
東方超越起

人参天国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方超越起

【Nコード】

N4767T

【作者名】

人参天国

【あらすじ】

どうやら俺は死んでしまったらしい。原因は……自業自得？ それはひどい。しかし実は俺、けっこう凄い事したらしい。んでとりあえず異世界で修行して神になれと……何という急展開。でもわかった。俺は神になってやるぜ！！

チート注意！ キャラ崩壊注意！ 邪神注意！ 他作品ネタ注意！

駄文注意！ 不定期更新注意！ 注意が多すぎ？ すみません…

…

プロローグ（前書き）

はじめまして、人参天国です。

この作品は駄目人間が『チートしたいな！ 東方キャラとからみたいな！ でもあのキャラも出してみたいな！ そしてやっぱりキャラ崩壊だな！』とあれもこれもと欲張って生まれた作品です。

こんなモノ表に出していいんだろうか……

せめてこの作品で楽しんでいただければ幸いです。

それではどうぞ。

プロローグ

ふと気がつくと思議な場所にいた。

周りはひたすら白い空間。

どこまで見渡しても人っ子一人いない。

唯一、いや、二つだけ存在する物があつた。

自分がいつの間にか座っていた、周りと同じ色の白いソファ。
そして対面にある誰かが座るのであろうもう一つのソファ。

まるで面接試験に来たかのような状況である。

場所がこれほど非常識でさえなければ。

……さて、そんな非常識な場所にいるわりにはかなり落ち着いてい
る俺だが、だんだんと今までのことが思い出されてきた。

——そういえば俺、死んだんだな。

突っ込んで来たトラックから女の子を庇って。

突き飛ばした先がすぐ歩道だったから反対車線の車に跳ねられたな
んてことはないだろうが、自転車に当たるくらいはしたかもしれん。

……無事だったと思いたい。
トラックに跳ねられるよりはマシだろう。

しかしそうなるここは死後の世界か？

この状況は二次創作によくある転生前のイベントに似ている気がしてならない。

漫画もアニメもラノベも好きだったから知っていくうちに二次創作もよく見る様になったが、誰かを庇ってトラックに衝突、神様が出てきてあなたは死ぬはずではなかったなので転生して異世界へ！という展開がよくあった。

……んなアホな。

頭を抱えて考えていると。

「ごめんごめん。遅くなったね、常遥つねはる錬火くん」

誰かが自分の名前を呼んだ。

バツと頭を上げると、ソファの隣に一人の青年が立っていた。

肩口まで伸ばされた綺麗な金髪。微笑みを湛えた口元。蒼い瞳は今

にも「世界はなんて美しいんだ!」とでも言い出しそうな優しげなものである。

ぶっちゃけイケメン。

フツメンである俺にとっては非常に憎たらしいことだが、ここまでくると嫉妬も覚えない。

……やっぱちょっと悔しい。

「待たせたね、仕事が溜まっていたんで時間がかかったんだ」
そう言いながらよいしょとソファに座る。

ううむ、この状況、このイケメン具合、なんだか神様っぽいぞ。

まさか本当に二次創作みたいなの……

「おや、話が早いな。大体が君の予想通りだよ」

「へっ?」

俺喋ってないよな。

読心術?

「うん。勝手にやって悪いけど君の心の中を読ませてもらったよ。
思ったよりも混乱していなかった様だね」

……まあ、自分が死んだことははっきりしているし、このことも

なんとなく想像出来ていたからあまり取り乱すこともなかったけど。

「予想通りっていうことは、自分は何かのミスで死ぬことになったんですか？」

「敬語は無しでかまわないよ。ここに人が来るのは久しぶりのことでね、僕としても君に興味を持った。仲良くなれば面白そうだ」

「はあ、わかりま……いや、わかった」

こっちの方が楽でいいんだが、まさか神様相手にタメ口で話すことになるとは。

「さて、君が死んだ原因のことだけどね、実は君やあの女の子はあそこで死ぬはずではなかったんだ。

それどころか怪我を負うこともなかった」

え、ということは、自ら走った俺は自業自得で！？

「いや、そうでもない。死ぬはずではなかった、というのは元々の運命。それがこちらのミスで変わってしまったのは確かだ。……もつとも、変わった運命は女の子の運命だったんだけどね」

「……どういうことだ？」

女の子の運命が変わっただけならなぜ死ぬはずではなかった俺が死んでしまったのか。

「君がその女の子の運命に介入したんだよ。そんな運命は認めない！
と言わんばかりに。そして彼女はかすり傷ですんだ。すごいこ

とだよ。まるでヒーローだ」

「待ってくれ、俺がそんな漫画みたいなことしたのか？」

まったく自覚がないのだが。

無理に介入して死んだというのならこれもある意味自業自得だ。

「こちらとしても予想外だ。運命を変えてしまうミスも滅多にあることじゃないのに、今度は運命を覆す人間が出てきてしまったんだからね」

「なぜ俺にそんなことが出来たんだ？ 偶然なのか？」

「偶然があったということは可能性があったということだ。君が運命に介入出来る可能性を、人の持ちえない才能を持っていたということさ」

そんなわけがない。

自慢じゃないが、自分はどこにでもいる普通の高校生だった。

決して神に選ばれた戦士だったりなんかすごいパワーを持った家系に生まれたわけではない、平凡な人間。

「平凡ではないさ。誰にもない可能性を持っていたんだから。

しかしその才能も小さな欠片の様な物だ。それが発揮されたのは本当に偶然。

『運があつた』ってことさ」

運があつて死んだというのもイマイチ納得出来ない話だな。

「いいじゃないか。君の正義の心が一人の少女を救い、こうして僕とも縁ができた。自慢出来ることさ」

「いや、正義なんてもんじゃないんだけどな……」

勝手に身体が動いただけだし、今考えてみれば随分無茶をしたものだ。

もう一度やれと言われてもやれる自信はない。

……だけど

「まあ、助けられたのならいいか……」

そう呟いた。

「ははっ、正義というよりもお人好しだったかもね。

……ところでカミサマになつてみない？」

「……………はっ?」

突然の言葉に一瞬思考が止まる。

はあ、神に。

ノートに名前を書いたり黄金のフネで月を目指したりするのだろうか。

「ジャ○プ好きなのかい？」

そんなんじゃないくて、もっとよくあるイメージの神でいいよ」

ジャ○プを知っていた。

読むんだろうか。

「1京2858兆519億6763万3865個はあり過ぎだと思
うんだ」

こいつ、読んでいる！

「それはそうと話の続きだ。

さっきも言ったように、君にはカミサマになってもらいたい。

テンプレ通りに異世界に行って」

「なんで俺が神に？ しかもそう簡単になれるモンでもないだろ」

「言っただろう？ 運命に独力で介入した君の才能は人にはない物、
過ぎた物だ。そんなことが出来るのは神だけ。」

でも神になればその小さな才能を育てることも出来る」

育てるか……

面白そうではあるんだが。

「じゃあなんで育てよう？」

「面白そうだからだよ」

……俺と同じ思考だな。

「本来なら人間には過ぎた力は没収しておかなくてはならない。

あっさりと人が神に到達してもらおうわけにはいかないからね。

でも君は僕が興味を持った人だし気兼ねなく付き合えそうだ。

せっかく知り合ったんだから、このまま才能を奪ってサヨナラするよりもカミサマになってもらって友人になった方がきっと楽しいさ」

……じゃあどうしようか。

この話を断ればその才能とやらを取られて輪廻の輪にでも戻るんだろう。

死んだのはあくまで自業自得。

都合のいいサービスは期待する方が間違っている。

……普通なら。

しかし俺にはそのサービスが与えられるチャンスがやってきた。

平凡に生きるよりももっと新しい未来が。

だったら。

「ありがたくその提案にのるよ」

「そうかい？」

それなら僕も嬉しいんだけど、神になるための道は決して楽しいことばかりじゃないよ？」

「そうだろうな。」

神様になるんだ。

どれだけ苦しいことか想像もつかない。

安っぽい覚悟かもしれない。

だけど、そっちの方がきつと『面白い』だろ？」

ニヤリと笑ってやる。

「ぷっ、あはははは！」

うん、そっちの方がきつと『面白い』よ！
やっぱり君とはいい友人になれそうだ！

じゃあ早速君には修行に必要な力を与えておこう。

一つ目はある程度の霊力と魔力、そして神力を少しだ。いきなり大量に与えても修行にならないからね、頑張って鍛えてくれ。限界をなくしておくからいくらでも増えていくよ。

二つ目は不老不死。修行の途中で死んでしまっても困るし時間も必要だ。

三つ目は知識だ。力の使い方や武器の使い方、料理の仕方まで様々な知識をあげよう。でも知識だけでは当然実戦で使えない。きちんと練習をするんだよ。

……こんなものかな？

いきなり強力な力を渡すわけにはいかないからそこはテンプレではないけど、君が元々持っている能力が修行の中で育っていきけばきつと強くなれる。カミサマ目指して頑張ってくれ！」

「ああ、十分だ。

よし、では修行の旅へ！

……つとその前に。

もう一つ頼んでいいか？」

「うん？　なんだい？」

……勝手に死んじゃったからな、両親には最後に挨拶しておきたい。

頼みは聞いてもらった。

俺の葬式が終わった後のどんよりと暗くなった家に突然当人が幽霊状態で現れたので、両親は「すわ化けて出たか」と大騒ぎだった。

それをなんとか宥めて事情を説明していたら今度は助けた女の子が登場。

二度目の恐慌状態を沈静化し話を聞くとどうやら線香をあげに来てくれたらしい。

神様うんぬんはぼかして再び事情を説明。

両親に説明が終わっていてよかった……

あまりこのことは背負い込まずに幸せになれるように生きてくれと頼むと力強く頷いてくれた。

「別れはすませたみたいだね」

「ああ、すませたよ。」

ありがとな」

「いってことさ」

両親や女の子との別れを終え、いざ異世界に向かう時だ。

「そういえばお前の名前をまだ聞いてなかったな」

すっかり聞き忘れていた。

名前を知らないと何て呼べばいいのかわからない。

「うん？　名前かい？」

……ソウだ、ソウと呼んでくれればいいよ」

「偽名？」

「違うよ。」

まあ、ニックネームかな？」

「わかった。」

じゃあまた会おう、ソウ」

「うん、また会おう。」

錬火くん」

よし、なら行くか！

修行の旅へ！

「じゃあ送るよ？」

早く練武の4でレベル上げしなくちゃいけないんだ」

……………なに？

「行ってらっしゃい」

「おい待っ…………あああああ——」

ツツコミを入れようとしたら突然足元に開いた穴に落ちてしまった。

野郎、まさかやっていた仕事って。

神様のイメージが……。

破壊されたソウの第一印象に嘆きつつ、俺は暗い穴の中を落ちて行
った。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします。

よろしくできない？

すみません……

第一話：修行修行！（前書き）

キングクリムゾン？

むしろこの早さはメイド・イン・ヘヴンだ！！

早い早い

……『早』がゲシュタルト崩壊しました。

第一話：修行修行！

さて、やって来たはいいが、見事に何もない。

さっきいた所はソファや立つ地面があったが、それもない。

精神と時の部屋の方がまだいろいろあるぞ……

この環境での修行も試練の一つなのか。

そう思いながらも貰った知識を確認してみるとここの情報があった。

『ビッグバン前の宇宙』

……マジ勘弁

そりゃ何もないわ。

なんで息ができるとかはソウがなんかしたらしい。

修行の厳しさを一つ認識しつつ、まずは貰った力の確認から始めるのであった――

こっからはダイジェストだ。

——十年経過——

魔力、霊力、神力を知覚。

知識で使い方や総量を増やす修行をする。

——五十年経過——

制御もバッチリ、量も大分増えた。

具体的に言うとか大陸吹き飛ばせるくらい。

成長速度がおかしい気がするが、よく考えたら俺はもう人間ではなく神様候補だった。

……あれ、それでもおかしい気がする。

——五百年経過——

力が増え、今では太陽系を吹き飛ばせるだろう。

具体的に言うとかセルぐらい？

……まだまだ上はいるな。

様々な武術も修得した。

拳法だったり剣やら槍やら銃やらだったり。武器は魔力とかで形を作って修行していた。

流派東方不敗や飛天御剣流やらの漫画の武術も知識にあってびっくりしたが家具を使った武術まであったのも驚いた。

今の俺なら家具で地球を武力制圧できるだろう。

神力でできたオタマや掃除機は非常にシユールだが。

右手にフライパン、左手にオタマを持った男が掃除機に乗って軍隊に向かい爆走する……

そのプレッシャーはただ事ではないだろう。俺なら逃げる。

技術を更に完璧にするために修行を続けよう。

しかしこの空間に一人にいるのもそろそろ限界かもしれない。

よくもっていると思うが、いつまでここににいることになるのだろうか……

——六百年経過——

能力開花！

その名も『乗り越える程度の能力』だ！

………東方かよっ！！

なんて新鮮な驚き。

これが俺の持っていた能力か。

チートな匂いがしてくるぜ！

きつとこの能力も進化していくのだろう。

しかしまずはこの能力を使い……！

孤独感を『乗り越える』ッ！

……成功だ！

これであと一万年は戦える！

——二千年経過——

能力進化！

展開が早い気がするがそんなことはなかったぜ！

進化した能力の名は『超越する程度の能力』だ！！

……やばい、マジでチートだ。

何が出来るかっというところ現在の自分を『超越』出来る。

まあこれはいい、前の能力でも同じことが出来た。修行にならないからあまりしなかったけど。

なら何がやばいかっというところ、記憶の中の存在も『超越』出来る。

どういう事か。

なんと実在の何かだろうが漫画の中の何かだろうが『超越』出来るのだ。

お袋の味を越えれば『超お袋の味』と言える物ができるし、ゾーマ様を越えればメラが……なんだろう、燃える天空並に？

もう何が何だかわからない。

とにかく、自分が全く知らない技術さえも能力で越えることが可能なのだ。

そしてこの能力でソウも越えてしまった。

あいつ創造神だったみたいだ。だから『ソウ』なのか……安直な。

しかしこんな可能性を持った人間いたら確かに危ないわな。

能力も進化したし、修行を一区切りしていいんじゃないか。

しかしむこうからは何の音沙汰もない。

これからどうしようと思っていたらティンときた。

——『ビッグバン前』

……なるほど、やっちゃまえて言うんだな、ソウ！

ドラ○エやディ○ガイアみたいにあっさりやっちゃまうぜ！？

ビッグバンを！

規模が違うけど！

新世界の神に俺はなる！！

……と彼の意味を勝手に捏造、さっそく取り掛かる。

まずは俺の持つ魔力、霊力、神力、ついでに東方らしく能力で生み出した妖力を合成する！

それぞれの力が反発し合い弾けようとするが、それを制御、莫大な

エネルギーを秘めた球を作り、能力で更にエネルギーを高めていくことでビッグバンに到達する！

もちろん自身の耐久力も向上済み、ビッグバン程度では傷一つつかないレベルだ。

そして今、とてつもないエネルギーを秘めた針先程の小さな球体を解放するッ！！

————世界は光で包まれた。

第一話：修行修行！（後書き）

携帯熱いです！

パソコンが使いたい……

第二話：邪神誕生（前書き）

短いなあ。

もつと長く書きたいです。

タイトル通り邪神登場ですね。

第二話：邪神誕生

さて、ビッグバンを起こしてから八十億年程がたった。

いやぁ長かった。

起きた直後に何ができるというわけでもなく、ゆっくりと物質ができ、岩石っぽいものができたり星っぽいものができたりするのを観ながらもはや習慣となった修行を続け、今では能力無しで一秒以内にビッグバンを起こせるくらいにまで成長した。

でもきつとソウはこんなレベルは望んでなかったと思う。やり過ぎ感が否めない。俺自重。

もう遅いけど……

そして今、とある空間で。

俺の目の前にはなんか奇妙な生命体がいる。

丸くてピカピカしているがあまり知性を感じない。

アラレちゃんの如くそれを突つきながらこんな生物見たことない！
などと思っていたが、誰かとの触れ合いに飢えていた俺は何を考えたか、

「よし、知恵を与えてみよう！」

と答えを出してしまった。

そして知恵を与えられたそれはだんだん黒い髪と顎髭を持った人型になり……

「我は今日からマお……いやアザトースだああ！」

あ！ やせいの アザトースが とびだしてきた！

『アザトース』

白痴にして盲目の神

宇宙の邪悪な面の中心。下劣な太鼓とかぼそく単調なフルートの音色がひびく外宇宙の深奥で、冒瀆的な言葉を吐き散らす魔王と表現され、宇宙の中心の黒い玉座にいとされている。

……やっべ、邪神生んじやったぜ♪

「死ぬがよい！」

やせいの アザトースが おそいかかってきた！

こいついきなりか！？

くっ、上等だ、やってやるぜー！

そして、宇宙一をかけた長い戦いが始まった――

「ホントスミマセン、いやぁ超越神様でいらしたとは。あっいいい
えそのようなつもりは……」

――こともなく、戦いは五秒でカタがついた。

そりゃそうだ、年期が違う。億年単位で修行したのに生まれたばかりの存在に負けてたら俺は泣くね。

力任せに殴り掛かって来たアザトースにデコピン一発食らわせて終了、百キロ程吹き飛び実力差を察して現在俺の目の前で土下座をかましているのだ。
ここ宇宙なのに。

土下座の知識なんてないはずなのに。

「……はぁ」

「っ！？　すみませんすみませんどうかお許しを！」

「ああ、そうじゃなくて」

俺のため息が機嫌を損ねたものと勘違いしてひたすら謝っているアザトース。

まるで取引先でミスをした新人社員の様な姿は非常に哀愁を誘う。

「別に気にしてない。あと口調も崩してかまわない」

「フハハハハ！　そうかそうか！　ではさらばだ！！」

「まてやオラ」

変わり身はやっ！？　もはや別人格レベルだぞ！

なんなんだこいつ、バトルより疲れるな……

「ムッ、何の用だ？」

「いや、何の用じゃなくて……とりあえず何でこんなところに？」

「ふむ………わからん」

「なに？」

「気付いたらここにいて、知恵を与えられていた」

「お前、自分の状況も知らないのに襲いかかってきたのか……」

「はっはっは、気にするな父よ、出来心というものだ！」

「んな出来心あってたまるかつ……て誰が父だ」

「ムッ？ この世界を創り我に知恵を授けてくれただろう。」

父と呼んでもいいと思うが？」

「あっそ……」

俺はこんな髭のオヤジに父と呼ばれるために神になったんだろうか

……

いやっ、大丈夫！

きっとそのうちいいことあるさ！

立ち直りの早さには定評がある。

「んで、お前はこれからどうするんだ？」

「うむ、まずはこの宇宙を旅してみようと思う。」

なにぶんまだ生まれたばかりだからな、何かを知ってみるのも悪くない」

「そうか、まあがんばれ」

「ウムッ！　そして強くなったあかつきには父も頂点から引き摺り下ろしてくれるわっ。

ではさらばっ！」

「オイこら」

キラキラと無駄に光を撒き散らしながら去って行ったアザトース。

追う事もできたが……やめよう、なんか疲れた。

SAN値がただ下がりしてゲンナリしていると。

「ん？　何だこれ？」

アザトースが撒き散らした光が一ヶ所に集まっていくのに気付いた。

それが最初のアザトースの様に生きているかの様に明滅を繰り返している。

……どうやらこれも生命体みたいだ。

世界って不思議。

俺は考える事をやめた。

「……二度目の挑戦だ」

せっかく生きているんだ、再び知恵を与えてみてもかまわないだろう。

次はまともな奴になれと思いながら知恵を与えてみれば。

「ぬあー！ あの邪神^{ひと}、我らが偉大なるお父様に向かってあの態度！ 許せませんわー！！」

両手を握り天に突き上げ、うがぁーと叫ぶ少女が現れた。

頭の両サイドにはドリルの様な見事な金髪ロールが備わっている。

……これまたキャラが濃そうだな。

「はっ、申し訳ありませんお父様！ 私ったら我を忘れて……」

「いや、それはいいんだけど、その呼び方もあいつと同じ理由か？」

オッサンに言われるのも嫌だがこんな女の子に言われるのも背中が痒くなってくる。

「もちろんですわ。こうして話す場を与えてくださったのも、話せるだけの知恵を与えてくださったのもお父様ではないですか。今の私があるのは全てお父様のおかげなのです！」

「……一応お前はあいつの残した物から産まれたんだが」

「ああああそれを言わないでください！ あんな考えなしが父だなどと思いたくありません！」

今本音が見えたな。

確かにあんなのが親と思いたくないだろうけど……

「それと私のことはヨグ子とお呼びください」

「なにそれ」

「私は種族がヨグ・ソトース、だから名前はヨグ子と決めましたわ」

「……………」

お前がそれでいいならいいんだがな。

しかし嫌に安直な名前である。

あとなぜ『子』を選んだかもわからない。

遥か未来の地球の島国の女性に使う文字なんだが。

アザトースといいヨグ子といい、アカシックレコードにでも接続しているんじゃないだろうか。

しかしここで知識が活きる。

『ヨグ・ソトース』

全にして一、一にして全

過去・現在・未来の全てがヨグ・ソトースにとっては1つであり、

あらゆる存在や現象を認知できる。

へえ、なら知っていてもおかしくないか。

……あれ、じゃあアザトースは？

……やっぱり考えないようにしよう。

「えっと、ヨグ子はこれからどうするんだ？ あいつみたいに旅でもするか？」

「ええ、そうします。産まれたての若輩者の身ですのでこれから心身共に鍛えていくつもりですわ。」

「そうか、じゃあお前もがんばれよ？」

「はいっ、ありがとうございますお父様！ いずれは私が彼奴めを葬り去ってくれますわ！！」

「オイまで」

止める間もなくヨグ子は颯爽と去って行った。

無駄に玉虫色の光を撒き散らしながら。

下克上宣言といい光を撒き散らす去り方といい、やはり親と子で似ているなと思う。

ヨグ子は否定するだろうが。

しかし疲れた。この俺を疲れさせるとは大したもんである。

疾風怒濤のごとき出会いを終わてどつと疲れた俺は久しぶりに修行をサボり休むことにしたのだった――

第二話：邪神誕生（後書き）

アザトース……ぶっちゃけゼロ魔のジョゼフさん黒髪黒ひげバージヨン。

自分にとってひげのオッサンと言えばこの人です。

ヨグ子……ぶっちゃけ『れでい×ぼと！』のセルニアさん。こんな性格にしよう、と思ったらこの人が降りてきた。

邪神と言えばデモンベインよりニヤル子さん。金髪ロールと言えばマミさんよりセルニアさん。

明らかにラノベ派な人参天国でした。

第三話：更に増えました（前書き）

だいぶ詰め込んだ気がする……

まだまだキャラが増えます。

人参天国はいつ潰れるのかな？

第三話…更に増えました

アザトースやヨグ子を生み出してから、俺はやけくその様に生命体っぽいものに知恵を与えていた。

もう上位邪神を生み出しちゃったんだからいつそのこと行くところまで行っちゃまえ！ という方針である。

迷惑以外のなにものでもない。

世界の理性がマッハだ。

そしてそれから五十億年ほどたった今……

「錬火さーん！ 愛しのニヤル美が這い寄って来ましたよー！」

「ラフオイエツ！」

「ファンタシーツツ！？」

「ふんっ、いい様ね！」

「懲りないなあニヤル美くん……」

「……今日も平和」

その子孫達と交流があります。

——ここは喫茶店『ン・カイ』土星支店

宛もなく歩いていたところを知り合いのこの四人に見つかり、俺の意思に関係なく連れて来られた。

かなり有名な店で特に女性に人気があるそうだ。

なぜ喫茶店があるのかとかしかもチェーン店なのかよと思うのは今更。

周りは決してぐちゃぐちゃしたおどろおどろしい風景が広がっているわけではなく、すでに俺がいた時代の地球の様にビルが建っていたり車が行き交っていたりするのだ。いや、むしろ地球よりも技術が進んでいるだろう。

俺は遥か昔に諦めた。

だってこいつら邪神だもの。

「鍊火さん、出会い頭に炎系の最上級テクニックを放つのはどうかと思いますよ……?」

「出会い頭に発情して飛びかかってくるのもどうかと思うが」

「だからってわざわざ対立属性の技でツッコミしなくても……。ううっ、鍊火さんの愛が痛い……」

この微妙に焦げて机に垂れている銀髪ポニーテールの少女はニャル美。

『這い寄る混沌』『無貌の王』などと言われる、土の属性を持つ邪神の中で最強の一柱、ニャルラトホテプだ。

こいつが子どもの時から面倒を見る事があったんだが、何をどう間違えたか「私、鍊火しゃんの子を産みましゅ！」とある日突然言い出して以来、事あるごとに引っ付いて来るのだ。まだ小さかったくせにえらい生々しい発言を聞いた日にはこいつの将来を思い戦慄したものである。

最近の悩みはニャルラトホテプらしくあれ！ とガミガミ言ってくるアナログ派で頑固な父親らしい。私はニャルラトホテプではなく一人のニャル美としてありたいんです！！ らしい。

んなもん知るか。

「ふんっ、こんなところでイチヤイチヤしているからそんな目にあうんだわ！ いい気味ね！」

「ああん？ 何言ってるんですかあんたは。ここで抱きつかなくていいつ鍊火さんに抱きつくんですか！ 明日なんてない、今この瞬間に命を賭けるんですよ！」

「何を偉そうに言っているのよ！？

………そ、そんなに抱きつきたいなら、わ……わたしが代わりに
なってもいいのよ……？」

「誰があんたに抱きつきたいと言った！」

炎の様に真っ赤なストレートヘア、これまた炎の様にゆらゆらと動
いているチョーカーを着けた少女はクトゥー院。

『生ける炎』クトゥグア。

火の属性で最強の邪神である。

本来ならニャルラトホテプとは恐ろしく仲が悪い対立種族……の筈
なのだが、今のでわかる通りどう突然変異が起きたか、ニャル美に
対してツンデレになる。

ニャル美と幼馴染みだがニャル美が妄言を吐き始めるのと同じ時期
に「ニ、ニャル美なんて別に……しゅ、しゅきじゃないんだからね
！？」 ホントなんだからっ」と言つてのけた猛者だ。これにも別の
意味で戦慄した。これも一つの才能なのだろうか。

最近実家が牧場を始めたらしい。

軌道に乗れるのはまだまだ先になりそうだが、ゆくゆくは宇宙一有
名な牧場になってみせるとか。

……クトゥグアって言ったら破壊が本領の存在じゃなかったっけ？

……まあ邪神だもんな。

仕方がない。

「でもやっぱりこれを見ると安心するねえ。なにものにも代えられない日常って感じかな？」

「他人事だと思って……少しはニヤル美の奇行を止めようとしてくれ、ハス彦」

「うーん、僕じゃあ止められないんじゃないかなあ」

いつの間にか周囲を巻き込んだリアルファイトにまで発展しているニヤル美とクトゥー院を見て苦笑している金髪ベリーショート少年はハス彦。

『名状しがたきもの』『羊飼いの神』などと呼ばれ、風の属性最強の邪神ハスターである。

楽しいな雰囲気が出に似ているな、と思っていた時期が俺にもありました。

「受け止めて！ 爆炎【ヴァルカンシヨックイグニション】！！」

「なんの！ 生贄【ハスター型使い捨て装甲板】ッ！！」

「へっ？ ぐはあああ！」

クトゥー院の放った巨大な火球にニヤル美はハス彦をぶつける。火球は膨大な熱量を撒き散らしながら爆散し、憐れ黒こげになったハス彦は周りに建っていたビルの一つに突っ込み、中は大騒ぎになっ

ているのが見えた。

ちなみにハス彦を盾にしたニャル美は無傷だ。

そのままハス彦に目をくれる事もなく再びクトゥー院に殴りかかって行くのを見ればその外道具合も窺えるというものだ。

……実は彼は苦労性の様なのだ。よくニャル美とクトゥー院のいさかいに巻き込まれてとばかりを食っている。俺が彼に助けを求めるのも酷だったかもしれない。

最近では耐性が付いてきたのか、見た目はひどいことになっているがダメージはそれほどでもないというギャグ補正の様な体質を持ちつつある。意外と切実な問題だったのでこの体質には喜んでいた。

「……………（もっきゅもっきゅ）」

「ルー華、誰も取らないからもう少しゆっくり食え」

「……………（コクッ）」

いつの間にか注文していたらしいナポリタンを頬張っている青い髪で眼鏡の無口な少女はルー華、水の属性で最強の邪神クトゥールである。

『来るべきもの』クトゥールは『クトゥール神話』の名前の元にもなり、名前だけならおそらく邪神群の誰よりも知られているだろう。ちょうどニャルラトホテプとクトウグアの関係の様に風の属性のハ

スターとは敵対している筈なのだが、ハス彦とは普通に仲が良く、そもそも誰かと争うという話は聞かない。

……いや、そういうえば食事を邪魔されて怒った事があったな。

邪魔したのは当然ニアル美とクトゥー院。戦いの余波でステークが吹き飛ばされたのを見たルー華の顔が深い悲しみの表情から怒りに燃えつつも氷のごとき冷たい眼差しに変わっていくのを見、絶対ルー華を怒らせない様にしようとハス彦と囁きあったのはいい思い出である。

他の二人はルー華のテレパシー能力でトラウマやら黒歴史やらを刺激され、床の上をのたうちまわっていた。

それ以来ルー華を怒らせてはいけないという暗黙の了解ができたのだ。

「チッ、なかなか勝負が付きませんね」

「ふん、少しはやるじゃない！ さっきわたしの攻撃がかすっていただけ大丈夫かしら！？ 怪我はしてないわね！？ ついニアル美との触れ合いに熱くなっちゃったけどもっと火力を抑えてあげてもいいわよ！

……あつ、いや、別にニアル美がかまってくれから熱くなったんじゃないんだからね！？ あくまで戦いが血をたぎらせただけなんだからっ！！」

「がぁあぁあつ！ あんたのそれがウゼエんですよ！ 誰がクトゥグアのツンデレなんか見たいんですか！ もういい、第二形態で叩き

潰してやります!!」

「だっただ誰がツンデレか！ 上等よ、この胸に思いっきり飛び込んで来なさい！」

「だまれえー！ その無駄な脂肪の塊をもぎ取ってティンダロスの餌にしてやる！」

再び目を向ければ、二人の周りが世紀末的な廃墟となっている。

関わりたくなくてこちらに障壁を張っていたが、その他はそうもいかない。

ビルは崩れさり街路樹は燃え、瓦礫の中には『シ・カイ』の看板が埋もれていた。ハス彦も同じく瓦礫の下だろう。

彼を思うと切なくなる。

——ピーポー——ピーポー——

……懲役何年かな？

一億年くらい？

「げっ、マッポが来た?! あんたのせいで逃げ遅れたじゃないですか！ あんた**囚**になりなさい！」

「ちよっ流石にこれは無理よ！」

この前も森ひとつ焼き尽くしちゃって宇宙自然保護団体から怒られちゃったんだから！！ ニヤル美があの時逃げたせいで一人で暴れていた頭のおかしい邪神ひとだと思われたのよ？ 今度はもう表に出て来れなくなるわ！」

俺が居ても居なくてもこいつらは喧嘩をする。クトゥー院がかまって欲しくてちよっかいを掛ける事もあるが、大抵はニヤル美から始まる。

どうせその時もニヤル美が肩が当たったとか難癖付けたんだろう。

クトゥー院一人、という事はハス彦はいなかったらしい。運がよかったんだろう。

「……ちなみにその後はクトゥー院とハス彦の長期間無償奉仕活動の罰でカタがついた」

ルー華がチョコパフェを食べながら言った。

……何がどうしてそうなった。やっぱりハス彦は巻き込まれたか。

あとルー華、横に控えたイチゴパフェと抹茶パフェも食うのか。

「……別腹」

こいつらは物理的にありそうで怖い。

「鍊火さんお願いします！」

「何だ」

「どうかこの状況を打破する為の策を！」

「よかったな、臭いメシを食う機会なんてそうないぞ。これも経験だな」

「いやです！ 錬火さんに会えなくなるなら、私はこの星を破壊し尽くすだけです！」

「やめろニャル美」

「あ、でも二人で愛の逃避行というのもいいですね。

迫る追っ手からなんとか逃げ延び、たどり着いた先は小さなボロ小屋。やがていろいろ溜まっていた錬火さんは傍にいた私に「マンダム！！ 五人の記憶を残し、出会った時点まで時は戻る！」 ええー……」

それ以上言わせるか！

ちなみに五人とは俺、ニャル美、クトゥー院、ハス彦、ルー華である。

そして再び道で会い、店に戻ってきた。

時間を戻したのでニャル美達が暴れた痕跡もなく、店内は変わらず賑わっている。

「錬火さんは本当に私を愛してくれているんですか……？」

「トマトのヘタぐらいには」

見た目にはいいが食べるには向かない。

「……グスッ」

泣き真似をしているニャル美。

「……ハンカチを貸してあげてもいいわよ?」

「フンッ! (ビシッ)」

「痛っ!?!」

そしてそれに騙されたクトゥー院は差し出したハンカチをはたき落とされている。

「でもわざわざ錬火さんがツツコミをする前まで戻ったところは愛を感じない?」

あっ、ハス彦余計なことを!

……ニャル美がキラキラした目を向けてきて非常にウザイ。

「感じます、感じますよ錬火さんの愛を! 見たかクトゥー院、これが真のツンデレですよ!」

「クッ、ニャル美の好感度がまた上がってる……!」

生き生きしたニャル美と悔しそうな顔でハンカチを噛むクトゥー院。
手加減はしてもさすがにやり過ぎたかと思ってただけだったんだが
……やめといった方がよかったか。

手加減をしなかったら？ とりあえずこの星は蒸発するかな。丸ごと。

「……『ケチャップたっぷり喫茶店のナポリタン』を十皿」

「っってお前はまた食うのか」

「……またお腹減った」

ああ、そういえば残ったのは記憶だけでそれ以外は全部戻ったからな。

「あつ、ハイハイ店員さん、アト……いえ、『茶』を五つください」

こちらをチラリと見て注文を言い直すニャル美。

……なんか嫌な予感が。

「お待たせしました」

すぐに店員がやって来て大量のナポリタンと、

「……………」

ニャル美曰く『茶』を置いて行った。

琥珀色の液体、見た目は普通のお茶だ。

「ニャル美、これは何だ」

「何って見ての通り『茶』ですが」

「メニューを寄越せ」

「……………」

ニャル美が渋々と寄越した、なぜか日本語で書かれているメニュー
(当然現在は日本どころか人間もない)を見てみれば。

『当店イチオシ!! この上なく痺ましい唾棄すべきアトラック
ナ茶』

「二度目だ、これは何だ」

「……いえ、見ての通りと言いますか」

「……………」

「ちょっとなぜ無言で席を立つんですか!」

「俺は帰る」

「待ってくださいー!」

『アトラックⅡナチャ』

巨大な蜘蛛の体、人間の様な顔をしていて、ツアトウグアの洞窟で糸を出し続けている。その糸で巣を作り終えた時に世界が終わる……らしい。

世界云々は単に世界が滅びるまで巣を作り続けるからって事らしい。蜘蛛の姿というのもそれっぽい生命体に知恵を与えたことがあるからそれが容姿であっているんだろう。

こいつはしばしばこのような妙な物を食わせようとしてくるから油断ならない。

なんだアトラックⅡナ茶って。

アトラックⅡナチャが作ったのか、それともアトラックⅡナチャで作ったのか。

前者も嫌だが後者は最悪だ。一口飲めば発狂しそうだ。いや、俺なら大丈夫だろうが、決して気分のいいものではない。

「大丈夫だよ。それはクンⅡヤンでアトラックⅡナクアのラク蔵さんが栽培から仕上げまで手ずから作り上げたお茶で、『ン・カイ』でしか飲めない人気のお茶なんだ。今日はみんなでこれを飲みに来たんだよ」

「そうそう、メイド・イン・ヘヴンというやつですよ！」

「言わねーよ何で天国なんだよ。この場合メイド・イン・クーンヤンとかハンドメイドとかだろ」

……しかしハス彦が言うなら大丈夫……なのか？

だが少なくともニヤル美より信用できる。

仕方なく席に戻り、一口飲んでみる。

「……うまいな」

「でしょ！？　でがしょ！？」

なぜか得意気なニヤル美。

しかし何と言うか、普通においしかった。

クトゥー院もハス彦もためらいなく口を付けているし、ナポリタンをモシヤモシヤ食べているルー華はすでに飲み干していた。

ニヤル美がテンションを上げてクトゥー院がそれに追従しツンデレで、その二人を見ながらニコニコしているハス彦と我関せずと何かを食べているルー華。

ハス彦の言葉を借りれば俺もすっかりこの光景に慣れ、日常を感じる様になったのだろう。

かけがえのない日常、と言えば聞こえはいいが単に汚染されただけかもしれない。

「……はあ」

「おや、どうしましたか錬火さん。ため息をつくと瘴気が逃げますよ？」

「お前は俺を何だと思っているんだ」

「ダーリン」

「泥棒神ね」

「超越神様かな」

「……ネ申」

「誰がダーリンだ、そしてお前らには聞いてない。だがクトゥー院とルー華はその認識をどうにかしろ」

「疲れる、疲れるんだが……こんな日常が一人で修行していた時より楽しいのは確かなんだ。」

「SAN値には優しくないが、邪神達を生み出したことを俺は後悔していないだろう。」

「……たぶん。」

「店員さん、『タコ焼き』五人前ください」

「材料を言ってみろ」

「『ダゴン』です」

「俺は絶対食わんからな」

第三話：更に増えました（後書き）

ニヤル美……ポニーテールのニヤル子さん。這いニヤル七巻の表紙みたいな感じと思ってもらえれば……

特にポニーに思い入れがあるわけでは無いんですよ？ ホントダヨ？

クトゥー院……クー子がリボンを解き、チョーカーを着けて表情豊かなツンデレになったと思ってください。

某炎髪のフレイムヘイズさんが浮かびましたが、残念ながら『クトゥー院』の座を奪うまでには行きませんでした。

ルー華……お気付きの方は多いでしょう、皆様ご存知タバサさん。ゼロ魔より二人目が進出ですね。

水属性らしく青い髪のカラにしようか、と思ったらこの人だった。丸々オ리지ナルなキャラはこれからも出ないでしょう。

問題のハス彦……バカテスの工藤愛子さん金髪美少年バージョン。

もはや自分がわからない。オトコノコにしようと思ったら自分の脳裏にこの人がご光臨。もうこの人以外考えられなくなった（恋愛的な意味ではない……筈）。

説明長々とすみませんでした。

赦さない？

すみません……

第四話：ニヤル美の家に行こう！（前書き）

ニヤル美さんのお話。

うーん、もう少し長く書けないものか。

第四話：ニャル美の家に行こう！

ニャル美達は俺が昔生み出した邪神達の子孫だ。

邪神達は決して一種族一人ずつというわけではなく、五十億年の間にゆっくりと、しかし確実に増えていき、今ではかなりの数が宇宙中にいる。

元の世界のクトゥルー神話フリーク達が聞いたら卒倒するだろう。

とは言え、もちろん例外もある。

最上位の邪神である『アザトース』と『ヨグ・ソトース』のあいっらは一種族で一人だ。

まあどうでもいい事かな？

そんなわけで他のニャルラトホテプ達なんかにもよく会う。

そう、例えばこんな日に――

「錬火さん、ウチくる！？」

「行かない行かない」

「えっ……」

わざわざ俺の家まで来て何かほざいているニヤル美に返す。

あまりの即答に一瞬ポカンとしたニヤル美だが、すぐに再起動した。

「ちょっなぜですか！ 来てくださいよ！ 来なかったらそこで物語終了なんですよ!？」

「お前は何を言っているんだ」

メタな発言しやがって……。

俺の家は前に俺がビッグバンを起こした所に建っている。

とは言ってもこの家、元々は俺の家ではなく、最初に生まれた髭オヤジの邪神アザトース、現在は『アザトース』を種族にし、名前をアザースにしたアイツの家だったのだ。

今でも思うが奴は何を思って、まるで舌が回っていないコンビニのバイトのにーちゃんの挨拶の様な名前にしたのだろうか。

いや、どうでもいいんだけど。

それである日、俺は自分がビッグバンを起こした場所に行ってみた
ら大きな真っ黒い家が建っていたのだ。

そして驚きながら中に入ってみれば、大広間でアザースが下劣な太
鼓とかぼそく単調なフルートの音色を携帯型音楽再生機で聞きなが
ら一人で楽しそうに踊っていたのだ。

あれは怖かった。

引きこもりだとか友達がいらないだとかそんなチャチなもんじゃあ断
じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わった。

そして俺に気付くやいなや飛びかかって来て、

「父よ、今日こそ我が宇宙一となる！ 疾く死ぬがよい！！」

と即座に戦闘に突入した。

もちろん勝った。

フェイントなんかを使うわけでもなく、フォームだけは綺麗に殴つ
て来たのを回避、そのまま絡み付く様に近付いたまま後ろに回り込
み肩に乗り首に両足を掛け、勢いのままに全体重を横に倒す、つま
りは転蓮華を決めた。

ボキッという致命的な音が聞こえたが邪神だから問題無し、現にア
ザースは二分で復活した。

勝利した俺は家を持っていなかったので戦利品としてアザースの家を奪い取り、今まで自分の家になっているのだ。

悪い事をした気もするが相手が相手なので気にしない事にした。

ちなみにアザースは「I'll be back（俺は帰ってくるぞ）！」と発言、広い宇宙へと飛び去って行った。

そして今、その家までニャル美がやって来たのだが――

「父親を説得しろ？」

「そうなんですよ。少し前まではそれほど口出ししなかったんですけど、ここ最近になって我慢できなくなったのか私の恰好にいちやもんつけてくる様になったんですよ。

まったく、おかげで同じ恰好ができません。困ったものです」

やれやれと両手を広げて首を振るニャル美。

「だけど俺が言って効果があるのか？ お前の家族は話を聞かない奴が揃っているだろ。

お前みたいに」

「さりげなく毒を吐かれましたがこの際置いておきましょう。

おそらくそれについては大丈夫かと」

「なぜ？」

「錬火さんは私の父に会った事は？」

「質問に質問で返すな。ちょっと話をした事があるくらいだな」

「ではご存知ないですかね。」

私の父は思考が古臭いんですが、実はその分ニャルラトホテプに知恵を与えてくれた『超越神 常遥錬火』に感謝し敬う思考も持っているわけなんです。

五十億年前の事まで引っぱり出してくる思考は化石なんてもんじゃありませんね」

「つまりお前の父親は俺には頭が上がらないだろうから説得が有利に進めれるって事か」

「イグザクトリイ」

なるほどそれならニャル美の言う事ももつともなんだが。

「だが断る！」

「えっ」

「俺の最も好きな事のひとは勝算がついてほくそ笑んでいる奴の協力の要請にNOと答えてやる事だ」

「いやそれただの嫌がらせじゃないですか!」

「むしろそのおかげでお前が自粛してくれる様になれば俺としては万々歳なんだが」

「駄目です! あちらが勝ったら私は膝下二十センチのスカートを履いたりしなくてはならないんですよ! 今時メイドだってミニスカ履くのにな!」

「……何だって?」

「あつ、すみません。どうやらうつかり電波を受信した様です」

「うつかりで未来と交信しないでくれ……」

まあぶっちゃけ俺が断る理由なんてめんどくさいというだけなんだが。

俺には実害ないし。

「錬火さん、自分には関係無いなんて思ってませんか?」

「……どういう意味だ」

「いえね、考えてもみてください。

いくら口煩く言われても当然私は自分を変えるつもりはありません。ならば取るべき手段は何か。

答えは二つです。

ドンドコドンもといトコトン無視をするか、もしくは」

「……家出をするかか」

「イグザクトリィ！」

ならば何処へ家出するか。

クトゥー院は当然却下。ハス彦君は今セラエノの小さな図書館で住み込みのアルバイト。ルー華は……ちよつとあの子苦手で。

つまりッ！

私が行くべき場所はここ！ 愛しのダーリンが暮らすマイホーム一択になるのです！」

「俺はお前のダーリンじゃないしここはお前のホームでもないからな」

「おや、私は錬火さんの事とは一言も言っていないのに……もう、ようやく自覚できてきたんですね！」

「今俺の右手の上にあるエネルギー弾には太陽を破壊するだけのエネルギーが蓄えられているんだが……」

「調子乗ってすみませんでしたー!!」

やはり最後は話し合いではなく暴力だな。なんとも世知辛い世の中

だ。

「その三人以外にツテはないのか」

「……………」

「……………」

「……錬火さん」

「何だ」

「私は友達が少ない」

「威張るなバカ」

しかし確かにこいつの友達なんてあの三人以外では聞いた事がないな。

「でも家出したらここへ来るのは本気ですよ？　せっかく錬火さんと毎日おはようからおやすみまでを共にできるチャンスなんですから。」

おや？　　もしや家出した方が得だったりします？」

……こいつと毎日顔を付き合わせる事になる？

それは困る。心休まる我が家まで這い寄って来られたら俺はいつ休めばいいんだ。

「……わかった、何ができるかわからんが一応行つてやるよ」

「おお、ありがとうございます！ 錬火さん！ このご恩は私が生涯をかけてお返しを……」

「別にやめといってもいいんだが」

「……少しくらい心が揺れてもいいのでは？」

「それはない」

「ひどっ」

斯くして俺はニヤル美の父親の説得をする事になった。

「……（ニヤリ）」

「（ゾクッ）……？」

なんだろう、寒気が……

「ここが我が家ですよ！」

「見りゃわかるよ」

目の前には今まででも何度か来た事のある、何の変哲もないごく普

通の一戸建て。

庭には前来た時には見られなかった色とりどりの花が植えられ、二階に見えるベランダには布団が干してある。

「あの花はヴルトウムと言います」

「……もういいから早く行こう」

どこに何が仕掛けられているかわかったもんじゃなかった。

さて、中に入ってみればきちんと整頓された靴やチリひとつ落ちていない綺麗な廊下がある。

綺麗好きなニヤル美の母親は掃除に手を抜かないのだ。

今は買い物に行っていないらしいので相手にするのはニヤル美の父親だけなんだろう。

さっさと家に上がろうとすると……

「ニヤル美ッ！」

男の声が鋭く響いた。

声の方向に目をやれば、頭に布を巻き、筋肉質で長身の男が立っている。

——ジャー

男の背後の扉からは水が流れる音がする。

……どうやらトイレから出たところの様だ。

ニヤル美の家のトイレは水洗式。

「と、父さん!？」

まるで生き別れの肉親に会ったかの様な無駄なリアクションをとるニヤル美。

そう、このトイレから出てきた男こそがニヤル美の父親、ニヤーズだ。

頭に小判を着けた猫を想起させる名前である。

「ニヤル美、貴様はまたその様な恰好を……スカートが短いッ! 膝下二十センチだと何度言ったらわかる!」

険しい視線を向けたと思えばこのセリフ。こんな大男がスカートとかめちゃシユール。

「当たり前です! これくらいの方が需要があるんですよ!」

お前は誰のニーズに答えているんだ。

「何が必要だ、くだらんッ!

貴様には教えた筈だ！

ニャルラトホテプとはッ！

ひとつ 無敵なり！

ふたつ 決して老いたりせず！

みつ 決して死ぬことはない！

よっつ あらゆる生物の能力を兼ね揃えしかもその能力を上回る！

そしてその形は闇に吼える様な禍々しさを基本形とする。

それをなんだ！

膝上二十センチだの三十センチだの、『デコ』だの『きゅーていくる』だの『バスターアップ』だのと……！

貴様それでもニャルラトホテプか……！

「いえ、バスターじゃなくてバスト……あっいえいえ何でもありませんよ錬火さん！ そう、バスターアップ！ バスターの性能上げまくっちゃいますよ！」

「……そうか」

わりと気にしていたらしかったが、触れない事が優しさだろう。

「そんな生暖かい目を向けられても困るんですが……んっん。

さあ父さん今回は勝たせてもらいます！　では先生、よろしく願います！」

「なんか悪徳商人に雇われた用心棒みたいだな……」

しかしやると言った以上やらねばなるまい。仕方なく前に出る。

「おや、君は……前に会ったことがあるな。ニヤル美の友達か？」

「クククッ、この方が誰か知らない……？　我々の起源とも言えるこの方の事がわからないんですか……？」

なぜか意味ありげに喋るニヤル美。自分達のボスを紹介しようとしている悪の組織の幹部みたいだ。

「ならばお教えしましょう！」

この方こそ！

我ら邪神群を生み出した存在！

超越神『常遥錬火』様だアアアッ……！！」

「ナ、ナンダッテー！」

ナイスリアクション！

どうやら本当にわからなかったみたいだ。

「あ、貴方が神か!!」

そうです。

「これはとんだ失礼を！」

こんな大事な事を言われて気付くとは、このニャーズ、一生の不覚であります！」

「いや、それは別にいいんだ。それよりも……えっと」

「鍊火さんは今日は私の為に！ 私の為に!! わざわざ父さんの説得に来てくれたんですよ！」

「なんだとオッ!?」

大事な事なのか二度言ったニャル美とそれに驚愕するニャーズ氏。だがニャル美、お前の為ではない。

自分の為だ。自分の為だ！

「な、なぜニャル美を……?」

「いや、そんなに頭ごなしに否定しなくてもいいんじゃないかと……」

「鍊火さんはありのままの私を愛してくれているんですよ！」

「お前もう黙ってろよ」

説得する間もなく俺を振り切るニヤル美。ダシに使うあたりは虎の威を借る狐ならぬ超越神の威を借るニヤル美だ。小悪党臭がプンプンするぜ。

「クッ、しかしこの様な軟弱な姿をしたニヤルラトホテプになぜ……！」

「おや、いいんですかあ？ 父さんの言い分では鍊火さんが軟弱者を愛する頭のおかしい人という事になりますよ？」

狼狽するニヤーズ。

ニヤル美はもうこれで通すつもりなんだろう。

「ムムムムM M M ツ！ ……わかった、常遥様に言われてはどうしようもない。

ニヤル美よ、せめてこれだけは言わせてもらおう。

どのような道を進もうと、自らを磨く事だけは怠るな。

どんな選択だろうが強ければよからうなのだアアッ！」

「もちろんですよ！ 鍊火さんとならピリオドの向こう側まで行ってみせます！」

説得（？）も終わってしまった。

俺はほとんど喋る事なく、ほぼ突っ立っていただけである。

……さっさと帰ろう。

「常遥様、どうかニヤル美をお願いします」

「あっ、ああ……」

いかん、ついいい加減な返事をしてしまったな。

「ささっ、錬火さん！ 帰りましょう、私達の愛の巣に！」

「何度も言うがおまえンぢゃないからな」

俺達を見送るニヤーズを背に帰途につく。

機嫌がいいのか鼻歌を歌いながらスキップしているニヤル美を見ながら、俺はまた一つため息をつくのだった。

第四話：ニヤル美の家に行こう！（後書き）

次回は閑話です。

閑話：それいけ！ニャル美さん（前書き）

投稿だあー！

今回は短いです。

閑話…それいけ！ニャル美さん

初恋は実らないと言われている。

だが私は声を大にして言いたい。

否である。

可能性はあるのだと。

最大の敵は『諦め』だ。

自分の不屈の信念こそが願いを叶えるのである。

そのためならばどんな場合、どんな相手、どんな境遇でも、譲らないと『覚悟』を決めれば成就へと大きく近づく。

たとえば相手が幼稚園の先生だろうと。近所のおにーさんだろうと。誰かの父親だろうと。

そして———超越神様だろうと。

恋した瞬間は年月を経てなお色褪せる事無く覚えている。

小さかった自分が転んで膝を擦りむいてしまい、泣きべそをかいて

いた所を通り掛かったのが彼だ。

彼が翳した手から出る暖かい光が傷を癒すのを感じながら、もう片手で頭を撫でられた時に私は彼に恋をした。

安心させる様に笑いかけてくる彼になぜ妹が兄を慕う気持ちではなく、女が男を想う気持ちを抱いたかはわからない。

しかし私はその時の私を褒めてやりたい。

もしあの時あの気持ちを抱かなければ、今頃は見知らぬ二人かただの知り合い止まりだっただろう。

好きになる事の良さを知らないままで。

そして私は、たとえ自分が子どもでも女であるとかわからせようと、母さんに男を落とす為のセリフ（後で意味がわかった時はさすがにないと思った）を教えてもらったり、料理を習ったり（初めての頃はダークマターが生成された）、単なるお荷物にならない様に体を鍛えたり（いい女は護られてるだけじゃない！）していたおかげか、今の彼は私を妹ではなく一人のニヤル美として接してくれている。女としては微妙だが……。まあ兄と妹よりはゴールに近いだろう。

ゴールはもちろん……。アハッ！

ちなみにハス彦とルー華と知り合ったのもこの時期だ。

クトゥー院？ あいつは元から幼馴染みですが？

そして時間が経てば彼への気持ちの間違いではないこともわかった。

自分の為とは言いつつも、なんだかんだ言って彼は根がお人好しで優しいし、メチャンコ強いくせしてカワイイところもあるのだ。

女として見られても恥ずかしくないくらいに成長してきた頃、アピールの為に風呂上がりにはバスタオル一枚の姿で彼の前に出たら、私をたしなめつつも目線を微妙に逸らし、わずかに頬を赤く染めていた。

私は知ってますよ？　いくら長い間生きていても、女っ気がまるでなかったおかげで冷静は装えても内心動揺しているという初心な少年の様な人だって事は！

あんな様子を見た日にはもう……………ジュルリッ

おっとヨダレが……

とまあそんなこんなで今まで来ていた。しかし、今日はそろそろまた一歩前に進もうかと思う。

基本的に私達邪神は非常に長寿だ。一日一日を疎かにしているワケじゃないが、生が長いと思っても停滞しがちになる。そりゃそうだ、毎日何かしらの変化があったらあつという間にネタ切れになるだろう。いろんな意味で。

その現状維持になりがちな思考を押し退け、変化を手に入れる為に策を練る。

策は簡単、外堀を埋める。クトウグアをぶっ殺したければまずクトウグアの配下をぶっ潰すのだ。彼に直接アプローチを掛けるよりは

少しずつでも確実に効果が出るだろう。

彼自身を落とすのはなかなか骨が折れますからね。しかしどんなに遠回りでも構いません！ 確実に落としてみせますよ！

よし！ 策は成った！！

彼自身を連れて行き了解を得ているものと父さんに思わせつつも、できるだけ彼に喋らせない様にした結果、父さんに彼が娘を愛していると思わせることに成功した！

もちろん事實はそうではないが、いづれなってみせるから問題ない。いや、そうなる！！

しかしこれで父さんに文句を言われる事もなくなり、なにより親公認の偽・カップルとなる事もできた。

案外押しに弱い彼をこうして周りから埋めていけばいづれなし崩し的に……おっと言い方が悪いですね、後々の『恋愛結婚』の際に結婚の報告で両親と悶着する手間が省けますね！

こうして着実に攻めて行けば、丸裸になった本丸、すなわち彼を落とすのもより容易になるし、落としてしまえば後は物理的にも丸裸になってもらいフュージョンしたりして……ムフフッ、夢は膨らみます！

これからの未来を思い気分がいい私は、スキップをしながらどさくさに紛れて彼の家に行くのだった……。

——あなたへの愛はいくらでもあります！

ですから今度はあなたの愛もいっぱい手に入れてみせますからね！

錬火さん♪

閑話：それいけ！ニヤル美さん（後書き）

以上、ニヤル美さんでした。ちゃんとニヤル美を描写出来てるかな？

他のキャラの話が見たい人は……いますかね？

いらっしやいましたらリクエストどうぞ。

その分東方が遅れちゃいますけど……

第五話：地球降下作戦（前書き）

初のバトルらしいバトル回……かな？

ううむ、未熟よのう。

第五話：地球降下作戦

「……アザースがか？」

「そうなんですの」

久しぶりに会ったヨグ子。

だんだんと邪神が増え始めてきた頃、自分の知識を活かして教師をしたのをきっかけに教育に力を注ぎ始め、今では様々な教育機関を創った彼女だが、本日俺の家まで来て奇妙な情報を教えてくれた。

「アザースが星を創ったって……」

「それかなり前ですわ。調べてみたところによると、道端で突然『この宇宙を創り出した父に対抗するには我も何かを創れねば！』よし、まずは星を創るぞォッ！』と叫んで宇宙そらに飛んで行ったのを見た人がいるんです」

「もはやただの不審者じゃねーか」

相変わらず頭の中が春満開みたいだ。

「んで、俺にどうしろと？」

「どうやら創った星の住人をお父様を倒す為の戦力にしようとしているらしいので、これ以上面倒な事にならないうちにご報告しておこうかと思いました」

野郎、自分だけじゃ勝てないなら味方を増やそうって魂胆か？

猪突猛進ばかりのアザースも考える事ができたんだな。成長したと
誉めるべきか、それとも面倒な事をしやがってと嘆くべきか。……
後者だな。

「とにかく彼奴の元へ向かうのでしょうか？」

「ああ、そうするよ。これ以上妙な事されても困るからな」

「そうですか。勝利は確実にしようが、どうかお氣をつけて」

「ありがとう……で、場所はどこだ？」

「あっ、そうでしたわね。場所はここから遠い辺境銀河の片隅、太陽に近いですわ。アザースが創ったにしては青くて綺麗な星みたい
ですので見ればすぐにわかるかと」

「……なんだと？ 辺境銀河、青い星、アザースが、いや、『アザト
ース』が創った……」

「その星に名前は付いているか？」

「星の名ですか？ 彼奴はまだ決めてない様ですが、未来では――
――」

「……………そうか」

こりゃあ行かざるを得ないな。

知識でそんな話があったが、まさかあの馬鹿がそんな真似本当にするとは思わなかった。

すぐに向かうとしよう。

「では次の話ですが、これまで創った教育機関で数は揃いましたが、彼奴を倒す為には個々の質がまだまだ足りません。何かいいアイディアはございませんか？」

オイ。

「お前の学校では戦闘訓練でもしてるのか」

「ええ、護身の為としています」

「……………格闘術でも教えたらどうだ」

「まあ、それはいい考えですわ！ でしたら各々の個性を引き出せる様に改良できるものを……CCCとかがいいかしら。それなら教え方は……………」

ブツブツと呟いているヨグ子はやはりアザースと思考が似ていた。

まさか全てそのための洗脳学校だったりしないだろうか……。

そんなわけがない、と思いたいが……うん、やっぱり考えないようになしよう。

ヨグ子は自分の世界に入ってしまったので、彼女をおいて俺は件の星に向かう事にする。

とりあえずアザースをぶっ飛ばし、元の星と同じなのか確認してみようか。

———未来では『地球』と呼ばれています。

『地球を創造したのはアザトースである』———

目の前に浮かぶ青い星。

そして進路上に立ち塞がるのは。

「来たな父よ。どうだ、綺麗な星だと思わんか？」

「ああ、陳腐な表現だが、まるで宝石みたいだ」

「そうだろう。そしてこの星が父が最後に見る光景であり墓標となるのだ」

「懲りないな。何度やっても俺には勝てないぞ。」

それとも戦闘兵ができたのか？」

「いやできていない。頭が悪いのか私の言う事を聞いてくれなかった……」

相変わらず残念な奴だった。

しかし、アザースの発言からはすでに地球上には何らかの生物が存在するという事がわかる。

人間が誕生するにはまだ早いだろうし、今は恐竜がいるかどうか、といった所だろう。

「とにかく、戦うつもりなのか？」

「おお、そうだった。まあいい、頂点に立つのは常に一人！ 己の力で勝てねば頂点とは言えん！」

「じゃあそんな事企むなよ」

いまいちペースを掴めないまま、もう数えきれないほど繰り返したアザースとの戦いが始まった。

「死ぬがよい！」

「うるせえよい」

突撃してきたアザースにこいつは考える頭はないのか、と思いなが

ら裏拳をかます。

しかし、

「ん！？ 感触がおかしい！」

今まで戦いの度にアザースを殴り飛ばしたからわかる。

これはまるで肉を詰めただけの人形の様な感触！

本物ではない！

「フハハハ！ 我は偽物だ！^{フェイク}」

そしてエツ！」

「！！」

突如偽のアザースが破裂し、視界を覆い尽くす程の触手が一斉に襲ってきた。鋭く尖った先端を持つそれらは厚さ一メートルの鉄板すら容易にぶち抜くパワーを秘めている。

「甘い！」

自分に向かってきた触手を指で弾く。弾かれた触手は別の触手に当たり、弾き……と一瞬で繰り返され、ちょうど自分に当たらないだけのスペースができた。その場を動かず触手が後方へ流れて行くのを見るが、

「あっ、ヤベ」

周囲の触手の胴部分がボコボコッとわずかに膨らんだ瞬間に理解した。

一秒経たずに四方八方から再び触手が襲ってくる。隙間もない程襲ってくる！

カッコつけて弾かないで、素直に丸ごと消し飛ばしだ方が楽だったか、と思っているうちに……

肉の槍が放たれた。

Side 三人称

「フハハハハハハッ！ どうだ、流石に無事ではいられまい！
だがまだだ！」

アザースの身体の一部で作られた触手は自由自在に操作できる。そして隙間無く触手で埋め尽くされた肉の檻の上で本物のアザースはとどめの一撃の準備をしていた。創り出された黒い太陽の様な、不気味に揺らめくその漆黒の球体の内には太陽系を破壊し尽くせるエネルギーが渦巻いている。

動きを止めて必殺の一撃を当てる。

単純ではあるが、今までの猪突猛進ばかりのアザースには見られなかった『戦術』であった。

「完全に消え去ってしまえ！ 滅死【沸騰する混沌の黒太陽】！！」

放たれた黒い太陽は檻を呑み込む。その目的は破壊ではない、そのエネルギーでひたすら腹の中の物を跡形もなく消滅させていくのだ。

錬火に動きはない。

消滅したか。それとも動けない程のダメージを負ったか。どちらかはわからないが、しかしアザースの思考はただ一つだった。

「勝った、勝ったぞ！！ これで我がナンバーワンだ！

超越起、完ッ！」

勝利を確信し、高笑いをするアザース。念願の頂点を手に入れて、アザースの心には歓びで溢れていた。

次の瞬間までは。

「教えてやろう……。」

お前が居る場所はすでに、俺が百三十億年前に通過した場所だッッ！」

「なにッ！？」

その声が聞こえた。

声の持ち主は今まさに黒い太陽の中心に居る『父』なのだろう。

なぜ声が聞こえたかはわからない。

気のせいかもしれない。

しかし確かな事が一つあった。

「未だ健在か……！」

アザースはそれがあっさりと納得できた。

そうだ、我が目指した所は『こんなもの』ではない、と。

「ハアアアアッ！！」

黒い太陽が白い光に食い破られる。中心に居た錬火が神力の放出だけで吹き飛ばしたのだ。

「クハハハ！　それでこそ父よ！

喰らえいッ！」

アザースの背後から再び無数の触手が放たれる。

「なんとおー！」

錬火はそれを高速機動のみで回避しながらアザースの元へ飛んでいく。

迎撃も間に合わず、あっという間にアザースの目の前に現れた錬火は服がボロボロだが、傷は一つもない。

「ハッ、化け物か！」

あれだけ喰らってその程度という異常さにもアザースは歓びしかない。

目の前の理不尽な存在に触手を打ち込むのと同時に自らも殴りつけて――貫いた。

「まさかこれは!？」

「分身だ。意趣返しにはちょうどいいだろ？」

抵抗無く貫かれ殴られた錬火の分身から光が迸った。アザースの防御も間に合わない。

「……自爆【スーパーストカミカゼアタック】ってか」

爆発に巻き込まれたアザースの耳には届かなかった。

Side 常遥鍊火

アザースは去った。

今回のアザースの戦い方は不思議だったが、どうやら最近図書館で本を借りて勉強し始めたらしい。「腕っぷしも強いのに知力まで備えたら……フハハ、もはや父では役不足だな！」と言われてイラツときたのでとりあえず殴っておいた。こいつ相手だと暴力的になるから困る。というか白痴の存在のくせになに学んでんだお前。

ボス戦を終わらせていざ大気圏突入、と思った矢先に携帯電話が鳴った。

この携帯、いつでも声が聞ける様にとニヤル美が寄越した物で、どれだけ距離があっても繋がるらしい。当然の様に待ち受けがニヤル美になっていたのでもその場で空の写真を撮り、待ち受けに設定した。ニヤル美は項垂れていたが知ったことか。

なに、念話は駄目なのかって？

ニヤル美発の電波なんて受信してたら汚染されそうでイヤだ。

とまあ、そんな曰くがある携帯だが、どうやらヨグ子からみたいだ。

「どうしたんだ？」

『いえ、戦闘が終わったみたいです。連絡をと思いまして。どうもご苦労さまでした』

「ああ、そういえば誰か見ていたな。あの視線はヨグ子のか」

『ご存知でしたか。情報を持って来た身としてはどうなるか気になっていたのです。もちろん勝敗ではなく戦闘兵の件ですよ？』

そりゃあ俺が奴に無敗という事を知っているからな。

今更心配するまでもないと思っていたんだろう。

『でもどうやって攻撃を防いでいたのですか？』

私には命中していた様に見えていたんですけど』

「命中したぞ？」

『えっ』

「別に防御するまでもなかったって事だ。被弾したのは初めてだがな」

『……そういえばビッグバンでも傷一つ付かないんですでしたね。防御しなくて当然ですわ』

ヨグ子の声には呆れが混じっている。失敬な。

『そんな理不尽な存在、呆れもしますわ』

「心を読むなよ」

しかしそれもそうだ。はぐれメタルにビッグバンが効かない様に本家ビッグバンが俺には効かない。確かに理不尽。自重……はもう遅い。

「とにかく俺は地球に降りるぞ」

『話を反らしましたね？』

うっせえ。

『ですがわかりました。しばらく滞在する予定で？』

「そうする。この星に興味があるからな」

『……ニヤル美さん達には何と言うおつもりで？』

「……………」

『……………』

「…………これより大気圏へ突入するッ！」

『ちよっとお！？』

電話を切って即地球に突っ込む。

俺は何も聞かなかった！ 問題は何一つない！ よって自由だ！！
と逃避気味に自己弁護する。

だって聞いたら絶対「私も連れて逃げてください！」とか言う。必ず言う。

ニヤル美が来るならクトゥー院も、そしてハス彦やルー華もなし崩しで付いて来そうですます面倒だ。

まあ大丈夫、上位の邪神はある程度成長したら老いが止まる。不死ではないので殺せば死ぬが邪神を殺せる奴なんてほとんどいない。死なないならばまた会えるだろう。

……いや、なんかハス彦辺りが疲労で死にそうだな。

仕方が無い、ルー華にもハス彦をサポートしてやる様にメールしておこう……なんか道具も渡しとくか？ 物理的サポートに使える便利なやつ。

そんな事を考えつつ、俺は地球に降りて行くのであった。

『キュピーン！ なんだか鍊火さんに逃げられた気がしました！』

ニヤル美が電波を受信したビジョンを受信した……。

第五話：地球降下作戦（後書き）

なんだあのバトルは、だって？

お察しの通り元ネタはF91でした。

人参天国にとって触手とバトルと言えばラフレシアか……朝倉？
やっべ、作者マジ意味不明。

こんな感じでこの作品には何処かにネタが転がっているのです。
ではまた次回よろしくお願いします。

感想やご意見お待ちしておりますよー。

第六話：地球なう（前書き）

漸く原作キャラが一人とーじよ！。

少しだけだけど……

第六話：地球なう

「ぬあああー！ー！ー！」

空から落ちる俺。眼下には広い海。

無駄な勢いのままに大気圏突入したから隕石よりもスピードが出ているだろう。

そんな俺の脳裏によぎったのはこの言葉。

『恐竜絶滅の原因は隕石説』

「ピーーンチッ！！」

恐竜が！

いかん、このままでは将来学者達が『恐竜が滅びたのは神の天罰が下ったからである』とか言い出す様な胡散臭い地球になってしまう！

が、しかし問題はない。

なぜかって？

俺が神だからだ！

「緊急停止い！」

ピタッ

と海面間際でいきなり停止する。けっこうなスピードだったのが急停止すれば常人ならペチャッ♪となるが、その程度に耐えられないようなら惑星間移動を身一つで行なったりなんてできない。

しかしよくよく考えなくても体重が百キロにも及ばない俺が落ちたところで恐竜が絶滅する原因になりはしない。焦る必要はなかった。もしそうなるなら地球は余程の虚弱体質だ。山根くんぐらい。

俺が子どもの頃に初めて知った貧弱キャラは山根くん。でもどちらかというと藤木くんが好きだった。

……非常にどうでもいいな。

やれやれと思いながら周りを見渡せばどこまでも青い海。しかし視線の果てにはうっすらと陸も見えた。

じゃあ行ってみるか、と思ってみたがそう簡単に事は運ばなかった。

「ギャオオオオオ！」

「すごく……大きいです」

海面から飛び出して来たのは青い鱗が身を包み、ワニの様な鋭い牙が生えた海竜。

どう見てもラギアクルスです本当にありがとうございました。

……あれえ、ここモンハン？ おのれアザースの罠か！

おそらくこいつは海面上に見えた影を餌と思って出て来たんだろう。

「ギャアアアア！！」

「オラア！（ドゴォ）」

「ウギヤアアアア！！」

アレ？ なんだか悲鳴っぽかったような気が……気のせいかな。

とりあえず口を開いて食いかかってきたので殴り飛ばした。当然俺のパンチに耐えられるはずもなく死んでしまったようなので陸に持って行って食べてみることにしようか。恐竜なんて食ったことないし。

変な物は食わないんじゃないかなかったかって？ 邪神が持って来た物じゃないければ大抵は食べれるよ。

とにかく、海に浮かんでいる偽・ラギアクルスを持ち上げて陸地へ飛ぶ。上陸してみればいかにも恐竜時代！ と言える草木が生い茂っており、やはり古代の地球なのだなあと思えた。

さて、こいつをどうしよう。まずは解体して焼くか。あと保管していた調味料で味付けしよう。空間に手をつ込めば俺の私物はいつでもどこでも取り出せる。鱗や牙なんかはとっておこう。保管保管

つと。

目の前の骨付き肉はいい匂いを漂わせ、パチパチと焼ける様はなかなか美味しそうだ。

いざ食べようとする……

「「ギャア、ギャア！」」

ジャギイ（らしきもの）の群れが あらわれた！

「これはひどい」

見た限りでうようよ三十匹はいる。

食事の邪魔しやがって……俺が何をした！ あ、血の匂いが溢れてるし肉も焼いたな。

……まただよ！ また自業自得だよ！

この数を相手にするのは非常に面倒なので焼けた肉だけ持って逃げる事にする。もちろん今度は匂いを遮断する結界を張っておいたのでもう襲われたりはしないだろう。

ジャギイが死体に群がって行くのを尻目にさっさとここから離れる事にした。

なんだか鯨っぽい味でした。

骨を捨ててこの地球の事について考えてみる。

ここに来るまでにアプケロスっぽい恐竜を見かけたし空を仰げばリオレウスっぽい恐竜が飛んでいる。

地球だとは思えない。ピクルはT-レックスをハンティングしていたと言うが、果たしてイビルジョーを素手でハンティングできるのか。……いや、やりそうだ。

しかしなぜこんな生物が溢れてるんだ。流石にアザースが創った星、混沌としている。だがこれはチャンスだ。リアルリオレウスを写真に納める事ができる！

ついでに俺が作った『別荘』に恐竜達を入れるとしよう。別荘とはもちろん『ネギま』のアレ。小さい水晶球だが中に入れば空間の広さも時間の流れも違うというやつだ。別にこの中で修行するつもりはなかったので時間の早さは変えてないけど。たぶんこの地球上の恐竜もいずれは絶滅すると思う。せっかくなんだから恐竜達を残しておきたい。

当面の目的が決まったのでさっそく旅するでしょう。

――百万年経過――

時間が一気に飛んだ気がするが問題ない。いつもの事だ。

とりあえずいろんな地域に行って片っ端から恐竜やら植物やらを捕獲していった。知らない恐竜もいたがモンハンの奴らはほぼ全部いたと思う。甲殻類共も見つかったのだ。いないのはアイルーやチャチャブーぐらいだな。

発見しだい恐竜達には全世界共通語（肉体言語）でSETTOKUしたので彼らは快く別荘に入ってくれた。

火山地帯でアカムっぽいのとミラバっぽいのとアルバっぽいのが覇権争いしていた所に参入してOHANASHIを聞いてもらったのはいい思い出。まるで助け合いの精神に目覚めたかの様に仲良くなった彼らも別荘に入って行った。

しかしいたのは恐竜だけではなかった。

なんとここ最近、妖力を持つ妖怪に会ったのだ。

そんな馬鹿なと思ったが實際いた。でっかいムカデやでっかいオオカミなど、どいつもこいつもでっかくて好戦的。流石に妖怪は別荘

に入れるわけにはいかなかった。人の居ない別荘に妖怪だけ入れたってすぐに消えてしまうだろう。

なぜかという妖怪とは人の恐怖の象徴みたいな物なのだ。闇を恐れれば闇の妖怪が生まれるだろうし、何が居るかわからない事に恐怖すれば表れたり消えたりする妖怪が生まれるだろう。つまりは妖怪が存在するには人が不可欠。そして妖怪の存在意義もまた人の恐怖である以上、人が居なくなったり恐怖を忘れてしまえば存在の糧を失った妖怪はやがてひっそりと消えてしまう。

だが今の問題はなぜ妖怪が居るかだ。さっきの言葉、逆に言えば妖怪が居るという事は人間が居るという事なのだ。

しかし今まで人なんか見ていないしそもそもこの時代の地球には存在しなかった。でも最近妖怪が現れたって事は人間もここ最近誕生してたって事だよな？ いや待てよ、そういや一度だけ妙な視線を感じた事があったような……と悶々としながら歩いていると、

「グギャアアアア！」

「おっ、この声は！」

とりあえず人間誕生の事はおいておく。なにやら聞き覚えがありつつも珍しい鳴き声の元に向かえば。

「Wow！ ミラルー君じゃないか！」

白銀の身体に大きな角、雷を纏ったその姿はまさしくミラルーツ。

っぽいもの。個体数が少ないのであまり捕獲できず、俺にとってはカビゴン並のレアモンスターなのだ。

ミラルーツⅡカビゴン。ここに奇跡の公式が成り立った。（別に成り立ってない）

まあいいや、とにかくゲットしよう。

何かを追っているのかこちらに背を向けて這っているミラルーツ。

「グギャアッ!？」

隙だらけなので背中に飛び蹴りをかましたら悲鳴を上げた。失礼な、ちよつとしたスキシップじゃないか。

ようやくこちらに気付いたのか怒りの形相で後ろを振り向いたのだが……目が合った瞬間に真っ青になった、気がした。

え、なにこれと思っているうちにミラルーツは頭を伏せて子犬の様にブルブル震えている。

なにこれ少し可愛い、などと思ったがこの状況は理解できない。

様々な場所で暴れ回ったせいで、遂には恐竜社会でまで食物連鎖の頂点として有名になり、恐れられているとは見当も付かなかった。

疑問に思いつつも、まあ楽でいいんだけどね、と呟きながら大人しくなったミラルーツを別荘に入れていると。

「あの……」

「ん？」

誰かに話し掛けられた。

人？ いや、この時代に居るのはピクルだけだ。じゃあ誰？ 邪神？ やっべ、ニヤル美が使者として（ニヤラトホテプは別名『大いなるの使者』と言われる）やって来たか！？

と慌てていると、

「あっ、あの！」

「おうっ、なんだ別に忘れてたとかじゃないん……だ……ぜ？」

声の主に目を向ければそこに立っていたのは銀色の長い髪を持つまだ幼い少女。恐る恐るこちらを見ている。明らかに人の形をしているが邪神ではない。奴らの持つ特有の狂気の波動がこの子からは出していないのだ。

じゃあ誰？ まさか本当に人？ と考える俺に向かって

「さっきはありがとうございました！」

と頭を下げた。

さっき。俺はミラルートスを蹴り飛ばして別荘に連れて行った。何かを追っている所を。何か。

「ああ、追われていたのは君か」

「はい。薬草を採取していたら出くわしてしまっ……本当に助かりました！」

「そうか、まあたまたまそうだったただけだしな。俺もあいつに用があったし」

「いえ、危うい所を助けられた事は変わりません。どうかお礼をさせてほしいのです」

「お礼？ 別にいいんだが……」

と言って思った。

これはこの少女達に近づくチャンスだ。いや、いかがわしい意味では決していないぞ？ 今から彼女は自分の集落にでも俺を連れて行くんだろう。だったらこの謎の種族が人間かどうか確認をする為にはこのまま付いて行って他の奴も見た方がいいという事だ。招待された側なので門前払いという事もないだろうしな。

ならば答えは決まっている。

「わかった。ありがたくお礼を受け取る事にするよ」

「本当ですか！？ ありがとうございます！ ではさっそく私の村に招待しますね！」

嬉しそうに手を合わせている姿は大変可愛らしい。

……しかし村とは？　それなりに文化が進んでいるのだろうか。

とにかくその村とやらに行ってみよう。どんな所かは見ればわかるはずだ。

「あつ、申し遅れました。

私の名前は――――」

………えっ

第六話：地球なう（後書き）

誰かって？

わかっているでしょう。そう、東方最年長のあのバb……お姉さんですうわ冗談ですからやめて誰かアーツ！！

……次回閑話。

閑話：私の救世主さま（前書き）

本日二話目。

閑話：私の救世主さま

困った。

私はよく村の外で薬草を採っているのだが、いつものこの場所では最近採れる量が少ない。採り尽くしてしまったらもうここで採取ができなくなってしまうからこれ以上採れないが、今日はまだまだ薬草が必要だ。

栽培には最近成功したが今のところ量が少なく、使うにしても今日の分を賄うには足りない。

どうしようかと困ったがすぐに案を思いついた。

村から離れてしまおうが、もう少し遠くへ薬草の採取に向かう事にしたのだ。

ここは村のすぐ近くで安全だ。しかし今から行こうとしている場所に行く事を禁止されている範囲、恐竜や妖怪に遭いやすくなる。

危険ではあるがその分薬草も採れるだろう。今はまだまだ明るいし、危険も少ないはず。

そう考えた私は新たな穴場を見つける為にそこを離れた。

結果を言えば大漁。

道中で何かに遭う事もなく穴場を見つけ、夢中になって薬草を採っていた。

そしていっぱいになった籠を持ち、いざ帰ろうと立ち上がった気が付いた。

自分の周囲が、自分の周囲だけが暗くなったのだ。まるで頭上の何かが影を落としたかの様に。

自分の状況を理解した私は恥も外聞もなく、籠を放り捨ててその場から跳び離れた。

次の瞬間轟音が鳴った。

転がり土にまみれながらも目を向ければ、先程まで自分が居た所に白く大きな龍が立っていたのだ。その身体にバチバチと雷を纏い私を見ている。

今まで炎を吐く火竜や素早い動きをする迅竜を見た事はあったが、こんな神々しい龍は見た事がない。

運が悪い、と思うのと同時に運がよかったとも思えた。

もしも私が今も薬草に夢中だったら。

もしも私が周囲の暗さに疑問を持たなかったら。

もしも気付いた私が上を見上げて確認していたら。

回避は間に合わず、あの龍の下でただの肉塊になっていたのだ。

足が震える。

ギリギリで命を拾った私はこの龍から逃げられるのか。

今なら安全などと思った愚かな私は再び命を拾う為に走れるのか。

走れた。

「グギャアアアア！」

その咆哮が響き渡ると同時に私は立ち上がり、背を向けて走り出した。震える足は私を救おうと逃げてくれた。

しかし逃げられない。

背後に迫る音は大きくなるばかり。

なぜか冷静な私の頭は逃げられないと答えを出してしまった。もうすぐあの龍の腹に納まるのだとわかってしまった。

涙が出てきた。

死にたくない。

でももう私には祈る事しかできない。

すぎるしかない。

誰か助けて！

お願いします！

神様———

「グギヤアッ！？」

「！！！？」

龍の悲鳴が聞こえた。

無力な獲物を追う者には最も似つかわしくない悲痛の声。

走りながら振り向けばなんと龍が倒れている！

なぜ。転んだ？ そんな馬鹿な……。

そんな奇跡があるわけが……。

「失礼な、ちょっとしたスキップじゃないか」

「!!!!!!」

再び驚愕。

第三者の発言。この場に私と龍以外の人が居る！？

倒れていた龍が顔を上げ、私は息を飲んだ。

怒りに赤く染まった龍の顔。

自分の顔に泥を塗った存在に激怒しているのだ！

身に纏う雷は更に強くなり、邪魔な虫を踏み潰さんと殺意が籠る。

誰かは知らないけど逃げて！ 殺されてしまう！！

そう叫びたかったが声は出なかった。龍の殺気にもはや本当に震える事しかできなくなったのだ。

そして龍が怒りの形相のまま後ろを振り向き——固まった。

あっという間に殺気が霧散し人間の様に真っ青になったかと思えば、拳句の果てには頭を下げてガタガタ震えているのだ。

なんだ、何を見たんだ！

この場で絶対強者にふさわしいこの龍をここまで怯えさせる存在なんて、まるで——

そしてうつ伏せた龍越しにその存在をようやく目にした。

黒い髪、黒い瞳、灰色の布で身を包み、巨大な龍も見下ろす姿……。

ああ、まさしくそうだ。村の長老が話していた姿とまったく同じだ。

長老が話した事……それは長老がまだ少年だった頃、村が今よりもっと小さかった頃の話だ。

長老は今日の私の様に、その日村で決められた範囲の外まで行って薬草採取をしていたらしい。

だが採取している時に竜の悲鳴が聞こえたのだ。

恐ろしくなったが興味もあった。

いったい何が起きたのか。

竜同士で縄張りの奪い合いでもしているのか。

震える身体でそれを見に行き、その光景を目撃した。

一人の男が火竜を踏みつけていたのだ！

赤い鱗と甲殻を持ち強力な炎を吐く火竜は今でこそ撃退できる相手だが当時の村では災厄として恐れられた竜で、その災厄を踏みつけるなど夢にも見なかった事だった。

腰を抜かしてその光景から目を離していたのは一分か十分か、それとも一時間か。

再び見ると火竜と男の姿がすっかり消えていた。

夢でも見ているのかと一人と一頭が居た場所に行ってみると、何かが暴れた痕跡が確かにあった。

慌てて村に帰って報告したが、誰も聞いてはくれない。白昼夢を見たのだろうと取り合わない大人ばかりで、挙句決まりを破って村を

離れた事に怒られてしまったそうだ。

この話は村の子ども達は皆聞いた事があるが、信じている子は誰も居ない。

長老が誰かに聞いたか、あるいは長老が作ったお伽噺なのだろうと誰もが思っていた。

私だって信じられなかったのだ。

この瞬間までは。

私が呆然としている間に龍が消えた。

ああ、消えてしまった。また長老の話と同じ。

もはや疑いようがない。

長老は嘘つきではなかったのだ。

私は男に意を決して話し掛けた。

男はなぜか驚いていたが常識的な返事を返してくれて、悪い人ではないともわかった。

私は決めた。

何としてでもこの人を連れて行かなくてはならない。

お礼がしたいというのもある。

でもそれ以上に……私はこの人の事が知りたい。

神様に願った時に助けてくれた、この不思議な人の事を。

頼み込んだ結果、どうやら村まで来てくれるらしい。

わき上がる笑みが抑えられない。

助けてくれたお礼に精一杯もてなさなくちゃ！ でも村に着いたら
まずは長老に紹介しないと。

ああ、早く村へかえりたい！ そしてこの人といっぱい話してみた
い！

しかしそう考えていて気が付いた。

いけない、肝心な事をしていなかった。

そう、まずは初対面の人に出会ったら……私の名前、発音できるか
しら？

じゃあこの名前がいいわね。

では改めて。

「――私の名前は八意永琳と言います」

貴方のお名前何ですか？

閑話：私の救世主さま（後書き）

えーりん！ えーりん！

（。▽。）〇〇。

みんなのお姉さま永琳さんでした。

まだロリっ娘だけどね！

第七話：村へ…（前書き）

更新ですよ！。

第七話：村へ：

「鍊火は世界を旅しているの？」

「そっそ、世の中には興味深い物がいっぱいあるからな」

あれからお互いに名前を交換し合い、下の名前で呼び合うようになったが、最初に少女の名前を聞いて驚いた。

八意永琳。

俺の持つ『程度の能力』と同じく東方で登場するキャラクターだ。

ここはモンハンの世界じゃなかったのか。いや、モンハンに邪神なんて出て来ないんだけど。いろいろ混じってんのか？　しかしそれならば人が既に生まれていたとしても不思議はない。そもそも邪神が居る時点でこの世界は普通じゃなかった。

しかし八意永琳と言えば東方キャラで最年長、頭が良くて巨乳のお姉さん説が多い……筈なのだが、今のこの子はどう見ても十歳程度。どうやらまだ子どもらしい。これから成長して立派な『れでい』になるのだろう。

村までの道のりで話をしてみるとどうやら昔永琳の村の長老に姿を見られていたらしい。その長老は皆にボケ認定されているために俺の話をしても信じられなかったらしいが、こうして実在したので永琳はとても驚いたそうだ。

そりゃああんなでかい龍を素手で倒せる奴なんて普通誰も信じない

だろう。

すっかり人外の俺だが永琳は興味津々でどうすればそんなに強くなれるかと聞いてきた。流石に『百億年間修行しな!』とは言えないので当たり障りのない所で『好き嫌いせずにも何でも食べな!』と言ったら『子どもか!』とツツコミされてしまった。

後に俺は『永琳のキャラが最初に崩れたのはあの時だった』と語る。

「ここが私達の村よ」

「ほほう……」

そんなこんなでやって来た永琳の村。しっかり整備された道や木でできた家々を見ればここには江戸時代並の技術力がある事がわかる。少し前までは竪穴式住居だったらしい。それを永琳が家の建築法や素材の扱い方を考え出して今の村になったとか。お前十分すげえよ。道を歩けばいろんな人が永琳に挨拶している。長老と同じくらい有名らしく、永琳も一人一人に挨拶を返していた。

しばらく歩くと周りを生け垣で囲んだ家が見えて来た。他の家よりも二回りは大きい家で、いかにもお偉いさんが住んでいそうな所だ。

「ここが長老の家よ」

と言いながら、勝手知ったるというのか、ずんずん中に入って行っ

た。

「いいのか？ 勝手に入って」

「いいの、ここにももう何度も足を運んでるんだから。今更よ……
つとここが長老の部屋ね」

白い襖の前で立ち止まる永琳。この部屋に長老とやらが居るんだろ
う。

「失礼します。長老、只今帰りました」

永琳が襖を開けた。

中に居たのは禿げた頭と立派な白い髭を持つじいさん。茶柱が立っ
た湯飲みの前に立ち天を仰ぎながら、

「おお、神が降りた……！」

何か言っていた。

「……………」

「……………」

ススー パタン

「……大丈夫、少し待っていれば治まるから」

永琳が襖を閉めて言った。

このスルー能力を見るにかなり慣れているとみた。

しかしあんな様子で本当に俺の話ができたのか。信じられなかった原因の大部分が話の内容ではなくあんなボケ方をしているからじゃないかと思えない。

「ほとぼりが冷めるまで何処かに行きましょう」

「……わかった」

永琳の提案に乗ってこの場を離れようと襖に背を向けたが、

「永琳、帰ったかの」

「チッ……」

中からじいさんが出てきた。逃げられなかったようだ。先程の様子は鳴りをひそめ、今はただのじいさんに見えるな。

でも永琳、女の子が舌打ちとかしてはいけません。

「……はい、只今帰りました」

さっきの舌打ちはなかったものとするらしい。

「そうかそうか、葉草はどれほど採れたかの？」

「籠いっぱい採れましたよ。でもいつもの場所ではもう採れそうにありません」

「……そうか、まあ仕方あるまい。最近は雨も少なかったしのう。しかしよくそんなに採れたの？」

「ええ、その事についてお話があります。しかしまずは彼を紹介させてください」

「ぬ？ 彼と……は……」

俺を目にして固まるじいさん。龍の時といい今といい、俺そんなに怖い？

「おお、今大いなる時を経て幼き賢者が彼方に座す真実を導き出した……！」

違った。何か受信したようだ。

「長老、疲れてるんですよ」

何かに感激しているじいさんを生暖かい目で見る永琳。

いつもの事だと思っているんだろうが俺には単なるボケで済ませられない。言い回しこそ胡散臭いがどう考えても『遠い宇宙の自分の家でくつろいでいた神が巡り巡って永琳に連れて来られた』と解釈できる。まさかこのじいさんはいろいろと受信できる人なんだろうか。

「……………この馬鹿者ッ！ あれだけ遠くに行ってはならんと言っておったじゃろう！ その様な目に会って当然じゃ！」

「申し訳ありません……」

じいさんが永琳を叱っている。俺が考え事をしている間に説明に入っていたようだ。

「……あまり心配させないでくれ。葉草なぞどうにでもなる。しかしお主に何かあれば悲しむジジイがいる事を忘れんでくれ……」

「長老……」

いいじいさんだ。永琳も若干涙ぐんでいる。先程まで俺を見ながら「光が見える……！」とか言っていた電波受信型白髭じいにはとても見えない。

「常遥様、この子を助けてくださり、本当にありがとうございます。この子は儂にとって孫娘の様に大切な子。何かあれば儂は余生を生きて行く自信もありませぬ」

「そうか、だが永琳にも言ったが結果としてそうだったただけだからな。あんまり感謝されてもこそばゆいよ」

「それでもどうかお礼を言わせてほしい。本当に……ありがとうございます」

深々と頭を下げたじいさん。やっぱりいいじいさんだな。

「では何かお礼をしたいのじゃが……そうじゃ！ 常遥様、どうか永琳を嫁に貰ってくれんかの？」

「「えっ」」

じいさんが突然ボケた。

「ちょ、長老！ いったい何を言い出すんですか！」

「いやあ、この村には古くから命を救ってくれた相手に嫁ぐという設定が……」

「あんの！？」

「ないわよっ！ と言うか『設定』って何！？ 『決まり』とかじゃないの！？」

「じゃあ『世界観』」

「おい」

「おい」

いかん、だんだん混沌としてきた。永琳のキャラも崩れてきている。さっきまでいい話だったのに……。

「いいじゃろ？ 永琳は美人、器量もある、性格は……いい方じゃ！ 優良物件と言うやつじゃよ！」

「いや、こんな歳の子を嫁にしたら俺大変なんだけど」

『ペ』で始まって『ド』で終わってしまう。

「なぜ性格の所で言い淀んだのかしら？ 不思議ねー。

うふふふふ……」

「あ、いや、大した意味はないんじゃないよ?」

やべえ、永琳コエー!

「しかし嫁ぐ事には反対しな」そうだわ、しばらく私の家に泊まったらどうかしら! 私しか居ないから部屋もいっぱい空いてるし!」
「反対はしないんじゃない!」

「うるさいッ! (ドスッ)」

「ゴフッ?!」

遮られて猶言い切ったじいさん。そして仮にも年寄りに腹パン喰らわせた永琳。今までもこんな事があったのだろうか。じいさんがまだ死んでないのが不思議だ。

「で、どうかしら?」

老人を痛め付けた事を微塵も気にしていない永琳。

うーん、どうしようか。そろそろ野宿じゃなくて文明人の生活をするのもいいが。

「迷惑じゃないか?」

「そんな事はないわ。私がそうしたいんだもの。でも申し訳ないって思うんなら代わりに今までの旅の話を聞かせてくれない?」

はーん、それが目的か？　ま、それくらい全然構わないしな。

よし、決めた。

「わかった、永琳の家でお世話になることにするよ」

「ホントッ!？」

喜ぶ永琳。

永琳はどうやら常に大人の様に振る舞っているみたいだが、こうして顔を輝かせる姿は年相応のもので微笑ましい。

「よしよし」

「……恥ずかしいんだけど」

思わず撫でてしまったら顔を赤くして睨んでくる。

やばい、可愛い。

どこぞの幼年期の邪神共より。だってあいつら子どもものくせに下心があったりマセてたり苦労性で可哀想だったり大食いだったりするし。

「ふむ、永琳。お前はまだ小さい。しばらくはBまでにしておくんじゃない」「オラァ!!」「ヨボオツ?!」

こいつ、なんでそんな言葉知ってやがる！

「でもBって何？ 不穏な気配がしたから思わず一緒に殴っちゃったけど」

「……お前は知らなくていい」

知っているのはこのジジイだけらしい。こいつ絶対に電波を受信してるって。まさか邪神の一種じゃなからうな……。

「ふっ、初めての共同作業か。のって身体中に痛みがアツ!?!」

「秘孔を突いた！ 丸一日は痛みが抜けないわ……」

怖っ!?!?

倒れていても懲りずに言ってきたジジイ。その無謀なる勇気だけは褒めてやろう。

しかし相手を間違えたな……。

「じゃあさっそく私の家に行きましょうか」

「ちょっと待て、アレは放置でいいのか」

アレは痛みを転げ回るジジイ

「いいの、いつもの事よ」

「とりあえず『いつもの事』って言うっておけばいいって思っていないか?」

「……早く行きましょう」

永琳は目を逸らして歩き出す。

まあいいか、いつもの事なら、と思考を放棄するのは確実に邪神共の影響だな。

ドタドタと何かが転がる音と痛みに悶える声を背後に、俺は今日から泊まる家に向かうのだった……。

第七話：村へ…（後書き）

長老は完全オリジナルじゃないのかって？

違うんだなあこれが……

能力はともかく容姿が問題です。

NEEDLESSの闇市の長老さんをイメージして作りました。イーイー！

んなモブ知るわけねえだろって？

すみません……

次回はこの話の続きです。

第八話：お世話になります（前書き）

八意家。

前回の続きです。

第八話…お世話になります

「ここが私の家。さつ、上がって」

永琳の家は長老の家ほどではないが、周りの村人の家よりも大きめになっている。こんな家に一人暮らしなら確かに部屋も空いてしまいうだろう。

今日からこの家でお世話になるのか。

「お邪魔します」

「あら、しばらくここに住むんでしょう？　だったら『ただいま』よ」

「えっと……ただいま？」

「よくできました」

クスクスと笑っている永琳。

玄関で靴を脱ぎ、居間に向かう。

「じゃあお茶を淹れてくるわ。鍊火はここに座って居てちょうだい？」

永琳は座布団を二枚持って来て卓袱台の前に置き、台所へ行った。

待っている間座布団に座り周りを見渡す。卓袱台や筆笥などの生活用品が置かれ、唯一色合いを感じさせる物として白い花瓶の中に落ち着きを感じる青い花が飾られていた。ホコリも落ちていないし、マメに掃除をしているようだ。

しかしひとつ屋根の下で恋人でもない男女二人が共同生活などしていいのだろうか。別に俺が劣情を催すという事は無いが、まだ幼い永琳の教育に悪いのでは……。いやしかし永琳はニヤル美達に比べたらずっとまともな子だし、男女がどうこうではなく子どもが父や兄に甘える様な感情ぐらいしか持たないだろう。変な考えを持つ必要は無いかな。そう考えると、なんだか妹分ができたみたいだ。

そんな事を考えているうちに永琳が戻って来た。

「お待たせ。あまり女の子っぽくない部屋でしょう？」

「いや、一人暮らしなら物も少なくなるだろうし、掃除は角まできちんとしてる。器量ありっていうのは本当みたいだ」

「あら、じゃあ容姿と性格はどうかしら」

「そうだな、将来美人になるのは間違いない。性格の方はまだ知り合って間もないから何とも言えないが、良い子だって事はわかるよ」

「子ども扱いっていうのは気に入らないけど、ありがとう。でもそうね、考えてみれば貴方に会ってまだ一時間程しか経っていないのね……」

これまでの事を思い出すかの様に目を瞑る永琳。

「薬草を採りに村の外まで行って、大きな龍が現れてそれに襲われて、もう死ぬかと思ったら貴方に助けられて。そして自己紹介したり村に招待したり、ついさっきは長老と一緒に制裁を加えたりして私の家に来る事になり、今はこうして卓袱台を挟んで二人でお茶を飲んでいる。」

これら全部が一時間程度で起きた事。今日は本当に不思議な日よ」

目を開いた永琳は最初に会った時にした様に俺に頭を下げて、

「救ってくれてありがとう」

と言った。

「どういたしまして」

今度は俺も素直に礼を受け取った。

頭を上げた永琳はニツコリと笑い、

「じゃあこの話はひとまず終わり！ 旅の話聞かせてくれない？」

と興味津々に言ってきた。

なら俺も約束通り、この家の家主さまに面白い話を聞かせてあげなくちな。

「いいぞ、じゃあ何から話そうか……」

とりあえず俺が最初に戦ったラギアっぽい恐竜を殴り飛ばしたところ

ろから話す事にしよう。

「……わかっているとは思っていたけど、改めて聞いたら貴方は本当に凄いのね」

「はっはっは、それほどでも」

「どちらかと言うと呆れているんだけど……貴方の話に出てきた赤い竜って火竜の事でしょう？ それを殴り飛ばして終わりなんて……」

この村では竜の事を『火竜』とか『毒怪鳥』とか呼んでいるらしい。まんまモンハンだ。非常にわかりやすい。

「私達は武器を持って多人数で竜に挑むのよ？ それを素手でって、貴方何者なの？」

「んー、ただの旅人だよ」

「……教えてはくれないのね」

俺の正体は伏せておいた。

なぜかって？

そっちの方が面白そうだからだ！

ここに居る間はちょっと変わっているだけの人（巨大な竜を殴殺するのはちょっとどころではないが）として暮らすつもりだし、いざという時に公表した方がびっくりするだろう。

趣味が悪い？　すみません……

でも言わないけどな！

「あと貴方の目的の『種の保存』の為の……『別荘』だったかしら？　その事は教えてもらえるの？」

「それは別にいいんだが……いいのか？　外はもう真っ暗だぞ」

「えっ、あ！」

そう、話に夢中になっていたのか時間を忘れ、すっかり夜になってしまっていた。

「いけない、食事の準備をしなくっちゃ」

「こんな事もあるのかと！」

「えっ？」

「おーい本体、メシができたぞ」

「分身に食事を作らせておきました」

「……………」

あんぐりしている永琳。目の前の男とまったく同じ顔の男が台所から出て来たのだ。驚かないわけがない。

「……はあ」

どこかで聞いた覚えのあるため息をついた。おふぎけが過ぎたのだろうか。

「なんだか驚き過ぎて疲れちゃったわ……」

「すまんすまん。まあ別の話はまた今度。せっかく作らせたんだ、温かいうちに食おう」

「悪いな、勝手に食材を使わせてもらったぞ」

卓袱台に料理を並べていく俺の分身。ほかほかのご飯にふろふき大根、だし巻き卵、卓袱台の真ん中には野菜と鴨肉がグツグツ煮える鴨鍋が置かれた。

「いい匂い、貴方料理ができたの？」

「まあな。初めて二人で食事をするんだから、一緒につつける鍋物を選んだ。鴨鍋の理由は鴨肉を見つけたから。勝手に使ったがまずかったか？」

「いえ、かまわないけど……」

分身の言葉に戸惑っている。料理ができた事に驚いているんだろう。

「んじゃ食うか、いただきます」

「……いただきます」

「俺は消えるな」

分身が消え、二人で食事を始める。さっそく永琳が鴨を口にした。

「お、おいしい！」

どうやら口に合ったようだ。

「な、なにこれ！ 今まで食べた鴨鍋とは違う、でも食材がいいとか調理がずば抜けて上手いとかじゃなくて、まるで舌に慣れ親しんだかの様な、小さい頃の思い出の味の様な……。勝てない！ この料理には勝てないッ！ ああ、見える……。私の知らない、けど懐かしさを感じる割烹着を着た女性の背中が！ 鼻歌を歌いながら料理をしている女性の姿が！！」

大好評だな。よかったよかった。

「って本当に誰！？ おいしいんだけど幻覚を視てるみたいで怖いわ！」

「説明しよう！ この俺（の分身）が作った『懐かしの鴨鍋 真・お袋の味風』は食べればその人にとって最も『お袋らしい人』の

姿を幻視できるのだ!!」

つまり永琳にとっての『お袋らしい人』とは割烹着を着ているらしい。

「もっと普通に作って!」

「すみません……」

怒られてしまった。どうやら『お袋度』を上げ過ぎたらしい。

と言うか最近悪ノリの仕方が邪神達に似てきた気がする。

『私色に染まってきてますね!』

『? ニヤル美くんまた発作かい?』

……元氣そうでなによりだよ。

「このだし巻き卵おいしい……」

他の料理は普通に作っているので永琳も素直に食べていたが、

「う、負けた……」

落ち込んでいた。

男の俺に負けたのが余程ショックだったんだろう。それでも全部食べてくれたが。

「「ごちそうさまでした」」

食事が終わり、二人でお茶を飲む。

食器洗いは能力を使わずに手洗いだ。

料理は自分の手で作るのが醍醐味、そして片付けるまでが料理です。

いや、実は今分身にまかせているんだけど。

「明日は私が作るわよ」

「ああ、楽しみにしてるよ」

俺の料理を食べて闘争心に火が点いたようだ。必ず勝ってやると意気込んでる様だが残念、これまた年期が違う。伊達や酔狂で億年単位の一人暮らしや幼い邪神共の面倒を見ていないのだ。永琳が俺に勝つのはまだまだ先になりそうである。

「今日はいろいろあって疲れたし、明日も早いわ。今日はもう休みましょう。……でもその前にお風呂ね」

えっ、あんなに汚れたのに風呂も入らず食事してたの？　と思った
アナタ。

大丈夫、そういった汚れや身嗜みは村に来る途中に全部能力で綺麗
にしておいた。無問題だ。

それでも風呂に入りたいと思うのはやはり女の子だからだな。

「風呂は流石に沸かしてないぞ」

「大丈夫、この家は地下から温泉を引いているからいつでも入れる
わ」

「んじゃ入るか」

そして俺達は二人で温泉に入った……………わけがない
！！　当然だ。

しかし永琳に先に入ってもらったが……

「濡れっぱなしだと髪が痛むぞ」

「そうは言ってもすぐには乾かないし……」

「……あ、そうだ」

空間に手を突っ込む。肘から先が消えたのを見て永琳の顔は何かを
諦めた様な表情になった。

中を探り、目的の物を取り出す。

「ほら、これを使いえ」

「……これは何？」

取り出したのは邪神印のドライヤー。なまらエネルギー効率のいいソーラーパネル付きなのでコンセントもいらぬ。

しかし邪神が太陽のエネルギーを使うようになってしまったら、正義の味方はいったい何をエネルギーにしたらいのだろう。寿命とか？

使い方を教えて渡す。説明していくうちに永琳の顔が探求者の顔になっていった。

「……これはもらったら駄目？」

「別にいいぞ」

キラリと光る永琳の目。ドライヤーを使わずに何事かをブツブツと呟き始めたので仕方なく能力で髪を乾かしておく。この様子だとドライヤーを渡した目的を忘れているな。

なんだか永琳の様子が怖いので放置して風呂場に向かうことにしよう。

良いお湯でした。

中は手足を思いっきり伸ばせるくらい広々とした檜風呂で、石鹸も置いてあった。あれも永琳が考案したんだろうか。

居間に戻るとまだ永琳がドライヤーを見ながらブツブツ言っていたが、部屋に案内してもらいたいので仕方無く声を掛ける。

「オーイ永琳」

「ここの構造は……動力が……」

「えーりん、えーりん！」

「じゃあ分解を……ハッ！ え、錬火？ どうしたの？」

「いや、部屋に案内してほしいんだが」

「あっ、そうね。行きましょうか」

正気に戻ってくれた様でなにより。

案内された部屋は何も置かれていない部屋だが、ここも掃除が行き届いていた。

「この部屋を使って。何か問題はある？」

「……布団は？」

「あっ……」

ないらしい。

まあ一人暮らしだし誰かが泊まり掛けで来るという事も……なさそうだな。だったら布団は二組もいらなかっただろう。予備なら用意するかもしれないが……この様を見るにそれも無いんだろうな。

というか永琳、なんだか今日はうつかりし過ぎだと思う。

「えっと、ごめんなさい。あの、今日是用意できなくて、でも私の布団なら頑張れば二人ぐらい入れると思うから……その……」

「まあそれも問題無いんだけどな」

「えっ？」

再び空間に腕を突っ込み、我が家のベッド（一人用通常サイズ）を引っ張り出す。

「……………そう、じゃあいいわ。おやすみなさい……」

なぜか肩を落として部屋を出る永琳。いや、原因はわかっている。

そう、永琳は————一人で寝るのが寂しかったんだ。

今までこの広い家に一人で住んでいたが、俺がやって来ていろいろ話しをしたことで他人との触れ合いに心が休まり、同時にまた一人ぼっちで寝る事になるのが怖くなったに違いない。

しかし永琳も立派な女の子、嫁入り前に男と一緒に布団で寝るわけにはいかない。

だが一緒にいてやる事はできないが、少しでも孤独を紛らわせる事はできそうだ。

「永琳、これをやろう」

「これは……大きな枕？」

俺が渡したのは抱き枕。

いつだったかニアル美が自分をプリントした抱き枕を持って来て、『洗濯物が真っ白に洗いあがる様に、これを私だと思って好きなだけ錬火さんの欲望で真っ白にしてください！』と言っていたのでお言葉に甘えて能力で白の無地にした物だ。

「それをやるよ。抱いて寝たらいくらか落ち着けるだろ。大丈夫、また明日会えるから」

「……？ えっと、おやすみなさい」

今度こそ出て行った永琳。いい事したぜ。

あれは邪神印だが特に変わった物ではないから使っても何の問題も無いしな。これで一安心と思いい寝ることにする。

しかし永琳にお世話になるばかりもいけない。これからは兄貴分としてしっかりしないではいけな、と決意を新たにし、この日は

過ぎていった――

第八話：お世話になります（後書き）

感想ご意見お待ちしておりますー！

第九話：二人の距離（前書き）

シリアス……

シリアス？

……うん、後半は似非シリアスですね。

第九話…二人の距離

俺がここに来てから十年くらい経ったか。

すっかりこの家に馴染み、永琳も立派に成長している。いろいろと。何がとは言わないよ。

そして今、俺は家の縁側に座ってお茶を飲んでいるんだが……

「成長速度がおかしいよなあ」

科学技術のだ。

この家は中はいろいろと便利になる様に改良しているものの、外装は昔と変わらない木製の物だ。

しかし周りはそうではない。立ち並ぶビル、空を飛ぶ車、ロボットが街を歩き子ども達はドムの如くホバー走行するスケボーに乗り遊びに行っている。この光が途切れる事はなく夜も明るいし、空を見上げればうっすらと輝く膜、妖怪や恐竜の侵入を防ぐバリアが都市全体を覆っている。

そう、都市。村ではない。

かつて江戸時代並みの古いが活気のある風景だった村が、今では機械が溢れる未来都市へと姿を変え、この古風な家が場違いに思える。たった十年だ。しかもその十年でここまで技術を発展させたのはただ一人の功績だった。

金属の加工も建物の建築法も、法則の発見もクリーンなエネルギーも何もかも一人が考え出したのだ。

今この家に居ない、八意永琳が。

彼女は天才だった。俺が時折使う邪神印の道具を見せる度にそれを理解し、そこにある技術を応用して新しい物を作り出し、やがて永琳はヒントが無くても次々と発明をし、いつの間にかこの都市は邪神達にもせまる勢いで発展したのだ。

そして今永琳がここに居ない理由は新しいプロジェクトに携わっているからだ。宇宙に行く話だとは聞いているが、詳しい事は聞けていない。永琳がとてつもない天才として有名になってからはこの家に居る事も減っていき、会う事自体も少なくなってしまった。最後に喋ったのは何ヶ月前か。

そして本来なら俺はこの家に一人で留守番する事になっている筈なんだが……

「鍊火ー！　遊びに来たわよ！」

「ちょっとお姉様、待ってください！」

「どうしてこうなった……」

幼女が増えた。

なぜだ！　なぜ俺の周りには幼女が集まる！

ロリコン野郎なら妬ましいとパルパルするだろうが、生憎俺にはそ
っちの趣味はない。ノーマルだ。走り回るこいつらを見て転けたり
しないかハラハラするばかりである。

やって来たのは綿月豊姫とその妹の依姫。

長老に紹介されて初めて知り合ったのだが、なんとこの二人、長老
の曾孫だったのだ。お前実の孫いたんかいと思ったが、永琳はまた
別口だとか。意味がわからん。

永琳は俺より前に二人と知り合っており、しかも弟子入りを許して
いたらしい。勉強や剣術の師をする事になったらしいが、永琳はそ
の時から既に忙しい身、いつでも付きっきりで相手するわけにはい
かないから永琳がいない時は俺が相手する事になった。なぜか。

「師匠は最近余計に忙しくなったからあんまり私達の相手ができな
いのよね」

「お姉様は永琳師匠が居る日も勉強をサボっているじゃないですか
！」

「あー、わかったわかった。とりあえず今日も稽古しに来たんだろ、
さっさと始めよう」

「あ、はいっ、錬火師匠！」

「頑張ってね依姫、私はお茶を飲みながら待ってるわ」

「豊姫には永琳からの宿題が大量に溜まっていたぞ」

「……………（ダッ）」

「逃がさん（ガシッ）」

「いやー！ 放してー！」

首根っこを掴まれた豊姫が暴れる。

今のでわかる通り、相手をすると言っても遊ぶわけではなく、俺も師として主に戦闘関連の事を教えている。

永琳は確かに俺が鍛えたから剣術も教えられるぐらいの腕前があるが、どちらかと言うと弓を好んで使う。鍛える際に剣より弓に才能を見出したんだが、教え込んだ結果、弓で鎧竜の群れをソロで狩れるぐらいにまで成長した。あの堅い甲殻をあっさり貫通する様な矢を雨霰と放つところを見た時は流石に相手に同情してしまったな。

免許皆伝の印に俺が思い出のミラルーツを素材にして造った弓を上げたらその日の内に試射と称して黒龍を狩りに行き無傷で仕留めたと言うから永琳も大分壊れたと思う。

とそんなわけで（どんなわけだ？）自然と永琳が勉強を、俺が剣術を教えるという風になっていった。まあ別に完全に分担したのではなく、永琳は剣術の方もちょいちょい教えているんだが。

「ひいひい！ 宿題で山ができてる！？」

「提出期限が明日で切れる筈だったぞ」

「うわーん！！」

絶望する豊姫。大丈夫、今はまだ絶望する時じゃない。隣の部屋にはそれと同じくらいの宿題がまだあるからな！ 勉強はコツコツやる物である。

「んじゃ俺達も始めるか」

「はい、よろしく願います！」

「じゃあこの前の続きから。」

前回も言った様に真の極光術は大切な人を守る為の力であり……」

うん、師として教えるからにはしっかりと強くなってもらいたいところだな。

「おかえり、永琳」

「ただいま」

その日の夜遅くに永琳が帰って来た。もう日付が変わろうとしている時刻だがこれくらいの時刻に帰る事はよくある。しかし今日は会えるだけマシなのだろう。

明日の昼頃にまた出て行くらしい。

ちなみに今の永琳の服装は左右で色が違う赤と青のツートンカラー、所々に星座が描かれた服で頭には同じツートンカラーのナース帽を被っている。よくわからない服装だが街ではこんなのが流行っているとか。……まあ何も言うまい。

「泣いてたぞ、豊姫。『終わらない〜!』って」

「仕方無いわ、今までサボってた分のツケが来たのよ。依姫はどう、貴方の授業について行けてる？」

「問題ないな。俺の言う事をどんどん吸収していくし、たぶん世界最強レベルまで強くなるぞ」

剣術もそうだし、今はまだ目覚めてないが依姫には神の力を借りる事ができる『神霊と呼ぶ程度の能力』がある。地球レベルでは測れない邪神達でも苦勞するぐらいに強くなるだろう。

もっとも、最終的には能力を使わないで最強というレベルにまで上げたい。修行を積みまくった俺は『力を借りて』最強になるなどという軟弱な事は認めん。

俺、依姫を鍛えたらきつと「私は神を降ろさない方が強い」とか言わせるんだ……

主人公勢マジ絶望モノである。

「貴方、あの子を私みたいにする気？」

「永琳が火竜相手に必死で逃げ回りながら戦っていた頃が懐かしい」

「おかげさまで、今じゃあただの木の弓で鼻歌歌いながら倒せる様な人外になっちゃったわよ……」

「そのあと『物足りないわね……』とか言っていたのはどこの誰だったか……」

「……さあ、誰かしらね」

顔を背ける永琳。

すっかり非常識人になり、弓の腕はもう誰にも負けないだろう。流石に某赤い弓兵さんでも矢継ぎ早に（弓だけに）三十本以上の矢を放ち、空中でぶつけさせていつの間にかやら敵の全方位を囲んでいました、とかはできない筈だ。三十本てお前……。俺はそんな事教えてない、永琳が勝手に編み出した。お前はどこの写輪眼忍者だ。

「……私達は地上を捨てる」

永琳が突然話し始める。

「これまでずっとその計画の為に動いてきた。一ヶ月後、私達はロケットに乗り『穢れ』の無い月へ向かうわ」

『穢れ』とは。あらゆるもの、生物にも無生物にも寿命を齎すモノだ。『生』を与えるが、同時に『死』という終着点も与えるのだ。『穢れ』は『永遠』を赦さない。

しかし『穢れ』は地上に溢れていた。『永遠』を求めた人間はならばどうすればいい考えた結果、『穢れ』の無い月に移住しようという結論を出したのだ。それが『月移住計画』、永琳が携わっていたプロジェクトだった。

「一ヶ月か、ギリギリじゃないか。妖怪達が攻めて来るのも一ヶ月後だぞ？」

「そう、本当にギリギリで……おそらく間に合わない」

妖怪達はどうかやったか、人間が地上から居なくなるという事を知ったらしい。人間が居なければ妖怪は生きていけない。当然必死に妨害してくるだろう。

相手の準備が整うのもまた一ヶ月、おそらく人間は妖怪達を迎撃する事になる。人間は強力な科学兵器で対抗するが、果たして雪崩れ込んで来る多勢の妖怪にどこまでできるか、という懸念もあった。

だが問題はない。

「俺がまとめて妖怪達の相手をする」

「……貴方を残して行けと言うの？」

「あれ？ どっちかと言うところは『無理よ、死んじゃうわ！』とか言う場面じゃね？」

「貴方が死ぬ所なんて太陽が破壊される事よりも想像できないわ」

確かに俺を知っている奴らが俺を殺すか太陽をぶっ壊すかどちらか

選べと言われたら間違いなく太陽の破壊を選択するだろう。耐久力にはメタルとベス以上の差がある。

「心配すんな、お前が生きてりゃまた会える」

一人で月に行けるし。

「ええ、きっとそうでしょう。貴方には断言できるだけの力がある。……でもまた貴方に頼る事になるのね」

「妹は兄貴に頼るモンだ」

「妹って……また私を子ども扱いしてるわね」

「はっはっは、俺にはいくつになっても可愛い妹さ」

「……言ったわね？　すぐに撤回する事になっても知らないから」

「？　どういう意mーッ!？」

「ん……」

「むう!？　むうー!!?」

ど、どういう事だ！　永琳が俺にキ……キs……接吻をしている！
？　（なんだか響きが恥ずかしかった）

逃がさないと言わんばかりに頭に手を回す永琳。混乱中の俺は成す術無く仰向けに倒された。

「……んちゅっ、れろ……」

「んーーーーッ!!?」

舌が! 全てを舐め尽くさんとする舌がーッ!!

「……ふう」

「えっ、ええええーりん?」

「どう、びっくりした?」

「び、びっくりって一体何を!?」

びっくりなんてモンじゃない! 永琳に……俺のハジメテがあ?!

「もしかしてファーストキスだった?」

「!?!」

な、なぜそれを!?

「やっぱり。その反応からしたらそうじゃないかと思ったのよ」

永琳が両手で俺の顔を挟んで覗き込んでくる。その瞳の中には真っ赤になって狼狽えるヘタレた男しか写っていない。

「そう、とっても初心。それも免疫が無いと言うよりは寧ろ若いから、私よりもずっと年上で人生経験が豊富なだけの青年の様な……精神だけが若いまま保たれている様な……貴方が持つ『普通さ』に

はそんな『不自然さ』がある」

何かを確認する様に言葉を発する永琳。

「でもそんな事今はどうでもいい。貴方に口づけしたのは別の理由」

「……じゃあどういいうつもりで」

「手っ取り早く私を意識させる為よ」

簡潔に答えた。

「貴方から見たら子どもかもしれないけどね、私はいつまでも子どもじゃない。妹分扱いなんて望んでないわ。私はもう『女』なの」

決して目を逸らさない。俺を見つめ続けている。

「どう、あんなキスを貰っておいて、まだ私を『妹』って言う？」

……言えない、言えるわけがない。今や俺の目には永琳が『可愛い妹』ではなく『美しい女性』となって見えていた。

「……どうやらわかってくれたみたいね？」

俺の無言の反応で察した永琳は妖艶な笑みを魅せる。

ああ、十分過ぎるくらいわかったよ。

「じゃあ残念だけど今日はここまでね」

あれ、この空気で？　　なんだか行くとこまで行きそうな雰囲気だったんだけど。

「貴方が意識してくれたのはわかったけど、まだ女として愛してくれているわけじゃない事もわかっているわ」

そう、確かに俺は永琳に対する認識を変えたが未だ混乱状態だし、永琳を一人の女性として愛しているかと聞かれたら頭を捻らざるを得なかった。

「だからここまで。初めてのキスはこんな形になったけど、これ以上は雰囲気の流れされてとかじゃなくて『愛が在る』行為であってほしいの」

「……永琳は理想が高いのかな」

「違うわ。妥協しないだけよ」

馬乗りになっていた永琳が上から降りて漸く俺も座り直すことができた。

クラクラする様な先程の空気と今までの妹と兄貴の距離感は消え、新たに男と女としての距離感が生まれている。

「いつになったらこの距離は縮まるのかしらね？」

距離がなくなった時。その時はきつと俺が永琳を女として愛している時なんだろう。

「……悪かったな、ずっと気付けなくて」

「仕方無いわ、そんな貴方を好きになっちゃったのは私なんですもの」

苦笑する永琳。

「いつ永琳に答える事ができるかわからないけど、それまで待っていてくれるか？」

「大丈夫、貴方はもう『今まで止まっていた錬火』ではなく、『成長した錬火』になった。答えは必ず出せるわ。」

もつとも、答えなんて決まっているんだけど」

——私に惚れないわけがないんだから——

自信満々に言い放った永琳は誰もが魅了される様な笑みを浮かべていた。

第九話：二人の距離（後書き）

もう、恥ずかしいなあ！

後半は超越起らしからぬ（？）空気になりましたが、どうかお許しを。

別に大した伏線じゃないツスよ？ 想像つく人も多いでしょう。

次回は大战ですね。二話くらいに分けるつもりです。

それではまた次回へ。

第十話：来るその時（前書き）

前回に続きシリアス風味。

第十話：来るその時

あれから俺と永琳は特に何かをした、という事はなかった。

確かに俺が永琳を見る目は変わったし、キスの事を思い出す度に赤くなり、永琳に『少し刺激が強すぎたかしら……』と逆に子ども扱いされたりしたが、やはり忙しい永琳とは会う機会が少なく、会っても綿月姉妹の勉強の進み具合や日常的な会話をしたぐらいで特別な事はなかった。永琳は月に行き俺は地上に残るため、もうすぐ離れ離れになるから少しでも今までの様な日常を味わっておきたいと思っていたのだ。

いや、俺はいつでも月に行けるんだけどね。マジで。

そんな様子で一ヶ月が経ち、計画実行のこの日を迎えている。

「……来るぞ、永琳」

「わかってる。でももう少し準備に時間が掛かるわ。

……錬火」

「任せろ」

準備は間に合わなかった。

都市の外に結集した妖怪達は今まさに攻撃を仕掛けようとしていた。しかしそれは予定通りだ。この時の為に俺がいる。外で迎撃しようとしている決死隊の兵士達と共に妖怪の相手をするのだ。

決死隊はロケット発射の時間を稼ぐ為の部隊だ。彼らは志願兵や独り身の者達で構成されている。その目的上、彼らはロケットに乗る事ができないため当然ここで死ぬことになるのだ。つまり言い方は悪いが、大を助ける為に小として切り捨てられる。だから決死の覚悟をした者や家族がおらず悲しむ人が少なそうな者達が戦う事になった。そしてその戦いの様子はロケットの中で見られる事になる。犠牲になる彼らをせめて心の中に留めておく為だった。

しかし本来ならこの戦い、俺だけでも勝てる。だったら俺一人で戦えばいいと思うだろうが、実は俺の実力がどれほどの物かわかっているのは永琳くらいだ。長老や綿月姉妹も俺が強い事は知っているがどれだけかは知らない。だから俺が一人で戦うから誰も残さなくていいなんて言ったところで他の人達は納得しないだろう。

そんなわけで俺は決死隊と一緒に戦う事になったのだ。

しかし助けられるのに助けられないのも後味が悪いし彼らがいない方が俺も伸び伸び戦える。

なので彼らには一人一人に俺の分身を護衛として付けておく事にした。そしてロケットが全て飛び立ち、妖怪に襲われる事がなくなったらロケット内に転送しようかと思う。大した手間ではない。

すぐに転送しない理由は簡単だ。戦いの様子を見ている人達がパニックになるからである。自分達を守ってくれる人がいなくなり、唯一残るのが知らない男一人という事になるのだ。彼らにしたら堪ったもんじゃない。

ま、それはともかく今は戦場へ向かおう。そう思い都市の外まで来てみたが……

「「「「オオオオオオオオオオオツツツ！！！！」」」」

「うわぁ……」

いるいる、数十万に達する妖怪の群れが。一体どっから湧いて来たんだ。

中には言う事なんて聞かない筈の恐竜も混じっているから、たぶん能力で従える事ができる奴がいるんだろう。相手の戦力は更に上乗せされている。

「うおおお！ 死ねえええッ！！」

「いっちまいなあ！！」

「お前ら！ 熱線のシャワーぐらいでビビるな！！」

人間勢は遠距離から科学兵器を使い先手を取り、

「ゴアアアアアッ！！」

「いいか……一人でも突破し、人間の町へたどり着くのだ！ 我々の勝利を後の世に伝える為に……！！」

「「「「オオオオオッ！！」」」」

近づいて来た鎧竜が熱線を放ったり、一際妖力が多い角が一本生えた鬼が他の妖怪達を鼓舞したりしている。

さて、俺はどうするか。

まずはあの大軍に突っ込むがどうせなら効率的に戦力を減らしたい。ならば指揮官を殺るか、もしくはあの竜達を操っている奴を殺るのがいいだろう。統率が乱れるのもいいし、竜の制御ができなくなれば一気に同士討ちを狙えるかもしれない。

そう考えるとまずは竜を操る奴を殺りたいが、誰がそうなのかかわからない。もしかすると死んだら大変だと思って隠れているかもしれないしな。

だったら指揮官を殺ろう、狙いは当然さっきのアイツだなと狙いを定めたが……

「……！ 都市内から妖力が！？」

しかも永琳が居た辺りだ。更に次の瞬間には永琳の霊力が攻撃をしたのがわかった。

「何だ、何があった！！」

まさか永琳の身に何かあったのか！

俺はすぐさま永琳の元へ向かった。

S i d e 八意永琳

彼が行った後も私はひたすらコンソールを叩く。

今私以外でここに残っているのは武器を持った僅かな護衛だけだ。

妖怪に立ち向かう彼に気をつけて、とは思ったが、実のところ心配なんて全くしていなかった。

だって私は知っている。人も竜も妖怪も、あらゆる生命を敵に回したところで彼は変わらず勝利するのだろうと。

彼に鍛えられて私はだんだんと知っていった。

最初に鍛えられて、よくわからないけど凄い人だとはわかった。

更に鍛えられて私は強くなっている事がわかった。

まだまだ鍛えられて、私は彼とどれほど大きな差があるのかわかった。そんな気になった。

そして彼にたくさん鍛えられて、結局私は何もわかっていなかった事を知った。

霊力を教えられ、武術を学び、様々な技術を齎されて成長した私は彼が途方も無い存在だとわかったのだ。

果てしない高みにあるその力は、いくら上を見上げたところでとても理解できるモノではなかったのだ。

まさに人知を越えた存在。

そこで気が付いた。

ああ、最初からわかっていた事があったんだ、と。

龍に襲われる私の声に答えてくれた存在。

あの時から既に彼の事がわかっていたんだ。

彼は隠せているなんて思っているんだろう。でも残念、伊達に『天才』なんて呼ばれてないのよ？

だから私は今、作業に専念していた。彼の力が誰より凄い事を知っている私には心配なんて欠片もなかったから。

しかしその作業中に声を掛ける者が居た。

「どうじゃ永琳、もうすぐ終わりそうかね」

「長老!？」

既にロケットに乗っている筈の長老だった。

「長老、まだ乗っていなかったんですか!？ 早く乗り込んでください!」

「いつになったら『長老』じゃなくて『おじいちゃん』と呼んでくれるのかの……」

ブツブツ言いながら杖について歩いて来る長老。

長老は杖を手放せなくなった頃に長の役目を退いており、その際に「おじいちゃんとよんで」と言っていたのだが、私にとったら良くも悪くも長老という事に変わりないので却下していたのだ。まあ長老も諦める気はない様だが。

「なぜここに？」

「最後にこの町をこの目に焼き付けておきたかったんじゃないよ」

長老はどこか遠い目をして答えた。

「あの火竜一匹狩るのにも苦勞していた村が、今ではここに入て来れないどころか武器ひとつで倒せてしまう様な技術を手に入れた。民は心配をする事無く安全な暮らしができたし子ども達の笑顔もたくさん見れた。」

永琳のおかげじゃよ」

それに常遥殿にも会えたしの？

そう言って笑い掛けてくる。

「しかし儂らはここを離れる。儂にとって様々な思い出が残るこの町を出て行くのは寂しくての」

「長老……」

「だからいつまでも忘れん様に目に焼き付けておったんじゃ。

しかしそろそろ行かねばな。永琳、邪魔したの」

「いえ、かまいません。大丈夫、向こうに行ってもこの町の事は民の記憶に残ります。みんなが憶えてくれますよ」

「……そうじゃの」

こちらに背を向けて歩いて行く長老。今度はちゃんとロケットに乗ってくれるんでしょう。

長老はこの町が『村』の頃から居る最古参の人物だ。誰にもない思い出もたくさん持っているに違いない。

私も少し感傷的になってしまったがまだする事がある。

再びコンソールに向き合うが……

「うわあああ！！！」

「!？」

護衛の悲鳴が聞こえた！ 一体何が！？

「やっほう！ 漸く人間を見つけたぜ！」

誰かが現れた。いや、この言葉で理解した。

だがなぜ？ こんな所に————妖怪が！！

「アニキ、見てください！ 人間がいましたぜ、しかも上玉の女もだ！？ 片方はジジイですが」

「おう、なら他の人間も近いかもな」

小柄な鬼の言葉に長身で細身の鬼が答える。その回りには妖力が多い十匹ほどの妖怪も控えていた。

どうやらここで人間を探していた様だが……

「あなた達、なぜここまで！？」

「へっ、確かに苦労したぜ？ ここまで来るのは……」

小柄な鬼が喋る。

「だけどオレの『地面を掘る程度の能力』でコツコツとこの下まで掘って来たのさ！ いちいち壁みたいな硬い物にぶつかっちゃってこんなに時間が掛かっちゃったけどな……」

地下からの侵入を阻む為の防壁だ。今まで相手の準備が遅れていたのはこの少数精鋭の別動隊を送る為だったのか。

しかしそれだけでは説明がつかない。

「妖力を探知したらわかる筈だったんだけど」

「そこはワタシの『力を隠す程度の能力』だ。探知されない様にこいつの妖力を隠しながら掘っていたのさ」

今度は細身の鬼が答えた。

なんてひどい組み合わせ。次からは能力封じの結界も張ろうかしら？

しかし今はこの状況をなんとかしないと。

「もういい、さっさと殺して船を壊しに行くぞ」

「えー、殺っちゃまうんですかい？ 折角の美人なのに……」

「ワタシ達の目的を忘れたか。船を壊せばワタシ達の勝ちだ。逃げられなくなった人間ならいくらでも喰うなり犯すなりしな」

「へーい……」

勝手な事を言ってくれる。私がそんなに弱く見えるのかしら。

「長老、下がっててください」

「……無茶せんでくれよ」

長老も今どうするべきかわかっているので素直に下がった。

穴を掘って来たという事は今も穴から妖怪が来ている可能性がある。すぐにでもこいつらを倒し、穴を塞がなくてはならない！

「おお？　ねーちゃんやるのかあ？」

前に出て来る鬼。

嘗めるなら好きだけ嘗めるといい。そっちの方が油断してくれるから。

「へっへー、じゃあアニキ、オレにやらぜぶッ！！？」

頭が吹き飛び血が噴出する。

即座に手元に白銀の弓を転送した私は間髪を容れず矢を放ったのだ。

まず一体、と思ったが……

「えっ！？」

首の無くなった鬼の身体が飛んで来た！

視界が遮られたのですぐ横に動いたが……

「死ね」

もう一人の鬼が目の前まで迫って来ていた。

こいつ、味方の死体を躊躇無く突き飛ばしたのか――！

まずい、喰らう。致命傷にはならないだろうが戦闘力を削られるダメージが来る！

せめてダメージを減らそうと霊力で防御しようとしたその時――――

「それは赦さんぞ！ 『こっちへ来い』 ツー！！」

「んなっ！？」

こちらへ飛び掛かった鬼が声を漏らし、私の頭上を越えて行った。

『何かに引っ張られる』様に長老の所へ。

「長老ッ！？」

体勢を立て直しすぐに矢を番えて振り向いた私の目に写ったのは……

「……ぐぶっ」

鬼の腕に身体を貫かれた長老だった。

「ああああ、ああああああ！」

夢中になって矢を放った。

一本の矢は突き刺さった腕を千切り、もう一本の矢は込められた靈力を爆発させ鬼の身体を吹き飛ばし、最後の矢は吹き飛ばされた先の鬼の頭に正確に吸い込まれて行った。

長老に被害が及ばないよう、もはや条件反射の様な精密射撃を行い長老の所へ走る。

「永琳、何があった!!」

鍊火が駆けつけてくれた。

もう、遅いわよ！

周りの妖怪は一瞬で片付けて長老の傍に座り込む永琳の所へ行った。
腕が刺さったままの長老の腹部は血で赤くなっていた。

「永琳何があった!?!」

「どうやら妖怪が穴を掘って侵入して来たらしいの! その妖怪に長老達が……」

「地下から!?! クソッ」

俺は分身を生み出し命令する。

「お前はそっちの奴らの傷を! お前は妖怪を見つけて始末しろ!
穴も塞げ!?!」

「「わかった!」」

分身達が部屋から出て行く。既にそれぞれの役目に取り掛かっているだろう。

「錬火、傷を!」

「任せろ! 『クレイジー・D』ダイヤモンド ツ!?!」

腕を引き抜き傷口に触ると傷が治っていく。

しかし……

「長老! 傷は治りましたよ!?! ほら、立ってください! 長老

「!!」

長老の弱々しげな呼吸は変わらなかった。

「……これは、生命力自体が切れかけている!?　じいさん、あんな何したんだ!!」

「……なぐに、ちょっと力を振り絞っただけじゃよ」

長老がゆっくりと目を開けて答えた。

「錬火、どうにかなる!?!」

「当たり前だ、俺は神だぜ!?　不可能はない!!」

さりげなく暴露してしまったが、この時は気付かなかったが永琳達はあまり驚いていなかったと思う。

しかし霊力も生命力も俺なら補給可能だ。さっそく始めよう、そう思ったが……

「……常遙殿、待ってください」

「長老!?!」

長老に止められた。

「俺はこのままでいい、それより俺の話を聞いておくれ……」

長老が話した内容には驚いた。

『引き寄せる程度の能力』

長老が持っていた能力だった。この能力で鬼を『引き寄せた』らしい。しかし自分より力が上の者を引き寄せるには余程力が必要らしく、鬼を引き寄せるのに自分の生命力を限界まで絞り出したのだとか。

そういえば長老は今までも電波を受信する事がよくあったが、もしかしたら電波を『引き寄せて』いたのかもしれない。

連れて来るという所が曾孫の依姫の『神霊を呼ぶ程度の能力』にも似ているな。

「常遥殿も、一人だった永琳を孤独から救ってくれる人として儂が引き寄せたのかもしれない……」

……俺は超越神だ。そんな俺を長老が何の代償も無しに干渉するなんてありえない……なんて俺には言えなかった。

だって昔の俺は体験していた。

今俺がここにいる原因を。

ほんの僅かな可能性が生み出す奇跡を。

長老の言葉が否定できなかった。

「……二人とも、儂はこの町に残るよ」

「そんな……」

「言ったじやろう、永琳。ここは儂の思い出の場所。どのみち老い先短かったんじゃ、儂の人生の終わりは新しい町よりもこの町で迎えたい」

「……………ううううっ」

永琳は涙を溢しながら齒を食い縛って耐えていた。

長老も連れて行きたい。

しかしそれを口にする事はできなかった。これが長老の本当の願いだとわかっていたから。

「……………わかった。じいさん、あんたを残して行こう」

「鍊火……」

「ほっほっ、すまんのお……」

その願いを聞き遂げよう。この常にめげないじいさんが考えを変える事は無いだろう。

「……………わかったわ。長老、ここでさようならです……」

長老の手を握りしめる永琳。

「……常遥殿、永琳は美人じゃし器量もある、なによりこんなに優しいんじゃ。優良物件じゃよ?」

「ああ、わかっているよ。俺にはもったいないくらいだ」

「ちゃんと考えておいておくれよ?」

俺と話し、今度は永琳の方を向く。

「永琳、敵は筋金入りの鈍さじゃぞ? 苦勞するかもしれんが、し
っかりの」

「……ふふ、そんな事は百も承知です。大丈夫、すぐに落としてみ
せますよ」

「その意気じゃ。………最後に二人で『おじいちゃん』と呼んで
くれないかの?」

なぜ俺まで?

「孫が増えたみたいじゃろ?」

「もう、こんな時にまで………さようなら、『おじい
ちゃん』」

「………さよならだ、『じいちゃん』」

「うむ。二人とも、さよならじゃ………」

ゆっくり目を閉じる長老。

もうその目が開く事は無いだろう。

「……私はまた作業を再開するわ。いつまでもこうしていたら『おじいちゃん』に怒られちゃう」

「そうか。じゃあ俺は外に向かう前に『じいちゃん』を屋敷に連れて行くよ」

「ええ、お願い」

自分の家の方が思い出がいっぱい詰まっているだろう。いつもと変わらぬ場所でゆっくり眠ってくれ。

そして俺達はそれぞれのすべき事を再開した。

Side 三人称

ロケットは上がったが、その中でも人々はモニターを見続けた。すると不思議な事が起こった。

なんと戦っていた決死隊全員が次々とロケットの中に送られて来たのだ。

一人も欠ける事なく帰って来た彼らに困惑しつつも喜んでいたが、そこで誰かが気が付いた。

「おい、誰が残っているぞ!!」

皆がモニターに顔を向ける。

そこに居たのは空中から妖怪の群れを見下ろす一人の男だった。

その男には何の恐れも見られなかった。今や地上にある全ての視線を一身に受けているというのに。

そしてその光景はある種の象徴にも見えた。妖怪も恐竜も、たとえば空を飛んでいる奴でも全てがその男を見上げていたのだ。

まるであらゆる生命の手が届く事が無い、見上げる事しかできない果てしない存在が降臨したかの様な。

「—————」

男が手を広げ、何事かを呟いた。

—————光が落ちた。

神聖な光が地上を染め上げていく。

圧倒的な光景の中に人々は全く同じ思いを抱く。

「―――神が降りた」

誰かが呟いたこの一言こそ、それを視る人間達の総意だった。

闇夜に朝日が射し込む時に感じる神の気配。救いと解放を齎した瞬間の太陽の様に光で敵を白く塗り潰して行く光景を見て、人間達はそこに『神』を幻視したのだった。

「師匠、あの人は……」

「そうよ。あれが彼。とっても凄いでしょ？」

「……とんでもない人だったんですね」

「す、凄いです！ 私もあんな風になりたいです！！」

「……じゃあこれまでに以上に修行を頑張らないとね」

「はいっ！！」

一人の女性と二人の少女はほんの二、三言だけ言葉を交わし、再び

モニターに見入っていった。

「れえ~~~~~ん~~~~~かあ~~~~~さあ~~~~~
~~~~~ん~~~~~」

「ゲッ!!!」

……彼の戦いはまだ終わらない。

## 第十話：来るその時（後書き）

はい、大戦自体はあっさり終わりました。

これですばらくはシリアスはありません。

最後のは誰かって？

このタイミングで這い寄って来るのはあの人（？）しかないでしょう！

それではまた次回、『錬火の戦い』後編でお会いしましょう。

## 第十一話：這いよるあの人（前書き）

東方キャラより邪神の登場頻度の方が高いという不思議。

今回は一万字超えましたぜ！

しかしグダグダ……どうかお許しを。

## 第十一話：這いよるあの人

全部終わったと思っていた。

長老の弔い合戦とは言わないが、せめて派手にやって手向けとしようと思ひ、

派手にいこう！↓やっぱ神らしく？↓とりあえず光るか↓そういえば依姫も見ているんだっとな↓ならば真の極光を魅せてやる！

という思考展開の元、

「バテンカイトスに葬り去ってやる！」

と間違ったキャラのまま極光壁（攻撃範囲鬼畜仕様）を発動し、敵軍を全滅させてじゃあ俺も月さ行くべえ、と思っていたが……

「アナタの心臓ハートにズームインですよ……………」

「狙われているッ!!?」

裏ボス戦が終わっていなかった!!

俺の戦いはこれからだった!! (打ち切りフラグ)

「れえゝゝんゝゝくあゝゝすあゝゝん……? 今の今まで何をしていたんですかゝゝ……」

「ニヤル美、なぜここにッ!？」

幽鬼の様にゆらゆらと揺れながら黒いオーラを発しているニヤル美。オーラが視認出来るだど!？ バカな、俺は凝は使っていないぞ!

しかしこれはヤバイ。

今のニヤル美は怒りでパワーアップしている様に見える。当然原因は俺にあるから強く出れないし、もしかするとここ数十億年で初めての危機かもしれん!

アザース? アイツじゃ役不足だ。

「何度携帯に電話をしても繋がらないしメールを送っても返信されないし詠唱しても召喚されてくれないし……どういう事ですかねえ」

……そういえば携帯は電源を切ったままであれから一切触ってないな。

携帯を取り出しメールを確認してみる。

『着信履歴…五億件』

『受信メール…二十億件』

凄かった。

送られた数も凄いが何よりこの数の履歴が携帯にしっかり保存されている事に驚いてしまった。

「連絡が無いのは不安でしたが鍊火さんをどうこう出来る人なんていないですからね。それに加えて鍊火さんが突然どこかへ行くのも初めてではないので最近はメールに時間を費やすよりも何処へ行ったのかを捜す事にしていました」

「それでもこの数か……」

「ちなみに普段クトゥー院から一日に送られて来るメールの数は平均八件です」

一年を三百六十五日とすると

放置していた百万年×三百六十五日×八件＝？

答え…約二十九億件

……もうあいつ『ツン』じゃねーよ。『ヤン』入ってるよ。

「なんですか？ 私に飽きちゃったんですか？ 搾り取れるだけ搾り取ったら後はポイですか？」

「人聞きの悪い言い方はやめろ！？ 何だその典型的なたちの悪い男は！」

「だってあんなに私に貢がせたじゃないですか！」

「携帯とか抱き枕とかか！？ あれはお前が勝手に持って来たんだろ！」

「……錬火さん、まるで責任を逃れようとしている駄目男みたいですよ」

「俺もそう思った……」

いや、こいつが勝手に持って来たというのは本当なんだが、それを突き返さなかった時点で俺の負けが決まっていたのかもしれない。

「返済はキャッシュでは不可です。身体で払ってください」

「よしわかった。俺の力が凝縮された血液とかが欲しいんだな？ いくらでもやるからこの件は不問にしろよ？」

「いえ、錬火さんの血が欲しいのはある意味合ってますが、実際に欲しいのは血液ではなく錬火さんの雄しべです。血は副産物ですね。

出産だけに！」



「そんな事だろうと思ったってばよ！」

いかん、口調も変わってしまう程『気圧されて』いる。悪いのは俺だからとここぞとばかりに押して来ている！

「さあさあ錬火さん、私の連絡を拒否してまで一体何がしたかったのか教えてくださいよ！」

「ま、待て！　そういえば何でお前はここがわかったんだ？　俺気になるなあ！！」

「時間稼ぎですか……？　まあいいでしょう、お教えします。」

それでは回想どうぞ！

「いや、口で説明しろよ……」

## Side ニヤル美

「……クトゥー院くん、よくニヤルラトホテプの家になんて入れたね？　僕やルー華くんなら大した問題は無いけどクトゥグアの君じ

やあ厳しいと思ったんだけど……」

「だからさっきニャーズさんにお土産を持って来たんじゃない」

「……赤い宝石を渡していた」

「ああ……けっこう喜んでいたねえ」

私の部屋の前で聞き覚えのある声が三つ聞こえる。

しばらくの間会わなかったからわざわざ家まで来たんだろう。ありがたい事だと思う。だがクトゥー院、あんたは帰れ。

「ニャル美、入るわよ！」

ドンドン扉を叩く音の後、ドアノブが回り扉が開――

「うえ？　ちょっと、何で鍵が掛かってんのよ！（ガチャガチャ）」

――かない。

「ふははは！　当たり前でしょう、ここは年頃の乙女が持つ聖少女領域ですよ！？　ロックぐらい掛けるに決まってんでしょ！」

しかもその鍵穴に合う鍵は存在しない！　身体を自由に変化させる事ができるニャルラトホテプだけが鍵穴に合った鍵を作る事ができるのです！

両親は一応そこらへん弁えてますからね、勝手に入る事はありません。それでも鍵は掛けますけど。

「くううー！ 馬鹿にしてるわね！？」

ハス彦！ あなたドルドルの実を食べなさい！」

「持っていないしあっても食べたくないよ……ニヤル美くーん、開けてくれないかい？」

「クトウー院が帰るなら入ってもいいですけど」

「ちょっと、特別扱いはいいけど私だけ仲間外れは嫌よ！」

「クトウー院くん、これは残念な方の特別扱いだからね……？」

いよいよ騒がしくなって来た。しかし私は忙しい。今漸く彼の手掛かりを持つ奴が……！ 何々、天を突けそんな物凄いドリルを持った人と話していた？ ドリル？ 誰ですかね？

「……私が開ける」

「」「へっ？」「」

今まで黙っていたルー華が突然喋った。

「そうか、ルー華くんの『テレパシーをする程度の能力』なら……」

「私に会いたってイメージを送って我慢できなくなって出て来た所を抱きしめてあげるのね！？ もう、仕方無いわね……！」

「違うよ……いや、違くも無いのかな？ とにかく、扉を開けたく

なる様に思考誘導するんでしょ？」

「……二人共違う」

「？　じゃあどう開けるのよ」

「これを使う」

「それは……」

「鍵ね。ここの鍵なの？」

鍵？　この扉の鍵なんて無い筈ですが。何を取り出したんでしょう。

「錬火に貰った」

「は！？　ちょっと待ちなさいルー華！　あなた今錬火さんに貰ったって！？」

「……あらゆる存在には鍵穴がある。扉にも、地面にも、嵐にも」

「なんか必殺技の前口上みたいなの始まったー！？」

「その鍵穴に差し込み回す事で対象を『開閉』できる」

「あっ鍵が長くなったわ」

「ああ、そういえばそんなのでニヤル美くん達の喧嘩を止めていたね……」

「ちよつとー?! 何をやっているんですか! 変な事しないでくださいよ!」

「……ルー華エグゼトランスミッション」

ズボッ

——ガチャリ——

開いた。

『扉』が。『鍵』ではない、直に扉が開いたのだ。自動ドアの様に縦にパカッと。

「ひいい、私のロック面が真<sup>メン</sup>つ二つに!! ルー華、あなた何をしたんですか!?!」

目の前のルー華に詰め寄る。その手には確かに三十センチ程の長い鍵を持っていた。

「……これで開けた」

「何ですかソレはッ!」

「……錬火に貰った」

「それっ、それですよ! 錬火さんに貰ったってどういう事ですか! いつッ、どこでッ、どうして貰ったんですかーッ!!」

「……『マスターキー』（ガチャリ）」

「……………ッ!? (身体が、動かないッ!?)」

「うんうん、確かこうやって二人を止めてたんだ」

「二人つてもしかななくても私とニヤル美よね。こんな事された覚え無いわよ?」

「……………身体ごと意識も閉じてた」

「ニヤル美さんと闘っていたら次の瞬間別の場所に居たって事はあったでしょ? こうして動かなくなった二人を僕が移動させてたんだよ」

「……………ッ! ……………ッ!」

「……………口は開く」

「(パカッ) そんな事はどうでもいいんです! 私でも何か貰った事が無いのに何でルー華にはそんなキーブレード擬きを贈っているんですか! いつの間に!」

「……………百万年くらい前に貰った」

「はあ!? 百万年って言ったらちようど鍊火さんが居なくなった頃じゃないですか!」

「『しばらく旅に出るからこれでハス彦を助けてやってくれ』って……………」

「あ、僕のためだったの？ いやあ、心配されるって何だかありがたいなあ」

「旅い！？ 一人ですか！？ 何で私も連れて逃げてくれなかったんですか錬火さん！！」

「ちょっとそれは許さないわよ？ ニヤル美が何処かへ行っちゃうんなら私だって付いて行くんだから！ ニヤル美とは……その……ライバルだしね……！」

「意味がわからないので死んでください」

「それにしても不思議な鍵だね」

「……『開閉する程度の能力』が籠っているらしい。『止めると言ったら鍵だろう』ってくれた」

ぬぬぬう、また錬火さんに聞かないといけない事が増えましたね……！！

しかし……

「ルー華、落ち着いたのでこれを解いてくれませんか？」

「……あばれない？」

「暴れません暴れません」

仕方無い、私が学校を休んでまで何をしていたか皆に教えておきましよう。

「情報収集？」

「そうです。そこらへん歩き回って聞き込みしても欲しい情報は集まり難いでしょう。しかし世の中には情報だらけと言っても過言では無い場所があります」

「じゃあ家に籠ってネットしてたってわけね？」

「失礼ですね、情報収集の為に仕方無くですよ」

「……でもこれはゲーム？」

「ああ、それは今話題になっているネットゲですよ」

「『モンスターハスター プリンキピア』……何これ、僕の種族？」

「ええ、モンスター級に強いハスターがいろんな兵器を発明してダゴンとかヒュドラとかを狩るゲームなんです。どっかのハスターの会社を作ったんですけど……ハス彦君ご存知無い？」

「いや、知らないなあ……」

「……私達の眷属達……」



「あー、このゲーム、ハスターが作ったからかクトウルー関係の敵が多いんですねー。やっぱり敵対種族だからですかね」

「……なんかゴメンね？」

「……ハス彦は悪くない」

首を横に振るルー華。本当にこの二人は敵同士とは思えませんね。……それを言うならクトウルー院もですけど。

「んで、成果はあったのかしら？」

「モチのロンですよ、これまでの努力が実を結び今漸く情報を持っている奴をふん捕まえた所です」

「へえ、やるじゃない」

ホント、苦労しましたよ……

『ギルドに居る』って聞いて行ったら『クエストを受注して行きました』と言われ、そこまで出向いたらそいつの仲間に『アイテム売りに行ったからお前も急ぐべきそうすべき！』とか言われ、いざその店に行けば店の奴に『あ奴は山奥の村に湯治に行ったのじゃ。それよりぬしは旅のハスターじゃろ？　なんか買ってってくりよれ？』と押し売りされかけ、とにかくあちこちに行っていたのだ。もはやこれ自体がお使いクエストみたいな物か、もしくはコケにされているとしか思えなかった。

まあいつまでも愚痴っていても仕方無い。とりあえず手に入れた有力な情報を三人に話そう。

「……ドリル？」

「ドリルを持った人なんて……誰かいたかなあ？」

「私の知り合いじゃないけどドリルを装備したロボットを持ってる  
なんとか団って奴らなら知ってるわよ」

「それなら私も知ってますよ、本気を出したら銀河系よりでかくな  
るとか言ってる団体でしょう。でもロボットじゃなくて自分で持っ  
ていたらしいんです」

「何処かの工事現場だったのかなあ……」

「「うーん……」」

「……ヨグ子理事長」

「「「あっ」」」

た、確かに！

あの人の縦ロールは見事な掘削機！　ドリルと言われれば誰もが頷  
くでしょう。しかもあの人は錬火さんと古い知り合い、かなり有力  
な線ですよ！

「ナイスですルー華！　じゃあさっそくアポを……どうやって取り  
ましょう？」

「ああ、あの人他の学校でも忙しいから滅多に会えないんだよね」

「何言ってるのよニヤル美」

「あん？ 何ですか？」

「今度私とニヤル美が行ってる宇宙やまぶき高校に来てくれるじゃない。私達の卒業式に」

「へ……？」

「呆れた、知らなかったの？ ……でも最近ニヤル美が学校に来る回数も減ってたからね、聞き逃してたのかも……もう、仕方無いわね、特別に教えてあげるわ！ 今回だけよ！？」

「思い出したかの様にツンデレにならなくていいのでさっさと教えなさい」

「でもそんなに変わった事じゃないのよ？ 単にヨグ子理事長が創った数多くの学校の一つで送辞を送ろうってだけなんだから」

「……どこの学校の卒業式でも来てる」

「でもニヤル美くん最近休み気味だったんだよね？ 卒業は大丈夫なの？」

「それなら大丈夫ですよ。テストは常に高得点取ってましたし出席日数も足りる様に計算して休みました」

「そんな事に頭使わなくても……」

しかしグッドタイミングです。

漸く有力な情報が手に入ったかと思えばそれを確認できるチャンスがすぐそこ。おそらくヨグ子理事長なら何か知っているでしょう。まるで止まっていた時が動き出したかのようです！

乗ってる、波に乗ってますよ！！

「じゃあ久しぶりにニヤル美くんにも会えたし、そろそろ御暇しうかな」

「あっ、そうですか。ならお見送りぐらいはしましょうかね」

「ニヤ、ニヤル美？ 別に私にネトゲについてもっと教えさせてもいいのよ？ でも勘違いしないでよね！ ネトゲに興味が湧いただけで、家でもニヤル美と一緒に遊べてお徳！ なんて思っていないんだからね！！」

「……『カギ真拳』（ガチャン）」

「—————ッ！！」

「じゃあねニヤル美くん」

「皆さんさよーならー」

……行きましたか。

それにしても卒業式ですか。出来れば鍊火さんにも来てもらいたかったんですが……居ないもんは仕方ありませんね。

ま、卒業式までは少し時間があります。もう少し情報を集めておくのでもいいかもしれませんね……

決して遊ぶ為ではありませんよ？ あくまで情報収集です！

「理事長！ 話を聞かせてもらいますよ！」

「な、何をかしら？」

ここは卒業式後の理事長室。ヨグ子理事長が何処かへ行ってしまったというちに即行でやって来ました。

卒業式の描写？ 鍊火さんが見てくれない卒業式のなんて必要ありません！ 強いて言うなら父さんの号泣がうるさかったですが……ひたすら他人のフリをしておきましたね。

いえ、それはともかく……

「理事長は百万年前にいなかった鍊火さんと何か話していたようですね！」

「えっ、なぜそれを！？」

「その反応、やはり鍊火さんの失踪に関わっていましたか！」

漸く鍊火さんの居場所がわかるんですね！ フッフ、勝手にいなくなった罪、どう償ってもらいましょうか……

「ハア、ハア、見つけたわよニヤル美！ ホームまですっぱかして何してんのよ！ 先生怒ってたわよ！？」

「クトゥー院じゃないですか。あんた息切らせてまでそんな些事を伝えに来たんですか？」

「先生にニヤル美を捜して来いって言われたのよ！ 息を切らせているのはいきなり走ったからで、別にいなくなったニヤル美を捜すっていうシチュエーションに若干興奮したからってわけじゃないんだからね！！」

「あんたがこの前の宇宙マラソン大会でトップじゃないにしろ息も切らせず完走した事はこの際置いておくので、とりあえず息を止めておいてください。五時間程」

「アハハッ！ バカねえニヤル美、そんな事したら流石に死んじゃうわよ？」

「死ねつつつてんですよ最近もうツンじゃなくなって来てんですよこのSAN業廃棄物！」

「……じゃあ私はこれで失礼しますわ」

「おーっと逃がしませんよ！ 逃げるんなら吐くもん吐いてからにしてください！」

「……貴女って話しているとだんだん遠慮が無くなって来るんのですよね」

遠慮で鍊火さんが見つかるなら苦勞はしません。

「……わかりました、お話ししますわ。流石に百万年も放って置くとは思わなかったですし……」

漸くヨグ子理事長がその日の事を話し出した。

「へえー、新しい星ができたの。あんなんでも一応最上位の邪神っただけはあるのね……ってニヤル美!? どうしたのその黒い波動は! 暗黒面に落ちちゃったの!？」

クトゥー院がなんか言ってますが気になりませんね……

鍊火さん、あなた忘れてたとかじゃなくて気付いてたのにこんだけ放置咬ましてたんですか? あなたを思って枕もシートも濡らしていた健気な私を放って置いて、それより気に掛けたのがハス彦君?

男ですか!? 美少年がいいんですかーッ!?

「……まあここまで放置されれば怒るのも当然ですわね。わかりました、ニヤル美さん。お父様の所へ行くといいでしょう」

「えっ、でも未開発の惑星に民間人が勝手に行くのは宇宙連合に禁止されてますよね? 本当に降りていいんですか?」

「確かに何の調査もしていない星に行くのは原則禁止ですわ。貴重な物質を持ち出されたり妙な病原菌に感染したりすると困りますから。でもその星が今のところそういった心配が無いのは私の『時空の制限を受けない程度の能力』で未来の私に教えてもらってますし、そもそもまだ宇宙連合に発見されていないので侵入禁止もされていません。もし何かあっても私の権限で何とかしますので安心して行ってくださいな」

「……それは職権乱用では？」

「宇宙連合も土台は私が創り上げたんですよ？ 私に意見できる者は五人もいませんわ」

「乱用は否定しないんですね……」

「細けえ事はいいんですよ！ 『私がそこへ行くのに何の障害も無い』！ その事実さえあれば何も問題ありません！」

「……わかったわ。じゃあ私も行く準備をしなくちゃ……」

「はぁ？ あんた何を言ってるんですか？」

「何って私もその星に行くのよ！ あっ、でも私はただ知らない場所を冒険してみたいなーって思っただけ！ もしその先でニャル美に会ったんならそれは偶然よ！？」

「だったらあんたは実家の牛舎でも冒険してなさい！ 私と錬火さんの感動の再会に水を差すつもりですか！」

「ちょっと待ちなさい。そもそも貴女が行く許可はしませんわよ？」



「あつ、そうなんですか」

「え、ええーッ!! なぜですか! ニヤル美がいいなら私だっていいじゃないですか!」

「冒険したいなどという理由で許可出来るわけがないでしょう」

「ふん、どうですか。これが愛の力ですよ!」

「貴女からお父様への一方通行ですけどね……」

「くうー! 今日の所は引いてやるわ! でもこれで勝ったと思わないでよね!?!」

走り去るクトゥー院。あいつ本当に残念な生き物ですね。

しかし邪魔者は消えましたからさっさと話を進めてもらう事にしましょう――――

「って事があったのです」

「実はお前が頭ん中で思い出してただけで一言も喋ってなかったんだけどな」

「でもわかったでしょう？」

「いや、そうなんだけど……」

こいつが喋らないので読心術を使っていた。だから言葉だけではなく映像も確認できていたのでより理解できたが……

「もう心の奥まで見られちゃったんですね！ 責任取ってください」

「お前が喋れないからだろ！」

やはり罨だった。

くそ、こいつ全然変わってない！

「とにかく、今はダーリン分が不足しています！ もっとよくその顔を見せてくだ……さ……」

「？」

俺とニアル美の間には距離があったのでニアル美が近づいて来たんだが……。残り二十メートルという所でゆっくり止まった。

気のせいか先程よりも黒いオーラが増している様に感じる。……なぜか冷や汗も止まらない。

「……………錬火さん、今まで女としましたね…………？」

「ひいいいッッ！！？」

ちょっと待て、女というのは永琳の事のはズだ。なぜ気付けた！？  
しかもまだこれだけ離れてて！

「私の『邪神アイ』は女の気配を視認出来るんです」

「それはもはや日常生活に支障が出る特技だろう！」

人が多い町なんかを歩けば女の気配とやらで視界が遮られるに違いない。うかうか買物にも行けないな。

「そして女の事については全く否定しないのですね…………」

「しまった！」

いかん、まだまだオーラが強くなっている！更に喉の渇きや足の震え…………まさか！この俺が恐怖しているのか！？くっ、俺を怯えさせるとは、強くなったんだな、ニヤル美！！

「私をずっと放って置いて他の女とイチャイチャしていたんですね。そしてあなたは『待て、それは誤解だ、ニヤル美！！』と言う」

「待て、それは誤解だ、ニヤル美！！ハッ！」

「残念ながらYE GUILTY（汝、罪あり）…………あなたは磔刑ですッ！！」

やせいかした ニャル美が おそいかかってきた！

マズイ！ これは非常にマズイぞ！ 物理的ダメージは無いに等しいだろうが精神面でのダメージが予想出来る！

俺は生まれて初めてマジに心の底から神様（俺と邪神共以外）をお願いした。「自業自得だけどヘルプミー！」と。

そして……願いが聞き遂げられた。

「フーハハハハ！！」

あまり望んでない形だけど。

「！ 誰ですか！？」

ニャル美が声に反応し、俺の目の前で止まった。一先ず助かったようだ。

しかし問題も増えてしまった。

出来ることなら声の主に「おかげで助かった！ ありがとう！！」  
とでも言えればよかったんだが……

「父よ、我は帰って来たあッ！！」

「邪神は帰れ!!」

「私ですか!？」

「いや、お前じゃなくて……」

案の定アザースだった。

しかも奴の背後には何か巨大な物が浮かんでいる。あいつまさかアレを……

「戦闘指南書『戦のススメ 応用編』! 『会話中に奇襲せよ!!』」

「何だその外道な教えは!」

「あ、それ私の父さんが書いた本ですね」

「ニャーズウウツツ!!」

何処か遠くで誰かが『勝てばよからうなのだアアアッ!!』と言った気がした。

「死ぬがよい!!」

アザースが両手を上に挙げ、何かを引きずり落とす様に振り下ろす。落ちるのはモチロンさつきから見えていた物だ。大質量の物体、空を埋め尽くす程のデカさ、憤怒の表情が刻まれた……『星』だ。

「圧死【落下する暗愚の月】！！」

「てめえはムジユラかアッ!？」

しかもそれよりでかい。町サイズどころでは無い、リアルな月ぐらいのサイズはある。それ程の大きさの人面月が落ちて来るのだ、非常に怖いのでやめてほしい。

「仕方ありません錬火さん。一緒に巨人を四体集める旅をしましょう!」

「んなヒマあるかボケ! ってなにどさくさに紛れて抱き付いてんだ!!」

「いやー、これで死ぬなら最後に思い出が欲しいなーと思ひまして」

「死なせねえよバカ!」

「えっ（ドキッ）」

あれくらい俺がどうにでも出来るって知ってんだろ。それに俺がこいつだけ見殺しにするとでも思っていたのか。心外だな。

いや、スキあらば密着して来ようとするのを見る限りこいつ余裕綽々だ。

絶対にわかっててやってる。

「もう、錬火さん! 私をこんなときめかせたって今回の件は赦しませんよ!？」

「お前が何を言いたいのかわからない」

相変わらず変な奴だ。しかし喋っている間にも月は迫って来ている。さっさと迎撃する為の準備をしないとな。

俺は身体を月に向け、某龍球の様に気を溜めるポーズを取る。力が集まるのは身体の中ではなく胸の前だけど。

「錬火さん、ショウターーーーイム!!!」

「なぜわかった」

こいつ、この動作だけでそれをするのだとわかったのか。いや待て、その前になぜ知っている……!

そう思っている内に充填が終わった。後は胸の前のエネルギーを発射するだけだ。充填するのは様式美。すぐ撃って終わりじゃつまらないだろう。強すぎるのも考え物だな。

よし、それじゃあ撃つか!

「錬火さん、アクション!!!」

「うっせえよ!?      機砲【ファイナルステージ】!!!」

発射。

極太の光線が大気を蹂躪しながら突き進み、月に直撃した。

———轟音。

「ぐわあああ!!」

アザースは余波を受けて吹き飛び、その体をキレイに削り取られた月……

——ドゴン——

……なぜか爆発した。

ファイナルステージにそんな効果なかった筈だけど……あれ爆薬でも仕込んでたのか？

爆発で飛び散った、真っ赤に灼熱した大小様々な月の欠片が地表に降り注ぐ。

まるでこの世の終わりの様な風景だが、永琳達が月に行っていたのでヤレヤレ一安心と言う所だな。

……ん？

月の欠片……隕石？ 『この世の終わり』？

——ドーン——

一際でっかい欠片が海に落ちた。

「あ、錬火さん凄い津波ですよ？ あんなのが落ちたんだから海水も思いつきり巻き上げちゃったんですね」



「……………」

「おや、波が陸地を飲み込んだじゃいましたね。天気も荒れて来ましたし……。この星しばらく大変な事になりそうですね」

「……全ては予定調和だ！」

「ヨグ子理事長には黙っておくのでとりあえずマイホームに帰りましょう」

「……はい」

これが歴史の修正力とでも言うのか。おかげでニヤル美に弱みを握られてしまった……。マイホーム発言を修正する事もできない。

憂さ晴らしに厄介事を運んで来たアザースを殴ってやろうかと思っただが、とつくに逃げているようだ。今度会ったら絶対ボコってやる。泣いたって赦さない。

「早く行きましょう錬火さん。ところで私がここまで乗って来た車が壊れちゃったみたいなので転移をお願いしますね」

「お前免許持ってたのか？」

「カーナビで設定してましたから勝手に連れて来てくれました。あとあれはヨグ子理事長に貰った奴です」

「……そうか」

ますますヨグ子に知られるワケにはいなくなっちゃった。しばらくはニヤル美のご機嫌取りしないといけないな……。

ああ、さらば地球よ。帰って来れるのはいつになる事か。

月の永琳の所にも行こうと思ってたんだが……悪い永琳、もう少し待っててくれ。

そんな事を考えながら、俺はニヤル美を連れて久しぶりのわが家に向け転移したのだった。

## 第十一話：這いよるあの人（後書き）

毎回の量は今回ほどとは言いませんが、もっと多く書きたいものです。

## 第十二話：常通家の食卓（前書き）

（注）この作品は東方の二次創作です。

## 第十二話：常通家の食卓

「はあ、あの星の生物を捕獲していたんですか」

「ああ、おかげで『別荘』の中は地球の縮図みたいになっているよ。見てみるか？」

「んー、今はいいです。また別の機会にしましょう」

ここは久々の常遥邸。

家に着いてすぐにニヤル美がお茶を淹れ、何をしていたのか聞いてきた。

だいぶ落ち着いているので助かるな、と思いつつ今までの事を話す。今までと言っても恐竜に関する事ぐらいで永琳の事、と言うより人間関係の事は丸ごと無しだから説明も簡単に終わってしまったが。

何だか浮気を必死で隠そうとしている駄目亭主みたいだが、俺には折角穏やかに燃えている蠟燭にガソリンをぶっかけて楽しむ様な世紀末な趣味は無い。

「鍊火さん」

「なんだ」

「鍊火さんが過ごした百万年はそんなに薄っぺらいモノではなかったんでしょう？」

……ニヤル美は気付いていたのかもしれない。俺が何かを経験してちよっぴり成長した事を。恐竜を集めて回った程度では俺の変化に納得出来ないんだろうな。

しかし。

俺には全部話すなんて出来ない。少なくとも今は。

だってニヤル美に全部話したらどんな強行手段に出るかわからない……！ 下手したら月に殴り込みするかもしれないのだ。穢れから逃れる為に地球を出たのに穢れだらけの邪神なんか襲来したら本末転倒だ。

……いや、言い訳はやめよう。

何より！ 何より恐れているのは……！！

『ニヤル美と永琳が向かい合う事』だ……！！

そんな図を想像しただけで……うう、胃が痛くなって来る……

「……まあいいでしょう、女の気配については今は聞かない事にします」

！？ た、助かった……！！

これで一先ず修羅場は回避出来そうだ！

ヘタレだと？ ヘタレだよ！（開き直り）

「あ、でもその代わりに私今日からこの家に住みますから」

「はい？」

明くる日。

「鍊火さくん、朝ごはんですよー」

「……どうしてこうなった」

ベッドから起き上がりポツリと呟く。

階下から聞こえるニヤル美の声。おそらくあいつはわが家の大きな台所で朝食を作っているんだろう。

着替えて食堂に向かって行く内にベーコンの焼けるいい匂いがしてきた。目玉焼きでも作っているのだろうか。

「おはようございます鍊火さん。もう八時をまたいでいますよ？朝はもっとズバツと起きなければ！」

食堂にやって来れば若干テンションが高いニヤル美がテーブルに朝食を並べていた。これ見よがしにハートマークが付いたエプロンが少々目につくが、何だか普通に『良妻』している。

食堂はこの家に見合った広い部屋だ。そして中央には何人も座れる大きいテーブルが置いてあったんだが、ニヤル美が「これじゃあ錬火さんが遠すぎます！」と言ってそれを片付け、一般家庭サイズのテーブルを持ち込んでいる。

そう、また物を持ち込まれた。これも貢がせている事になるんだろうか。……なるだろうな。

「はいはい座ってください。準備はできてますよ」

「あっ、ああ……」

目の前に並んだご飯、香ばしい香りのベーコンエッグ、瑞々しいサラダ、デザートの赤いイチゴにカップに入った……

「……これはスープか？」

「コーンポタージュですよ。クトゥー院が牛乳やバターを大量に送ってきたのでそれを使いました」

「……クトゥー院からのもんでも使うんだな」

「食材に罪はありませんよ」

彩りのあるご機嫌な朝食だった。



「……いただきます」

「どうぞ召し上がってください!」

コーンポタージュを一啜り。……美味しい。

ニヤル美は昔から料理が上手だったから味の心配は無かった。順番に料理を口に入れていく。

「自家製のベーコンなんですよ! よくできているでしょう!？」

「ああ、店で売れるくらいだな」

「卵は新鮮なシャンタク鳥の卵です! 手に入れるのに苦労しましたよ!」

「今は慣れたけど最初は食うのを躊躇ったな」

「そのイチゴは輝きは鈍いですが味は良し、ついた名前はキングスベリー!」

「二十五ワットぐらいなのか? 変なもん仕入れるなよ」

「そのコーンポタージュは力作です! クトウー院はムカつきますが牧場の物はいいもん揃ってますしね」

「うん、本当に美味しいな。腕もまた上がったみたいだ」

「こないいい奥さんなら文句ないですね!」

「まあこんな美味しい飯作れるんだから悪いわけじゃない……あつ、一般論だぞ？　あくまで一般論だからな！！」

「……ムフフフツッ！！」

「なに笑ってんだよ！」

「いやあ、やっぱり鍊火さんのツンデレはいいですね！」

「誰がツンデレだ！」

「それに何だか前より扱いが良くなっている気がします」

「……………」

それは永琳との件が効いているんだろう。

昔からこいつは俺が好きだと公言していた。それまでは適当に流していたんだが、あの一件以来ニヤル美の気持ちもどんなモノなのか考えてしまい、どうも邪険にする事ができなくなったのだ。

「ふむ、それも謎の女に関係してますか。何だか自分で振り向かせる事ができなかったみたいで気に入りませんが、まあいいでしょう。意識してもらえた事を考えればあながち悪い事だとも言えませぬね」

「いや、お前に惚れたワケじゃないんだからな？」

「……なんか一々鍊火さんの言う事がツンデレに聞こえますね」

「……うん、俺もだんだんそう思えてきた」

男のツンデレとか誰に需要があるんだ。……ニヤル美ぐらいしかないぞ。

そう考えながら止まっていた箸を再び動かすが……

「ところで錬火さん。ルー華には珍しい物をプレゼントしたらしいですね」

「……………オウ」

不意打ちを受けた。

まだ地雷が埋まっていたのか！ しかも今度のは時限式だった。安全地帯はどこなんだ！？

「いや、あれはハス彦をサポートしてもらった為に上げた奴で……」

「つまり男がいいと」

「変な結論を出さないでくれ！」

「じゃあ女の子が好きなんですか？」

「当たり前だ！」

「幼女？」

「『子』過ぎるだろ！？」

「じゃあ私みたいなの？」

「そうっ……………そう、それくらいなの？」

「私何だか錬火さんがこの世界の真のヒロインのような気がしてきました」

「おいやめろ妙な伏線張るんじゃない」

そんな哀しい世界だったら俺が無に還してやる。

「まあ錬火さんヒロイン説は一先ずおいといて」

「一生片しとけ」

「とにかく、『ルー華にプレゼント事件』の話です！ なぜルー華には渡して私にはくれないんですか！ 私が誰よりも傍ににいるのに！」

「いや、あれはお前らを止める手段兼報酬として渡しただけで……」

何か邪な目的で渡したわけではないしな。でもそれでは納得出来ないんだろうか。

うーむ、仕方無い。

「わかった、お前にも何か贈るよ」

「錬火さんの血判が押された婚姻届」

「ごちそうさま、じゃあ俺は散歩でもしてくるな」

「待ってください冗談ですから!!」

「チッ……」

椅子に座り直す。

それって後はニヤル美の判を押すだけじゃねーか。そんな形で人生の墓場に入るのは嫌過ぎる。

結婚には両者の同意が必要です。

「他には無いのか他には」

「うーん、そういったのが駄目となると意外に出て来ないですね。可愛さアピール狙うなら『鍊火さんとの思い出の写真を飾る額縁が欲しい』とでも言うんですがあいにく間に合ってますし……」

やはりこいつは危ない奴だ。手を繋いただけでもいつの間にか金を搾り取られていたという事になりかねない。

油断したらやられるな。人生が。

「これがあったら便利だな……みたいな奴は無いのか? やっぱり使える物がいいと思うけど」

「ひでんマシンとかですか?」

「お前全部自力で出来るだろ」

しかもそれはあったら便利な奴なのか？

「日常生活で特に不自由は無いですしねえ……やっぱり装飾品の類ですかね」

「じゃあ幸福の象徴のルビーや心を落ち着けるアメジストとかの七つの宝石が填まったベルトをやろうか？」

「あれって我々邪神には片っ端から悪い効果があるんですけど……」

残念、少しぐらい浄化されればまともになるかもしれないのに。

「だったらこの腕輪はどうだ？」

「それはなんですか？」

「これはいくらでも道具が収容、転送出来る腕輪だ。不壊の概念を込めたから壊して中の物を失う事もない」

「転送とは？」

「登録しておいた道具を手元に転送出来る。例えば家に置きっぱなしの学習机も登録すれば何処でも取り出せる様になる」

「へえー、すごいじゃないですか。似た様な事は科学で出来ますけど収容スペースには限度がありますからね」

「どうする、これにするか？」

「はい、その腕輪にします。デザインもいい感じですし、ありがとうございますね！」

どうやら喜んでくれたみたいだ。

地雷の撤去がまた一つ済んでよかった。

「ところで鍊火さん、これは卒業祝いも兼ねているんですかね？」

……………また発見しました。

結局またアイテムをせびられてしまった。

今度は飛雷神の術を封じた腕輪を取られた。登録している場所に一瞬で移動出来る物だ。新しく入学した大学はこの家から少々遠かったので移動が楽になると喜んでいたな。危うく入学祝いまで取られかけたがなんとか誤魔化した。

しかしそれはもう過去の事だ。

今は久しぶりに他の三人に会う為、ニャル美と一緒に喫茶店『ン・カイ』にやって来ている。

もうこの喫茶店は全宇宙にチェーン展開したらしく、かの『アトラックIIナ茶』も今やペットボトルになり自動販売機で売られている。ラク藏さん頑張り過ぎじゃないか？ それとも作業を機械化して効率を上げたのか。かつてのお茶はもう飲めないんだな。

非常にどうでもいいけど。

「おっ。久しぶり、みんな」

「本当に久しぶりね」

「僕達は外見が少し成長してるんだけど……鍊火さんは変わってないね」

「……鍵は今も使わせてもらってる」

三人が来た。

ハス彦が言った通り確かに三人共少し成長しているが、仲の良さは変わっていないようで何よりだよ。

「卒業式に来れなくて悪かったな。少し遅いけど卒業祝いに好きな物頼んでいいぞ」

「……『喫茶店のカレーピラフの様なドライカレー』を二十皿」

「カレーピラフなのかドライカレーなのかはつきりしないな」

しかも食べる量も増えている。言っちゃあ何だか太らないんだろう



か。

「……私の身体は常にエネルギーを燃やし続けている」

「お前はどこのオリバだ」

肉体の封印を解いたら巨大化するのだろうか。……邪神だからするな。

「確かアザースさんが創った星に行っていたんだよね」

「いったい何をしていたの？」

「カクカクシカジカだ」

「へえ、珍しい動物を捕まえてたんだ」

「あれ、何だかすごい手抜きされた気がするなあ……」

気のせいだ。

「ハス彦は二人を相手して大丈夫だったか？」

「ルー華くんが助けてくれたからいくらか楽になったんだ。そうするよう言ってくれたみたいだし錬火さんにも感謝しているよ」

「そーかそーか……」

無事でよかったよかった。

「あつ、ニヤル美！ 私が、私が！ 送った牛乳どうだった!？」

「ああ、あれですか。味は悪くなかったですよ、味は」

「ふふん、当たり前よ！ 敵であるニヤラトホテブに牛乳を送ってやる度量の広さはもはや表彰モノね!!」

「でももう送って来なくていいです」

「ええっ！ 何でよ!？ 貰ってくれたっていいじゃない！ 私のミルクを飲んでよ!」

「どりゃあああ!!」

「ああんツ!!?」

「気色悪い事を言うなツ!! あんたのじゃなくてあ…んた…んちの牛乳でしょうが!」

「べっ別に私のミルクを飲んでいるニヤル美を想像していたわけじゃないんだからね!？」

「おええええ！ キモチワルツ!! あんた少しは自重しなさいよ!？」

クトゥー院は今日も健やかに変態的だった。あいつはもうただの変態娘でいいんじゃないだろうか。

ちなみに自重という言葉に反応してしまったのはここだけの秘密だ。

「……あの二人も相変わらず」

「もうあのまま変わらないと思うよ？」

「そんな残念な永遠は俺ならお断りだな」

永琳、人が求めた永遠がここにあったよ……

『穢れ』ではなく『爛れ』があるが……

「それほど上手くはない……」

「お前こんな時にツツコミするなよ」

畜生、わりといい感じだと思ったんだけど。

「話は変わるけど、大学はどうなるんだ？」

「みんな同じ大学になるよ？ 高校は別々だったけど、今度は一緒になれるから今から楽しみだなあ」

俺はニヤル美とクトゥー院に目を向ける。

「ロードローラーですッ！！」

「その程度の鉄塊なら空中で溶かすのはわけないわ！！」

「グレート……幸せだったのにねえ。そんな火力なんてなかった方がねえ」

「ハッ！」

——ドーン！！

「ガソリンがいつぱいだったのかあ——ッ！！」

「どうです！ この鉄片の目つぶしはッ！ 勝ったッ！ 死ねいッ！」

……ニヤル美達の闘いもたけなわのようだ。

「……本当に楽しみか？」

「あははは……」

冷や汗をかくハス彦。

俺にはどう考えても巻き込まれる頻度が上昇すると思えなかった。

——ピーポーピーポー

……またこの流れか。

「鍊火さ——ん！ クトウ——院がいじめるんです——！」

「ええッ!? ニヤル美だって好き勝手にガスボンベばらまいてたじゃない!!」

「お前は俺を未来から来た便利な猫型ロボットと勘違いしてないか?」

「はて? 私はただ触手取りと射撃が得意なただのニヤラトホテプを主張しているだけです?」

「んなもんいつ主張したんだ……」

仕方無く『マンドム』を発動する。

こんな光景も百万年経っても変わってないな……。

とうかこいつはどこまで未来を読んでいるんだろう。まさかこれも何かの伏線だったりしないだろうな。

「あつ、それは無いので安心してください」

「だから勝手に心を読むなよ」

## 第十二話：常通家の食卓（後書き）

いいからさっさと東方行けや、ですって？

すみません……

次は東方キャラ出しますのewithどうかお許しを！

え、幻想郷？

………慌てない慌てない。

### 第十三話：突撃訪問（前書き）

予告通り東方キャラですよー。

この小説はちゃんと東方の小説だったのです！

### 第十三話…突撃訪問

今日からしばらくニヤル美がない。

どうやら大学でのレポートの存在を忘れてたみたいで、教授から大目玉を食らったそうさ。しかもそいつが短期間で終わる物でもなく、全く手を付けていなかったために遊びの類は一切禁止で泊まり込みでやるハメになった。

ちなみにその時の会話は

「鍊火さん！ 教授と女子大生が一つ屋根の下で共同生活だなんて危険だと思わないんですか！？ 『行くな！』とか『ニヤル美は渡さない！』とかはないんですかーッ！？」

「ニヤル美は渡さないといけないんだろう？ レポートを。行くな。私を付けて行ってこい」

「ひい！ デレがない！？ ツンしかない！ まさか偽者ですか！？ 鍊火さんに化けるとは太え野郎だ！ 今すぐその化けの皮を私の舌で舐め回して……」

「バルスッ！！」

「目があッ！？」

「優しい俺が大学まで転送してやろう」



「やめてください！ あそこに縛られ続けるのは嫌ですウーーーー」

「リサリサ教授によろしくな」

———というものだった。

今頃女教授の元で波紋やら五次元空間やらの勉強してるんだろ。

それはさておき今俺が居る場所だ。

畳の敷かれた和風の部屋で座布団に座り、勝手に茶を沸かして飲んでいるというまるでぬらりひよんの様な事をしている。

とは言っても別に茶を飲む為に侵入したわけではなく、こうして久しぶりに会う人を待っているのだ。アポは取っていない。ドッキリだ。

さて、どんなリアクションを……おっと来たみたいだな。

目の前の襖が開く。

「まったく、豊姫はいつまで経っても逃げればk……………」

「チャオ」

「……………」

「……………」

停止する世界。ザ・ワールド

なぜか弓を取り出す永琳。

矢を番えて……

「一遍死になさい!!」

「ぬおおおッ!?!」

額目掛けて飛んで来た矢を指で摘まむが……

「ちょっ、なぜ次の矢を構える!?!」

「連弾ワン・オー・エイト【108マシンガン】!!」

「百八連射だとおッ!?!」

感動の再会? そんなものはなかった。

「……で、そっちの都合が付いたから飛んで来た」と

「おう。悪いな、連絡が遅れて」

「別に連絡は期待していなかったのだけど……」

とりあえずやって来たよ！ と話す。ニヤル美達の事はこれまた内緒だ。どんな反応するかわからないし。俺は事勿れ主義なのだ。

「貴方って宇宙空間でも生きていられるの？」

「イエース」

「それで月まで飛んで来たの？」

「イエース」

「その事もびっくりさせる為だけに黙っていたの？」

「イエース」

「黙っていたって事は常に殴られる覚悟ができていたってわけよね？」

「イエー……すみません」

「……はあ」

ため息をつかれてしまった。流石に悪ふざけが過ぎたか。

「まあそれは……良くないけどおいておくわ。それより重要な質問があるの」

「？　なんだ？」

「貴方って……………神だったの？」

「そうだな」

「ふーん…………」

「前も思ったけどあんまり驚かないな」

「だってわりと昔から薄々気付いてたもの」

「…………えっ、そんなにわかりやすかった？」

「いいえ、気付いてたのは私ぐらいか…………後は長老も気付いてたかもしれないわね」

「長老か…………おじいちゃんじゃなくなったのか？」

「やっぱり『長老』の方がしっくりくるわ」

「そっか…………」

懐かしい人が出て来たな。確かにボケ老人っぽかったが意外と鋭い所もあったしな、気付いていたとしても不思議は無い…………か。

「でも今じゃ月の民は皆貴方が神だと思っているけどね」

「へっ？　なぜに？」

「……貴方地球を出る私達を逃がしてくれたでしょう？ それに何か凄い技で妖怪達を倒していたし、あれを見て皆に信仰心が芽生えちゃったのよ」

おおう、そいつは予想外だな。俺はただ長老への手向けと依姫へのお手本とテンションの高さ故にあの技を使ったんだが。

「ちなみに『暁の神』なんて言われているわ」

「なにそれ」

「あれが夜が明ける時の太陽の光みたいな印象があったのと、移住が成功して新しい時代の始まりの合図になった様に思えたから、だって」

むう、前に何だか少しだけ神力が増えているかなーと思った時があったが……どうやら信仰されているというのはマジみたいだ。神力なんていくらでもあるから気にならなかったんだけど。

「それに突然現れた星サイズの隕石まで破壊してたわよね？ 隕石の影に隠れてて何をしたのかはわからなかったけど……本当は何の神様なの？」

「超越神？」

「……………」

「ビッグバン起こして宇宙創りました」

「……ピツタリじゃない」

「そうか？」

まあ宇宙の始まりの原因になった神だからな。確かに『暁』だろう。でもそれよりニャル美達邪神の姿が見えていなかった事の方が嬉しかった。

俺にとったらそっちの方が重要だ。

「綿月の子達も率先して貴方を信仰しているわ」

「あいつらもか？ 依姫はともかく豊姫はあまり想像出来ないな」

「そんな事無いわよ？ 勉強は逃げる子だけど敬う事は出来る子よ。依姫は言わずもがなだけど」

地球に居た頃から依姫は俺を尊敬していたみたいだしな。豊姫は…  
…ただの面倒くさがりか。

「ここには居られるの？」

「しばらく居るがまたここを出るよ」

「地球に戻るの？」

「んにゃ、宇宙の中心。家があるんだ。地球にはまた行きたいけどな」

「……変な所に建っているのね。でもしばらくは居るんでしょ。ど

うする？ 民に姿を見せてみる？」

「やめとく。別に信仰が欲しいわけでも目立ちたいわけでも無いからな。でも綿月の二人には会っておきたい」

「なら明日会いに行きましょう。神様直々に稽古をつけてあげるといいわ」

「俺は昔っから神様なんだけどな」

しかし綿月姉妹にも久しぶりに会うな。どれだけ修行の成果が出ているか楽しみだ。

「じゃあ今日は泊まっていく？」

「そうするよ。月に居る間は厄介になろうと思ってたんだ」

「そう、だったらゆっくりと……………女の気配について聞けるわね」

「……………えっ？」

……………ええッ！？

一先ず乗り切った。

ひたすら「気のせいだよ、気配だけに！ 意味がわからない？ 気にすんな！！ うわはははは！！」と少々（？）慌てながらもゴリ押しし、なんとか永琳を諦めさせた。たぶんいつかは知られるだろうけど。

というか『女の気配』って何！？

宇宙空間を移動して来て尚俺の身体に纏わり付いて来るとか、恐るべき持続性の高さだ。しかも俺には見えず、ニヤル美曰く「恋する女のコにはわかるんですよ」らしい。超越神の探知をすり抜けるらしいので隠密性もバツグンだ。

能力を使えば見れる様になるとは思う。しかし『恋する女のコ』とやらだけが見れるモノを見える様になったら……何だか自分が自分でなくなってしまう気がしたのでやらなかった。

そんなこんなで次の日になり、二人に会う為に永琳に連れられ、

「ほら、ここに依姫が居るわ」

町の道場にやって来た。

この道場を使えるのは永琳と綿月姉妹ぐらいで一般人は利用出来ないため、人目を気にする必要も無いそうだ。

それではさっそく中に入ろう。



「たのもー!!」

扉を勢い良く開け放つ。

「お久しぶりです錬火師匠」

……依姫が正座して待っていた。

なにに、どういう事？

「永琳？」

「私は教えてないわよ」

「簡単です。この時間帯にやって来る永琳師匠の隣に別の誰かがいるとわかったのです。その足音から体重は推定八十キロ前後、男性の物と判断でき、歩幅や速度を考えればお互いの歩き方も見知っている親しい間柄とわかります。更には霊力の雰囲気、これは一般人並まで抑えてありますがよくよく感じてみるとブレが無い。一般人に擬態出来る程の腕前だとわかりました。以上の情報からその人物を推理した結果わかったのです。

錬火師匠！ 犯人は貴方だったんです!!」

「ふっ、そうさ、俺だったのさ！ ……ってなんで俺は来て早々に犯人扱いされているんだ？」

「ふえ？ あっ、すみません師匠！ これはとんだ失礼を!？」

「これは予想外の状況ですね。解説の永琳さん、これはどのように見られますか？」

「……先日再放送された探偵モノのドラマの影響でしょうね。依姫が自発的に見ると思えないから大方勉強をサボっていた豊姫が見ていたのを諫めようとしてついつい自分も見入ってしまった、といった所かしら」

「す、すごい！ その通りです！ あっ……」

「永琳さんありがとうございました」

「真実は大体一つよ」

「……それってあのドラマの主人公のキメ台詞ですよね」

「……………」

「永琳……………」

お前もハマっちまってるじゃねえか……

「……私豊姫を呼んで来るわね」

「逃げたな」

「逃げましたね？」

「……女」

「いってらっしゃアアい！」

「いってきます」

逃げる？ バカ言っちゃいけない、これは永琳の親切な提案じゃないか！

「えっ、なんですか今のやり取り？」

「大人の事情だ」

「大人になったらあんなドロついた雰囲気を出すようになるんですか……」

流石依姫、永琳のあの一言だけから本質を読み取ったか。

しかしこの話題は非常に危険だ。早く話を変えよう。

「そういえば月では俺が信仰されているって話なんだが……」

「そうですよ？ あの時の光にはみなが感動していました！ 今では月で最も信仰されていますね」

「そうなのか、でも依姫もアレが出来るようになってもらうからな」

「アレをですか？」

「そうだ。お前なら出来るしな」

「本当ですか！？」

「修行をちゃんとすればな。でも……どうやら修行は怠けていなか

つたみたいだ」

「もちろんです。常遥師匠がくださったメニューはちゃんとこなしてましたよ」

「偉い偉い。これなら修得の為の試練も今すぐ出来そうだ」

「例の試練ですね！ 師匠がそうおっしゃるならすぐにでも挑戦したいのですが……」

「やるか？ 精神を切り離して現実の百倍速ぐらいの時間の世界で受けてもらうから、豊姫が来る頃には終わっているかもしれんぞ？」

「……それでしたら早く受けたいと思います」

「ウズウズするか？」

「はい、我らが『暁の神』と同じ技が使えるようになると思うと……」

「そっか、じゃあさっそく行ってみるか」

「はい、よろしくお願いします！」

「それじゃあ守る為の力を入れる為の試練……己を知り相手を知る試練を受けて来い」

依姫の精神を試練用の精神世界に飛ばす。後は俺の分身がやってくれるだろう。

「……ハッ、お姉様になってる……ムニャムニャ……」

……俺の分身はどうやら寝言……これって寝言って言うのか？ まあ寝言で進行具合を報告するつものようだ。

「……桃の種をいろんな所にバラまくため……？ だからお姉様は何処にでも桃を持って……ムニャムニャ……」

……なんか木の実を食べた鳥が種の残ったフンをそこらへんにするみたいだな。

「あ、本当にいる！ 久しぶりね、錬火！」

「お前は鳥か」

「えっ？ いきなり何！？」

「……依姫は何をしているの？」

「ああ、俺からの試練だ」

「試練？ それって錬火が昔依姫に教えてた極なんとかって奴？」

「そうそう、もうすぐ終わると思うけど……」

三人で依姫の方を向く。すると丁度終わったのか、依姫がゆっくりと目を開けて立ち上がった。

「どうだった？」

「……はい、何だか力が溢れて来る様です」

「ふーん、じゃあ依姫は何か凄い事が出来る様になったの？」

「お姉様……」

豊姫を視界に入れた依姫が、何故かそのまま歩み寄って行く。

「え、なに？」

「お姉様……この間は永琳師匠の宿題の期限があと三日なんて言っ  
てごめんなさい。本当はあと一ヶ月あったのに……。苦労したんで  
すね」

「ちよっ、なにソレ一ヶ月!? 私あれ終わらせる為に好物の桃を  
断ってまで頑張ってたのよ!？」

「代わりに『ウイナーinゼリー ピーチ味』をがぶ飲みしてまし  
たけどね」

「何だ『ゼリーの中の勝者』って……」

販売競争にでも勝利したのか。明らかにパチもん臭いが……時代的  
にはこれが最初なのか？

「あの時の私の努力は何だったの!？」

「反省はしますが後悔はしません。己の過去は受け入れます」

「いいからちゃんと謝罪しろお!」

落ち着いた依姫とは対照的にヒートアップしていく豊姫。

「でも普段のサボり癖が祟ってこうなったとも考えられるのでは？」

「そんな事言って誤魔化せると思ったら大間違いよ!？」

「……貴方どんな試練出したのよ」

「いや、俺もこうなるとは思わなかった」

若干毒舌気味になっている依姫。

何だか俺も依姫に悪い影響を与えたんじゃないかとだんだん心配になってきた。

「いけないわ……落ち着きなさい……『桃』を食べて落ち着きなさい……『桃』は甘さと柔らかな歯触りを持つ素敵な食べ物……私に糖分を与えてくれる。ムシヤムシヤ」

豊姫が懷から桃を取り出し、器用に汁も垂らさず食べ始めた。その一心不乱な様はどこか宗教めいた雰囲気すら漂わせている。

「……月の桃って食べ始めたら止まらないのか？」

「いいえ、確かに美味しいし糖度も高いけどそれだけよ。中毒性は無い筈だけど……」

なんとも言えない空気になった。

豊姫は常に持ち歩く程桃が好きなのか。いや、もしかしたら豊姫は溜まったストレスを桃で解消しているのかもしれない。

「師匠！ 私はさっそく修得した術を試して来ますね！」

「お前はこいつを放置して行くつもりか！」

「あっ、二個目に取り掛かったわ」

「どんだけ糖分欲してんだ！」

おかしいな、こんなカオスな空間は邪神に関わる時くらいだと思っ  
てただけど……

「錬火が関わったらこんなになっちゃうのかしら……？」

「俺のせいか！？」

「犯人は錬火師匠だったのです！」

「うっせえ！」

こうして、この日俺に関する残念な可能性が発覚したのだった……

「そんな、今度は二個同時に！？」

「その執着だけは感嘆に値しますね」



「誰か止めろよ」

……今日はもう帰ろうかな……

## 第十三話：突撃訪問（後書き）

次回は地球に行く話です。

## 第十四話：地球行（前書き）

地球に行く、ただそれだけの話。

今回は短いです。

## 第十四話…地球行

さて、最後に地球に行ったのは果たしてどれほど昔の事か。

あれから邪神と共同生活したり邪神達と別荘に行って狩りをしたり邪神に迫られたり、月に行って顔馴染みと話したり弟子を鍛えたり桃好きをいじったりしていた。

そんな生活にすっかり慣れてしまっていたが、この度また地球に行けるチャンスが訪れたのだ。

そのチャンスというのは一番扱いが難しい邪神、ニアル美の就職先がヨグ子のコネで決定した事にある。

それまでの生活では邪神とはいえ学生の女の子に養われるわけにはいかないと俺が生活費を出していた。ニアル美もアルバイトをしていたがその給料はニアル美の自由にさせていたのだ。

もっとも、あいつはよくその給料で色々物を買って来てわが家で共有してたりするんだけど……。

しかし晴れて社会人となったニアル美はもう独り立ち出来る様になり、新入にしては給料もいいため俺が何かする必要も無くなった。

なので若干放浪癖のある俺はニアル美に言ったのだ。

「ニヤル美、お前は立派に成長して社会人になった」

「でも働きたくないですね」

「……上司にも恵まれているし友人のクトゥー院達もいる、俺が何かに口を出す必要も無いだろう」

「いやあまさかヨグ子理事長を上司にもつ日が来るとは思っていなかったですね。たまにアザースのオッサンとの鬨いに駆り出される事になりそうですけど。」

あとクトゥー院は友人の内に入れないでください」

「……………なので俺はまたしばらく旅に出ようと思っている」

「わかりました」

「……………えっ？」

「どうしたんですか？」

「いや……こんなにあっさり許可してくれるとは思ってなかった」

「何をおっしゃるウサギさん、私は常に夫を縛り付ける様な妻ではないですよ」

「お前の夫になった覚えもお前を妻にした覚えもないからな」

「でも私の実家の近所では私達お似合いの夫婦だって言われていますよ?。」

「いつの間にそんな噂が!？」

「まあ男女二人が一緒に暮らしているんですからそんな噂も立ちますよ。フッフ……」

「お前妙な工作してないだろうな……」

「とにかく! また地球に行くのでしょう? 正直にそれ話を話すという事は後ろめたい事をするわけではなさそうですし、女に会いに行くという事でもないみたいですから」

「……なんでわかるんだ」

「錬火さんの考える事ぐらいお見通しです!」

「今俺が何を考えているか当ててみる」

「……………」

「……………」

「……何も考えていませんね?」

「なぜわかった!？」

「いえ、なんか目から感情が消えていったというか……錬火さん明鏡止水とか使ったでしょ」

「確かにいい目はしているようだが、それではただの推理だな」

「答えが『無い』というのも卑怯だと思うんですけど……。自分の顔を見つけたりブタになった両親を当てるわけじゃないんですから」

「よくある事だ、気にすんな。……何の話だったっけ？」

「式はいつにしようかという話ですよ」

「お前は仕事があるから連れて行けないけど本当にいいんだな？  
怒り狂って闇に吼えたりしないな？」

「いけずですね……。それなら大丈夫ですって。お互いの大切さを再確認する為と思えばこの程度は大した事ありません」

「共同生活してた奴がいなくなるな」

「もっと他にあってもいいと思います……」

「泣くな泣くな。そうだな……。お前のメシが食えなくなる……。とかか？」

「あ、それはわりとポイント高いですよ！」

「はいはい」

「つと、何だか話が長くなってしまいましたね。とにかく、地球行きは許可しましょう。（いろいろと準備もありますしね……）」

「？　　なんか言ったか？」

「いえいえ、どうかお氣をつけて、と言ったんですよ。そう、東の間の自由をね……クックク」

「意味深な事言うなよ……」

——とそんな会話が交わされた。

そして俺が地球に行く事は永琳にも教えてある。

「……地球に行くの？ でも前にそんな事も言ってたわね」

「ああ、あそこはあそこでけっこう思い出深い所だからな。時期もいい感じだし行ってくる事にするよ」

「出来れば私も行きたいんだけどね……」

「月のお偉いさん達か？」

「ええ、もううんざり。私は何かを発明する為の機械じゃないのよ？」

「あいつらも頑張ってくれてるみたいだけど……」

「なかなか思い通りには行っていないわね。でもあの子達が未熟なん



「じゃない、相手のしぶとさが問題なのよ」

「洗脳でもするか？」

「……………いいわね、それ」

「あれ、冗談だったんだけど」

「でもすぐに片が付くじゃない。洗脳薬でも作ろうかしら」

「……相手がわかるならすぐにでも俺がやってやるぞ？」

「本当？　じゃあお願いしようかしら。リストを持って来るからちよつと待ってて……………お待たせ、これよ」

「おっけー、……………よし、じゃあ行け、俺の分身共！」

「「「イーツ！！」」」

「……これも一種のハーレムなのかしら」

「どうした永琳？」

「いえ、何でもないわ……あら、依姫から念話が来たわ？」

『師匠、大変です！』

「どうしたの？」

『さっきまで例の連中の内の一人を拷問部屋で説得していたんです』

が、一瞬錬火師匠が見えたかと思ったら突然こいつが「えーりん！  
えーりん！（。▽。）〇多。」と叫び出したんです！』

「……錬火？」

「あっれえ？」

「……依姫、大丈夫よ。もう敵はいなくなったから」

『ええっ、どういう事ですか――』

「……ふう、貴方がいると溜息も増えちゃうわね」

「悪い……でもこれで懸念事項は消えたんだな？」

「ええ。何だか素直に言えないんだけど、一応お礼を言っておくわ。  
これで少しは月で住みやすくなった」

「どういたしまして。で、どうする。永琳は一緒に来るか？」

「……いえ、今はやめておくわ。あの子達にはまだしばらくは人手  
が必要だし、私だけ遊んでいるわけにはいかないもの」

「なんか俺がニートみたいだな……」

「働き者の神様もそうそういないでしょう。それに貴方はいざとい  
うときは今みたいに動いてくれるし、今のままでもいいと思うわよ」

「……そんなもんかね。んじゃ俺もそろそろ行くか」

「今すぐに？」

「今すぐに」

「……変な所は活動的なんだから」

「善は急げって言うだろ？」

「地球に行く事が善になるか知らないけど……行ってらっしゃい」

「おう、行ってくる」

——って感じだった。

そして俺は今、目の前にある懐かしい青い星に——

「ダッシュャーッ！！」

——突っ込んで行くのであった。

## 第十四話：地球行（後書き）

地球入りだあー！

これからポツポツ東方キャラが出て来るでしょう。

しかし幻想郷はまだ遠い……

## 第十五話：どうしたウサギさん（前書き）

投稿だあー！！

タイトルでお気付きでしょう、あの人（？）の登場です！

## 第十五話…どうしたウサギさん

地球に着いた俺はとりあえず、幅を利かせている地球の神達にA I S A T S Uをして回っていた。

挨拶でも相殺でもないよ。

ちょっとハナシを聞いてもらって、浮気ばかりしているなんか偉い神の根性を叩き直してそいつのモットーを『友情・努力・勝利』にしてみたり、どっかの美人三姉妹の美貌に嫉妬した女神がちょっとかいを出そうとした所を見つけて教育し、なぜかマゾっ気を開眼させてしまい、三姉妹の方にはフラグを立ててしまったりしていただけだ。

他にも色々な神に会ったが、そんな中で思った事は地球の神はそういった倫理観方面では邪神以上にドロドロしているという事だった。クトゥー院みたいに個人で壊れる分には構わなかったが、種族全体でそんな爛れ方をされたら流石に目につくので、途中から旅の目的が全神教育計画になっていた気がする。

そして現在旅をしているのが、俺の祖国という事で特別扱いして教育計画の最後にとっておいた国、日本だ。

祖国の昔はどんなものだったんだろうと期待していたが、それも間違っていた。

どいつもこいつも近親婚万歳な奴らだったのだ。再び教育フラグで

ある。

もはや3年B組の先生だろうがグレートなティーチャーだろうが超越した俺の指導力は神さえも射程範囲内だ。

まずは好き勝手にヤッていた馬鹿共に慎みと萌えという言葉を教え込んだ。

そして結論を言えば、変態という名の神（ただの変態神）が大量生産された。

かつてモロが一番と豪語していた奴らがいつの間にかうなじやら太股チラリに興奮するフェチ共と化し、なんとかそいつらに感染されなかった神も変態の相手に疲れて雲隠れしたり、姉萌えの弟を持った神が引きこもってニート宣言したりと日本の神話も大分壊れたと思う。

そうして漸く教育計画に一区切りついた俺は、今日本を気ままに旅をしているのだ。

……俺の目の前には今毛が無い兎がいる。歩いていたら倒れていたこいつを発見したのだ。乱暴にむしられたのか皮膚が随分と充血していてとても痛そうだ。

「おーい、大丈夫か？」

何となく話しかけてみる。別に返事を期待したわけじゃなかったんだが……

「……………大丈夫じゃない」

返事された。

どうやらこの兎は喋るらしい。まあ喋る動物なんていくらでも見てきたから今更驚かないんだけど。

とは言え会話出来るのは助かるな。

「どうしたんだそんな前衛的な恰好して。毛の無い兎はただの下拵え済みの兎だぞ」

「あたしだって好きでこんな恰好してるわけじゃない……………って食べる気！？ あたしおいしくないよ！？」

「馬鹿だなあ……………ちゃんと調理すれば美味くなる」

「ぎゃあああ！ 誰か助けてえー！ 喰われ……………イタタタッ！？」

悶絶している。

そりゃその傷で暴れりゃ痛いだろ。

「んで結局なんでそんな姿してんだ？」



「うぐぐ……バカな鮫共を騙して海を渡ったらあいつらキレて根こそぎ毛を抜いてったんだ」

「お前が悪いんじゃない」

「うっ……」

というかよく命までとられなかったもんだ。

兎の毛を鮫が抜くなんてサイズの違いや手が使えない事を考えれば恐ろしく難しい事だった筈だ。どんだけ器用な鮫達だったんだろう。

「ま、命が助かっただけでも儲けもんだな」

「こんな傷じゃあ苦しみ死だよっ！　アタタタ……あんた傷の治し方とか知らないかい？」

「んー、知ってるけど……」

「本当っ？」

「反省してたら何とかしてやろう」

「……それは無理だね」

「へえ……なんでだ？」

「これがあたしの性分なのさ。今度はもっと上手くやるって反省はしてももう二度としないなんて思う事は絶対ないね。……イタタ」

……こいつ面白いな。

今だけでも「反省している」と言えば助かったかもしれないのに、こいつははっきり「しない」と言い切った。

聞けば鯨にバレたのも渡り終える時に自分からバラしたかららしいし……

正直者な嘘つきと言うべきか嘘つきな正直者と言うべきか……どちらも同じだな。

うん、でもどっちにしても俺がこいつに興味を持ったのは確かだな。

「わかった、じゃあ別の条件で何とかしてやろう」

「……なにさ？」

治してもらえそうにないと思いつつあるのか、声に若干の諦めが入っている。

ま、そんなの関係ねえ。

「お前……俺と一緒に旅しないか？」

「……………はい？」

予想外の条件にポカンとなる。兎のくせになかなか人間味のあるリアクションをする奴だ。

「今言った通り、俺の旅に同行するなら治してやろう」

「……いやいやいや、なんで？」

「そりゃ簡単な事だ。お前が面白そうな奴だからだよ」

「面白そうって……あたし治させたら逃げるかもしれないよ？」

「逃げれるもんなら逃げてみな。俺は契約破棄なんて許さないからな、逃げたら……そうだな、捕まえて葱の匂いを一日中嗅がせてやる」

「それはひどくない！？ 匂いはキツイし兎には毒なんだよ！」

兎は犬と同じで葱は駄目。ついでに生大豆とかも駄目だったりする。

「痛ーッ！？ いッ、いッ、痛いッ！ なんかますます痛くなってきた！？」

「ちょっと待て……あー、皮膚が乾燥してひび割れてきたな」

「うぎゃあああー！！」

「どうするー？ 条件をのむかー？」

「きつ、鬼畜ッ！ こんなに痛がっている兎を無償で助けられないなんて！」

「鬼畜でいいよ、鬼畜らしいやり方で条件をのませるから」

「マジで鬼畜だぁーッ!？」

元気いいな。

もしかしたら死ぬ心配はないのかもしれない。

「くうう! わかった、わかったよ! 旅のお供をさせてもらいます! だからなんとかしてえー!!」

やっとのんだか。

しかし……

「うーん、でも嘘かもしれないしなあ」

「鬼畜ッ!？」

「冗談だよ」

俺もそこまで鬼じゃない。

「ならどうすりゃいいの!？」      もう治る治らないよりこの痛みをどうにかする方法をー!!」

「ベホマ」

「はい？」

——パァアア——

体力が全回復した！

あっという間にモフモフの白い毛で覆われる兎。

「ええっ、ええー……」

「なんか不満でもあんのか？」

「いや、なんかものすごい一足飛びした気がする……」

「蒲の花粉を身体にまぶせとでも言って欲しかったのか？」

んな回りくどい真似する必要ないし。

「えっと、まあありがと」

「どういたしまして。んじゃこれからお前は旅のお供決定な」

「……ふん、いつか絶対逃げてやる」

「逃げたらトウモロコシを一粒ずつ食わせて行ってやる」

「あんたあたしを殺そうとしてない！？」

「逃げなきゃいいんだよ、逃げなきゃ」

兎はトウモロコシもNGだよ。

「か弱い兎を脅すなんて……この外道め！」

「か弱い兎は鮫を騙して海を渡ろうなんて考えねえよ」

普通の兎に比べたらとんでもないパワフルさだ。

「とにかく既に決定したんだ、諦めな。えっと……お前名前は？」

「……因幡だよ」

ほうほう、因幡。因幡と。

……その名前には心当たりが一人いるなあ。

「でも因幡って場所じゃねーの？ どっちかと言えば姓だろ。名はないのか」

「んなもんじゃないよ。名前を呼ばれる事なんかなかったし、因幡だってあたしが勝手に名乗ってるだけなんだから」

「ふーん、だったら俺が名前付けていいか？」

「勝手にすれば？」

「じゃあ因幡霞」

「！（ブンブン）」

勢い良く顔を横に振っている。

「因幡束」

「もっと別のにして！」

「**因幡**シエスタ」

「なんかさっきから二番煎じな感じがするよ!？」

「わがままだなあ、じゃあ**因幡**てみ」

「なんだろう、すごくおいしい気がする！」

やはり運命はこの名を授けろと言うのか。

「……**因幡**てゐ」

「それだあーッ！ それに決定！ もう変えないからね!？」

「必死だな……」

「あんたのせいでしょ!？ いや、あたしもよくわかんないんだけど！」

まあ提案しておいてなんだけど、可決されたら確かに困るんだよな。

「んじゃあたしの名前はいいとして、あんたの名前はなんなの？」

「常遥錬火」

「ひょっ?」

「ここで一番強い神様なのでしたー」

「……え、嘘？」

「マジなんだ」

「……………きゃああ教育されるう  
ー！！」

「なんだその斬新な悲鳴は」

教育は気が向いたらだぞ。

「だって常遥錬火って言ったら非常識の代名詞！ いろんな所で神様に洗脳的教育を施し混沌を生み出したっていう『混沌の原初』『荒々しくも蝕ばまれる支配をするもの』『絶対的決定権』、あとたまに『暁の神』なんて言われるこの世界の全存在をブッチ切りで超越した『歩み寄る理不尽』じゃない！！」

「ものすごいボロクソ言われてるな」

しかも何だか邪神チックな言い回しだ。まさか俺を邪神に分類してるわけじゃなからうな……

「なんでそんな奴がこんな所にいるの！？」

「だから言ったら、旅だって。これからよろしくな」

しかし面白い道連れが見つかったな。

こいつもいるならもう少しゆっくり世界を回ってみるか。



「くそお、早まったかなあ……」

「いつまでぶつくさ言ってるんだ。ほら、行くぞてゐ」

てゐを持ち上げて肩に乗せる。歩幅が全然違うから歩くだけで差が開いちゃうからな。

「そーいや錬火の旅の目的ってなんなの？」

「お前俺の正体知ったのに呼び捨てとは度胸あるなあ」

「だってあんたそんなの気にしなさそうだし。それに長い付き合いになるならいつまでも堅苦しい空気じゃ疲れちゃうでしょ」

「まあな」

そっちの方が俺にも都合がいいし。

「んで旅の目的か……特に無しだな」

「はあ？　じゃあなんで旅してんの」

「いや、明確な目的が無いって事だな。強いて言うなら『面白い事を見つける』ってとこだ」

「適当だね……。行き先とかも決めてないの？」

「それは簡単にだが決めておいた。今から行くのは外国……海の向こうだな」

「え、海って……」

「お前が渡って来たのよりも更に遠くだ。あと先に言っておくが、別に鯨に運んでもらうわけじゃないからな」

「じゃあどうやって行くの」

「飛ぶ」

「……大丈夫なんだよね？」

「大丈夫だ、問題ない」

「なんか余計に心配になったなあ……」

なんかボヤいているが、実は俺は今それどころじゃない。

顔の横、肩に乗ったてゐの毛がなんかモフモフする……！

やべえ、めちゃくちゃモフりたい。後で絶対モフらせてもらおう。

「ちょっとー、聞いてるー？」

「ん？ ああ、諦めろ」

「せめて毒にならない物食べさせてって願いが！？」

「え？ あー、諦めろ」

「答えが変わらない!？」

「冗談だよ」

「なら真顔で言わないでよ……」

グツタリするてゐる。

これはいい。

モフモフ癒し要員兼いじり相手になる。

てゐるには気の毒だが俺はそんな事を考えつつ、まずは海へと歩を進めるのであった。

「ううう、大変だ……、兄者達に先を越されてしまった……!」

「おーい、そこのあんたどうしたんだ？」

「えっ、あつ常遥殿じゃないですか!」

「あれ、俺の事知ってんの？」

「ひ、ひどい！ 昔会ったじゃないですか！ ホラ、スサノオ父さんの息子の<sup>おおむなぢのかみ</sup>大穴牟遲神ですよ！」

「ああ、そういやあの姉萌えの変態の息子に影が薄い奴がいたなあ」

「変な思い出し方しないでください！！ 気にしてるんですから！」

「どっちを？」

「両方です！」

「はっはっは、悪い悪い。まあそれはともかく、こんな所で何してんだ？」

「はっ！ そうでした、常遥殿聞いてくださいよ！ 兄者達が僕をおいて八神上売殿<sup>やがみひめ</sup>の所に求婚に行っちゃったんです！ しかも僕がただの従者に見えるようにこんな袋まで持たせて……ひどいと思いません！？」

「なに唐突に愚痴ってんだよ。あとなにその袋、なんか仄かに甘い香りがする……」

「それはですね、ただの袋を持ち歩くのも楽しくないのでせめて少しでもいい気分でいられるように花の蜜を少し垂らしてみたんです」

「蟻が寄って来るぞ……」

「ってこんな話している場合じゃありませんでした！ 早く行かないと八神上売殿が盗られてしまう……！」

「お前の物でも無いんだけどな」

「……たぶん大丈夫だと思うよ」

「ん？」

「へっ？」

「だから大丈夫だって言ったの。あんた八上比売の所に行くんでしょ？」

「素兎？ 君は誰だい？」

「ああ、こいつはついさっき俺の旅に同行する事になった兎だ」

「そんなの今はどうでもいいでしょ。あんたがそんな格好してたって問題ないよ」

「どうしてだい？」

「確か八上比売は袋を被って深呼吸するのが好きだって聞いてるよ。そのいい香りの袋を持って行けば他の有象無象よりは印象いいんじゃないかなあ」

「本当っ？ じゃあ僕にもまだ勝算があるんだね！」

「おい待て、いいのか。そんなマニアックなフェチの持ち主で本当にいいのか」

「『魔丹圧空』？ 『屁血』？ よくわからないけど僕は急ぐよ！

兎君、本当にありがとう！」

「……行っちゃった。お前がいいならいいんだけど……」

「……………」

「……そういやてゐ、なんであんな事教えたんだ？」

「……別に、ただうじうじしてたのが鬱陶しかっただけ」

「俺に助けられたのを思い出して自分もしてみようかと思ったのか？」

「……………」

「……よしよし」

「撫でるなっ！！ もう、さっさと行くよ！」

「はいはい」

——遙か先の未来。

その筋の学者達はあらゆる神話に登場する謎の男の神について悩まされる事になる。

そしてこの時の話が後にその神の使いと推測される『因幡の素兎』

が最初に登場する話となったのだった――

## 第十五話：どうしたウサギさん（後書き）

『因幡の白兎』……詳細は省きますが実に170万年前という大昔の話です。

最初の方の教育云々の所で時系列がおかしいと思った方、気にしないでください。不思議な世界なんです。

東方の因幡てゐはもしかしたら本人じゃないかとも言われています。まあ自分は妖怪兎だと言っているみたいですし、昔話の方の白兎は祀られて神格化している筈ですので別人だと思いますけど。

でもこの作品では本人という事に。だって早く出せる好きなキャラだったものですから……

このまま幻想入りすればなんと年齢約170万歳。某600年物の金髪ロリ吸血鬼とはケタが違います。

ロリババアだと？　それがいいんじゃないか！

え？　キモイ？

……だが謝らない！

……はい、そろそろ終わりにしましょうか。

それでは最後に、皆様と一緒に己の欲望をぶちまけましょう。



(深呼吸) スウー……ハァー……スウー……

てーーーーーゐ!!

好きだぁぁぁぁ!!

×××させてくれえー!!

(『×××』には好きな言葉を入れましょう)

## 第十六話：顔合わせ（前書き）

新キャラばかり増えていく。人参天国は何がしたいんだ！

しかもせっかく出たてゐるが空気……チクショウ！

## 第十六話..顔合わせ

「すご……」

「でかいだろ？　かなり無駄な気もするけど、あいつら派手好きだからな」

ここはゼウスとヘラの家族が暮らす家……というより神殿。主神だけあってかなり大きいんだが……一族には少々大きすぎると思うぞ？

旅の途中、ここへてゐの顔合わせに来たのだ。

俺に同行してるんだから他の神にも会う事があるだろう。今後の事も考えてまずは主神ゼウスの元へ来た。

「うわ、扉もでかい。あたしウサギだからでかく感じるのかと思ってたけど……」

「俺から見ても十分にでかく感じるよ。えーと、インターホンインターホン……お、ここだ」

隅に付いているインターホンを発見する。

家を護っているゼウスの妻ヘラが度重なるセールスに困り、それなら俺が付けさせた物だ。

昔は武器のセールスが多かったみたいだが俺が最後に会った辺りで

はペットのセールスが多くなり、ついに孔雀なんて物を買ってしまった。おそらくその派手さと目新しさに惹かれたものと思われる。

『はい、どちらさまでしょう？』

インターホンを鳴らすと当人のヘラの声が聞こえてきた。

「久しぶり。俺だよ俺、俺だけど」

『……夫の隠し子ですか？』

どうやらヘラの頭の中では詐欺より先に過去の浮気関係の事が浮かぶらしい。

「違う、レンカだよ」

『あら、レンカさん？ 気付かなくてごめんなさい、今行くわ』

「……錬火はこんな所の連中とも知り合いなんだね」

「まあな」

待つ間手慰みにてゐをツンツンつつきながら待っていると、ゴゴゴ……と音をたてて扉が開いた。

中から出て来たのはブロンドで碧眼の女性。おっとりした雰囲気を感じてお姉さんキャラな人だ。ちなみに巨乳。

この人こそゼウスの妻で結婚、母性を司る神、ヘラだ。

「お久しぶりですね。最後に会ったのはいつだったかしら？」

「確か千年ほど前だと思うな。ゼウスの教育が終わって今度はヘラの教育計画が始まって……あいつどうなった？　また浮気してないか？」

「ふふふ、大丈夫ですよ。あの人は家族を、特に私を愛してくれています。ええ……私を……フフフ……」

「怖っ！？　ちょっと錬火、この人大丈夫なの！？」

「……こっちが敵にならない限り害は無い」

「いや、この笑顔はキツイよ！　ストレスで禿げちゃう！」

初見でこの笑顔はキツかったか。

確かにこのハイライトの消えた奈落の底の様な瞳は胃にク。スマイル0円どころか治療費を払ってもらいたくなりそうだ。

胃に穴が開くか精神を患う前に慣れるしかないだろう。

「あら、そのウサギさんは？　レンカさんの新しいお友達かしら」

「（目に光が戻った……）こいつは因幡てゐ。しばらく俺という事になったからな、今日は顔見せに来たんだ」

「えっと……よろしく」

「あらあら」

ほんわか笑うこの顔こそスマイル0円なんだろうが……既に裏の顔を見てしまったてゐは和むどころか明らかに引いている。こいつがヘラ相手に心を許すには時間がかかるだろう。

「ちょうど主人もいますし、どうぞ上がってくださいな」

「……そうするよ」

元々そのつもりで来たんだけど……

「（ちよっと、マジで行くの？ あたしもうお腹いっぱいなんだけど）」

「（正直俺もこのレベルのギャップは予想外だ。昔はまだ……まだ！ 許容範囲内だったんだけどなあ……）」

時の流れは残酷だ。母性を司る女神がヤンデレと化してしまうとは……まさか母性の行き着く先がヤンデレとでも言うのか。それとも夫の浮気で溜まっていた鬱憤が晴らされて行った結果か。

この先何が始まるかわからないし、早めに切り上げた方がいいかもしれない。

「では私に付いて来てください」

ヘラを先頭に神殿の中を歩いて行く。

廊下には絵画やら壺やら石像が置かれており壁のステンドグラスか

ら色付きの日光が差している。

初めて見る光景をてゐがキョロキョロしながら見回していたが、直にそれどころじゃなくなった。

「――――！！」

「――、――！！」

「――――、――」

行く先で誰かが言い争いをする声が聞こえてきたのだ。明らかに厄介事の匂いがしている。

ヘラは終始ニコニコしていたが俺もてるも回れ右をして別の日に改めて来たい気持ちでいっぱいだ。いや、そうすべきだな。

「少し立て込んでいますが気にしないでくださいな。主人も歓迎するでしょうし」

ちいいい、先回りされた！ それを理由に今日は帰ろうと思ったのに！

そうして逃げ出すチャンスに恵まれないまま遂にゼウス達がいる部屋の前まで来てしまった。

ここまで来るともう中の話まで聞こえてくる。

「あなた、お客様ですよ」

「ええっ、まだ心の準備が!？」

「……ここまで来たら諦めろ。基本俺が対応するから」

てゐが覚悟を決める間もなくドアが開かれる。

部屋の中には二人の男がいた。

一人はローブを纏い、白髪を揺らしながら鋭い視線を相手に向ける男性、今日会いに来たゼウス。

もう一人は白銀の甲冑を纏った女受けが良さそうな整った顔立ちをした青年、ゼウスの息子のアレスだ。

さて、その二人が何を言い争っているのかというと……

「アレス！　なぜお前はヘラの美こそが頂点と認めん！」

「母さんが綺麗なのはわかる！　しかしアフロディテの美は更にその上を行くんだ!!」

わりとどうでもいい理由だったりする。

こいつらは千年経っても同じ議論をしてるな。前々からこんな話をしていたがどこまで行っても平行線、おそらく結論が出る事は永遠にないだろう。

ヘラはゼウスの方を見てニコニコしているだけなので止めるつもりはないみたいだ。



……仕方無い。

「二人共、一旦議論を止めてこっち向け」

「なんだ、今いい所……お？　おお！？　レンカじゃないか！　久しぶりだな！」

「レンカ殿！？　本当にお久しぶりですね！」

声を掛けて漸く二人はこっちに気付き歩み寄って来た。

「二人も相変わらずだな。いつまでその話をするつもりだ？」

「仕方無いだろう。アレスがアフロディテの御み足は美しいと賞賛し始めたんだ、ならばヘラの足の自慢をしないわけにもいかん」

「父さんは母さんの太モモも脛も足首も踝もパーフェクトだなんて言うんです。アフロディテの足こそがパーフェクトだというのに……」

「お前らちょっと足から離れろ」

今回のテーマは『足』だったか。こいつらたまにポイント絞って議論するんだよな……手の平とかヘソとか。暇人共め。

「こいつらマジキモイ……」

てゐの眩きには俺も全面的に賛成するぞ。

「そういえばアテナはどうしたんだ？　美人対決なら話に挙がると

思ったんだが」

アテナの名前を出した瞬間、僅かにヘラの顔が歪んだ。

実はアテナの産みの親はゼウスなのだ。神話らしく男が産むという妙な事になっているが、嫉妬深いヘラはそのアテナの存在はあまり気に入らないらしい。

「アテナか、奴も確かに美しいがやはりヘラが一番美しいな」

褒められたヘラの顔が綻ぶ。なんて現金な。

「ふん、ボクはアテナなど認めませんよ。ボクと彼女は相容れない存在なんです……」

あれ、確か軍神同士で切磋琢磨する仲じゃなかったっけ？ それなりに仲は良かったと思うけど。

「彼女は変わってしまった……。何者も寄せ付けない抜き身の刃の様な鋭さを持つ美女だったのに……その本性がMだったって！？ ふざけてる！ 本性を表して以来訓練でボクを踏みつけてくれる事もなくなつて、むしろ剣に当たりに来る！ 昔はあんなに遠慮なく叩き伏せてくれたのに！」

「お前もMかよ」

確かにM同士では相性も悪いだろう。

でもオリンポス十二神の内の二人の軍神、その両方共がMとは……いろいろな意味で終わっているな。

「それに比べてアフロディテはボクの頭を踏みつけて『やきそばパン買って来い』って言うってくれるんだ！ しかもその時ちよっと上を見上げれば黒い三角地帯が……背が低くて胸が無いのを気にしてゐるくせに大胆なんだから！ うっ、思い出したら鼻血が……」

思い出し鼻血を出しているアレスはドMでロリコンだった。昔はもう少しまでも……いや、上手く隠していたんだが……これは再教育か。……でも関わりたくない。てゐに変な影響を与えかねない。

「バカ息子が、屈服してどうする！ 男として産まれたからには漢として勝て！ そしてその勝利をヘラに捧げろ！」

「捧げるならちっぱいのアフロディテに決まってる！」

「ヘラの巨乳をバカにする気か！？」

「貧乳こそ真理だよ！」

「巨乳こそ頂点だ！」

「貧乳……！」

「巨乳……！」

「ぬぬぬぬ……」

「お前ら二人共正座しろ……！（ゴシヤアア）」

「「ぶべらっ！？」」

顔を殴り飛ばしてやった。こんな話をいつまでも聞いてられるか！

「くっ、やるかレンカ！？ あれからオレは更に強くなった！ スーパーゼウス様と呼べ！」

「そ、そんな……女じゃないのに、男なのにこの感覚は……！ レンカ殿、確かめる為にもう一度……」

「座れ……」

「「はい！！」」

ドスの利いた声で命令すると即座に従った。本当にこいつらは面倒くさい……さっさと要件を済ませよう。

「てゐ！ てゐ！」

「こっちこっち」

途中からヘラと部屋を出ていたてゐが戻って来た。

「何してたんだ？」

「ペット紹介された。孔雀の『サンダーバード』の羽根も貰ってきたよ」

見るとてゐは多彩な羽根をくわえていた。赤、青、黄、緑とカラフルな羽根だ。……名前もそうだがそいつは本当に孔雀か？ ロケツトだとか人工衛星だとか言わないよな。

……気にしないでおくか。

「二人共」

「なんだ？」

「なんです？」

「今日はこいつの顔見せに来たんだ」

正座している二人にてゐを持ち上げて見せる。

「ほおー、なかなかかわいらしいウサギじゃないか。ヘラには及ばんけどな！」

「確にかわいらしいね。アフロディテには及ばないけど！」

「「はっはっは！！」」

「……錬火、こいつらぶっ殺して」

「うざくても一応重要な神なんだ、殺したら後がめんどい」

重要人物じゃなかったら……どうだろうな？

「てゐ、まずこっちが軍神の……」

「アレスだよ。座右の銘は『百五十センチ以上お断り』。よろしくね」

「ドMのロリコンだ、気をつけろ」

「ものすごくよろしくしたくない」

俺も出来るだけよろしくしてほしくない。

「で、こっちがオリンポス十二神で一番偉い……」

「ゼウスだ。座右の銘は『努力・勝利・ヘラ』だ。よろしく」

「あらあら、恥ずかしいわ？」

「なにこいつ……」

「……………」

やばい、調教具合が透けて見える座右の銘だ。『友情』が丸々『ヘラ』と入れ替わってやがる。この分だと『努力』も『勝利』もヘラの為って意味だろう。

「それとレンカ、『オリンポス十二神』の他にいい名称はないか？」

「は？」

「どうもしっくりこなくてな、考え抜いた末、『王凜讃數十二神』という物に変えようと思ったのだが他の者に止められてしまったのだ。なかなかの案だと思ったんだが……」

こ、こいつ、厨二病まで発症してやがる！ いかん、これは教育の

仕方を間違えたか。ヘラが拗らせたとは考えにくい。やったのは自分の理想の旦那を作る為に自分への依存度を上げたとかだろう。となるとやはり俺のせいかな。

……うん、めんどい。実害はないからもう放置してしまおう。投げっぱなしは俺の十八番だ。

「それと……ヘラ、あと三人いただろ？ エイレイテュイアとヘバとヘパისტスが。出来ればこの際にてると会わせておきたいんだが」

「ごめんなさいね、三人なら今はいないんです」

ありゃ、タイミングが悪かったかな。

「エレは数百年前に家出してしまってな、『何で一回も出産した事がないあたしが出産の女神なのよ！ しかも産婆って……』『婆』って何よ『婆』って！ もうイヤ、あたし別の仕事探す！』って言って飛び出して行ったのだ」

そこは俺も気になってたけど本人もわりと切実に悩んでいたみたいだ。

しかし家出とは……相変わらずアクティブな子だな。

「ヘベは？」

「宴会に呼び出されてな、つい一昨日の事だ。今頃他の者達の酌をしている事だろう。暫くは帰れないと思うぞ」

「あの子お酒飲めないから飲まされてないか心配だわ……」

うーん、へべも変わらず人気があるようだ。あいつ青春の女神なだけあって快活で見ると元気になる様な奴だからな、盛り上がりたい時にはよく呼ばれてたっけ。ちゃっかりバイト代を貰うくらいには抜け目ないけど。

「じゃあへパイストスは？」

「あの子は……」

言い難い事なのかへらが言い淀む。

「……彼は自分探しの旅に出たんだ」

その代わりにアレスが答えた。

いや、自分探しの旅って……

「彼はずっと家にいて何かする事もなかったからね、このままじゃいけないと思って自分が何を出来るか知る為に旅立ったんだ」

「出来の悪い息子でごめんなさいね」

流石にニートのままでは家に居辛かったか。しかし出した結論が自分探し……まあ成功するといいな。無能ってわけじゃなかったからな、なんか見つける事も出来るだろう。

「それなら他の奴らとはまた別の機会にするか。ほら、てゐ。寝るな、起きろ」



「んー……キャキャロットオ……」

「伝説のスーパー野菜人にならなくていいから起きろ」

「いろいろあって疲れちゃったのかしら。なんなら今日は泊まっていけない？」

「お、それならヘラのすばらしさを一晩中話せるな！」

「やっぱりアフロディテの話題に決まってますよね！？　今夜は寝かせませんよ！」

「帰ります」

「あらあら」

冗談じゃない、何が悲しくてこんな奴らと修学旅行先の男子の様に夜通し話せにゃならんのだ。

俺達は今日はさっさと帰って寝るぞ。

「んじゃまたな」

「今度はゆっくりしていけ」

「てゐちゃんも元気だね？」

「次はレンカ殿にも貧乳の良さをお教えますよ！」

それは断る。

じゃあても眠そうだしそろそろ……ん？

「あら、あれは……」

「あつ、あれはアテナじゃないか！ 奴がなぜこんな所に！？」

「大方レンカが来た事を聞いて駆けつけて来たんじゃないか？」

金色の髪を風にさらしながら猛スピードで飛んで来る、金色の胸当てをした女性。それは確かに俺が知っているアテナだった。

あいつとも久しぶりの再開になるが……イヤな予感しかない。

「レンカあああ！！」

こっちに叫んでくる。

「妾を殴ってくれええええええ！！」

「転移ッ！！」

「ちょっ！？」

瞬時にこの場を離脱！

開口一番でそれとは……やはり歪みないな。あいつに付き合っただけならいいのでさっさと逃げた。

「錬火、今のは……」

「面倒さで言えばゼウス達よりも上の奴だ」

「……流石に今日はもう疲れたからね、こっちの方がありがたいよ」

「俺だってイヤなんだよ」

めちゃくちゃ絡んで来るし。会うにしても心の準備ぐらいはさせてほしい。

「まあゼウス達には会ったから目的は果たしてるな。今日はここまでだ」

「……うん」

最後の最後にごっそり力が抜けてしまった。

ああ、俺が来た事知られちゃったな。一応会いに行かないとな……疲れるけど。

うん、またいつかまたいつか……

## 第十六話：顔合わせ（後書き）

ゼウス……彼のいいイメージが降りて来ない。各々で脳内補完しちやってください。

ヘラ……容姿のイメージはゼロ魔のカトレアさん。きっと彼女はヤンデレの素養があると思う。

アレス……えむえむっ！の日村雪之丞のイメージ。M成分がプラスされています。残念なイケメン君。

最後に少しだけ出たアテナ……容姿はネギまのアリカのイメージで。二股眉毛は……皆さんが好きな方で想像してください。人参天国は無しの方向で。

次回も日常話にします。今度はちゃんとゐを出しますよー！

第十七話：人化練習（前書き）

てーーーーーる！！

## 第十七話..人化練習

旅は順調だった。

途中肉食獣の群れに追われたり大嵐に襲われたりといったトラブルはあったものの、それも旅のスパイスみたいなものだ。

ゼウス以外にも今まで教育して来た神達にてゐの顔見せに行った時は槍を持ち歩くモフモフ好きの変態主神に追われたり俺が過去にフラグを立てた奴らに襲われかけたりしたが、てゐにもいい思い出になったんじゃないだろうか。

しかしこの旅、実は一つだけ問題があった。

人間がまだいないのだ。

いるのは未だ原人でコミュニケーションをとるのにも一苦労する。下手すりゃ襲われるし。しかもかなりの猿顔だ。俺が知っているレベルの人間に会えるのはまだ先だな。

おかげで旅先で話をした奴らはみんな神だったんだけど……その時の話は割愛する。また別の機会に話すでしょう。

ともかく、そんな旅をてると続けていたんだが……最近また気になる事ができた。

「……てゐ」

「なに？ ニンジンもつとくれるの？」

「お前この前ポケットの中と靴の爪先の中に蟬の抜け殻入れやがっただろ。めっちゃくちや感触が気持ち悪かったんだからな？ 罰としてしばらくはニンジン抜きだ。小松菜食ってろ」

「えー、そんなあ……」

「ってんな事今はどうでもいい。聞きたいんだが……てゐ、お前人化出来ないのか？」

こいつは今までずっとウサギの姿のままなのだ。

人化出来た方が都合がいいと思うんだけど……

「人化ってどうやるのさ。あたしあの変態共みたいにあと二回変身を残したりしてるわけじゃないから知らないよ」

「それはあれだ、こう、『変身ッ！ とうッ！』みたいな感じで」

「あたしバックルが回転したりカードを差し込めるようなベルトは持っていないんだけど……」

「今じゃお前も容易に横文字を使いこなせるようになったな」

「そりゃいろんな所行ったからね」

すっかりグローバルなウサギになったもんだ。

「ま、『変・身ッ!』は冗談としてお前が持つてる神力を使えば人化くらい簡単に出来ると思うぞ」

実はこいつ、既に神力を持った一柱の神となっていたりする。それも結構昔に。

気付いてなかったのか?

「……はあ? 神力? なんで?」

「お前もう結構昔に神になってたみたいだぞ?」

「ええっ、なんでそんな事に!?!」

ふむ、言っているんだろうか。知らぬが仏と言うしな……

まあいいか。

「前にオーデインから『モフモフを集めて頬擦りする会』って奴の勧誘があったろ?」

「ああ……、あの厳つい顔のオッサン達が自分達のペットを連れて来て自慢し合ったりモフモフしたりしてた会でしょ? もはやあれは地獄絵図だね。地味にヘラもいたし……」



「それそれ。その会でな、お前『キング・もふもふ』として祭り上げられてるぞ」

「はあっ!？」

「なんかモフモフの頂点に立つウサギだとか……」

「ちょっと、なんであたしなの!？」

「自分達の馬とかオオカミとかカラスとかよりもモフモフしてたからじゃね？」

しかしそれも仕方無い。そんな奴らよりも俺のてゐの方がモフモフなのは当然なのだ。触つてるとなんか幸せな感じがするし、今もよくモフモフさせてもらってる。

……おや、何処かで誰かが邪な想像した気がするな。

あくまでこいつは『兎』だぞ。動物を撫でているだけだ、何が悪い!

「と言うか、何か自分の中に違和感があつたんじゃないのか? 自分に神力があるって気付いてもおかしくないと思うんだが」

「そーいやだいたいぶ前に体の調子がいいなーとは思ってたけど……あとそれから徐々に身軽さも上がっていった」

「その原因が神力だと思うぞ」

まあ確かに最初の頃は神力も少なくて気付きに良かったと思う。今

じゃかなり力が溜まってるけど。気付けよ。

「でもお前の力の質はかなりすごいぞ？　なんせ仮にも神から信仰を受けているんだから」

「神様からの信仰って凄い事だとはわかるんだけど、どっちかと言うと軽いモンだと思えてくる……」

俺もそう思う。

だってモフモフしてるから信仰の対象になったって……何だか神がお手軽な存在に思えてくるな。

「でももう信仰されちまった事はどうしようもない。今はその力の有用な使い方を知るべきだ」

「錬火がどうかしてくれればよかったんじゃん！」

いや、だって俺……てゐが『キング・もふもふ』になったの密かに自慢してたし。

てゐの信仰がだんだん増えていったのはそのせいだろう。

言ったら怒るだろうから黙ってるけど。

「とにかく、まずは神力の使い方を教えるぞ」

「……なぜか若干誤魔化された気がしたけどわかったよ」

……てゐは一々勘がいいな。バレなくてよかったぜ。

「ではまず自分の中の神力を発見する事から……わかるか？」

「……うん、わかるよ。この神聖な感じのする力だね」

「ベネ（良し）！」

それがわかってりやすぐに次のステップに行ける。

「なら今度は神力の放出だな」

「ハアアアアッ！」

「ディ・モールト（非常に）ベネ（良しっ）！！」

てゐるは飲み込みがとても良かった。

「……………良おし！ 身体能力の強化も弾幕を張る事も出来た、自衛手段は手に入ったから次はどうとう人化だな」

いやあ、マジで飲み込み早いよ？

練習を始めたのが昨日の話、夜は睡眠を取って昼の今までやってい

だが簡単な事なら問題なく出来るようになった。今も目の前でぷかぷか浮かんでいるのだ。飛べるようになったからてゐるも今まで以上にすばしっこく動けるだろう。でもその機動力はおそらく悪戯に使われる事になると思うが。

「今まで教えた事よりは人化は難易度が高いけど、たぶんてゐなら大丈夫だろ」

こんだけ飲み込みが早いんだ、人化もすぐ簡単に出来るようになるだろう。

「んで、どうやってやるの？」

「……気合い？」

「……もうちょっと具体的に出来ない？」

「いや、よく考えたら俺あんまり深く考えずに神力使ってたんだよな。フィーリングでやってたからどう教えたもんかと……」

ルー華みたいにテレパシーで感覚を教えりゃ早いかな。

「どんな風に考えるの？」

「ん？ とりあえず『早く人になりたい』って感じだと思ってくれればいいよ」

「善行積みば人化出来るの……？」

「とにかく、神力を操るという事はできて当然と思う精神力なんだ」

……ちよつと抽象的過ぎるかな。

「……………ん！　ハアアアッ！！」

「？　何やってんだてゐ」

突如己の神力をフルパワーで開放したてゐ。

気でも違つたか。

「気合いでやる……………？　こんな感じか……………こんな感じかぁー！！！」

「マホトラ」

「あふん……………」

とりあえず荒れ狂うてゐの神力を吸収した。

「なにすんのさっ！？」

「それこっちのセリフ。なんで無駄にクライマックス迎えてんだよ」

「気合いでしょ？」

「入り過ぎだボケ」

ウサギといえどもその神力は本物だ。おかげで周りの木が薙ぎ倒されてしまっている。

こんなに自然に優しくないウサギも珍しいと思う。

「そこまで力まなくていい。何となーく人型になる感じで神力を使えばいい……気がする」

「錬火がそんなに適當だからあたしが苦勞してるんだよ……」

ブツブツ文句を言うてゐに吸収した分の神力を返してまた挑戦。

「ん……」

今度は落ち着いて目を閉じる。

すると……

「ん……んん？」

「おお、出来た出来た」

バッチリ人化出来た。

俺が知っている東方のてゐそのまんまだ。

もし東方のてゐじゃなかったら原作ブレイクになってたな、名前を先に使っちゃったし、と若干心配していたがどうやら杞憂だったようだ。

「お？ おおー！ 視界がいつもより高い！ 二本足も……」

ピョンピョンとウサギの時みたいに跳ねる。

「うん、大丈夫！　あたしったら完璧ね！！」

未来の誰かのセリフが盗られてしまった。

しかし人化に成功したのがかなり嬉しかったのか、ウサウサ笑っているてゐを見ればそんな事は大した問題じゃないな。

「よしよし、エライエライ」

「ふふん、出来て当然でしょ！　……って撫でるなー！」

「でもウサギの時は散々モフモフしたじゃん」

「あれは……仕方無く毛繕いさせてやってたの！」

「どうどう……」

「あたしは馬か！」

「ご褒美にニンジンをやろう」

「本当っ？　やрийい！　錬火も少しはわかってきたじゃん！」

あっさり騙されたてゐに思わず生暖かい目を向けてしまったのは仕方無いと思うんだ。

「ポリポリ………はっ！　誤魔化すなあ！？」

「誤魔化されるなよ……」

出来の悪い子ほど可愛いというのはこの事か。

しかしてゐるが人の姿をした今、そんな事を口に出したら確実にロリコン扱いされてしまうな。

まったく、世の中は無情だぜ。

「でも人型になれたから今まで食えなかった物も食えるようになったんじゃないか？」

「あっ、そうか！　ならもう葱やトウモロコシの危険がなくなつて逃げ放題という事に……」

「黙って逃げたらその耳掴むぞ」

「やめてよ！　？　ウサギの耳は繊細なんだから！」

てゐるが耳を抑えて後退る。

だから黙って逃げたらって言ってるだろう。

「んじゃ、てゐるも人化出来たし、また旅を再開するか」

「まったく、もう少し優しく扱ってくれたっていいんじゃない？」

歩き始める俺の後をてゐるが付いて来て……

「よいしょっと」



「……………」

肩に乗った。

「……もう普通に歩けるだろ？」

「あっ、つい癖で。まあいいじゃん、いつもの事だよ」

てゐるが笑いながら新しくできた手で俺の髪を捏ね回す。ほっといたら変な髪型にされかねない。

「髪を触るだけならともかく、妙な形にしたら三日間お前の食事は葱だけな」

「長い！？　いくら食べれるようになったからって三日も葱だけは辛いよ！」

「三日も『つらい』と味が『からい』でダブルミーニングなんだな？」

「『つらい』の方だから！」

俺の頭がすぐ目の前にあるのをいい事にバシバシ叩いてくるてゐるを無視しつつ歩く。

ウサギから人になれたんだし、今度はこいつにも色々と食わせてやるか、と思いながら、俺はまず次に行く方向から決め直すのであった。



## 第十七話..人化練習(後書き)

うーん、幻想入りはまだまだ遠い。でも最近「もう遠くてもいいや！」と思うようになってしまった……

次回はあの人達が登場！ 東方にまったく関係ないキャラが出て来ます。

だーれだ！

え？ 調子のんな？

すみません……

## 第十八話：魔境エジプト（前書き）

やっちゃったぜ！な回。

## 第十八話：魔境エジプト

「エジプトだあー！」

「（ビクッ）！？ どうしたのいきなり！」

「いや、俺達が今どこにいるのか言っただ方がいいかなあと」

「誰に言っただ方がいいんだよ……」

この所面白い事がなく、人が誕生するのを待っていた時の様に引きこもり気味だったんだが、最近になってある知り合いの神に「面白い事？ それなら最近エジプトがアツいよ。気温は暑いしブームも熱い！ やっべ、オレ巧くね！？ ドヤ！？ ドヤ！？ ドベふっ……」と若干ウザかったのでお礼に腹パンをプレゼントしてからここへやって来た。

ここはズバリ『エジプト』。

かのジョースター御一行様もツアーにやって来て全滅の最後を迎えかけた地だ。

「あつっー……。鍊火はわざわざこんなクソ暑い所まで何しに来たの？」

「俺達また最近引きこもりっぱなしだったろ。あんな所でじっとしているよりは面白い事があるそうだからな」

「えー、変態共はウザかったけど、暇つぶしになる物なら色々あったじゃん。『神生ゲーム』とか」

「信徒の数を競うゲームだろ。なんであんなのにハマってるんだよ……」

『神の裁きが下された！ 信徒が一人死んだ』とか『プレイヤーAが降臨した！ 各プレイヤーの元から三千人の改宗者が出た』とか内容がヤバいんだぞ。せめて、こう、救った数とかで勝負しろよ。

「異教徒共をブチ殺すのがいいんじゃない？」

「もうこの話はやめよう……」

てゐ、出来ればもうちょっと優しい子に育ってほしかったなあ……  
まあ今はこの話題はおいといて、さっそく人の集まっている所に行ってみようか。

でもここら辺、何だかきな臭いというか様子がおかしい気がする。

「ぬるいわぁー!!」

デデーン

「バカな、神が三体とも!?!」

「このままでは世界がゾークに滅ぼされてしまう……!」

「何か他に打つ手は無いのでしょうか、ファラオ!!」

「(すごく帰りたいたい)」

「(えー、今来たばっかじゃん)」

そんな事はどうでもいい。

まさに今、エジプトは絶賛世紀末中だった。

空は現在日食が起こって暗くなっており、禍々しい角や翼を持ち股間部から竜の頭が生えている若干卑猥な姿の巨大な敵に人間達が切り札的なモンスターを差し向け、それがやられて絶望しているのを建物の陰から見えていたりする。

というか、この際はっきり言おうか。

「(なぜッ! 遊戯の王様的な要素がある!?!?)」

「(静かにしないとバレちゃうよ?)」

「(うるせえー!)」

「(ちよっ、耳を捏ねるな!?)」

なぜだ!

俺の記憶には古代エジプトに石板から神を出したり明らかに配色や形がおかしい髪の間人がいたなんて知識は無い!

この世界はどうなってるんだあー!?

「(よくわかんないけど錬火が創った世界だからじゃない?)」

「(おいバカやめろ! 薄々気付いてたのを必死で誤魔化してたんだから!)」

そうだよ、わかってたよ! だってそれくらいしか考えられないし!

ビッグバンに神力とか魔力とか混ぜたからか、それとも俺の知識が流出したか、何にせよ、俺が原因なのはほぼ確定だろうな! チクシヨウ!!

「(錬火だから仕方が無い)」

「そんな妥協のされ方はイヤだ!」

「(あっ、声出したら……)」

「ムッ、誰かいるのか!?!」

「(おっといけねえ)」



「(ほらー……)」

うっかりうっかり。

一際ヤバイ髪型の王様に声が聴こえてしまったようで、辺りをキョロキョロと見回している。

「誰か俺を馬鹿にしたな!？」

「ど、どうしたのですかファラオ!? 気でも違ったのですか!？」

「みんな、この辺りに誰がいる! 見つけ出すんだ!！」

「本当ですか!？」

おい、王様は精神感応でも出来る人なのか?

「(しゃーない、少しここから離れよう)」

「(…………)」

「(? どうした? 行くぞてゐ)」

向こうに目を向けたままだったてゐるが、やがてゆっくりと口角を吊り上げた。

やばい、何を考えてるか知らないが、こいつがこんな笑い方をする時は絶対何かをしでかす時だ。

「(おい、早く行くぞ!)」

「えいっ（ドンッ）」

「はいっ!？」

てゐに突き飛ばされて建物の陰から出てしまった!

「あっ! ファラオ、いました!」

「なんだこの肌の色は! 異人か!？」

「黒い髪と瞳……こいつも敵か!」

早い!？ 見つかって囲まれるまで三秒ぐらいしか経ってないぞ!

こいつら全員能力者か!？

「くそっ、てゐ!」

さっきまで居た所を見るが……てゐは居なかった。

「あのヤロー!」

「貴様何者だッ! ここで何をしていた!？」

「あの邪神に関係しているかもしれん、早く殺しておこう!」

邪神の知り合いならいるけどあそこの奴なら知らないよ。いや、知っていると言えば知っているけど……。

しかし何だか雲行きが怪しくなって来た。これはさっさとトンズラ

した方がいいな。

「みんな落ち着け!!」

ファラオの一喝が響く。

口々に騒いでいた神官達が口を閉じ、歩いて来たファラオに道を譲る。

まだ若いように見えるが、王としての威厳はしっかり備わっていた。

「お前の名前は？」

「レンカだ。レンカと呼んでくれ」

「レンカ……」

ファラオは何かを思い出す様に名前を口にする。

もしかして俺の名前を知っているだろうか。エジプトの神が俺に関する事残しているならそれもあり得るな。

「貴様、ファラオに向かって何だその口の利き方は!」

「セト、構わない。それよりレンカと言ったな、ここで何をしているんだ?」

「お前らがあれと戦っているのを観てたんだよ」

「こんな危険な所ですか?」

「命知らずなんだよ。と言うか、あいつ放置しといていいのか？」

「む、確かによくないな」

「ファラオ、この男は怪し過ぎる！ この場で首を撥ねた方が……！」

さっきから物騒な発言をしてるのはセトだったか。

せっかく穏便に事が済みそうだったのに余計な事を……

「ファラオのお手を煩わせる事はない。この私が斬り捨ててくれる！」

「おいその古代キャベツ」

「……貴様まさか」

「そうそうお前だよ。さっきから殺す殺すって、お前はどこの首狩り族だ。この古代キャベツ」

「キャベツとやらが何かは知らんが非常に腹立たしい事というのはわかるぞ！ もう我慢ならん、粉☆碎してやる！」

「おーおー、やってみやがれ」

俺の首より先に剣が折れるけどな！

「セト、落ち着いてくれ。レンカもだ、挑発しないでくれよ」

「ああ、悪い悪い」

「……ふんっ、命を救われたな。ファラオに感謝するがいい」

「セト！」

「……………」

「なんか暴れん坊な子供とそれを怒るお母さんみたいだな……」

「きつ、貴様ーッ！」

「俺がお母さんなのか……？」

再び怒りだす古代キャベツとどこか遠い目をするヒトデ頭。

「誰がキャベツだ！」

「誰がヒトデだ！」

「俺なんも言っていないよ……」

古代エジプトには超能力者が多いみたいだ。

「てめえら！！　いつまでくっちゃべってるんだ！」

敵が怒った。

当たり前だ、今まで散々無視してたからな。

「はっ、忘れていた！」

「そうだ、こいつの死刑どころではなかったのだ！」

「お前らしっかりしろよ」

わりと崖っぷちな状況だったと思うんだけど。実はどうでもいい事だったりしたんだろうか。

「レンカ、奴を倒す方法を知らないか？」

「なっ！？ ファラオ、なぜこんな男にそんな事を！」

俺もそう思う。

あれか、猫の手も借りたいとか三人寄れば文殊の知恵とかか。

「セト。彼の目は命知らずが持つ目ではない、絶対の自信がある目だ。必ず死なないと確信している目だよ。少なくとも、彼だけは確実に助かる手段を持っているだろう」

ほうほう、流石に王、それを見る目はあるか。

「しかし本当に持っているとは……」

「それは聞けばわかる。レンカ、どうだ？」

「あるぜ？」

「そうだろう、貴様なんぞが知るわけが……ってあるのか!？」

「あるって言ってるだろ」

「嘘だッ!!!」

「雛見沢に帰れ!!」

さっきから発情期のシマウマみたいに興奮しやがって。

「……ほ、本当か!? 奴を倒す方法があるんだな!？」

「や、あるから落ち着けて」

「あ、ああ、すまない……。しかしそれならその方法を教えてほしい! 俺に出来る事なら何でもしよう!」

ファラオは必死に聞いてくる。さっきは忘れていたが、実際はしっかり崖っぷちだったらしいな。

まあ別に教えてもいいか。隠しておく理由もないし。

「なかなか話が終わんねえなあ……」

……すまん、もうちょっと待っててくれ。

「えっと、教える前にあれが何なのか教えてくれないか?」

俺が知っている奴と同じかどうか、一応確認するためだ。

「貴様、あれが何か知らないのに倒せるとほざいているのか？」

「いや、教えよう。奴は大邪神ゾーク・ネクロファデス、この世界を滅ぼそうとしているんだ」

大邪神ねえ……。

俺の知ってる邪神は腕をでっかい斧にして星を真っ二つにしたり、地球をこんがり焼かせる火力を出したり出来る奴らがいるんだけど。あいつらあんなナリしてるけど、スペックはかなり『廃』だからな。

それに比べてゾークは……まあ純地球産の邪神だし仕方無いか。

「こちらは三体の神で対抗していたんだが……それがやられてしまい、打つ手がなくなっていたんだ。そこに現れたのが……レンカだったんだ」

ふむ、とりあえず思った通りの状況ってわけだな。

「わかった。じゃああれを何とかしてみよう」

「本当か!？」

「ふん、出来なかったら承知せんぞ!」

「大丈夫大丈夫」

やるのは俺じゃないけどね。



「と言うわけで。おーい、話が終わったぞー……ってなに暇潰しに股間部の竜の頭撫でてんだよ。なんか卑猥なんだよ、やめろ」

「やっと終わったか。あとこれは頭を撫でているだけだ、何が悪い」

「いや、悪くないと言えば悪くないんだけど……」

変な想像した俺が悪いんだろうか。

「……まあいいや。今からお前の相手する奴喚ぶからな、世界をぶっ壊したいならそいつを倒してみな」

「面白い、誰かは知らんが俺様の野望の礎にしてやろう」

「オッケー」

念話念話っと。

……お、繋がった。

『おーいホルアクティ。なんかお前んとこの縄張りがピンチだぞー』

『この声はレンカですか？ どうしたのです、私は今忙しいのですが』

『いや、今言った通りお前の国が大変だぞ？』

『大変？』

『大邪神とやらが復活したとか』

『なんですって!?!』

『何で知らなかったんだよ……』

『わかりました、今すぐに……って今ここを離れるわけには!?!』

『なんかしてんのか?』

『ええ、今……ああっ!?! 私信徒が異端審問に! フレイヤ、貴女なんて事を!?!』

『ちょっと待とうか』

『くう、ならばリバースカードオープン! 罠カード【擦り付け】を発動します。私の信徒二千人を生贄に捧げ、効果対象を私からイザナミに……護符持ちですって!?! しまった、これでは対象に出来ない! 余計に信徒を殺してしまった!』

『機能増やしてんじゃねーよ!』

神生ゲームは日々進化していた。

やばい、ちょっとやってみたいと思っちゃった。

『と言うわけで、今私は忙しかったのです』

『今まさにリアル信徒が死んでいつてるんだから早く来いバカ』

『うう、そうですね……わかりました。貴女達、勝手に進めない』

でくださいよ!?!? ……コホン、ではそっちでファラオに召喚してもらってください』

『どうやって?』

『三幻神が揃っていてファラオの名前がわかっていればいいです』

『んな面倒な……』

そりゃここで一番偉い神が俺みたいに気軽に降臨するわけにはいかないってのもわかるけどさ。

「ファラオ、お前の名前は?」

「俺の名前?」

「それがわかればあいつ倒せるぞ」

「貴様にファラオの名を易々と教えろと言うのか!」

「いや、今はそれどころじゃない。俺の名は『アテム』だ。これでどうにかなるのか?」

「なるぜ? お前の名の元に神を束ねるといい」

「神を? わかった、やってみよう。」

……三幻神よ! 我が名『アテム』の元へ集え!」

アテムがそう言うと言われている三体の神が混じり合い、一柱の神

が降臨した。

ゾーク並のでかさをしたド派手な金色の女神。そう、あれこそ光の創造神、小林S……違った、ホルアクティだ。

「あ、あれは光の創造神ホルアクティ!？」

「ホルアクティ!？ 三幻神よりも位が高い神ではないか！」

ファラオやその他モブ共は驚愕している。

流石にこれは予想外だったんだろう。

「なにい、ホルアクティだとお!？」

ゾークも驚いているみたいだ。

『ゾーク、貴方はあるべき場所へ帰るのです』

「クソッ、まさかてめえが出て来るとは！ 知り合いの神と温泉に行ってたんじゃないのか!？」

『飽きました。最初は楽しかったのですが、いつまでも温泉に入っているのだんだん体がふやけてくるように感じられて……。今は皆さんと神生ゲームをやっていた所なので早く終わらせて帰らせてもらいます』

ホルアクティの言葉にポカンとなる以下略達。

今彼女への信仰がどれくらいになっているか気になるな。

『とにかく、これで終わりです。【光創世<sup>ジュセル</sup>】！！』

「展開が早いぞ！　ぐああああ！！！」

ホルアクティの攻撃がゾークに命中。憐れゾークは翼が溶けたイカロスの様に地面に落下した。別にイカロスほど清い存在じゃないんだけど。

『お久しぶりです、レンカ』

「ああ、久しぶりだな」

こちらに気付いたホルアクティが挨拶してきた。

それを見た以下略達もまたポカンとする。こんな大物と俺が知り合いなのが理解出来ないんだろう。

しかしそれはともかく……

「黒のガーター付き……お前ちょっと自重しろよ」

『！？』

空に浮いている上に姿がかなり大きいんだ、スカートっぽい物の中身が見えてしまっても仕方が無いと思う。

そして俺の眩きが聞こえたのか、ホルアクティが真っ赤になって小さくなり、人間大になって地面に降りた。

「貴方は変態ですか!？」

「見た事は謝る。でもほとんど自業自得でお前が悪いと思うぞ」

「それでもです! 信徒達にまで見られてしまったではありませんか!？」

目を向ければ全員残らず頭を抱えていた。許容範囲を越えてしまったんだろう。可哀想に……

「うぐぐ、まだだ、まだ終わらんぞお……」

今まで倒れていたゾークが体を起こした。

「む、手を抜きすぎましたか」

そういやゾークは落下したものの、まだ消滅はしていない。ホルアクティなら一撃で出来た筈だからな。

「まあ構いません。次で終わりです」

再び攻撃しようとするホルアクティ。

しかし……ここで予想外の事が起きた。

「ぐっ!?! ガハッ!?!」

「な!」

「おお?」

突如ゾークの腹から黒い何かが生えた。いや、背中から貫かれたのだ。そう、実体を伴う『闇』に。

傷口からゾークの力が血液の様に漏れていく。

そして倒れ臥したゾークの向こう側からは何者かが歩いて来た。

あれって……

「フン、何が『大邪神』。何が『闇の支配者』。所詮取るに足らない小悪党だったってわけね」

「……マジ？」

「まったく、今度は誰なのよ……痛っ!？」

今の今まで隠れていたくせに素知らぬ顔で現れたてゐに拳骨をかましてそいつを見る。

金色の髪、漆黒の翼を持ち、黒いロングワンピースの胸元には赤いリボンが揺れている。

ああ、恐るべしエジプト。

遊戯の王様に続いて、なぜ……

「お前に代わり、私が世界を闇で支配してやる!」

なぜ……!」

「この宵闇の妖怪『ルーミア』が!!」

なぜルーミアがいる……!!?



## 第十八話..魔境エジプト（後書き）

注..この小説は東方の二次創作です。

ルーミアはともかく遊戯王って……相変わらず迷走している人参天国です。だってエジプトって言ったらDIO様か遊戯王じゃないですか！

え？ んなもん知るか？

おっしゃる通りでございます。

しかしもう何もかも手遅れ。読者を振り切り切りエジプト編、突入です！（それほど長くはなりません）

## 第十九話：ルーミアが来る！（前書き）

あんまり話は進んでないです。

でも切りがいいのでこの辺で。

## 第十九話…ルーミアが来る！

前回までのあらすじっ！

ルーミア発見。

以上。

「錬火、どうしたの？」

「いや、今わりと混乱中なんだ」

この古代エジプトの地に突然現れたルーミア。

服装は東方キャラらしく時代不相応な所以外に変わった所は見られないが、真に特筆すべきなのはその中身だ。

理性的な振る舞い、身長もあって胸もある。「そーなのかー」な少女ではなく、どこからどう見てもEXなルーミアじゃないか。

いえいえ胸じゃないヨ？　これはあくまで総合的な判断をした結果であって……

「……今変な所見てなかった？」

「何言ってるんだ、わけのわからない事を言ってる場合じゃない！　奴はいったい何者なんだあ！？」

「……（ジトー）」

ふう、危うく誤魔化せたぜ。

今もてゐはジト目を向けてくるが、バレなきゃいいんだよバレなきゃ。

「ウググ……てめえ……」

「あら、しぶといじゃない。まあ、仮にも神だったって事ね」

腹を貫かれたままで声を絞り出すゾークをルーミアはクスクスと笑っている。

しかしゾークを更なる不幸が襲う。

「ぬぁ！？　ち……力が抜けて元気が出ない……」

「お前なんでその言い回しを選んだ」

「これが『やみルミルミ』の効果よ！」

「『かびる〇るん』みたいに言うなよ！？」

これは恐るべきネーミングセンスだ！　流石はEXルーミア格が違った。

「てめえ一体何をした！？」

「簡単よ、あなたの力を私の闇で侵蝕してるの」

「ま、まさか……!?!」

「そう、戦いに敗れ弱りきったあなたは……もうただの『餌』よ」

「グッ……ガアアアア!?!」

胸に刺さった『やみルミルミ』とやらの力を吸われ、ゾークの身体はだんだんと小さくなっていく。

「クソがアツ!」

ゾークがなけなしの力を振り絞り、ルーミアに向けてエネルギー弾を放つ。

「ふん……」

「なに!?!」

しかしその攻撃も片手で弾かれてしまった。もはや二人の強さには圧倒的な差ができているのだ。

「闇の支配者などと言われておきながら出来る事といえば誰かの心に付け込むか力任せの破壊ぐらい……なんて無能な存在。あなたは支配者にふさわしくないわ」

残ったのは力を絞り尽くされカスだけになったゾークだけだった。

「認めん……! この様な結末……断じて認めんぞおー!!」

「理想を抱いて溺死しなさい……」

「うわああああ………あべしッ!？」

……ゾークは消し飛ばされた。

「そんな、あのゾークがこうもあっさりと……!？」

かつて苦戦したライバルが色々あって主人公のピンチに駆けつけてくれたものの、噛ませ犬の様に一瞬でやられて驚愕しているかの様なりアクションをてゐがとっているがそんな事はどうでもよかった。

一見シリアスなやり取りの様だが、どいつもこいつもネタに走っている気がしてならなかったのだ。

こちらも精神的な意味で力が抜けるのでやめてほしい。

「ふふふ……予想通りゾークの力はなじむ。この身体に実にしっくりなじんでパワーが今まで以上に溢れてきたわ!」

ルーミアが両手を広げ、己の力を確かめるかの様に妖力を放出する。

「なじむ。実に! なじむわ! アハハハハハ、フフフアハアハアハアハ! アハハハハハハハハハハハハハ! アハアハアハアハアハアハハハ!」

最高にハイになっているルーミア。

その姿、俺的には『支配者』よりも『帝王』を推したい。

「で、あいつどうすんの？」

「出来れば関わりたくないなあ……」

俺以外の誰かが相手してくれないかな……。もはや駄目神の思考だ  
があれを見れば誰だってそう思うぞ、きっと。

「……ここは私の管轄地域です。ここで問題が起きたのですから当然私が向かいましょう」

「おっ、そうか？ んじゃ俺達は見ている事にするよ」

ホルアクティがルーミアの前に出る。助かったと少し思ってしまったのは秘密だ。

手を出すのはホルアクティがやばくなったらにしようか。

「じゃ、がんばれー」

「そーいやニンジンジュース残ってたよね？ 出して出して」

「……もう少し励ましの言葉があってもいいのでは？」

ホルアクティはすっかり観戦モードの俺達に呆れてながらもルーミアと向き合った。

「光の創造神ホルアクティね……派手な恰好をすれば信仰を集めれるとも思ったのかしら？ そんな見苦しい金ピカじゃあただの似非セレブね」

「確かに少々派手でしようが地味よりはマシでしょう。例えばあなたの様に……キャラを立てるのにも苦労したんでしょうね。可哀想な事です」

二人の間ではまずは手始めとばかりに舌戦が始まっている。

このネチネチとしたやり取り……ルーミアはともかく、ホルアクティは本当に『光』の創造神なのだろうか。闇が混じっている俺は驚かない。

しかし美人二人が向き合って威圧し合うのを見ると、何だかドキドキしてくるな。

無論、恐怖的な意味で。

「いつまでも喋っていても仕方ありませんね。早々に決着をつけさせてもらいます！」

ホルアクティが神力を纏い輝き始める。

「同感ね。もっとも、負けるのはあなただけど！」

ルーミアの体からは闇が滲み出してくる。

今まさに光と闇の壮絶なバトルが繰り広げられようとしていた。

「ハアアアア！！」

ホルアクティが構えた右手に神力が集まり、力強い光を放つ。



「そんなもの、真正面から叩き潰してやるわ!」

対するルーミアは手の中に妖力弾を形成する。

しかし、確かにあれが直撃すればホルアクティでもただでは済まないだろうが、ホルアクティの技の方が若干威力が高い。このままぶつかってもおそらく押し負けるだろう。

「まだまだ!」

しかしホルアクティは更に力を込める。

「もつと!! もつと……!! もつと輝けえええええ!!」

おいこら。

「天破【シャイニングフィンガー】!!」

技が違 あああう!!?

「行きます!!」

行っちゃった!?

もはや直視するのも難しい程の光を放つ右手を突き出し、ルーミアに突進して行った。

ルーミアの妖力弾では勘違いシャイニングフィンガーを跳ね返す事は出来ない。

これは決まったか！

「ふふ……」

しかしルーミアの顔から笑いは消えなかった。

「何がおかしいのです！」

それに気付いたホルアクティが突っ込みながら言う。

「まるで猪の様な突進ね。光の創造神ともあろう者が、憐れな程『無様』よ……」

「なにを!？」

おかしいなあ、あんだだけ喋ってたらとつくにぶつかってる筈なんだけど……

「くらいなさいッ！」

ホルアクティが更に勢いを増した。

いいから早く当てろよ……

一方ルーミアはまだ妖力弾を撃たない。

「どうしました、諦めましたか……ッ!？」

「フフフフ……アハハハハハ!！」

突如ホルアクティが体勢を崩した。

ここからなら原因がよくわかる。

ホルアクティの足に黒い何かが巻き付いている。あれはルーミアが操る闇だ。

「ふん！　くだらないわ、真正面からやり合うなんてね！　このルーミアの目的はあくまでも『勝利』！　あくまでも『支配者』になること！！　ゾークのような破壊バカになるつもりもなければロマンチストでもない……どんな手をつかおうが……最終的に……勝てばよからうなのよオオオオツ！！」

ゾークを貫いた時の様に実体を持った闇が地面から滲み出し、ホルアクティの足を絡め取ったのだ。

完全に虚を突かれ体勢を崩したホルアクティの右手はルーミアを外れて空を切るだけだった。

更に攻撃の為に接近しすぎてしまい、ルーミアの攻撃を回避する余裕もない。

「はアッ！！」

「カハッ！？」

ゼロ距離で妖力弾が腹に命中。

ホルアクティは勢いよく吹っ飛んだが……

「おっと……」

俺が回り込んでキャッチした。

……ふむ、どうやら気絶しているだけで致命的な傷はない。僅かに神力を腹部に回して防御出来たみたいだ。

しかしこの勝負はルーミアの勝ちか。少し意外な展開だ。

「そんな……」

「まさかホルアクティまでやられてしまうとは！」

まだいたんかい王様御一行。

モブは帰れ。

「アハハハハ！ これで何者もこのルーミアを超える者はいないことが証明されたッ！ とるにたらぬ人間どもよ！ 支配してやるわッ！！ 我が『知』と『力』のもとにひれ伏すがいいわッ！」

そうだった、それどころじゃなかったんだ。

さっきからどこかで感じた気がする邪悪なセリフ……嫌な予感しかない。

「おいルーミア」

「何よ」

「そのセリフは自分で考えたのか？」

「あら、知ってるの？」

「……何をだよ」

「『戦のススメ 実用編』って本よ。昔散歩してたら空から落ちて来たの」

「ニャーズウウウ！？」

またあいつの本か！？

相変わらず内容がある意味でネクロノミコンより邪悪だぞ！

しかも大気圏突破して落ちて来るなんて、なんて本書いてるんだ！

素材は何だ、ガンダリウム合金か、VG合金か、それとも超合金Zかあああ！？

いかなな、若干悪のカリスマを発揮し始めたルーミアをこのままほっといたらそのうち天国まで目指し出すかもしれない。

流石に世界が一巡したりするのは勘弁してもらいたいな。

「……仕方無い、行くぞ、てゐ」

「がんばれー」

「ニンジン三本やるから」

「少なすぎ、十本」

「口答えしたから二本」

「減った!？」

「冗談だよ、六本だ」

「……まあいいか」

交渉を終えた俺とてゐはルーミアの前に出る。

先ほどまで喜んでいたルーミアも胡散臭げな目を向けて来た。

「……で、なんなの？ あなた達は。命が惜しかったら早く遠くへ逃げた方が賢明よ？」

「なに、ちょっと相手をしてもらおうかと思ってな」

「……なんですって？」

「聞こえなかったか？ 俺達と戦おう、そう言ってんだ」

ルーミアの目に今度はうっすらと怒りが見え始める。

「あなた私をナメてるの？ この姿を見て勝てそうとも思った？  
……人間風情が」

「人間に対する見せしめでも思ったらいい。『逆らったらこうなるぞ』ってな」

明らかにイラついた雰囲気を纏って来たな。

まあ格下にナメられていると思ってるんだ、当然だろう。

「いけない！ レンカ、殺されてしまうぞ！？」

「ファラオ、ここは奴を囷にして一旦退きましょう！」

古代キャベツ、お前は後で髪の毛を緑色にしてやる。

「……いいわ、遊んであげる。大口叩いた事を後悔させてあげるわ」

「グッド！」

よし、お望み通り遊んでやるぜ？

「じゃあいつでもいいわよ。二人で掛かって来なさい」

「いや、まずはこいつからだ」

「えー、あたしい？」

てゐの頭をポンポンと叩く。

「プラス十本」

「勝ったらな」

「仕方無いな、やってやんよ！」

「なんなの、本当に……？」

俺が後ろに下がり、代わりにてゐるが前に出た。

「……あなた男のくせに恥ずかしくないの？　女の子に戦わせて自分様子見なんて」

「大丈夫だ、問題ない」

てゐるもかなり強くなってるけど、少々経験不足だからな。これは経験を積めるいい機会になるだろう。

勝ち目も十分にあるし。

「ふふふ、ホルアクティはこの中でも最弱の神……奴は戦闘者としてはあまりにも純粹すぎたのよ」

「フハハ！　せいぜい遊んでやれ、てゐ！」

「わかってるよ。ふっふっふ……」

おっと、思わずてゐにのってしまった。

「レンカの方が悪役に見えるぞ……」

「やはり奴が元凶なのは？」

今の状況。



一人の女性に少女を差し向けて自分は観戦に徹する男。

……絵面的には間違いなく俺が悪だな。

「まっ、そんな事はどうでもいいじゃん。もう始まってるんでしょ？」

「ええ、好きな時に掛かって来なさい」

「もうやってるよ？」

「え……？」

その時ルーミアは気が付いた。

自分の背後にいた何かに。振り向いてみれば、そこにはこの砂漠には非常に不釣り合いな生物が……

「これは……ウサギ？」

「あんたがホルアクティと闘っている間に行かせてたんだ」

ルーミアの事をじっと見つめていたウサギだが……それがまるで人間の様にニンマリ笑ったかと思ったら。

「こ、これはッ!？」

「神力で形作ったウサギさ!」

ルーミアはウサギから噴き出す神力を感知した。

それと同時にウサギが胸元に飛び込んで来る。

「!? 離れッ……」

爆発。

ルーミアは爆発とともに巻き上がった砂塵の中に姿を消す。

「くっそお！」

砂塵が吹き飛ばされた。

姿を見せたルーミアは服の端っこが少々焦げている程度で肌に傷は見られない。

見た目は派手だが威力そのものは低かったようだ。

「調子にのっ……て……」

ルーミアは自分の周囲を見て口が止まった。

「ふふん、既に砂塵に紛れて配置しておいた!!」

先程の物より威力を重視した神力製のウサギの群れ。それがルーミアの周りを埋め尽くしていた。

「貴様アアア!!」

「逃げられないよ!! 爆兎【スパイシーラビット】!!」

ドドドドドン！！！！

全てのウサギが遠慮会釈も無く爆発した。

直撃か、これは結構効いたんじゃないか。

「やっチツたアアアーツ！」

てゐるがガッツポーズをとる。

「先手必勝油断大敵！ 殺る気満々で意気揚々だよ！！ ウサウサ  
ウサ！！」

てゐるが喜んでいるが……果たしてこれで終わりかな？

「ハアツ！！」

立ち込めていた煙が吹き飛ばされた。

案の定ルーミアはまだまだ戦える様だ。

「貴様あ！ ゆるさん、ゆるさなーい！！」

その姿は無事とはいえない。

さっきよりも服がボロボロに、今度は体中にも小さな傷があり頭からは血が一筋流れているのが見えた。

しかしてゐるからあれだけ攻撃を受けてその程度だったというのはな

かなか凄い事だろう。流石はEXルーミアといった所か。

「ふーん、結構丈夫だね。ま、あれで終わりなら十本丸儲けだったんだけど……」

それを見たてゐも気を引き締め直す。

実のところ、本人もあれで終わりとは思っていなかったみたいだ。

「いいよ、やってやろうじゃん！ この『因幡の素兎』のてる様が直々にね！！」

「もうこんなチャンスは来ないわよ！ 存分に叩き潰してあげる！！」

さてこの戦い、てゐはどこまで行けるか……がんばってくれよ。油断はしないようにな。

## 第十九話：ルーミアが来る！（後書き）

ゾークもホルアクティも踏み台にすぎんだ！

というわけで（どういう？）次回のはてゐVSルーミアです。

でも戦闘描写、ムズいです……

第二十話：てる A—GO!GO! (前書き)

戦闘描写なんて世界からなくなってしまえ！

## 第二十話：てゐる A—GO!GO!

ん？

今回はあたしから？

んー、初めてのあたしサイドなんだからもう少し平和な話の時がよかったんだけどなあー……まあ仕方無いか。

しかし、バトルを引き受けたものの、どうやってこいつに勝とうかな。

はっきり言ってあたしの能力は戦闘向きじゃないし、神だって言ってもこれまた戦闘には無関係な『縁結び』とか『癒し』の神だからね。

後者は変態神共から『キング・もふもふ』として祭り上げられた結果だし、前者は錬火に会った後に大穴牟遲神と八上比売の縁を取り持ったかららしいけど……あたし相手の性癖を教えたただけだよ。

まったく、そんなか弱いウサギをこんな戦いの中に放り込んでッ！  
やっぱり錬火は鬼畜だッ！

これが終わったらまた悪戯のアイディアたくさん考えてやるッ！

チクシヨーツ！！

「叩き斬る！」

こわッ!?

あいつはいつの間にか手に大剣を持って距離を詰めて来ている。

あんな剣で斬られたら真っ二つになっちゃうよ！ 真正面からの打ち合いは絶対にゴメンだね。

しかし最短距離で真っ直ぐ詰めて来る辺り、あいつの感情が窺える。

あいつは自分で思っているより冷静になりきれてない！

ブチギレ……てはいかないが、それなりにキレている様だ。

しかしこれは完全に好機！ そして既に次の布石は打ってある。チャンスは待つもんじゃない、自分で作るもんさ！

「ふふん、ルーミア、知ってるかい！？ ウサギってのはねえ、穴を掘る生き物なのさ！」

「だからどうした！」

だから？

だからこうするのさ！

タイミングを見計らい……ここっ！

「スパイシーラビット！」



「なっ!？」

あいつの目の前の地面が爆発する!

「アッハッハ、またまたやらせていただきましたアン!」

最初に目眩ました時点で戦いが続く事を予想して、さっきの攻撃用のウサギとは別に地面に穴を掘らせて待機させておいた地雷代わりのウサギがいたんだ!

こいつをタイミング良く爆発させれば土を吹き飛ばし、また視界を遮ってやる事が出来る。

戦いは頭を使うもんだ。

ガキンちよのチャンバラごっこみたいに剣を振り回すだけじゃあたしには勝てないよ!

「追撃だ! ウサウサウサウサウサウサウサウサウサアッ!」

後ろに回り込みながら兎型の弾幕を大量に放つ。

こいつを捌ききれるかな!?

「なめるなあッ!」

「ゲッ……」

あいつの周囲の地面から間欠泉の様に闇が噴き出す。

あれで防御するつもり!?

……いや、見た所あれには『耐久力』が無さそうだ。防ぐ事は出来ないだろう。しかし……代わりにあいつの姿を見失った!

弾幕を放ち終えて即座に空へ飛び上がる。

噴き出していた闇が治まれば案の定あいつの姿は無い。

これはまず間違いなく地面の下から奇襲して来るね。なら当然空中に居た方が周りを見渡せてどこから来るのか……うげっ!?

地面が蜘蛛の巣みたいに四方八方に盛り上がって行く!?

またあいつの『闇』か、なんて便利な。それあたしによこせ!

しかしこれじゃあどこから来るのかわからない……なんて思ったあたしは甘かった。

——ドドドドド! ——

「うぎゃー!?!」

どこからじゃない、そこら中から黒い触手っぽいのが飛び出して襲って来た!

なんか卑猥! こんな美少女に向けるもんじゃないよソレ!?

ゾークの件もあって触らない方がいいと判断し、飛び回って回避したり弾幕で弾き飛ばしながらやり過ごす。

——トン——

……そして後ろ向きで飛んでたあたしは背中に誰かがいるなんてぶつかるまで気付かなかった。

「はーい」

今一番聞きたくない声だ。超やべえ。

「あはははは、じゃ、そういう事で……」

背中を向けたまま去ろうとするも……

「ふざけるなッ！」

「うぐっ!？」

蹴り飛ばされた。

咄嗟に力を回して防御したが、迫って来た闇について手足を捕まえられてしまった。

これは所謂ピンチって奴ですかあー!？

「誰か助けてー! 犯されるうー!」

「ふ、ふふふふ……余裕じゃない」

この期に及んでこんな態度をとるあたしにルーミアが血管をピクピ

クさせてる！　もう少し怒らせれば完璧に釣れるぞ！

こいつは力を隠した錬火に向かって『人間風情が』と言った！

『人間風情』というセリフ！　つまり高いプライドを持っていて格下を見下すタイプとみたよ。その心理についてやる！

「いいのかしら、そんな態度をしてて……」

「うっさいレズ！　変態！　触手フェチ！　やだキモーイ！！」

「（ピクピク）……！　もういいわ、死になさい！！」

キタ————（。▽。）————！！

この一撃を待っていた！

首を狙った大振りの薙ぎ払い！　完全にキレてネチネチなぶり殺しにするより一撃必殺で殺しに来た！

当たれば当然頭と胴体が泣き別れ……だが当たらなければどうという事はない！！

「ほいっ！」

「！」

ウサギの姿に戻る！

身長はもちろん手足も縮んだから手足を拘束していた闇からは抜け

出し、迫って来た大剣は頭の上を通過して行くのみ！ 回避成功ッ  
！！

そして後に残ったのは！ 大剣を振り切って無防備な懷を晒すルーミアだけだあ！！

「チャンス到来ああああい！！」

すかさず人化！

この一撃で決めてやるよ！！

「全力全壊必殺奥義！！ 撃兎【崇汰亜雷兎ブレイカー】！！」

「それだとブレイクされるのは『崇汰亜雷兎』になるぞー」

錬火うっさい！

しかしあたしの渾身の右拳は見事にルーミアの肝臓に吸い込まれていった。

これは完全に決まったあー！！

「はい、おつかれさま」

「へっ？」

喜ぶあたしの後ろから聞こえた声。

それは確かにあたしの目の前にいるルーミアの声の筈で……

「それは分身。残念でした」

目の前にいたルーミアは真っ黒に変色し、やがて宙に溶けていった。

「私はちよつと荒っぽい性格でね、激昂してトチ狂いそうになるとしばらく戦いを分身に任せて頭を冷静にすることになっているのよ」

「……ちつ、クールだったってわけね」

「そういう事。ナメてたのはこっちの方だったみたいね。でもこれで終わり」

きつと地面に潜った時に入れ替わってたんだろう。

これは要反省かな。

「……クッソー、これは十本じゃあわりに合わないなあ。今度はもっと要求しておこう」

「そう……じゃあさようなら」

再び大剣が迫る。

もうこいつも同じ手は食わないだろう。

大剣を回避する事は出来そうにない。

……でも絶望はしない。

だって……

「……てゐ、あくまで勝ったら十本だったからな？」

「ええっ、なんで!？」

「いや、そういう話だったろ」

「詐欺だッ!!」

「黙れ兎詐欺」

いざとなったら錬火が助けてくれるしね!

目の前で大剣を摘まんだままやり取りする錬火を、あたしは確かに信頼しているんだから。

……でも報酬のニンジンは必ず貰ってやるよ!

あたし結構頑張ったんだからね、錬火!!

**第二十話：てる A—GO!GO! (後書き)**

短くてすみません。

次は錬火VSルーミアです。



## 第二十一話：絶望のゴール（前書き）

色々とはっちゃけてしまった恥ずかピー回です。そして恥ずかピーとか言っちゃったのも恥ずかしい。

出来れば生暖かい目でスルーしながら読んでください！

そして……ユニーク一万突破！

みなさんありがとうございます！！

## 第二十一話：絶望のゴール

んー、負けちまったかー。

そりゃはつきり言えばルーミアが勝つかなーと予想出来ていたけど、てゐもかなりイイ感じだったしな。

うん、健闘賞にニンジン五本ぐらいはやってもいいかな。

いや、甘いかなあ。三本ぐらいにしようか。

「いいからニンジンよこせえー！」

「お前のおかげで決心がついた。健闘賞に五本やろうかと思ってたけどやっぱり二本だな」

「すみませえーん!!」

向こう脛を蹴りながら要求してくるような奴には二本で十分だ。

さっきの戦いでも必殺技で肝臓を狙うなんてえげつない行為をいともたやすくやってたし……やっぱり教育の仕方を間違えたか？

「……あなたは」

「ん？」

ルーミアが口を開く。

「あなたは何者？　これだけ強い子の保護者をしているみたいだけど、情や成り行きだけじゃなくて完全に押さえ込める力がある。私の剣も簡単に止めて見せたし……」

「何者だと思う？」

「……………」

ルーミアはしばしの黙考の後に喋り出す。

「……聞いた事がある。兎の使いを連れた、世界の頂点に君臨する神。曰く『歩み寄る理不尽』、曰く『子煩悩』、曰く『男のくせにツンデレって誰得？』……」

後半二つを考えた奴は見つけ次第全殺しにしよう。

「あらゆる神々が頭が上がない存在。その神の名前が確か……『ツネハル レンカ』だったわ。……あなたもレンカだったわね」

フルネームで知ってたか。名字はあまり聞かないと思うんだけど。

「はっ、思い出したぞ！」

「どうしたのですかファラオ？」

「『レンカ』という名前についてだ！　確か王宮の地下の壁画に一面だけ、兎を肩に乗せた男に女が頭を下げる絵が描かれていたんだ。そこには『ホルアクティ』の名と『レンカ』という謎の言葉が彫られていた。あれはまさに！」

「あの男を示していると!? まさかあのような凡骨が……」

「……『スリプル』」

「「「…………グウ」」」

さっきからちょこちょこ話に入って来るモブ共は面倒臭いので全員眠らせた。

あと古代キャベツ、正体がわかって尚凡骨呼ばわりとは度胸があるじゃないか。

褒美に緑アフロのブロッコリーにしてやろうか。

「んで、俺の正体をそう推理したワケだが…………どうする?」

戦うのか、降参するのか、それとも逃げるのか。

ルーミアは果たしてどうするのか。

「…………戦うわ」

「ほ…………なぜ?」

「私はもう止まらないわ。力を手に入れホルアクティを倒し、後は一人を倒せば私が『頂点』となる! これは好都合よ……。世界一を倒せるなら、私は名実共に『支配者』となれるわ! ゾークの様な無能ではない、真の『闇の支配者』に私はなる!!」

「グーッド!!」

こいつは俺をナメてるわけじゃない、不退転の覚悟を決めて挑もうとしている。

目標の善し悪しはともかく、なかなか熱い根性を持ってるじゃないか。

「いいぜ、お前に『挑戦権』をくれてやる!」

指をパチンと鳴らす。すると……

「……傷が治った? 服も妖力も元通りに……」

「ホルアクティやてゐの相手もしたんだ、連戦で俺と戦わせるのもどうかと思ってな」

「……なるほど、これで『先の二戦で消耗してたから負けた』なんて言えなくなったのね」

「そんなつもりはないな。お前が全力で掛かって来ればいいんだよ」

「そしてそれを完膚無きまでに叩きのめそうってわけ? 嫌味な性格」

「うぐっ!? じゃあどうすんだ、回復前の状態に戻すか?」

「このままがいいわ。確かにこっちの方が助かるもの」

「なら言うなよ……」

これは舌戦で負けたのか？

むううう、流石に闇の妖怪、侮れん。

「あなた『闇』を勘違いしてない……？」

「よし、キリキリ始めるぞー」

な、なんだよ、そんな目で見るとよ……

「行くわよッ！」

「来いやぁ！」

ルーミアが接近し、剣を斬り下ろして来るのを体を半身にして回避する。ルーミアが今度は首を狙って片手で斬り上げたのを体を逸らせてまた回避。

「食らえッ！」

斬り上げた勢いのまま、空いたもう片方の手に妖力を込めて腹を狙

い殴って来るのを……

「よっと！」

更に体を逸らせて避けて地面に手をつけ、そのままバク転で跳び下がって距離を取る。

「当たりなさい！」

「やだね」

今度は避ける隙間も無い程の高密度な弾幕が放たれて視界が覆われるが、やはりルーミアの狙いは目眩ましだろうか。

芸がない……とは思うが、敢えて乗ってやろうと思いとりあえずは弾幕を弾く事に専念する。弾かれた妖力弾の一部が建物に当たって建物が崩れていくが、人的被害が無いので王様達には容赦してもらおう。

「……おっ」

四方の地面から飛び出した鋭く尖った『闇』が一斉に殺到して来た。

これでは前後左右へは逃れられないので当然上に跳ぶ。

「これはどうッ!？」

そして頭上からは剣の切っ先を向けたルーミアが落ちて来た。

なるほど逃げ道がない。大抵の奴ならこれで闇か剣に串刺しにされ

て終わりだろう。

「上と下からの同時攻撃よ！ 秘殺【ヘルヘブンスネーギル天地来蛇殺】！！」

「だが甘い！」

「……うそっ!？」

眼前に迫って来た剣の切っ先を両手で白刃取り。そのまま逆上がりをする様に挟んだ所を支点にして足を持ち上げ、ルーミアを蹴り落として上下を入れ替える。これで下から迫る闇への盾に出来る。

「クッ……」

しかし当然ながらルーミアは串刺しになる事はなく、すぐさま闇の実体化を解除して地面に着地する。

「空中なら避けられないでしょ！」

今度は弾幕を放つ。

でもなあ……

「てるが飛べるのになんで俺が飛べないと思ったんだ？」

「……あ」

天然か？

確かにまだ俺はルーミアの前ではジャンプしかしてなけど……



まあ避けずに弾いてやるか。避けるまでもないみたいな感じで。

……確かに性格悪いな。

「オラオラオラァッ!!」

空中で姿勢を直しつつ、頭から落下しながら手で妖力弾を弾いていく。

下にいたルーミアは俺が弾幕を抜けるのを見て距離をとる。

しかし今度は俺も動かしてもらうぞ。

両手を合わせてから地面に触る。すると地面の上をバリバリと電気が走り、一瞬でルーミアの足元に穴が空いた。

「なにこれッ!？」

「錬金術だ」

「私が知ってるのと違……キャッ!」

見事にルーミアが穴に落ちたのを見たら再び錬金。そのままでは飛んで逃れられてしまうので、ルーミアの頭だけ出して体を埋めた。

……こうして見るとまるで生首が落っこちてるみたいで少し恐いな。自分でやった事なんだけど。

「くうううう!!」

「どうする、まだやるか？ んん？」

埋まったルーミアの前でわざわざ豪華な椅子を出して座り、足を組んで頼杖について尋ねる。

特に意味はない、単なる嫌がらせだ。いっそのまま悪っばくいてみようかと。

「さっすが錬火！ あたしに出来ない挑発を平然とやってのける！そこに痺れる憧れるう！！！」

「はっはっは、褒めるなよてゐる」

「うがああああ！！！」

あ、壊れた。

「くっそおおお！ ナメんじゃないわよ！！！」

「おおっ……」

俺は即座に椅子を片付けて跳び退る。

ルーミアが妖力を放出して地面を吹き飛ばした。

「ダークパワーを全開よ！ こいつで勝負をつけてあげるわ！！！」

ダークパワーでなんぞ。

疑問ができたが、場にある変化が訪れる。

「あ、なんかまた暗くなってきた」

てゐの言う通り、周囲が暗くなったのだ。

「闇よ、我に答えよ!!」

ルーミアが上を見上げて太陽に手を伸ばす。

「おおっ、また日食してるじゃん」

「あー、そういやゾークの力も吸収してたもんな」

最初に起きていた日食はゾークがいなくなると終わっていたが、今ルーミアはゾークと同じ様に日食を起こし、闇の力を更に上げようとしているのだ。

言ってみれば大猿に変身する為に擬似的な月を作った某M字ハゲと同じだ。

やがて完全に日食が起き、真っ黒な太陽が空に現れる。

「ふふ……はははは、あははははは!! 来た来た来たあ!!  
力が溢れて来るわ!!」

ルーミアの力もテンションも更に上がったみたいだ。

「そう、私は闇の妖怪。当然暗い方が力は増すわ!」

その勢いのまま説明もしてくれるらしい。

「日中より夜中！ 太陽の下より月の下！ 私の力はより増していく！」

「錬火ー、ニンジンジュースもう一杯」

「黙って聞いてあげなさい」

せっかくノリに乗ってるんだから。

「しかし最も力が発揮されるのは『夜』ではない！ 太陽が出る『昼』でなくてはいけないのよ！」

ルーミアが空を指差す。

「見よ！ これこそが『最も力を持った闇』なのよ！！」

「「ナ、ナンダッター！」」

俺達の棒読みな驚愕にルーミアはご満悦だ。

「『夜』は決して最高ではない。最も恐るべき時というのならわざわざ無防備になる睡眠を夜にする人間などいない！ 夜に眠るのは『安らぎ』を覚えるから！ 確かに闇は『恐怖』を与えるが、同時に心を落ち着かせる。しかしそれは闇の本質として間違っていないわ」

「ねー、長すぎない？」

「もう少し待ってやってくれ」

「だがこの世には恐怖のみを象徴とする『闇』が存在する！ 太陽がいなくなった空を掠め取る様に闇で支配した軟弱な『夜』とはワケが違うのよ！」

「それが日食って言いたいんでしょう？」

「じゃがバターでも食ってろ！」

「ラッキー！」

これで少しは静かになるだろう。

「これがそうよ！ 天に昇った太陽をねじ伏せて生まれた闇！ 真に世界を支配した、『最も力を持った闇』！！ この私を最強にする『闇』なのよ！！」

「「わー（パチパチパチ）」」

演説終了。

説明が終わってメデタシメデタシ……

「さあ、ここからが本当の勝負よ！」

「ですよー……」

だって今のルーミアはテンション高すぎて近寄り難いし。まるで梅雨入りしたカエルの軍曹みたいだ。

出来る事なら関わりたくない。

だが残念ながら戦わざるをえないのも事実。

これも運命か。

「ハアッ!!」

「おっとお!!」

ルーミアが空中で横薙ぎにした大剣から飛んで来た斬撃を神力でコーティングした足で蹴り上げる。

斬撃はそのまま離れた町にあった王宮の上を掠め、遠くの空の雲を切り裂き消えて行った。

「……あたしの時にされなくてよかった」

まあてゐじゃあれを防ぐのは難しかったかもな。回避は……闇に捕まったら無理か。

「死ね死ね死ね死ねシネシネエエエエ!!」

「発狂ルーミアかよ!?!」

狂気を纏い始めたルーミアがさっきの斬撃を連続で放ってきた。

回避するだけでは後ろの町に大被害が出るので、やはり全て蹴りながら逸らしていく。

「ちよっ、こっちに飛ばすなー！」

あ、悪い。

「フンッ！」

今度は縦に斬り下ろした。

大地を真っ二つに裂きながら斬撃が迫って来る。

「これは無理かな……」

流石の上に逸らすのは難しいかと思い、仕方無いので技で相殺する事にする。

「嵐脚ウ！」

足を勢い良く蹴り上げると斬撃が発生し、ルーミアの斬撃とぶつかって相殺された。

「錬火も相当無茶だよね」

「いきなり団子でも食ってろ！」

「やつふうー！」

まったく、大人しく見てろ！

そう言っている間にルーミアが接近して来る。

「ハアアアッ！ 暗黒剣Xの字斬り！！」

「お前本当にそれ自作か！？ そりゃっ！」

「うっ……！？」

足元の砂を掬い上げてルーミアの顔に投げつける。上手く砂が目に入った様で狙いが逸れて回避成功、再びルーミアを蹴り飛ばして距離を作った。

「チッ、なぜ攻撃しない！？ 今まで何度も機会があった筈よ！」

そりゃそうなんだが……

「攻撃していいのか？」

「それが戦いでしょう！」

いや、マジでもっともなんだけどな。

「本当の本当に？」

「くどいッ！」

うーん、まずは暴れただけ暴れさせようかと思ったけど……そう言うならいいか？

「わかった。んじゃ行くぞー」



「来いッ！」

「後ろだ」

「えっ……？」

俺は既に「ぞー」と言い終わった瞬間に高速でルーミアの後ろに回り込んでいた。

「な……今あそこに！？」

「残像だ」

俺の動きを目で追い切れなかったため、ルーミアにはまだそこにいる様に見えていたのだ。

「クッ！」

大剣を振り下ろして来るが、

「ほっ」

「！クソッ！」

前の様に指で摘まんだ。

ルーミアは力いっぱい動かそうとするも、ピクリともしない。

「おりゃ（バチン！）」

「……………ッ!？」

デコピンでルーミアが吹っ飛んだ。

なんとかブレーキをかけて止まったが、膝をついて頭をぐらぐら揺らしているから狙い通りに脳震盪を起こしたんだろう。

「ふっふっふ……どうした、その程度か？」

「出たぁー錬火の魔王的挑発発言! 圧倒的な力量差を見せつけ勝負を決めにいく時の言葉! これは遠回しの勝利宣言だぁー!!」

「てゐ、後でお前の鼻頭にドリアンエクス塗ってやる」

「うぎゃー!？」

魔王とはなんだ魔王とは。

だいたい俺はそんな発言をいつもしているわけじゃない……筈だ。

「う、ぐぐ……こんな所でえ……!」

フラフラしながらも立ち上がる。

さっきの一撃で力量差がわかって尚、ルーミアから闘志が消える事はなかったようだ。

「こんな所で! 負けてたまるかアアアッ!」

次の瞬間、ルーミアの体から大量の『闇』が噴出した。

S i d e   ルーミア

勝てない。

あんな攻撃一発でそれがわかってしまった。

まるで極上の料理を一口食べた時の様に、その重みも、速さも、込められた力も、そして……手加減さえも一瞬で感じとれたのだ。

これが世界一か。

ゾークの力を手に入れ、自分の力を増す状況を作り出してもまだ届かないのか。

視界が揺れる。

あの程度の一発がここまで影響を及ぼすのか。

……勝てないのか。

そして愕然とした。

私は何を考えている。勝てない、だからどうするというのだ。

泣いて赦しを乞えというのか。

背を向けて逃げ出せというのか。

勝てないならば全てを諦めて殺されろとでもいうのか。

……冗談じゃない。

そんな弱気な事を考えるなんて私らしくない。

相手がどんな理不尽な存在だろうが、知った事か。

勝てる勝てないじゃない。たった一つだけ……『勝つ事』だけを考  
える、それでいいじゃないか。

まだ私は死んでいない。

まだ私は……折れちゃいない！！

そうだ！

「こんな所で！ 負けてたまるかアアッ！！」

今まで幾度となく感じてきた、自分の体から闇が噴き出る感覚。

しかしいつもと圧倒的に違うモノがある。

ああ、これは……かつて私が『闇を操る程度の能力』に目覚めた時  
の様な、あの時感じた解放感と同じ――――

『闇を支配する程度の能力』

——世界が広がった。

自分がどこまでも大きくなって、それでいてシルクのような繊細な感覚で世界を感じとれる。

あいつの居場所、呟く唇の動き、大地の裂け目や町の構造まで手に取る様にわかる。

他のウサギや人間達がいらないのはあいつが逃がしたからか。

……私の『闇を操る程度の能力』ではここまでの事は出来なかった。

闇で包む事は出来ても中に何がいるかわからないし、闇を実体化のにも限度がある。

だが！

今なら闇の中を理解する事はもちろん、次の瞬間には周囲を包む闇全てを実体化させ、あいつをハリネズミ以上に針だらけにしてやる事も出来る！

やはり世界は私を選んだ！！

この『闇を支配する程度の能力』で、私はこの世の頂点となるッ！

「これは……」



なんで壊れないの？

さっきからずっと攻撃しているのに……全方位から絶え間なく『闇』で攻撃してるのに……

な、なんで死なないのオ！？

刺しても潰しても貫いても砕いても裂いても剥いても削いでも断つても打っても穿っても噛んでも殴っても斬っても捻っても抉っても割っても圧しても……いくら当てても……！

効かない！

壊れない！

かっ……『硬い』！！

「なんでよオオオオオオ！！？」

なにソレふざけんな！

攻撃そのものが効かないなんて……いくら攻撃しても意味ないなんて……！

「まあ仕方無い、俺だし。攻撃を当てられたのは驚いたけどな」

……どうやら自分は相手が近づいて来たのに気付かない程必死だったみたい。

「それじゃあ俺のターンだ」

何をするの？

殴る？ 蹴る？

でもこの『世界』の中ならなんとか防御する事も……

「俺はお前が持つ『闇への干渉力』を……………『超越する』」

「あ……」

…………その言葉とともに…………『私の世界』が消えて行った。

この『闇の世界』の支配権を強引に持って行かれたのだ。

言葉通りにとるなら、私以上の支配力を使って。

…………ホントなにソレ。『超越する』って……………なんて理不尽な。  
意味わかんないわよ。

あー…………無理無理無理、これは勝てないわ。

…………なんかあっさり折れちゃった。

「んじゃ、俺の勝ちだな」

ええ、悔しいけどあなたの勝ちよ。

…………次の瞬間、脳みそがシェイクされる様な衝撃を受けた。



私は薄れていく意識の中で思った。

あーあ……負けちゃった。

## 第二十一話：絶望のゴール（後書き）

内容には触れませんよ、ええ……生暖かい言葉なら感想でお願いします。

あと前書きに書いた通り、ユニークが一万を超えました！

このような拙著に時間を割いていただき、本当にありがとうございます。

この事でテンションが上がった人参天国は調子にのって記念のリクエストとか募集しちゃいます。

こんな話が見たい！って奴がありましたらぜひ。

……ええ、ネタ不足は否定しませんとも。

リクエストがなければこの東方かどうかかわからない本編を続けますよー。

最後に、これからも『東方超越起』をよろしくお願いします！

## 番外編：とつぜん！黄金伝説（前書き）

リクエスト作品です！

……しかしこの話は作者が好き勝手やっています（いつもの事です）が。

「オレのFateを汚すな！」という方はすぐさま回れ右をして他のお気に入り小説へ行きましょう！

## 番外編…とつぜん！黄金伝説

この日、俺はふと思い出した事がある。俺とてゐが旅をしていた時の話だ。

忘れもしないあいつとの出会いの話……

ああ……あの頃が懐かしい。

俺とてゐの二人旅もかなりの時間をかけているんだが……こんな大きな街は初めてだな。名前は『ウルク』って言ったか。

かなり広いし活気もある。治安も良さそうだ。統治者が優れているのか知らないが、邪神関係以外の街でなら今までで一番いい街だろう。

どうせならこの王にも会ってみたい所だな。

「錬火ー」

「どうした？」

「ホラホラ、金貨拾った」

「交番に届けて来なさい」

「見て見て、シャム猫シャム猫」

「なんでそんな猫が……元いた場所に返して来なさい」

「ホラホラ、金色のシャチホコ」

「名古屋城に返して……ちょっと待て、何だその生物は」

「川にいた。錦鯉とかの仲間じゃないの？」

「角が生えてる鯉なんているか。とにかく、それも元いた場所に返して来なさい」

「ちっ、ヘラとかに高く売れると思ったのに……」

確かにその派手さならヘラの目に適うかもしれない。動物じゃなくて魚(?) だけどそこん所はどうなんだろうな。

しかしここは珍しい物が多いな。活気があると珍品の出入りも増えるのだろうか。シャム猫やらシャチホコやらはどうかと思うが。

「ホラホラ、タコスだよー」

……てゐがどこかでタコスを買って食っていた。やっぱり『珍しい』ってレベルじゃない気がする。

「錬火の分もあるよ」

「お、本当か？」

こいつは驚きだ！　てるも優しい子に育ってくれたんだな……

「はい、ナン」

「……………」

「はむはむ……タコスうめえー！」

「……（シュバツ）……モグモグ」

「ぎゃあー！？　具が消えたー！」

ナンだけ寄越す奴がどこにいる。俺のホロリを返しやがれ、まったく。

「ちえっ、もういいや、喉渴いたからモ○シェイク買って来る」

「おい、お前これどこで買って来た！？」

呼び止めようとしたが間に合わず、てるの姿は雑踏の中に消えて行った。

俺は追った方がいいのだろうか……いや、これは知らない方がいい事のような気がする。このまま忘れてしまおう。

戻って来るのを待っていていようかと思ったが、考えてみればてゐを待つ必要もない。

あいつも子供じゃないんだし、その気になったら居場所もすぐわかる。

せっかくだから一人で散策してみようかと結論を出して俺は歩き始めた。

「あのー……」

……が、誰かに呼び止められてしまった。

いや待て、俺じゃないかもしれないぞ。これだけ人がいる中で俺に声をかける必要もないのでは？

しかし一応周りを見回してみる。

前よし、右よし、左よし、後ろ……

「あ、呼び止めちゃってすいません」

……いた。どうやら本当に俺だったみたいだな。

サラサラした金色の髪と紅い瞳を持つ礼儀正しそうな少年がこちらを見ていた。

……うん、こいつ見覚えがあるなあ。なんだっけ、確か……フェ……フェ……フェ……フェ○タス！……じゃなく……ああ、Fateのキャラだ！

……え、F a t e？

……別に今更驚く事でもなかったな。ふーん、って感じた。

「あれ、もしかして僕すべりましたか？」

「出番がもう少し早ければなあ……」

せめて永琳達に会う前ならもっと驚愕出来たのに。……いや、流石に無理な話か。時代が違いすぎる。

「何というか、意外性のある意外が必要だな」

「よくわからないままよくわからないダメ出しをされてしまった事に驚いています。しかし意外性………うん、実は僕は女なんです」

「……え、マジ！？」

まさか未来は英雄王女！？ 金ピカまさかの性転換！？

「え、嘘ですけど……」

「……………」

嘘かよ。というか、無理に意外性を作らなくてもいいから。

……俺達は何の話をしているんだろうな。

「さて、お前はいつたい俺に何の用なんだ？」



「流しましたね？ 元はと言えばあなたが原因だったんですが……」  
細かい事は気にすんな。ほれ、本題に入れ。

「まあ別にいいんですけど……では改めて。呼び止めてしまい申し訳ありません。僕の名はギルガメッシュと言います。ギルと呼んでください」

「構わない。俺の名前はレンカだ。よろしく、ギル」

「はい、よろしくお願いします。それで聞きたいのですが、あなたは旅の方ですよね？」

「……まあな」

ここでいいえと答えてみたい気もするがそれだと話が進まないの  
肯定しておく。

この子ギルならいいボケなりツツコミなりしてくれそうなんだけ  
どな。

「実は僕はあの城で働いているのですが、最近仕事ばかりで忙しか  
ったんです。それで今日はやっと休みを貰えたんですが何をしたら  
いいのか困ってしまい、手持ち無沙汰に街を歩いていたらあなた達  
を見つけたんです」

「という事は、俺に旅の話聞かせてほしいってわけだな」

「はい。もちろん無理にとは言いません。お時間をいただけたらで

構わないんです」

時間はいくらでもあるしな。付き合っても何の問題もない。

それにこの好奇心旺盛な所を見ると昔の永琳を思い出すな。それが今じゃあんなにたくましくなって……

「別にいいぞ？ 急ぐ旅ではないし」

「本当ですか！？ ありがとうございます！ いやあ、何事も頼んでみるものですね」

「まずは動かなきゃどうにもならないって事だな」

うーん、無邪気というか何というか……どうしてこれが慢心王になるんだろうな。世の中不思議だらけだ。

「ちなみになんで俺に？」

「それはですね、元々ここは外から来る人が多いですし、その中でも特にあなた達の恰好は珍しい物だったからです。その分聞ける話も珍しいんじゃないかなあーと」

まあ黒い髪だったりウサ耳生えてる奴なんてここらじゃそうそういないだろうしな。納得も出来る。

「あなたと一緒にいた方とも話してみたいと思ったのですが、別行動にしたんですか？」

「あー、まあそんな所だ。見てたのか？」

「はい、お二人に話しかけようとしたら行ってしまっ……残念です」

大丈夫大丈夫、どうせすぐに戻って来るよ。

「錬火ー」

お、噂をすればなんとやらってか？　どうやらてゐるが戻って来たよ  
うだ。

「ホラホラ、チリドッグ。はい、これは錬火に。コッペパン」

「中途半端な優しさなのか単なる嫌がらせなのかわかりにくいんだよ……」

「もちろん嫌がらせだよ！」

「やっぱりかこのヤロウ！（ぐりぐり）」

「野郎じゃなくて美少女だ挟り込まれる様につむじが痛い痛い  
！？」

わざわざ金使って嫌がらせてんじゃねえよ。

あとお前は何自分で美少女とか言っちゃってんだ。

「あ、あのっ！」

「ん？　ああ、悪い」

ちょっとお仕置きしてただけで、別に無視してたってわけじゃないから。

「ぼ、僕の名前はギルガメッシュです！ ギルって呼んでください！  
あなたの名前は何ですか！？」

「……鍊火、このうっさい奴誰？」

「うっさいって言ってやるな。さっきお前がいない間に知り合っ  
てな、旅の話聞かせてほしいんだと」

「ふーん……めんどくさそ」

随分と辛口だな……

しかしギルのこの態度、俺の時とはまったく違う。これは……まさ  
かなのか？

「あたしの名前はブライアン・てゐ。生まれ変わるならペンギンが  
いいね」

「お前はいつからギタリストになった。初対面の奴にあっさり嘘つ  
くなよ」

「だって個人情報迂闊に漏らすと大変だよ？ こいつめんどくさ  
そうな匂いがするし」

お前確実に後者が本音だろ。ある意味敏感に相手の感情を感じ取っ  
てるんだろうけど。

「ブライアン・てゐ……てゐさんと呼んでいいですか!？」

あっやべ、信じちゃったよ。そりゃ初対面じゃわからんわな……名前はあるけど。

しかしこれは完全にアレだろうな。

……よし、ちょっと確認してみようか。

「てゐ、ちょっと待ってろ。ギル、お前はこっちだ」

「……さっさとしてね」

「何ですか？」

てゐを残して離れた場所に移動する。話を誰かに聞かれないようわざわざ結界まで張った。

「おい、まさかお前って……」

「な、何で僕が一目惚れしたってわかったんですか!？」

吐くのが早い！俺まだ何も言ってないよ！

早くも確認が取れてしまった。まさかてゐに惚れるとは……なんか可哀想だな。まだあいつの事ろくに知らないのに……

「何であいつに？」

「えーと、その……無邪気っぽい所が可愛かったと言いますか、笑っている顔が胸に来たと言いますか……」

どちらかというとお前の方が無邪気だよ……

しかし外見だけ見れば仕方無いのかもしれない。ああは言ったが確かにあいつは見た目美少女だからな。見た目。中身を知っても傷つかないでいてほしいもんだが……

「じゃあ俺達に話しかけたのも？」

「い、いえ、休日の使い方に困っていたのは本当ですよ？　ただ目についたのが彼女だったというか……」

「ああ、わかってるって」

ギルは若干慌てている。別に口実がどうだろうと構わないんだよ。

しかし……青春してるなあ。

「わかった。一度了承した身だし、ギルの暇つぶしに付き合うよ。……てゐも一緒にな」

「あ、ありがとうございます！」

ま、俺はそれ以上手は出さないよ。本人達の問題だからな。いずれ中身を知ってもてゐと付き合いたいって言うんならその時は応援してやるよ。

……てゐを傷つけたりしたらどうなるか知らないけどな。H A H A

H A H A H A ……

さてと、てゐの所に戻るか。ギルも張り切ってるみたいだしな。

「おーい、話は終わったぞ」

「そ？ んじゃあたしからもちよつと話があるんだ」

「えっ？」

なに、てゐ本人からだと？ 何を言うつもりだろう……まさかギルの想いに気付いたか？

「えっと……一応言つとくけど、ごめんね？」

「……………え？」

え、まさかこれって……

「いや、たぶんあたしあんたになびかないよ？ だから先に言つとく。ごめんね？」

「……………（ドサツ）」

「あちゃー……」

てゐの突然のお断り宣言にギルは膝をついた。

「な……なんで……ですか……？」

ギルは力を振り絞るかの様にして尋ねた。その声はなぜか息も絶え絶えだ。これ以上は止めた方がいいんじゃないだろうか。

「いやー、ちょっとねえ……」

そこでなぜかてゐるはチラリと俺を見た。

……俺？　なぜ俺が……ああ、そうか。もし付き合う事になっても俺が許さないと思ってるんだな？　まったく、俺はそこまで狭量じゃないぞ。

「別に本人同士で認めあってるなら俺もとやかくは言わないぞ」

「そうじゃないよ……このバカ」

バカとはなんだバカとは！　俺なんか間違ってたのか？

「そういう事だったんですか！？　そ、そうですね、こんなぽつと出の男じゃ仕方無いですよね……」

ギルは何かを察したらしい。ついに地面に手をつき項垂れていた。

どうしよう、励ましの声とかをかけた方がいいんだろうか。でも俺の直感がやめとけて嘸いてるしなあ……ホントどうしよう？

「……ぐすつ、見苦しい所を見せてすいません……ですが出来れば旅の話は聞かせてください……」

なんと驚くべき事に、ギルは自力で立ち上がった。しかも自分を振った相手との同席でも構わないと言う。



流石は未来の英雄王、強がりかはわからないが大したメンタルだ。それともこれも青春効果なのだろうか。

「……あんたがそう言うならあたしは別にいいよ。めんどくさいけど」

「うぐっ……で、では、城に案内します……」

「てゐ、出来れば言葉を選んであげて……」

てゐの容赦ない言葉に若干ふらつきながらも、ギルは城に向かって歩き出す。

こりゃあダメージはでかいかな。せめて楽しい話をして気を持ち直してくれればいいんだけど……

城までの道のりでは誰も口を開かないまま、俺達三人は黙々と歩を進めるのであった……

そしてギルと出会ったあの日から、俺とてゐは数年間城に滞在していた。色々と話をするうちにギルには随分気に入られたらしい。

何度も言うが、自分を振った相手と毎日顔をあわせれるなんて本当に凄くと思う。ほんの十分程度とはいえ初恋だったらいいが、割り切る事は出来たそうだ。

しかし考えてみればギルは成長して大人になるが、てゐは中身はともかく見た目が少女のままだ。割り切れなかった場合ギルは小さい女の子に固執するロリコン王として後世に名を遺す事になったんじゃないだろうか。それを考えると彼は英断を下したと言えるだろう。

まあ、ギルのこれからの人生に幸あれ。

あと俺達が神って事もバレた。と言っても自分からバラしたわけじゃないが。

滞在して二年ぐらい経った頃、アルルって知り合いの女神がわざわざやって来て、てゐに現キング・もふもふとしてモフモフコンテストにお越しいただきたいと頼んで来た所を目撃されたのだ。

神力をほとんど隠さず来たもんだからギルもアルルの正体に気付き、なし崩し的に俺達の正体も話す事になったのだ。かなり驚かれたよ。

そしてその後ギルは「これほど凄い盟友ともを持ったというのに僕だけがいつまでも情けないままではいられません。僕もあなた方と肩を並べれる男に……いえ、『王』になってみせます！」と一念発起。イメチェンの為にそれまで以上に勉強したり体を鍛えたりしながら真の『王』を目指してどんどん成長していった。

そして……ギルの苦難の日々はすっかり実を結んだ。

知と力を蓄えたかつての少年は今や見事な変貌を遂げ……

「見ろレンカ、金色の巨大魚だ！ この牙、この角、このサイズ……そしてこの輝き！ まさに我の為に生まれて来たかの様な生き物だ！ 我はこやつを『グボロ』と名付けてエラミテの雑種共との戦いに連れて行くぞ……！」

「グオオオオオオ……！」

「早く川に返して来なさい！」

「なにっ!？」

「グオッ!？」

すっかり拗れちゃったよ……

うん、俺が知ってる慢心王になっちゃったんだ。

威厳を出す為に口調を変え、絢爛さを示す為に金ピカの鎧を纏い、強者の義務として慢心した結果……あの頃の素直なギルは死にました。

「なぜだ!？ この寧猛と華美を兼ね備えたグボロの前ならばあのような雑種共など案山子も同然ではないか！」

「いや、言っちゃあ何だがそいつすぐに死にそうだぞ。何というか、やられ役感をひしひしと感じる」

「なに、心配する事はない。なんどこやつは体内で水を圧縮して大砲の様に角から打ち出す事が出来るのだ。いや、大砲どころではな

い！ その威力はまさにプライスレス！」

どうだ、凄いだろう！ と呵呵大笑しているが……ギルよ。

「後ろ見てみ？ 後ろ」

「む……？」

ギルがさっきまで背後にいたグボロを振り返る。

そこには……

「おっ、オリデオコンみつけ。でも量が少ないから手裏剣にでもするかなあ……」

「グ……グオオオ……（ピクピク）」

「グ、グボロオオオオ！？」

ギルが絶叫する。

目の前にはてゐに鉱石を採取されている瀕死のグボロがいたのだ。何をされたのかわからないが既に虫の息で、てゐのされるがままになっている。

「てゐ！？ 何をしている！？」

「あ、ギル？ いやー、なんかザコい金づるがいたからつい討伐しちゃった。ほら、なんか珍しい鉱石いっぱい採れたよ」

「討伐するな！　これは我の飼い龍だぞ！」

飼い龍……なんか語呂悪いなあ。

「ああ……このような姿になって……さぞ辛かろう」

「……さて、今日はドリンクがワンコインの日だったかなー」

「あっ、待て！」

状況を察したてゐるはそそくさと逃げてしまった。

……しかしグボロは見事にボロボロになってしまったな。てゐに色々と採取されたために身体中のウロコが剥けている。見てて非常に痛々しい。

「我のお気に入り……この傷では戦場に赴く事もできん。もはや勝利は目前だったというのに……」

いや、それはやめておけよ。

でもなんか気の毒だな。わりと本気でこれで勝てるか思ってたのかもしれない。

傷を治してやる事も出来るけど……こいつ体力が異様に低い。戦場に出たら絶対に死ぬだろう。

……仕方無いな。

「なあギル」

「……なんだ」

「てゐの奴がすまない。それに止めれなかった俺も悪かったからな、お詫びをさせてくれ」

「詫び？ ……いや、レンカは何も悪くないのだ。これもまたひとつの運命だったのだ……否、やはりてゐが悪いな」

「あいつには後でよくOHANASHIしとく。だから今度の戦い、これをグボロの代わりに持って行ってくれ」

「……これは？」

渡したのはもちろんアレ。たった今創ってみた、俺が知っているキヤラクターのギルガメッシュが使う物だ。

円柱状の形の刀身という、『剣』と言うには少々疑問を持つ剣。『乖離剣エア』だ。元ネタでは無銘なのだがそれでは不便なのでこの剣はそう名付けた。

しかし他は全て同じかというところではない。実はこれ、悪ノリして若干改造してある。

「むむ……この剣、ただならぬ力を感じるな。それになぜか手によく馴染む」

「一応お前の為に用意したモンだからな。お前専用の武器って奴だ」

「ほう、レンカが我の為に……我の専用……うむ、なかなかいいぞ」

「！」

ニヤニヤ顔のギル。この微妙に素直な所は今も昔も変わらないなあ。

「さて、その剣の使い方だが」

「うむ」

「まずは軽く魔力を透して振ってみ？」

「む、こうか？」

——ブンッ　ズバァッ！！——

「……………」

おっと、城の壁が切れてしまった。修復修復っと。

「と、こんな感じで空間ごと切断出来る。魔力をもっと込めたら更に色々凄い事になるからそこらへんは注意するように」

「…………こんな剣は初めて見たぞ。あの程度の魔力で空間を切れる剣…………凄いではないか！」

「別にそんな大したもんじゃないさ」

——ブンッ　…………ピッ——

「空間なんて腕振ったら切れるし」

「……………」

ん？　なんだその目は……ああ、そうか、そういや腕力だけでそんな芸当出来る奴って聞いた事ないな。だったら仕方無いかな？

「……まあレンカだからな、仕方が無い。それでこれはいつから用意していたのだ？　それなりに手間もかかっているだろう」

「二秒前ぐらい」

「二秒！？」

「意外と時間がかかったよ」

古い記憶から元ネタ引っ張り出して来たり設定考えたりしたからな。ま、手間という程のものでもない。

「あとまだあるぞ」

「ぬ……まだ何かあるのか……？」

もちろん。こっからが悪ノリ部分だ。

俺はギルの持つエアの柄の部分をコツコツと叩く。

「ほれ、起きろ、エア」

『……エアだけに空気になってました、なんちゃって……ッス』

「喋っただとオツ！？」



はい、実は喋っちゃいます。別に魔法を吸収したり元傭兵ギルド員の相棒だったりするわけではない。

基本的にギルはお喋りのくせに友達が俺達以外いないから、剣が喋れたら話し相手になれるかな、と思ったのだ。

ものすごい余計なお世話だけど。

「あともう一つ能力が……おい、エア」

『出来れば乖離『槍』が良かったんすよ……あ、はい、なんスか？』

「ほら、あれあれ」

『ああ、アレッスか。わかったッス』

「……もう我は何が来ても驚かんぞ」

いや、驚いてもらうぞ！ この剣の能力に！

『ではミュージック、スタートッス！』

♪ ~~~~~♪ ~~~~~♪

「こっ……これは!？」

「これぞ、音楽好きのお前にピッタリな搭載機能!」  
ケモード  
黄金の調べ』だッ! 剣の担い手はその力を増し、臆病な有象無象は音楽を聞いただけで恐れ戦くというわけだ!」  
カラオ  
『勝利を誓う

『ちなみにこの『ギルガメッシュのテーマ』は地球を侵略しようと宇宙からやって来た敵をギルさんがばったばったと薙ぎ倒す所をイメージしてるッス！ 最後の幻想はまったく関係ないッス！』

さあどうだ！？

果たしてギル的にこれは『アリ』か？ 『ナシ』か！？

「……レンカ」

「……どうした？」

「これが……これが答えなのだな」

「……………」

「これが……これこそが！ 『意外性のある意外』 ツ！！ あの時言われた言葉はなぜか私の記憶によく残っていた。我に足りない物が何なのかを考えながら私はこうして成長して来たが、漸く答えが見つかった！ いや、これは教えてくれたと言うべきか！」

……え、決め手そこ？

というかそんな事考えてたの？ 今まで？

……まさかギルがこうなったのって……俺のせい？

「ありがとう心の盟友よ！ 答えを手に入れた今の我ならエラミテの雑種共など鎧袖一触にしてやれる！ この戦い、我は勝つぞー！」

「あ、ああ……喜んでもらえて何よりだよ……」

やばい、なんか心が痛い。

あの素直な少年が慢心王になった原因がもしかしたら俺のせい……  
すまん、ギル。

「錬火ー」

「ん？ どうしたてゐ」

「アルルが来てるよ。『こんな時間まで何してるんですか、コンテ  
ストはもう始まってますよ！？』だって」

「ああ、そういえば今日だったっけ」

言われたのが何年も前だったからすっかり忘れてたよ。

……あ、でもギルはどうしよう？ モフモフコンテストって準備に  
時間がかかる分、内容もゆっくり進むからなあ。かなり大量の神が  
観客に来るし、みんな基本的に寿命がなくて気が長いから十年単位  
で時間を使う事もあった。

……まあ合間合間に戻って来ればいいか。抜けるのに苦勞するけど。

「……行くのか、レンカ」

「え？ ああ、うん、行ってくるけど……」

「なに、言われずともわかる。コンテストとやらがどのような物かは知らんが、きっと長い戦いになるのだろう？」

「……まあ長いっちゃ長いな」

俺とてゐのコンビはチャンピオンなので、出場するのではなく勝ち上がって来た奴の相手をする事になる。それまでめっちゃ暇なんだが……周りの神達が逃してくれないんだよな。俺達の場合、いかにして暇をつぶすかの勝負になってくる。

正直行きたくない。しかし今回はなんやかんやで受けてしまったんだよな。……後悔先に立たずか。

「我は大丈夫だ。二人の盟友に恵まれ、このような素晴らしい剣も授けてくれた……これ以上心強い事があるうか！ この思い出と剣があれば、我は世界を相手にしても戦える！ ……遅くなったが我も独り立ちする時が来たのだよ」

あれ、なんか今生の別れみたいになってる？ ……なにゆえ？

「錬火、アルルが『早く来てくれないと泣きます……』って言うてるよ」

「行くのだレンカ！ 我は近い将来、世界を手に入れてみせる！ その時は我の世界でまた杯を交わそうぞ！」

『おれっちは空気を読んで喋らないッス』

え……えー……

なんかエアに最後まで読めよとつつこむ気分にもなれない。

……もうなんでもいいや。

「……わかった。じゃあな、ギル。また会おう」

「ああ、また会おう。てゐ、そなたもな」

「ん、じゃあね」

握手をした後、ギルはいい顔のまま背中を向けて歩いて行った。これはもう振り返らないという意志表示か何かか。

「早く行くよ」

「……ああ」

てゐ、お前はあっさりしすぎだよ……

……そう、こうして俺とてゐるはギルと別れたのだ。

そしてあの後ギルと会う機会には恵まれず、今日までついに顔をあ

わせる事はなかった。

……しかし。

どうしてそんな俺が突然そんな回想をしているのか。

実はそれには理由がある。

それは……

♪♪♪♪♪

「はっ、この曲は奴のテーマ！ 『レバノンの森の死闘』です！！」

「ついに来たのか！ みんな、気をつけてくれ！」

「んな事わかってるわよ！ これで気をつけない奴はよっぽどのバカか自信家ぐらいよ！」

「軽口を叩いている場合ではないぞ凜。……そら、お出ました」

二組の主従は一斉に身構える。

彼らは既にこの敵に遭遇した事があり、その強さも実感済みだった。四人がかりであつても決して油断出来ない相手なのだ。

「ふん、このような雑種共の顔を何度も見る事になるとはな。王に

対して失礼だと思わんのか？」

そしてその声が聞こえた。

風に揺れる金色の髪、輝く金色の鎧、その瞳だけは紅く光る男がゆっくりとこちらへ歩いて来ている。

「どうしたセイバー、この我が会いに来てやったというのに随分な怯えようではないか」

「私が怯えているだど！？」

「我に及ばずとも騎士の王と言われていたのだろうか？ 王にしては随分と余裕のない姿ではないか。まあ、我が相手ではそれもやむ無しか」

「油断こそが戦場では命取りとなるのです！ 私は貴方の様に慢心などしない！」

「ふん、慢心せずして何が王か。この我に言わせれば、その思考こそ弱者そのものであろう」

「私が弱者であろうとなかろうとする事は一つ！ 貴方を斬り捨てるのみです！」

「ほざいたなセイバー！ そのような己のテーマソングも流せぬ骨董剣で何が出来る！」

「なんだど！？ それを言うなら貴方の剣の方が古い物でしょう！」

「では『時代遅れ』と言う奴だな！　ふははは！」

『普通は剣に音楽再生機能はいらないと思うけど空気を読んで何も言わないッス！』

「む、起きたか、エア」

「時代遅れですって！？　わ、私の剣だってそのくらい……エクスカリバー！　貴女にも何か隠された力があるでしょう！？　というかなぜさつきから黙っているのですか！」

『プレミアムに空気を読んで何も言わなかったわ！』

「貴女そんなキャラじゃなかったでしょう！　それで、隠された力は！？」

『ごめんなさい、私にはサードインパクトを起こすぐらいしか……』

「くっ、使えませんね！」

「なんでさ……」

「十分凄いわよ！」

「昔の人間となると価値観も違うのだろうか……」

「な、なんです皆して！？」

セイバー、アウェーである。この世界のセイバーは若干天然が混じっていた。



誰の影響かは特に言わない。

「……はっ、聖杯！」

「なんでこのタイミングでそれを思い出すのよ！ 音楽が聴きたいなら士郎がA Iポッド買ってくれるわよ！」

「え、オレ！？」

「え……そ、そんな事に聖杯を使うわけじゃないですか！ えーと……そうです、ギルガメッシュ！ 貴方は聖杯に何を願うというのですか！」

「あまり誤魔化せてないな」

「うるさいですよアーチャー！」

「何を願うかだと？ そんな事決まっておろう」

今まで騒がしかった四人も流石に気になるのか口を閉じる。

「それは……」

「……それは？」

ギルガメッシュの雰囲気誰かの喉がゴクリと鳴った。

「それは……我の『グボロ』を無敵にする事だ！！」

「「「……………」」」

ギルガメッシュ以外の時間が止まった。

そして数秒の後に動き出す。

「え、えーと、確か『グボロ』とは貴方が乗っていたあの貧弱な龍の事ですよ？」

「私のガンド三発ぐらいでヒレが壊れてたわよ。あとそこから珍しい鉱石採れたわ。ごちそうさま」

「見た目は恐かったけど…………なあアーチャー、あれって魚だよな？」

「なぜそこで私に聞く…………まあどんな調理が出来るか気になる所ではあるな」

四人にとってはそれほど脅威のある存在ではなかった。むしろオイシイ敵扱いだ。

「ま、まさか聖杯をあれに使うと!？」

「そうだ! あやつは力はあるものの、いかんせん体力がない。我が世界を旅していた頃もそれを改善出来る物を探していたが、ついにつける事は出来なかった。しかし聖杯によって強化されれば!」

「体力が欲しいならランニングでもさせてください! 貴重な聖杯をそんな事に使うなんて、貴方バカですか!？」

「な、なんだとオッ!？」

いつまでもバトルではなく口論をしている。これはズルズルと長続きするパターンだな。

……仕方無い、行くか。

ずっと隠れていた所から出て行く。この際だから今までずっとかけていた認識障害の魔法も解いておこうか。

そして俺の姿はすぐに皆の目に止まった。

「レンカ!?! 来てくれたのです……………え、レンカ? ……」  
「レンカ!?!」

「うわっ、どうしたんだセイバー!?!」

「あんたいたならさっさと出て来なさいよ! 今大変な所なんだから!」

「鍊火……鍊火だとッ!?! なぜ今まで気付かなかった!?!」

場は大混乱だ。

士郎と凜は俺の事を詳しく知らないだろうが、サーヴァントの二人とは知り合いだからなあ。

……いや、アーチャーの方とは今の俺は知り合いじゃないけど。

詰め寄る二人の言葉に曖昧な返事をしながら、俺は懐かしい奴の元へ歩く。

……うん、最後に別れた時より更に王<sup>オーラ</sup>気が増してるな。

「久しぶりだな、ギル」

「……ああ、本当に久しぶりだ、心の盟<sup>とも</sup>友よ」

——To Be Continued?——

## 番外編…とつぜん！黄金伝説（後書き）

『エア』

ランク…E

種別…対人宝具

レンジ…――

最大捕捉…1本

この場合乖離剣エアに宿る人格を指す。超越神によって生み出された人格だがその性格は意図してできた物かは不明。この人格が自力で剣の力を引き出したり担い手を操ったりする事は出来ず、剣の使用にはあくまで担い手が魔力を通さなければならぬ。喋り相手になれるので友達が少ない人に最適。しかしたまに空気を読まないので注意が必要。

『天地乖離す開闢の星』  
エヌマ・エリシュ

ランク…EX

種別…対界宝具

レンジ…1～99

最大捕捉…1000人

乖離剣エアによって放つ攻撃。効果は元ネタの物と同じだが、燃費はそれよりも若干よくなっている。

圧倒的な破壊を生み出すが、使用の際に『エア』が空気を読まない発言をした場合シリアスになりきれないので注意が必要。

『勝利を誓う黄金の調べ』  
カラオケモード

ランク…B

種別…対軍宝具

レンジ…10～50

最大捕捉…500人

乖離剣エアに魔力を通す事によって『エア』が状況に応じた曲を選択し、再生する。『ギルガメッシュのテーマ』『レバノンの森の死闘』『ギルガメッシュが来る』など、ギルガメッシュのテーマ曲も多数収録しており、本人の気分にあった選曲をすると幸運以外のステータスを1ランクアップさせる。

しかし『エア』がたまに空気を読まずに『かえして！ 乖離剣エア』などといったあまりにも場違いな曲を選択した場合、ギルガメッシュを含むその場の全員のステータスが1ランクダウンするため注意が必要。

『ゴールドデン・クボロ世界を喰らう禁断の龍』

ランク…C

種別…対人宝具

レンジ…1～30

最大捕捉…100人

突然変異によって生まれた生物。子供の頃から既に金色をしているが、成長するにつれて更に輝きは強くなる。非常に飽食で土や建造物でも食べ、その中の稀少鉱石を体内に溜め込みながら成長していくために基本的にはそれを狙う物達に狩られる立場にあるようだ。異常に体力が少ないものの、その巨体から繰り出されるタックルや噛みつき、体内で水を圧縮して放つ水弾や周囲に降らせる酸の雨など、攻撃手段やその威力は低ランクのサーヴァント並にはあるので油断は禁物だ。

しかしやはりそれ以外が貧弱なため、少し戦い慣れている者にはすぐに倒されてしまうので注意が必要。

……ふう、暴れるだけ暴れました。

あとは苦情が殺到しない事を祈るばかりです。

**番外編：王者誕生（前書き）**

リクエストネタです！



## 番外編…王者誕生

「おう、ゼウスではないか！ 久しぶりじゃな」

「おっ、オーデインか。相変わらず元気そうじゃないか」

その日は二人の神が再会した日だった。

場所は天界。そこにはその二人の神以外にも多くの神達が共通の目的を持って犇めき合っていたものの、彼らは運良くお互いの存在に気付く事が出来たのだ。

「どうじゃ、そちらのコンディションは？ 昔の様にお主自身が白鳥に変身して出場するなんて事は当然許されんぞ」

「おい、よしてくれ。そりゃオレの忘れたい黒歴史なんだよ……。ダグダの髭面を羽根に押し付けられてスリスリされた時には鳥なのに鳥肌が立ったもんだ。……それはともかく、俺の方は可もなく不可もなくって所だ。お前は今回誰を出すんだ？」

「今回は『スーさん』にする。狼はマルスが出して来るみたいじゃしカラスは今回初出場のアマテラスが八咫鳥を出すみたいじゃから、かぶりを避けてワシの愛馬で行く」

「毎度思うんだが、なんで自分の愛馬にさん付けするかねえ……」

「お主の鷲の『ターキー』よりはマシじゃろ？」

「ま、それもそうだけどな」

今出て来たのは彼らのペットの話である。その在り方は愛玩用だったりパシリだったり友達だったりと様々だが、中でも今回の戦いに有利なのは愛玩用だ。この勝負はどれほど癒しを振り撒けるかの勝負なのだ。そのため、今まで散々こき使われて来たパシリの動物でも才能ありと思われれば、この日の為に主人直々にコンディションを整えてもらいツヤツヤになれる。

……もつとも、戦いが終わればまたパシリの日々に逆戻りになる可能性が高いが。

「そういやついこの前レンカに会ったぜ？　ちっこいウサギを連れてたんだけどよ……」

「ああ、知っとる知っとる。ワシの所にも来たばっかじゃ。あのウサギの顔見せとか言っておったがのう……」

「……なあオーディン」

「……お主の言いたい事はわかるぞい」

周りの神達がわいわいと騒いでいる中、二人はしばし黙って見つめ合う。

そして……

「「可愛かったなあ……」」

キモかった。

大の男がどちらも顔を弛ませてそんな事を言うのだ、話に拳がった白いウサギの彼女がそれを見ればおそらく「人に迷惑がかからない様自分が考えられる最大限の遺体の発見されない自殺の仕方だけを考え行動し48時間以内に実行して死ねっ!」と言うだろう。

「確かに綺麗だとか可愛いっていうのならヘラが一番だけだよ、あのモフモフはヘラにはないもんだからなあ……」

「お主のヘラ愛も相変わらずじゃな。しかしあのモフモフ具合……出来ればモフらせてもらいたかったのう……」

「あいつならこの戦いも……」

「うむ、確実に上位に……いや、もしかしたら優勝だって可能な程だったじゃろうな。ワシらにとって恐るべき相手となっていたじゃろう」

しかし同時に彼らは思っていた。「今回は出場する事はないだろう」と。

彼らは今錬火がどこかにいるかは知らないが、少なくともエントリ―されていない事は知っている。会場にも姿は見えないようだし、おそらく来るつもりもないのだと思っていた。

「強敵と言えばじゃ、パチャカマックが言っておったぞ。『期待の新星が現れる!』だとか」

「そういやうちのアポロンも同じような事言ってたな。あいつの勘は最近よくハズレるからあんまり気にしなかったんだが」

予言を司っている神が二人も同じ事を言う……これは明らかに異常事態だ。

「……レンカか？」

「いや、わかっているじゃろうがあやつはエントリーされていない。……しかしどうじゃろうなあ」

「だが、どちらにせよオレでも予言出来る事が一つあるぜ」

——この戦い、嵐が来るってな。

そう言ってゼウスが向けた視線の先をオーデインも追う。

そこにはデカデカとした看板が、そして書かれている言葉は……

『第6089回モフモフコンテスト 王者決定戦』

「いけっ、イヌイ！ 『まるくなる』だ！」

「わふっ！（くるん）」

「「「「「おおおおお！」」「」」「」」「」」

『おーっと出ました、アレス選手のオオカミ、イヌイのまるくなる！  
流石は優勝候補、あのモフツとした感じがたまりません！！』

『これは勝ちパターンですね。通称『灰色わたあめ』で知られるこのアピールに観客席では触ってみたい方達がウズウズしているのがわかります』

会場は大盛り上がりしていた。

このコンテストは実に数百人もの神が出場している。

第一関門は見た目審査をし、ある程度のポイントを得た組が第二関門へ移る。この時点で蛇やらカエルやらを連れて来ている勘違い野郎は消える。

第二関門は審査員やランダムに選ばれた観客に実際に触ってもらってポイントをもらう。やはり肝心なのは実際の感触で、この時点で高得点を取れなかった組は脱落し、一気に数が振るい落とされる。この関門を突破出来た組が第三関門へ挑戦出来るのだ。

そしてコンテストの目玉の第三関門はアピール審査。芸やモフモフさをアピールしながらどれだけ観客の心を掴めるかを競い合う。更にここでも第二関門の様に触れ合えるチャンスがある。アピールによってますますモフモフになった動物達をモフモフ出来るのだから、観客の期待も大いに高まる。

これらの関門を制覇し、最もポイントを手に入れた組がチャンピオンとなるのだ。

え、ポケ○ンコンテスト？　ポ○モンコンテストにお触りなんかないから別物ですよ？

『さあ、イヌイ君のアピールが無事に終了しました！　それでは皆様お待ちかねの触れ合いタイムとなります！　皆様の中からランダムで選ばれたのは――』

「ふむ、やはりイヌイ君はやるのう」

「相変わらずレベルが高いな。いい毛並みしてやがるぜ」

彼ら二人は既に脱落し、大人しく観戦に徹していた。共に第二関門で敗北したのだ。

このコンテストはいくらお偉いさんだろうと実力不足ならば容赦なく落とされる。案外シビアな世界なのだ。

「しかしなぜスーさんが負けたのかのう？　あれは見事なモフモフだった筈じゃが……」

「タテガミだけだろ、モフモフしてんの。流石にスレイプニルは筋肉質過ぎたんだよ」

「それを言うならお主のターキーだって負けたじゃろ。鳥は上級者向けじゃぞ」

「……アマテラスの奴は通ったのになあ」

どちらも敗因は選択ミスだった。

こんな事はこのコンテストではよくある。しかしそれでも彼らは連れて来るのだ。己の信じるペット達を。『こだわり』というよりはむしろ『愛』であった。

ようは自分達のペットを自慢したいだけとも言える。

「やーくん、『アフリカオオコノハズクのものまね』！」

「……………（むくむく）」

『お、おーっと！？ 八咫鳥のやーくん、膨らんだー！？ モフモフと言うよりモコモコだ！ でも触ってみたい！』

『どうやら羽根を広げて大きくなっているようです。口で言うのは簡単ですが、この技術を修得する為には相当な訓練をしたでしょうね』

「よしっ、そのまま』とびはねる』！」

『こっ、これはーっ！？ 弾んでいる、弾んでいます！ 我、ここに在りと言わんばかりに毛玉が弾んでいます！！ どこか青っ鼻の喋るタヌキを彷彿とさせる光景です！』

『えっ、タヌキ？ シカじゃないんですか？』

——オレはトナカイだー！——

『観客席がうるさいですね、気にせず実況解説を続けましょう』

『やはり角があるんだからシカかと……』

そして最後の組のアピールが終了し……

『得点は……563234点!! 563234点!! おしいつ、  
最高点のイヌイ君の588012点には僅かに届かなかった〜!』

『これにて全組が終了しました。よって優勝はマルス選手の……おや?』

その時だった。

解説をしていた神は会場に向かって来る何かに気付く。

空の向こうに見えていた小さな点はだんだんと大きくなり、その姿を表した。

『ペ、ペガサスだあああ!? なんとこのモフモフコンテストの会場に突如ペガサスが出現しました!』

そう、純白の翼が生えた白馬、ペガサスが現れたのだ。そしてその背中には誰かが乗っているのが見える。

飛んで来たペガサスはやがてステージの上に着地し、乗っていた人物……美しい長髪をなびかせた眼鏡をかけた美人さんもステージに降りた。スッと背筋を伸ばしている姿を見ると、どうやら背丈は高



めようだ。

「す、すみません、コンテスト出場の受付はどこでしょうか？」

『なんでわざわざステージの上に来て尋ねるかはわかりませんが貴女はエントリー希望なのですか!?!』

『ドジっ娘、もしくは天然っ娘という奴ですねわかります』

「あ、すつ、すすすみません! えっと、その、確かにエントリー希望です……」

しかし既に戦いは終わり、優勝者が決定した所であった……が。

『なななんと! ここで予想外の事態が発生! コンテストに美人選手が殴り込みをかけたあああああ!!!』

「「「わあああああああ!!!」」「」」「」」

「えっ? ……えっ?」

会場再び大盛り上がり。そこらへんはわりと寛容なコンテストなのだ。あと神達のノリが非常にいいという事もある。

『はい、ではお名前は?』

「は、はい、メドゥーサです」

「「「「メドゥーサたん!!」」「」」「」」

「ひっ!?!」

変態達の大合唱にメドゥーサが怯える。彼女は元々大勢の前に出るのは苦手であるが、それ以前にこれだけの数の変態達に名前を呼ばれたら誰だって怖い。怯えるのも無理からぬ事だ。

ならば、そんな彼女がなぜこのような場にやって来たのか？ 実はそれには理由があった。

『メドゥーサ選手はなぜこのタイミングで出場を?』

「そ、その……私が捕まえたこの子を姉さま達に見せたら『コンテストに行ってみなさい』と言われて……」

『それは大変ですね。あとそのペガサスは最近捕まえたんですか?』

「はい、くさむらで寝ていた所を……」

そう、原因は彼女の二人の姉のせいだった。

かなり気分屋な姉達にはメドゥーサは逆らえず、たとえ無理難題でも受ける羽目になってしまうのだ。

『という事は、出すのはそのペガサスという事なのですね？ 捕まえたばかりで大丈夫なのですか?』

「えっと……大丈夫?」

「トゥーンだから平気デース☆」

「……らしいです」

くさむらというよりどこぞの王国でふんぞり返っていきそうな馬だった。

『喋るペガサスですか、珍しいですねえ。わかりました！ それではメドゥーサ選手のペガサスのアピールに移らせてもらいます！』

『ペガサスよりもメドゥーサ嬢のお山をモフモフしたいですね』

『解説は自重してくださいね』

『おっと、つい本音が』

そして実況と解説の漫才を終えて、ついにアピールタイムが来る。

「いきます！ ペガサス、『はねやすめ』を！」

「それではワタシのターンデース☆」

メドゥーサとペガサスの挑戦が始まった……！！

『なんとお！ 600571点！ 600571点！！ マルス選

手のイヌイ君を引き離し、優勝をかつさらって行ったあああああ！  
』

『あの羽根は驚きのモフモフワフワ感でしたね。ちょっと前まで野生だったとは思えないほどの物でした。更に羽根は二つ、タテガミも良し、つまり一頭で三度オイシイというのもポイントが高かったようです』

なんと最高得点を叩き出し、見事に勝利してみせたのだ。

かつてない展開に観客のボルテージもうなぎ登りである。

「やりましたね！ よく頑張ってくれました！」

「イツツ・ア・ミラクル☆」

メドゥーサも大はしゃぎでペガサスに抱き着く。

驚いたが、これで姉さま達にいい報告が出来る！   もしかしたら見直してもらえて扱いも少しは良くなるかも……

可能性ははっきり言って低かったが、喜びは彼女を前向きにさせていた。

ちなみに、美人が子供の様にはしゃいでいるのを見て観客のボルテージが更に上がった事には彼女は気付かなかった。

『それではコンテスト優勝者に「待った！！」な、なんですか！？』

今度こそ優勝者が決定されようとした時だった。

何者かが異議を唱えたのだ。

『だ、誰ですか!?!』

その場の全員が辺りを見回し……やがて一人が気がついた。

「見ろ、上だ!」

全員が空を見上げる。そしてそいつはいた。

ステージの真上、上空から一人の男が降りて来たのだ。その肩に白いモフモフを乗せて。

「あなたは!?!」

『『あなたは!?!?』』

「「「「あなたは!?!?!?」」」」」

メドゥーサも、実況解説も、観客も、口から出る言葉は誰もが同じだった。

そして男の口から、会場の隅々にまで行き渡る声が発せられた。

「俺の名前を言ってみろオオオオオオオオ!?!」

「「「「「『『ツネハル・レンカ!?!』』』』』」」」」」

「YES I AM!?!」

チツチツと指を振る男に誰もが視線が釘付けになっていた。それにしてもこの男、ノリノリである。

「え、何このノリ……」

残念ながら男と共にやって来たそのモフモフはついていけなかったようだ。

「レンカさま！ お久しぶりです！」

「おつ、メドゥーサか、久しぶり。元気だったか？」

「はい、おかげさまで。姉さま達も会いたがっていましたよ？」

「まだ諦めてないのか……まあ元気なら何よりだよ」

メドゥーサと男は知り合いだった。……いや、この会場の誰もが知っていた。この男はそれほど有名な人物だったのだ。

『えーと、ツネハル様？ 今日はいったいどのようなご用件で……』

「ああ、突然で悪いけどこのコンテストに参加させてもらいたいんだ」

「「「「「『「な、なんだってー！？」「』『』『』『』『」」」」」」

「……ねえ、こいつら打ち合わせとかしてんの？ これあたしにドツキリ仕掛けようなんてしてないよね？」

「素だよ、素」

あまりの息の合いように疑問が出るが、男の言う通り素だ。何度も言うが神はノリノリな奴ばかりなのだ。

『なんと、今コンテストで二組目のダイナミックエントリー！ これまでかつてなかった展開！ しかもツネハル様が初出場！ 予想外の事態が続出だああああ！！』

『いやー、世の中何が起きるかわかりませんねえ』

やはり飛び込み参戦は許可された。しかしこの男は許可を力ずくで取れる存在だ。どちらにせよ結果は変わらなかったかもしれない。

『それで、ツネハル様は誰をお出しに？』

「こいつだ」

「……………」

『そっそれは！？』

会場に激震が走る！

その生物、見た目からして既に…………！

『そっ、それではアピールの方に…………』

「よしっ、てゐ！ お前に決めた！」

「最初っから決まってるでしょ？　ちゃんと約束は守ってよ！」

「大丈夫、ちゃんとニンジンやるって。それじゃあお前のお披露目タイムだ！」

言葉を待つまでもないと彼らは動き出す。

男から離れたその生物はピョンピョンとステージの中央まで跳ねて行った。

「てゐ、『まるくなってねむる』だッ！」

「はいはい」

白いモフモフが丸くなって目を瞑る。

その姿に会場の心は一つになった！

「「「はうゝゝ！！　かあいよいよおゝゝゝ！！」「」「」」

地獄絵図だった。

『連結技だああああ！！　なんと高等技術『連結技』を使用！  
一回で二つの技が使える、しかもコンボが決まれば効果は抜群！　その比率、実に四乗！！　あまりの威力にコンテスト会場が一瞬にして雛見沢と化してしまったぞおお！！　恐るべき連結技！　恐るべきポテンシャル！　恐るべきモフモフ度だああああ！！』

『今までになかったタイプですね！　これまでの動物達はどれも大柄、高得点だった先程のオオカミやペガサスも飛び込みたくなる様



なモフモフでしたが、あのウサギは抱きしめたくなる様なモフモフ！！抱きしめながら布団に入って一緒に寝たくなる！しかも小柄で可愛い姿は保護欲をそそります！『保護欲の刺激』！！ただモフモフであるだけでは出せない触れ合いたいという感情を何倍にも引き上げている！』

大絶賛だった。

予言の通り、突如流星の如く現れたモフモフは神々の心をガッチリと掴んでみせた。

そしてその流星はカラスでもなく、オオカミでもなく、ペガサスでもなく、小さな白いウサギだったのだ。

「ふはははは、圧倒的じゃないか、我がてゐは！！！」

「どいつもこいつもブッチ切りでイカレてるね。この変態共め！」

以後君臨し続ける、『キング・もふもふ』誕生の話である。

## 番外編：王者誕生（後書き）

ふう、こんなものでしょうか？

もうすぐPVが100000に到達します。

うーむ、しかし連続で記念したって記念になりませんよね……

まあ、どうしてもこんな話が見たいってのがありましたらどうぞおっしゃってください。万年ネタ不足なのは変わりませんので人参天国は大喜びするでしょう。

本編続けろやっておっしゃるかもしれませんが……

しかし今は付き合ってくださいっている皆様に感謝感謝です！

## 第二十二話：エジプト脱出（前書き）

無事にPVが十万を超えました。

皆様本当にありがとうございます！

## 第二十二話：エジプト脱出

あの戦いの後、俺とてゐるはアテム（王様の事はそう呼ぶ事になった）に招かれて王宮にやって来ている。

なんでも国を救ってくれた大恩人（神？）をそのまま帰すわけにはいかないから、どうかもてなさせてくれと頼まれたのだ。

ホルアクティは女神友達の所へ帰って行った。今頃また神生ゲームに興じているんだろう。

しかし奴は余計なモノをてゐるとアテム達に教えて行った……

「来た！ モンスターを生け贄に捧げ……行け、『マハード』！」

「ふうん……ならば私はファラオの召喚と同時にリバースカードオーブン！ 罨カード『追随』を発動！ 生け贄召喚がされた時、自分の場のモンスターを一体墓地に送り、手札からモンスターを一体特殊召喚出来る！ ゆけっ、『青眼の白龍』！ おお……やはりふつくしい……」

「甘いね！ あたしは手札からこのカードの効果を発動！ 『超ウルトラスーパードレートスペシャルマックスハートキャッチフレッシュスイートプリティーキュート超絶美少女最強白兎神 因幡てゐ』

を特殊召喚！！ このカードは相手がモンスター効果、魔法、罠を  
発動させた時に手札から特殊召喚出来る！ 更にこのカードは他の  
カードの効果を任意で無効に出来る。そしてそのパワーは攻守とも  
に……『一万』！！」

「「なんだそれはあ！？」」

ホルアクティのヤロー、神生ゲームからピンポイントな要素を取り  
出して教えて行きやがったんだ。

流石にこの世界の未来がカードで覇権争いする様な世界にならない  
事を祈ろう。

「『超越神 常遥錬火』の効果を発動。好きなタイミングでこのカ  
ードを手札、デッキ、墓地、除外ゾーンから特殊召喚出来る。この  
効果は無効にされず、あらゆるカードの効果の任意で無効に出来る。  
攻守はともに……『五十三万』だ」

「「「ふざけんなあッ！！」」」

「五十三万ってなに！？ 絶対勝てないでしょ！」

「何を言う、『てゐ』のたった五十三倍程度じゃないか。随分と弱  
体化したもんだ」

「自重しろお！」

「それに効果はまだある。このカードは発動した瞬間持ち主を勝利  
させる効果を持つ！」

「なんじゃそりゃあっ!？」

「待てレンカ、考えなおせ!」

「うぐぐ……ト、罨カード『奈落の落とし穴』を「はい無効」うわああああー!」

「三ターン待ってやる」

「くっ、ここは一時同盟を結ぶよ! なんと少しでもこのカードの攻略手段を……!」

「ドロー! こっ、これはエクゾディア!? そうか、この手が!」

「よっしゃー! アテムを全員でバックアップするんだ!」

「む、ならば私は壁モンスターを出すか! 魔法カード『融合』を発動! 手札とフィールドの『青眼の白龍』三体を融合させ、『青眼の究極竜』を召喚! 更に融合解除を使い「あ、それ無効に」なぜっ!? くそっ、攻撃表示にしてしまっているというのに……仕方無い、攻撃はせずにカードを伏せて「罨カード『玉碎覚悟』を発動を発動、このターン攻撃可能な相手モンスターは俺のモンスターを攻撃しなくてはならない。」貴様私に恨みでもあるのかあ!？」

え、お前も遊んでいるじゃないかって?

そこはホラ、タッグマッチだから仕方無くなんだよ。

……ホントダヨ?

さて、アテム達との決闘の後、俺とてゐはルーミアが眠る部屋へとやって来た。

勝敗がどうなったか？ 気にすんな。

まあ俺のカードが破れる事はなかったとだけ言っておこう。

とにかく、あの時ルーミアを気絶させたものの、別に殺すつもりもなかったし、そのままそこに放置するのもどうかと思って連れて来たのだ。

アテム達には俺が全責任を持つと言ってお願いしたら快く了承してくれた。

「どれくらいで起きるの？」

「そろそろ起きると思うぞ。ダメージ自体はそんなにないし」

脳みそ揺らして気絶させただけだし。

しかしこうして見ると眠っている顔は険がとれていてかわいいもんだ。

テンションアゲアゲ状態の時はお近づきになりたくないぐらいだったからな。

「ヘンターイ」

「何がだよ」

「女の子の寝顔を見てニヤニヤするなんて……キモーい！」

「……………」

「ひゃあああ！？　ちよつ、耳の中にそよ風送り続けるのやめてエ！」

うるさい、誰が変態だ。

和んではいたがニヤニヤはしてないぞ。

「ん……んん……」

「あ、てるが騒いでるから起きちまったぞ」

「いいからこのくすぐったいのとめろォー！」

ルーミアの目が開く。そのまましばらく天井を見上げていたが、やがてムクリと体を起こし周囲を見回す。

「……………」

そして俺達の姿を見つけて固まった。



「や、おはよう」

「……………おはよう」

おお、ちゃんと挨拶を返してくれた。

「気分はどうだ？」

「…………ええ、最悪。世の中の理不尽さを思い知った気分ね」

「ああ……………また一人錬火の犠牲者が……………」

「どういう意味だコラ」

「自分の中の常識が壊された感じじゃない？」

「そんな感じね」

「……………なんかスマン」

へっ、いいさいいさ、どうせ俺が悪いんだもんね…………

「もっと誠意を込めて謝れ！」

「調子にのんな（ゴチン）」

「痛ーッ！？　そうやってすぐに暴力振るうんだから！　この暴力魔神！　変態神！　超越神！」

「最後のはそうだけど……」

「邪神！」

「はああああ！（グリグリ）」

「こめかみが、こめかみがあ！？」

「邪神はやメロ！」

「……なにこの状況」

ルーミアが何か呟いているが、今はそれどころじゃない。

この俺を邪神だと！？

あんな濃ゆい奴らと一緒にすんな！

「このみさえめ！」

「スーパージグリグロリングサンダーッ！」

「うぎゃーー！！」

「えっと、私はどうしてここにいいのかしら？」

「ん？（グリグリ）」

てるとOHANASHIする俺に躊躇いがちに聞いてきた。

「どうしてって、あんなところに放置しておくわけにもいかんだろ（グリグリ）」

「……殺せばよかったんじゃない？」

「何も死ぬ事はないと思っただけだ（グリグリ）」

「喋りながらグリグリするなあー！」

ふむ、流石にもう勘弁してやろうか。

「……もう放してあげたら？」

「おおつ、触手フェチのくせに話がわかるじゃん！」

「続きをどうぞ」

「はいよ（グリグリ）」

「ごめんなさいタイイタイ！」

せつかく終わるとこだったのに……バカな奴だ。

「んで、なんでお前はあんな事を？」

「え……それは……」

話し難い事なのか、なぜか口ごもる。

言うのを躊躇う様な理由なのか？

「えっと……実は私はいろんな所を旅しているんだけど……」

「ほうほう」

こんな所にも旅仲間が。

「その旅の途中でゾークが暴れている所を見る事になってね。それを見て、あいつの力を手に入れたら強くなれそうだなあって思ってた……」

「チャンスを待っていたと」

「ええ」

まあ確かに目の前にパワーアップキノコやスーパースターを見つけたら取りたくなるのが心情ってもんだろう。

「それでチャンスが来て力を吸収したら……」

「したら？」

「……なんかムラムラしちゃって」

「精力剤でも飲んだのかお前は」

「勝手にムラムラしちゃったんだから仕方無いでしょ!？」

「あんまりムラムラって連呼しないでくれ……」

なんか別の事を……やめよう、あまり深く考えない方がいいな。

「とにかく、何だか気分が高揚して、今ならどんな事でも出来るって思えたの」

「ふーむ……」

つまり酒を飲んだみたいになにに酔ったのか？

ゾークは地球規模で見るなら結構力があつたから、それを一気に吸い取ったせいで暴走したとかか。

「ちなみに今の状態は？」

「もう大分落ち着いているわ。力が本当の意味でなじんだ感じ。支配どころかこうなんて気はもうないしね。

……もつとも、あなたがいるんじゃない支配なんて出来ないでしょうけど」

そんな事はないぞ？

俺は地球を気に入ってはいるけど地球の神じゃないし正義の味方ってわけでもない。

興味が湧く様な事じゃなければ……余程ひどい事じゃなければ地球の住民達が地球をどうしようと構わないと考えている。

今回の件だって俺が興味を持ったから関わったんだし。

「……………あ！」

「どうした？」

「能力が戻っちゃってる！？　ううう……出来る事が増えたと思ったのに……」

「なんだ、能力が進化してたのか？」

「ええ、『闇を支配する程度の能力』になってたんだけど……『闇を操る程度の能力』に戻っちゃった」

「ふーん……」

あの時はまさか攻撃を当てられるとは思ってなかったが、まさか能力が変わっていたとは。

しかし原因はなんとなくわかる。

「ほいっと」

「……あ！　能力が変わった！？」

やっぱり。

原因はズバリ……

「レンカ、居るか！？　大変だ、また太陽が隠れ（パキヤーン）グハアッ！？」

「あー！　せっかく仕掛けた花瓶が……」

さっきからてゐが静かにしていると思ったら、扉に花瓶の罫を仕掛けていたらしい。勢い良く扉を開けたアテムに見事命中してしまった。

「ちゃんと片付けておけよ」

「えー……」

「えー、じゃない」

人んちの物を壊したあげく、人にまで被害を出さないでくれ。

「太陽が隠れたって言ってたけど……」

「また日食を起こしてみた。つまりお前の『闇を支配する程度の能力』は日食時に使えるってわけだな」

「いつでもってわけにはいかないのね……」

そう落ち込むな。

言ってみれば日食時のルーミア、『ルーミア・エクリプスモード』専用の能力ってどこか。

だったら夜がルナモードで昼がコロナモードって名付けた方がいいのかね？

……ん？

念話だ、永琳からか。

『どうした永琳？』

『錬火！ さっきからこっちの月の軌道がおかしいの！』

『……………』

『それで大騒ぎになってたんだけど……………』

『……………』

『原因を調べてみたら何か妙な力が外から働いてたみたいなの。妖力とか神力とか……………』

『……………』

『貴方は今地球にいるんでしょう？ 何か知らない？』

『……………い、いや、知らないなあ……………』

『……………』

『……………』

『……………今は忙しいから聞かないで置いてあげるわ。今回の事も今度しっかり聞かせてもらうから』

『……………はい』



……うん、今は考えないようにしよう。

生きている今が肝心なのさ。

「まあルーミアの能力はどうでもいいとしてだ」

「いや、私にとったらわりと重要な事なんだけど……」

俺にとっちゃあ大した問題じゃないんだよ。

「腹は減ってないか？」

「……空いてるわ」

「んじゃメシ食いに行こう。メシはいい、人間関係を円滑にしてくれる」

「……あなたは知らないかもしれないけど、私それでも人喰い妖怪よ？」

「人が動物や魚を食べるのと変わらないだろ？ 同じ様なもんだ。親しい奴を殺されたってわけでもないしな。俺は気にしない」

まあ実際にその場面を見ればいい気はしないだろうけどな。

でも人間だった頃なら問答無用でアウトだったかもな。神になって良くも悪くも変わったって事か。

「いいからさっさと行こう。人間と同じ物は食えるんだろ？」

「そうだけど……」

「もう、さっきからグズグズうっさいね！ 早く行かないとあたし  
までゴハン食べ損ねるでしょ！？ さっさと行くよ！」

「と、言うわけだ。さ、行くぞー」

「……はいはい、わかったわよ」

しぶしぶルーミアがついて来る。

そうそう、最初っから素直に来ればいいんだよ。

「ファラオ、ここにいます（ガターン）かはあッ！？」

「てゐ、倒れた柵を直しておくように」

「あたしが倒したんじゃないよ？」

「お前が仕掛けたから倒れたんだろ」

「この二人の事はいいのかしら……？」

なんだか食事が近くて遠いな……

いやー、堪能した。

何を食ったのかって？

とりあえず豪華な古代エジプトの料理を想像しておいてくれ。

……なに、想像しにくい？　なら諦めろ。

「さて、これからの予定を話しておくか」

今度は俺とてゐに与えられた部屋に居る。ルーミアが寝ていた部屋より広い部屋だ。

「しばらくここにいろんじやないの？」

「いや、今回はさっさと出て行こう」

「えー、別にここで引きこもってたっていいじゃん。超ビップ扱いだから楽だし」

「とまあお前がニート化しかねないというのもあるが、俺としてはそのビップ扱いというのが気に入らないんだよ」

アテムとセト以外はみんなへりくだって接して来る。

俺達の立場を考えればそれも当然なんだが……なんだか息苦しい。

俺はもっと気楽に生きたいのだ。

「じゃあなんで私もここにいるの？」

実はルーミアも話に参加させている。

食事の後に何処かへ行こうとしていた所を連れて来たのだ。

「それなんだか、お前はこれからの予定は決まっているのか？」

「そりゃあないけど……」

「んじゃこれも何かの縁だ、一緒に行こうぜ」

「……なんとなくそう言う気はしていたわ。拒否は？」

「どうしても嫌って言うんなら無理強いはしないぞ」

嫌がる女を無理矢理連れて行くなんて犯罪臭い事をするつもりはない。  
い。

え、てる？    てるはその時まだウサギだったからいいんだよ。

「……わかった、私も同行する事にする。そっちの方が旅先で色々  
見れそうだし」

「おっ、そうか。じゃあ反対意見もないみたい」「ちょっと待ったー  
！」 山○バ○ラかお前は」

「あたしはこの理不尽な決定に物申すよ！」

「おじさんの方か」

意外！ それはてゐッ！

「なんか不服でもあるのか？」

「不服というか確認したい事がある！ あんたちよっこつちに来て！」

「もう、なんなのよ……」

てゐがルーミアを部屋の外に連れて行って何事か話し始めた。

しかしてゐよ、残念ながらこの程度の距離では俺の耳には筒抜けだぞ？

「（あんたなんで錬火について行ってもいいと思ったのさ！）」

「（さっき言ったでしょ、一人で行くよりそっちの方が色々見れそうだからって。彼って意外と巻き込まれ体質じゃない？）」

「（それは否定しないけど……惚れたからってわけじゃないよね！ 寝首を掻こうって目的ならいいけど！）」

「（あら、あなたもしかして……）」

「（あんなのでも一応あたしのご主人様なの！ 変な女に付きまといわれると困るのよ！）」

「（いや、だったら寝首を掻かれる方がまずいんじゃない……）」

「(掻けると思う?)」

「(無理ね)」

「(そう、そんな事は即答出来るくらいわかりきった事よ。だからあたしが心配してるのはそっちだけ)」

「(……大丈夫よ、今はあなたのご主人様を誘惑しようなんて気はないわ)」

「(『今は』!? 将来するかもしれないと!?)」

「(だって出会ったばかりで彼の事はよく知らないけど、悪い人じやなさそうだし、女が強い男に惹かれるのは当然じゃない?)」

「(だったらやばいじゃん! 落ちちゃうじゃん! 錬火はなんだかんだ言って優しい所もあるし世界で一番強いんだよ!? 誰でも落ちちゃうよ!)」

「(つまりあなたも……)」

「(うがああああ!!)」

「(ちよっ、このウサギくっつけてどうするつもり!? や、やめ——)」

チュドーン☆

……何をやっているんだあいつらは。

しかしてゐる……お前がまさか……俺を主人と想つてくれていたなんて！

する事は悪戯ばっかだけど、やはり根はいい子だったんだな！ 後でいっぱいナデナデしてやろう。卑猥な意味じゃなく。

「ただいま……」

「ひどい目にあつた……」

意気消沈したてゐると若干煙をあげるルーミアが歸つて来た。

重ねて言うが、人んちで暴れないでいただきたい。

「一応この子にも許可はもらったわ」

「チツ、色目使うんじゃないよ!？」

「はいはい仲良くな」

てゐるが敵意の籠った視線を投げているが、これから一緒に旅をする仲間なんだからもう少し抑えて抑えて。

「んじゃ俺達が出て行く事を伝えに行くか。ルーミアもここで暴れたんだから居辛いだろうし」

すれ違う人何人かに睨まれたりしてたもんな。早く出て行った方がいいだろう。

「せっかくの二人旅が……」

「あなたを置いて駆け落ちしたりしないから大丈夫よ」

「それはフラグ？」

「フラグって？」

てゐ、あんまり変な言葉を教えないでくれよ……

「な、なに！？ もう出て行くだと！？」

「えっと……はい」

当然ながらアテムには物凄く驚かれた。

「なぜだ！？ 早すぎるだろう、この国の対応が気に入らなかったのか！？」

対応……気に入らないと言えば気に入らないんだけど……これは俺の我が侬だしな。

「あれだ、俺は一ヶ所に留まってはいられないんだ」



「鍊火って放浪癖があるもんねー」

「男はつらいわね」

二人共余計な事を言うな。

「ならばさっさと出て行け。いつまでも貴様に構っていられる程こちらも暇ではないのだ」

「セト！」

「なんかもうお前が大物なのか大馬鹿者なのかわからなくなってきた」

ホントにこいつは態度が変わらない。

敬えとは言わないが、ここまで来るといつそ清々しいな。

というか、お前は嬉々としてデュエルしてたじゃないか。超暇人じゃない。

「まあそんなわけで、俺達はまた旅を再開する事にした」

「（どんなわけなんだ？）……わかった、残念ではあるが無理に引き留めるわけにもいかない。しかし将来この国に再び来る事があったら、その時はまた歓迎させてくれ」

「ああ、次に来た時はもう少しゆっくりさせてもらおうよ」

「せいぜいその時までくたばらん事だな！」

セト……

「ツンデレかよ。気持ち悪い……」

「ツンデレだね。気持ち悪ッ」

「ツンデレって？ 確かに気持ち悪いけど……」

「貴様らぁー！！」

いや、だって男のツンデレとか気持ち悪いし。

俺はニヤル美とかにこんな風に見えるのか？

「粉☆砕決定だ！ いでよ、『青眼の白龍』！！」

「セトお！？ こんな所でそんな大きい龍を出すな！」

「やっべ、怒った」

「私が怒ったかだと……フ……私は既にキレているわ！！」

「あ、タメに入った」

「逃げた方が得策ね」

「「賛成」」

この感じなら……王宮が半壊するくらいの威力か。

「滅びの爆裂疾風弾！！（ビコーン）」

「王宮を壊すつもりかぁー！」

「ルーミア、今こそ闇の魔法で……」

「吸収してもいいけど、一気には吸い切れないから結局この辺りは壊れるわよ？」

「やーいやーい、役立たずー」

「あなたには言われたくないわ……」

「ふふん、これを見てもそう言えるかな！？ えいつ」

「はあっ！？ バケツで吸収したあ！？」

「おいてる、その黒いバケツ誰に貰った」

「なんか子供のラクガキみたいな黒い人に貰った」

「ミスターエ……」

この時代に存在したとは……実はゲームの神様だったりしたんだろ  
うか。

「とりあえず……中身をブチまける！」

てゐるがバケツを振るとなぜか液化化した爆裂疾風弾が龍に飛び散り  
……

「ギャオオオオオオオ………（キラーン☆）」

王宮の壁をブチ抜いて星になった。

「バカなぁッ!？」

「おおー、効く効く」

「吹っ飛び率溜まってたのか？」

「今の内に逃げましょ」

こうして俺達はエジプトを脱出する事に成功したのだった。

## 第二十二話：エジプト脱出（後書き）

さて、この後はどうしましょう。

一応旅の途中の話を一話書くつもりですけど……その後はやっぱりあの歴史的大イベントを書こうかなあ？

もう進み方はゆっくりでいいやと思えて来た今日この頃。幻想郷まで何話かかる事か……

困ったものです。

「（ー、ー）」

## 第二十三話：砂漠の中で（前書き）

閑話というか日常話というか。

とにかく、ようやくできました。

## 第二十三話：砂漠の中で

エジプトと言えば世界最大の広さの砂漠、サハラ砂漠に面した国だ。

俺達の移動は基本的に飛んで行くという事はしないので必然的に……

「暑い……」

「この程度で弱音を吐くとは……情けないぞ、てゐ」

「火山口に直接突入してモンスター狩る様なあんたと一緒にすんな  
！」

徒歩での移動となる。

「ルーミアはどうなって……って黒っ！ 何この黒い球体！ しか  
もなんかひんやりしてる！」

「闇の吹雪を吸収したのよ。とっても涼しいわよ？」

「マギア・エレベアって避暑手段だったっけ……」

「しかも氷属性が入ってるぞ」

ルーミアって闇オンリーじゃなかったか？

「あたしも中に入れて」

「残念ながらこれは一人用よ」

「暑い所からいきなり寒い所に行ったら体を壊すからやめておけ」

「あんたはオカンか！」

「誰がオカンだ」

「性的にはオヤジね」

んな事どうでもいいんだよ。

しかし周りは見事に砂、砂、砂。たまにサボテンもある。

いつまでもこんな風景じゃてゐるがうんざりするのも仕方無いと言えるだろう。

ちなみに途中真っ黒い穴の開いた埴輪みたいな形のサボテンがなにかを束ねている様に見えたのだが、結局見なかった事にした。

「暇……」

「ならありきたりだがしりとりでもするか？」

「しりとりって？」

「お前はなんで『闇の吹雪』とか知ってて『ツンデレ』とか『しりとり』とか知らないかな……」

知識がかなり片寄ってると思うぞ。



仕方無いのでしりとりルールを簡単に説明する。しかし……果たしてルーミアは俺達のしりとりについて来れるかな？

「んじゃ俺、てゐ、ルーミアの順な。リンゴ」

「ゴリラ」

「ラッパ」

なぜ延ばしたし……

だがこれからが本番だ！

「パーカッション」

「あ、『ん』だから負けじゃな「ンドウール」あれ、続いた!？」

これぞ『神ルール』！このルールは神達の間に通じるルールで言えない奴こそ弱者であり敗者なのだ。本当にシビアな世界だよ。

さあルーミア、お前はどこまで足掻けるかな？

――五時間経過――

「オアシスぐらいは見つかると思ったんだけどなあ……魔攻破邪神ザルビオス」

「今日はもうここら辺に家建てて休んどく？ スーパーファ○コン」

「家建ててるって言っても材料なんて砂しかないわよ。 ……パス」

「そこはそれ、俺がこう手を合わせてバリバリつとな……ン・イゾー」

「もうイヤ！ 『ん』で始まる言葉なんて知らないわよ！ もう私の負けでいいわよ！」

ついにギブアップか。しかしむしろここまで頑張れた事は凄いぞ？

『ん』以外はパスしてないし。

「んじゃしりとりはここまでにして今日の宿を作るぞー」

「おー」

「？」

ルーミアがまだわかっていないようだが……ま、いいか。

手を合わせてバリバリーッと。

「はい、鍊金終了」

「うーん、材料が材料だから茶色いね」

「……ああ、確か前もそんな事してたわね」

砂漠のと真ん中に現れた一軒家。人が住めるぐらいに大きいがいかにせん茶色い。ビジュアルは悪いが……ま、地産地消みたいなものだ。勘弁してもらおう。

「じゃあ中に……ん？」

「どしたの？」

「……なんか近づいて来るな」

「こっちに？」

「ここに。若干ウロウロしてるけど」

「あとどれくらいで来るの？」

「この速度だと……三時間ぐらいかな」

「あなたの感知能力はどうなってるの……」

何を言う、Z戦士なら地球の裏側にいても気でわかるんだぞ。俺の場合は能力をセーブしなかったら宇宙規模でいけるけど。

「三時間もかかるんなら中に入ってようよ」

「それもそうだ」

「早くもこんな所でアクシデントに会うなんて……あなた疫病神の類い？」

失礼な……と言いたい所だが否定しきれない。やっぱり俺はトラブル体質なんだろうか……

――五時間後――

「そろそろ来るぞー」

「二時間も遅かったんだけどどういう事？」

「それなんだが、なんでこっちに来れるのか考えたら、たぶんお前の妖力の残滓を辿って来ていたと結論を出したんだ。砂漠に入ってからずっと妖力使ってたろ？」

「……つまり私のせいって事？」

「まあ平たく言えばそうだな。なのでちよちよいと足跡を乱して迷わせてみた」

「なんでそんな事を……？」

「そりゃあ見てると滑稽だから……」

「そういえばてゐがしばらく前に寝ちゃったわね」

「……………」

「これでいくらか睡眠時間ができたかしら？」

「……結果的にはそうかもな」

「子煩悩」

「うぐっ!？」

くそっ、じゃあお前もアレ見てみろよ、あの丸くなってスヤスヤ熟睡してる姿を！ 起こせるわけないだろ!？

「……まあそれは否定出来ないわね。起きているとめんどくさい子なんだけど」

わかればいいんだよわかれば。

「それであとどれくらいで来るの？」

「あと十メートルでこの真下だな」

「はあっ!？ え、ちよっ早く離れないと……!」

「大丈夫大丈夫」

——バゴン——

アングァアア………

「分厚い鉄壁仕込んでおいたから」

「……あなた本当にひどいわね」

「何を言う、針も熱も電気もないただの硬い壁だぞ？　むしろ良心的だ」

「あなたの良心に無被害という言葉はないの？」

人を冷血漢みたいに言うな。

「ん……今の揺れ何？」

今のでてゐが起きたみたいだ。

出来れば揺れる前に接近を察知して起きてほしかったんだが……

「ん、何か罠にかかったみたいだ」

「やっぱり罠なんじゃない」

「あ、今のナシ。勝手に壁にぶつかったんだ」

目を擦るてるとジト目を向けるルーミアを連れて例の生物の元へ行ってみる。

しかし家の外には何もいなかった。

「あれ？ 何もいないじゃない」

「下だよ下」

実は地中を進んで来ていたりする。つまり相手は砂の下で気絶しているのだ。

「じゃあルーミアが引つ張り上げてよ」

「なんで私が」

「しりとり負けたでしょ」

てるとルーミアの話し合いの結果、ルーミアが引きずり出す事になった。

闇を使ってしぶしぶ引きずり出したんだが……

「なんだコレ……」

「キモーイ。こんなの錬火の別荘にもいなかったよ」

「別荘って何？ でもこれって……ミミズかしら」

ルーミアの言う通り、見た目はでっかいミミズだった。

少なくとも俺も見た事がない生き物だな。

「名前は『おおみみず』かな、それとも『サンドマスター』かな」

「ここは砂漠だからやっぱりサンドマスターじゃないか？」

「わからないわよ、もしかしたらモンゴリアン・デス・ワームかもしれないわ」

なぜその名前を知ってるかわからんが、残念ながらそれはゴビ砂漠のUMAでここはサハラ砂漠だ。

うーむ、しかしこのミミズもどき……なんだか非常にイヤな感じがするとか、ぶっちゃけ俺が知ってる奴に似た邪悪な気配がするというか。

「どうする、一応こいつ仕留めた方がいいよね？ 触りたくないけど」

「私もイヤ」

「ザキ」

「あ、死んだ」

「……そうよね、一言呟けば十分なのよね……これが当然、これが当然……」

ルーミアが懸命に環境に適応しようとしているのを見ると涙が出て来るな。

「あなたのせいよ!!」



「す、すみません！」

「早く慣れた方がいいよー」

スゴ味のある顔で怒られてしまった。

「でも一匹いたって事は……」

「三十匹かは知らんが他にもいる可能性が大だな」

こんなのが何匹もいると思いたくないんだが……仕方無い、ちょっと視てみるか。

「白眼！」

「目えこわっ!？」

「いつもの事だよ」

いつもはしてねえよ。

さてさて、他のミミズもどきはどこに……ほう………？

「……錬火？　なんか顔が怖いよ？」

「さっきより目に更に力が入ったわね」

……ほうほう、これは……うん……

「ちょーっと待っててくれな………？」

「「ヒイイイイ!?!」」

何をそんなに震えているんだ? おかしな二人だなあ。H A H A H  
A H A ……よし、では行ってくるか。

「そこ、リズムが乱れているぞ。みんなに合わせろ。それ、うんたん  
うんたん」

「……………ああああああ!?!」

「むっ? おお、父ではないか。どうしたのだその顔h 「死ねオラ  
アツ!」ゲバブツ!!」

顔をブン殴られたアザースは勢い良く砂飛沫を上げながら吹っ飛  
んだ。

「こっちへ来いッ!」

しかしそれを再び『引き寄せる』。

前に長老の『引き寄せる程度の能力』を覚えておいたのだ。

今度はこっちに向かって飛んで来たアザース。

「オオオオオ！」

俺は地面スレスレまで拳を持っていきアッパーの力を溜める。

アザースはあれでも最強の邪神なので防御力も高い。そんなあいつにダメージを与える様な攻撃を地球に当てたらちよつとマズイので当然横か上に向かう攻撃にする。

「昇龍拳！」

「リュブウウー!!」

俺の拳がアザースを空へとカチ上げる。

そして両手を腰だめに構え……

「波アアアア!!」

宙に飛ぶアザースに追い撃ちの一撃を決めた。

綺麗にコンボが決まって少しスッキリ。

「……父よ、いきなりはひどいと思うのだが（プスプス）」

「あれ見たら誰だって殴りたくなる」

アザースが焦げ臭い匂いを発しつつも五秒で隣に戻って来ても

別に驚かない。こいつはこういう生物だ。ナマモノ

「我がいったい何をしたと？」

「その前に聞きたい、こいつらは何だ」

俺が見たモノ……それはさっきのミミズもどき共が百匹は集まり、アザースの指導の元、揃ってクネクネ動いている光景だった。

気色悪い事この上ない。

「我が産み出してみたのだ」

「なんで」

「父を倒す為の戦力になると思ってな」

「またそれかよ。こいつらは戦えるのか？」

「いや、これだけの数に摩訶不思議なダンスを踊らせれば力が減って勝率が上がるかと」

「MPどころかS A N値まで下がるわボケッ！（ベキッ）」

「グブウ……流石は父……ナチュラルに首をへし折ってくるとは、やはり格が違うな」

「だってどうせ効かないし」

魔人ブウよりしぶとい奴に何を遠慮しろと？

「さっき一匹こっちに来たんだが、あれはなんだったんだ」

「む？　　そういえば一匹足りない……大方食いしん坊のミーくんが先走ったのだろう」

「その名前やめてくれないかなあ……」

語尾に『嘘だけど』が付きそうに非常にイヤだ。

「まあ嘘だな」

「何がだよ。というかお前が言うのかよ」

「しかし都合がいい！　まさかこのような所で会えるとは……皆よ、今こそ練習の成果を見せる時だ！」

この場で踊らせるつもりか。俺にどこまで効果があるのか知らないが。

そして周囲で練習していたミミズもどき共が一斉にこっちを向き……

「「「「はーい！！」」」」

返事をした。

ものすごいアニメ声で。

「う……うわあああああ！？　（ゾワゾワゾワッ）」

「よし、では一曲目をぐっはあ!？」

思わずアザースを殴り飛ばしてしまった。

いや、でもこれ気持ち悪ッ!? と、鳥肌があ!

「アザース様あ！」

「みんな大丈夫、練習通りにやれば！」

「踊れ踊れえー!!！」

「お前ら喋るなああああ!! (若干発狂中)」

「「「ぎゃああああ!!?」「」「」」

——二分後——

「わ……我が『MMZ101』が……全滅……だと?」

周囲は死屍累々、そこら中に肉片が飛び散り原形を留めたミミズもどきは一匹もない。かなりグロイ光景だが、アニメ声で喋る巨大ミミズに囲まれるよりマシだ。

あのままでは発狂して地球どころか世界を消し飛ばしていただろう。奇しくも効果はあったというわけだ。

「クッ、こうなれば我がみな敵を……「錬火」、どうしたのー?」  
む?」

て、てゐ! それにルーミアもいる! 俺が暴れたのに気付いてや  
って来たのか!

しかしこの惨状は目に悪いしアザースにも会わせたくない! あい  
つらのSAN値は俺が守ってみせる!

「父よ、あの二人は「強制転移!」ぬおおお——」

まずはアザースを遠くに転移させる!

そして死体の山は……

「流砂瀑流!」

「「何やってんの!」?」

砂を操り死体におっかぶせる!

これで死体は砂の下だ。もう誰も気付かないだろう。証拠隠滅完了  
つと。

「ふう……」

「ふう、じゃなーい!!」

「ぐふっ!？」

こ、こいつ『崇汰亜雷兎ブレイカー』を躊躇なく地獄突きに使いやがった!

「ごほっ、お前必殺技をツツコミに使うなよ!？」

「使わないと油断してた方が悪いんだよ! さっきの奴のせいで耳に砂が入ったじゃん!」

「えっと……すまん」

「まったく……何やってたのよ?」

ルーミアはいくらか冷静のようだが、よく見るとこめかみに青筋が立っている。これがMK5（マジキレル五秒前）って奴か。

古いだと? この時代なら超最先端だよ。

「実はさっきのミミズもどきを大量に見つけてな? 処理したんだけどかなりグロい事になってたから片付けてたんだよ」

「……そう、なら仕方無いかしら」

わかってくれてよかったよ。

「悪いと思うなら誠意を見せな!」



「お前は……野菜スティックやるから」

「ニンジンの『ぐらっせ』がいい」

……それって未来のフランス料理なんだけど。というかなぜ突然グラッセが？

「ここに来る途中でそういう料理があるって話したの」

「お前見た事があるのか？」

「『戦のススメ』の毒殺の章に書いてあったのよ」

ニャーズは何を思っグッラッセをチョイスしたのだろうか。

しかし、なんだそういう事かと一瞬納得しかけたが、邪神がフランス料理を知っている事も十分おかしいと気付く。

俺も大概自重していないが、邪神も本当におかしな連中だよな。今更だけど。

「いいからよこせえ！」

なんだこいつは……用意するのも面倒だし……

「てゐ、グラッセが何か知ってるのか？」

「ニンジンを甘くした料理なんでしょ？」

ルーミアが教えたのはそれだけか。間違っていないと言えば間違っていないんだが……仕方無い。

「てゐ」

「なによ」

「グラッセってのはな、人の形をしたニンジンに犬の角、カエルの牙、魚の爪を砕いた粉をまぶして、奈落の光を当てながら始まりの炎で温めた白い兎の血で煮て作る料理なんだ」

「う、兎の血い！？ 甘い料理じゃないの！？」

「考案した奴にとったらさぞ甘美な味わいだっただろうよ。……食うか？ ニンジンのグラッセ」

「ひいひい！ ぐらっせ怖いいいひい！」

てゐが頭を抱えてガタガタ震える。こんな時は小動物チックでカワイイと思えてしまう俺はSなんだろうか。

「ふう、危機は去った」

「吐き気を催すような邪悪ね」

「お前だって面白がって訂正しないだろう」

「……無知が罪なのよ」

人の事は言えないだろ？

「ほら、保存しておいたニンジンジュースだ。これ飲んで出発する

ぞ」

「うん、やっぱりニンジンに変に料理するよりシンプルが一番だね！」

「なんかこの子の将来心配ね」

将来も何も、ずっと昔からこんなだけだな。

しかしこうして俺は妙なイベントを無事切り抜ける事が出来た。

アザースとの遭遇は予想外だったが二人のSAN値を守れてよかったよかった。

出来ればこの先は平和な旅になるように……多分叶わないと思うつつも願いながら、俺達は再び砂漠の中を歩き始めるのだった。

## 第二十三話：砂漠の中で（後書き）

もう、筆がのらない……

次は新しい章に入ります。あの大イベントに介入してみますよー。

## 第二十四話：有名人（前書き）

時間が出来たので一気にこの章を書いたのですが……「誰得？」って感じですね。

無駄に話数があるので数日の間一日一話を投稿してさっさとこの章を終わらせちゃいます。

## 第二十四話：有名人

ある日の事。

「……ん？　こりゃ神力か？」

「神力？　神がこの辺りにいるの？」

「むむむ………おっ、これだね。でも量が少くない？」

「たぶん天使だと思うぞ」

旅の途中でそれに気が付いた。ルーミアを仲間に加えてから砂漠を越えて海を渡り、未来のヨーロッパ辺りを歩き回っていたが、この場所にやって来たら神力を感じ取ったのだ。

「んー、この感じはガブリエルだな。また仕事サボって地上に降りて来たのか？」

「ガブリエルって……大天使の一人じゃない。あなた達知り合いなの？」

「協力して鍊火を冤罪に陥れようとした仲だよ」

「風呂場で鉢合わせさせられて『キャーレンカさんのエッチー！』って言われた時にはどうしてやろうかと思ったもんだ」

「なんでその人墮天してないの……？」

その程度で一々墮天してたら今頃天界より地獄の方が天使で賑わってる。

残念ながら天使なんてそんなのばかりなのだ。

「ちょっと行ってみるか。何しに来たのか気になるし」

「妖怪の私って会っていいのかしら」

「大丈夫じゃない？ あいつただのサボり魔のセクハラ魔だし」

「ますます墮天すべきだと思う……」

「いざとなったら俺が守ってやるから」

「……え、ええ、お願いするわ」

「……………（じー）」

「……なによ」

「……せいぜい不意打ちには気をつけなよ」

「……今のでわかったわよ」

何の話か知らんが早く行くぞ。

さてと……どうやらあそこの家みたいだな。

「ここみたいだね」

「だな。でもこの家見た目は普通の家なんだけどな……んんっ、ノックしてもしもーし」

「入ってるわー」

「「……………」」

女の声が聞こえて俺達は顔を見合わせる。

ルーミアはきょとんとしているが俺とてゐにはわかった。こんな下ネタ的な返し方をする天使なんて……けっこういるけれども、この声はやはり。

とりあえずドアを蹴り飛ばして、

「お前はこんな所で何やってるんだ、ガブリエル」

家の中に声を投げる。

そこにいたのは背中から大きな羽根を生やしたやたらとグラマラスな美女。椅子に座って酒の入ったグラスを傾けながらこっちを向いている。

「ちょっとー、入ってるって言ったじゃない。ガツガツしてるけどそんなに溜まってるの？ 仕方無いなあ、おねーさんが手伝って一発又いてあげようか……………って……あれ？」

「やあガブリエル。今日も健やかにセクハラ発言してるなあ」



「え……えーと、レンカさま？ ……いやー、久しぶりねー。なん  
でこんな所に？ てあちゃんじゃ物足りなくなったからバインバイ  
ンな私を探しに来たとか……」

「ハッハッハ」

ギユピ ギユピ ギユピ

ガシッ

「エッ、なにその野菜人が歩いて来た様な足音は？ あとなんで頭  
を掴むの？ ブラスターシエルとかやっちゃうの？ あっ、まさか  
そういうプレイ？ でも出来ればソフトにしてほしいかなー、なん  
て。『なんだあ？』レベルの」

「ガブリエル……」

「なっ、なんででしょう？」

「お前のセクハラ発言はてゐに非常に良くない影響を与える……」

「今更じゃない？」

「あの人よく懲りないわね」

このセクハラをいつまでも放置していたら際限なく続くだろう。

こいつはここで止めなくてはならない。

よって……！

「判決……ハードだ」

「ちよっ、ちよっと待ってまずは弁護士を呼んでアダダダダダ！  
？」

アイアンクロー。

ガブリエルの頭を片手でギリギリと締め付ける。

「痛い痛い痛い！」

「もうしないか？」

「しない！ もうしないから放してー！！」

ガブリエルは手をじたばたさせて訴えている。

そうか、そんなに痛いか。

「だが断る！！」

「ええっ！？」

「この俺の最も好きな事のひとは逃げる為にその場しのぎの嘘をつく奴にNOと言ってやる事だ」

ガブリエルの表情が絶望で染まる。

「あ……悪魔だ……」

「誰が悪魔なんだ」

「違っ、言ってなガガガガ……」

実はちゃんと聞こえてたけど。

理不尽？ ハードだから仕方無い。

「錬火」

「どうした」

「なんかあそこの子が恐がってるよ」

「なに？」

てるが指差す方に目を向ければ、誰かが毛布にくるまり隙間からこつちを窺いながらブルブル震えている光景が。

その膨らみを見るに若干小柄な人物だとわかった。子供か、もしくは女なのだろうか。

「そりゃあ見知らぬ男がいきなり家に押し入って来て目の前で女の頭を鷲掴みにしてたら怖いでしょうね」

「……………」

俺直球で犯罪者じゃん。

そうだった、ガブリエルは既に自分の家（マンションの一室）を持っているし、別荘なんか持てる程お金持ちってわけでもない。

なら当然ここは別の誰かの家で、住人もいるわけで……すっかり失念していた。

「へぶっ……」

とりあえずガブリエルを放す。落ちてカエルの潰れた様な声をあげたが気にしない。

「えっと、勝手に入ってすまない。俺はこいつの知り合いで……」

「ひっ!？」

「……………」

一歩近づいたら短い悲鳴をあげられた。

なんだか心が痛い。

ついでに今の声は女っぽかった。

「あははははは!!」

「ちよっとてゐ、笑っちゃ……プフー!」

その様子を見て爆笑するてゐ。そしてそれをたしなめつつも結局吹き出しているルーミア。

こいつら、他人事だと思って……

「そ……」

「ん？」

意外にも毛布の中の人物は話しかけて来た。

「その人をどうするつもりですか!？」

「どうするって……」

多分もうどうもしない。

これ以上やったら恐がられてしまうというものもあるが、こっちもなんだか気が抜けてしまったのだ。

「が、がーちゃんをいじめちゃダメです!」

「いじめというか……って『がーちゃん』? こいつと知り合いなのか?」

「ひっ……生意気言ってごめんなさい!!」

「おーい……」

謝られた。

知っていた事については考えてみれば当然か。羽根出して寛いでた

し、それなりに気が知れた仲なんだろう。

しかし……これは第一印象最悪だな。

「恐がられてやんの！ あははははは（ゴーン）へぶっ……」

「もっ、もう無理！ 完全に暴漢扱いされてるし！ あははは（ゴーン）へぶっ……」

「『シャイニングベイスン』。笑った奴にタライを落とす……」

人の不幸を笑った二人は正義の鉄槌（光輝くタライ）により罰せられ、これまた変な声を出して気絶した。

……今この家の中には男が一人と女が四人。更にその内三人の女が気絶してもう一人は毛布にくるまりガタガタ震えて男はそれを見つめている……どう見ても現在進行形で悲劇が発生している犯罪現場だ。

……あ、気絶させたの全部俺だ。紛れもない犯人です。本当にありがとうございました。

まずいな、どうやってこの状況を打破しよう……

「う、あたた……」

おっと、ガブリエルが起きたな。

「これは……ああ、なんとなくわかったわ……」

周りの惨状を見回して状況を察してくれたらしい。

これはちょうどいいぞ。

「ガブリエル、頑張ってくれ」

「頑張るって……とりあえず紹介から始めましょう。まーちゃん、大丈夫。この人はそんなに怖い人でもないような気がしないでもないわけでもない人だから」

「え？ え？ 怖い人がない気がしない……ごめんなさい、もう一回……」

「いや、待て。グルッと回って結局危険人物になってるぞ」

「じゃあ危険がまったくない安全でクリーンな存在なの？」

「人を原子力みたいに言うな」

「そういえば核とあなたとどっちが危険かしら？」

「……俺はクリーンだよ」

……確かに自分でも胸を張って危険じゃないと言い切る事が出来ない。

破壊力は断然俺の方が上だし。

「や、やっぱり危ない人なんですね!？」

「だから気をつけてね」

「ってその認識のまま放置か！ 誤解をとけよ！」

「ひいつ、興奮してます！？」

「こんなにカワイイ女の子が四人も揃ってたら興奮するのも当然よ」

「……………（バキバキバキ）」

「ちょ、ちよつと……アハハ……その手をバキバキ鳴らすのはやめてね？」

こいつはつくづく懲りないな……。

しかしここで制裁をしたらまた怯えられてしまう。今はまだじっと我慢の子だ……

「大丈夫、錬火はいたいけなウサギの弱みに付け込んで条件をのませる程度の鬼畜だから」

「大丈夫、彼は相手の希望を根元から叩き折って踏み潰す程度の鬼畜だから」

「す、すごい『程度の鬼畜』です！？」

「せっかくの俺の気遣いが！？」

起き上がったかと思えば余計な事を！ いや、事実と言えば事実だがもう少しオブラートに包めよ！



そして今度は覗いていた目も隠して蹲ってしまった。

更に悪化したじゃん！

「……なんかこの小動物的な怯え方可愛いわね」

「あ、わかる？ 思わずいじめちゃいたくなるし保護欲もそその  
よねー」

「そうそう。あなたもイケる口ね。私はルーミアよ、よろしく」

「私はガブリエル。レンカさまとはただならぬ仲の天使よ」

ルーミアはともかくガブリエル、お前は大天使のくせになにに  
いじめの話題で妖怪と意気投合してんだ。

そして誤解を招く様な自己紹介はしないでくれ。

「……それでね、錬火はこんなでっかい龍を踏みつけて『不届き者  
めが……』って言い放ったんだよ」

「龍を！？ やっぱり恐い人なんですね！？」

「お前はお前で何をしてるんだ！？」

てゐの方は何か余計な事を吹き込んでいた。

「あたしは真実を話している」

「だからタイミングを考えろ！」

「内容は否定しない！？ ひいいい、ドラまた恐いいいい！」

「あーくそ、めんどくさいな！」

これじゃあいつまで経っても話が終わらない。どうすりゃいいんだ  
……

「私に任せて」

ガブリエルが名乗りをあげた。

いや、元はといえばお前が余計に場を混乱させたんだよ。

そんな奴に再び任せていいものか……

「フッフッフ、大丈夫、優しくしてあげるからね？」

手をワキワキさせて近づいて行くガブリエルをさっそく止めたくな  
ったが我慢する。

そしてそのまま毛布を掴み……

「えいっ」

「ひゃあ！？」

一気に剥ぎ取った。

策ってそれかよ。

「か、返してー!」

「ダメダメ、まーちゃんは狭い鳥かごから飛び出して広い世界に羽ばたかないと」

意味がわからない事を言うガブリエルから毛布を取り返そうと涙目で必死に手を伸ばす少女を見る。

思った通り小柄で見た目の年齢は十代前半といった所か。しかしかなりの童顔なので実年齢はもう少しっているかもしれない。そういう例は何度も見ているからな。

「この子これでも二十歳よ? 人間で言うなら『行き遅れ』」

「うっ!?!」

「ダメージ与えてどうする」

確かにこの時代ならとくに旦那がいてもいい年齢だが……この半ベソをかいてorzしている子は大人には到底見えない。

「ちなみにあたしは百七十万歳」

「私は……十万歳ぐらいかしら」

「私は五万歳。やだ、もしかして私が一番ピチピチ?」

「黙れ人外共」

話がややこしくなるんだよ。

というかルーミアが十萬歳というのは初めて知った。意外に年齢いつてたんだな。

「……なによ？」

「なんでもないです」

なぜ気付く。やっぱり女性の年齢については深く考えない方がいいな。

「まーちゃん、これはチャンスよ！」

「チャンス……？」

「そう、お友達が増えるの！ 一人暮らしだから私がない時寂しかったんでしょ？ でもお友達が増えたらもっと楽しくなるわ！」

「おともだち……ううう……」

「がんばれまーちゃん！ 主だってがんばってるんだから！」

「私……私がんばる！」

「良い子ねー！！」

「一番子供扱いしてるのはあいつだな」

「あれは仕方無くない？ マジで大人には見えないし」

「私も頭撫でたらダメかしら……」

なんか妹を励ます姉みたいだな。母親でも可。中身はただのセクハラ魔だけど。

しかし漸くこれで話が進む……と思ったが。俺はふとそれに気が付いた。

……なんか腹部が膨らんでいる。これはもしや……

「ねえ、あんたってデブなの？」

「デッ……！？」

「てーあー！！」

こいつ、あっさりと聞きやがった！ デリカシーってもんがないのか！？ 俺は思っても聞かなかったのに。

「あ、この子妊娠してるの」

「「「……………はい？」」「」」

「ど、どうぞ」

「ああ……ありがとう」

「んぐんぐ、甘みが足りない！」

「わがまま言わないの」

「あ、まーちゃんこっちもおかわりー」

テーブルに出された温かい羊のミルクを飲みながら、漸く自己紹介に移る。

「常遥錬火、神だ。ガブリエルとは昔からの知り合いなんだ。よろしくな」

「因幡てる。あたしも神だよ。んで世界一の美少女！」

「美（笑）女」

「死ねえ!!」

「当て身<sup>ビシッ</sup>」

「ぐふう……（ドサッ）」

「何してんの……私はルーミア、人喰い妖怪よ」

「ひっ!?!」

「でも今は食べてないから安心して」

「今までは食べてたんですね!?!」

「フフフ……さあ、どうかしら」

「ひいひい!?!」

「……やっぱり可愛いわあ」

非常に簡単に済ませたが、まあこんなもんだろ。

「じゃあ今度はこっちね。って言っても私の事はみんな知ってるしルーミアにもさっき言ったからいいわよね。んでこの子はまーちゃん。別に誘拐事件に遭って壊れたりしてないからみんな安心してよろしくしてあげてねー」

「なんもわかんねえよ。せめて名前くらい言えよ」

「もー、わがままなんだから。まーちゃん」

「は、はいっ」

ガブリエルに促され、皆の視線を浴びて緊張して縮こまりながら喋る。

「私はマリア、二十歳です。がーちゃんには『まーちゃん』と呼んでもらってます。好きな食べ物はがーちゃんが持って来るお肉の燻

製で、嫌いな食べ物はがーちゃんが持って来る黄色いシュワシュワした飲み物です」

「流石はまーちゃん、自己紹介で好きな食べ物と嫌いな食べ物を言う所もポイント高いわ!」

「いや待て、それってお前の酒とつまみじゃねーか」

職場で飲めないからってわざわざここで飲んでんのか。飲むなら家で飲めよ。

「知ってる……? 家ってとっても寒い所なの……」

「うわぁ……」

「独身乙」

「うわぁぁぁん!!」

てゐるが容赦なく傷口を抉りやがった。お前はもっと言葉を選べ。

「だって職場は同性ばかりだもん! 出会いがないもん! えぐえぐ……」

「ああもう、ほら、泣かないで」

「うう……ルーミア、あなただけが私の味方なのね……」

「え?」



ガブリエルに言われて、ルーミアはなぜかチラリと俺の方を見た。

ガブリエルの涙が溜まった目が見開かれていく。

「そ、そうだった、あなたは既に男といるんだった！ 裏切りもの  
おー！！」

「……なんかごめんなさい」

よくわからないがガブリエルがルーミアに負けたという事はわかった。

更に泣き声が強くなってしまったガブリエルにこの場の全員が優しい目を向ける。

「や、やめて！　すごいたたまれない！　こんな生暖かさは望んでないわ！」

そうは言ってもどうにもならない。ガブリエルの苦悩を知ってしまったんだから……。

俺も少しは優しくしてやろうかな。

「ううう……あとまーちゃんはさっきも言った通り妊娠してるの。  
はい、これで自己紹介終わり」

「だから待て」

「なに？」

「そこんトコロをちゃんと教えろよ。話してもいい話なら」

このタイミングでボケるなよ。さっそく優しくしようという思いが揺らぎ始めたぞ。

「えっとね、実はこの子の子供は人の子じゃないのよ」

「神の子ってか？」

「あれ、気付いてた？」

うーん、ここまできたら察しが付くというか……これってあれだな。

「いやー、うちの主が『最近世の中荒んでるよなー。神頼みする奴も増えてきてるし……あーめんどくさ。しゃーない、我が子を派遣するか』って事で目についたこの子を孕ませたの」

「待て待て、途中から意味がわからなくなったぞ。まずお前んこの主って確か『Y H W H』だったよな」

「そうそう」

「ヤ……え、何？」

「呼びにくいんだったら『ヤーウエ』とか『エホバ』って呼んだらいいぞ」

俺もヤーウエって呼んでるし。実際は『神』とか『G O D』とかって名なんだけど、そのまんますぎて他の神との区別しにくいため別

の呼び方が多数ある。そこらへんもめんどくさい奴だな。

「一応みだりに口にするなって言われてるんだけど……人間じゃなくて妖怪だからセーフよね」

「別にあんな因業神敬う必要もないんじゃない？」

「それもそうだな」

「それもそうよね」

「「「あっはっはっは」」」

「ここまで言われる神ってなんなのよ……」

残念ながら神だってそんな奴ばかりなんだ。

あいつは酒好き金好き美少女好きでめんどくさがりとかかなり俗だからな。よく人間を騙せてるもんだ。

……あ。

「あんた、マリアって呼んでいいか？」

「あ、はい。どうぞ呼んでください」

「んじゃマリア、今の話は……」

今のは確実に信者には聞かせてはいけない内容だった。

あいつの信仰が減るのは知ったこっちゃないが、人間達が現実に絶望して首を吊ったりするのは流石に勘弁願いたい。

「……既にがーちゃんに聞かせてもらってます。私はこの子を『自分の子』として愛する事は出来ても、少なくとも『神の子』として愛する自信はないです……」

「あの因業神の本性を三日に渡って酒の肴として話してやったわ」

「どうしてお前はそうちよくちよく止めを刺すんだ」

天使のくせに希望もクソもない。むしろ悪魔の所業だろう。

「んでそのろくでなしの主が信者の期待に応えるのもめんどくさがつて、じゃあ自分の子に行かせるかってなって……」

「なって？」

「孕ませたの」

「早い！ 孕ませるのが早い！」

「一発で妊娠したの」

「そういう事じゃない！ 過程が飛びすぎて言いたいんだ！」

「肉体を与えるならこの方法が一番楽だったんじゃない？」

いや、それにしたってもう少しやり方ってもんがあるだろ。

「ねえ、まさかやったの？」

「てゐ、頼むからこんな話を深く掘り下げないでくれ」

「やってないわよ？ 仮にも神の子の母親なんだから処女じゃないと」

「あたしの知ってる変態達は錬火に教育される前はやりまくってたみたいけど」

「そっちはそっち、うちはうち。好き放題してたら信者が減っちゃうでしょ？」

「あれで好き放題じゃないなら妖怪の方がよっぽど慎重深いぞ」

前なんか部下の天使にセクハラして訴えられて慰謝料取られてた。あの天使、逆恨みされて墮天させられてないか心配だな。

ま、とどのつまりは厳格という言葉とは正反対にいる様な奴って事だ。なんであんな奴に今一番信仰が集まってるんだろうか。世も末だ。

「で、無事に処女のまま孕ませて今に至るというわけ」

「孕ませるって連呼しないでほしいんだけど……」

「無事種付けしたわけ」

「変わんねえよ」

こいつは一々躊躇いがないというかセクハラばかりというか……あの主にしてこの部下ありか。

「がーちゃんと初めて会った時に『あなたはヴァージンのまま知らない奴に孕まされちゃいましたー』って言われてびっくりしちゃいました」

「お前は本当に言葉を選べよ……」

「嘘偽りない言葉じゃない」

「ただセクハラしたいだけだろうが」

初対面の相手にまでセクハラする大天使ってなんだ。いや、誰が相手でもないではないけど。

一体こいつらは何度信者を裏切れば気が済むんだ。

「ちなみに出産予定日はいつなの？」

「今日だけど」

「……へ？」

「あうっ？ お、お腹が……」

「「「なにー！？」「」」」

展開が早い！ いきなりすぎるだろ！

「う、産まれるう……」

「お湯だ、お湯を用意するんだー！」

「どうすんの！？ 頭カチ割ったら出て来るの！？」

「それ死ぬから！ この子人間だから！」

あつという間に俺達はパニックになった。

だって俺は人間の出産に立ち会った事はないし（邪神・神ならある）  
てゐもない、ルーミアも多分ないだろう。

いや、落ち着け。やり方なら『知識』にあるんだ。それなら……！

「大丈夫よ、問題ないわ」

「……ガブリエル？」

自信満々に言い放った。何かいい方法があるんだろうか。

「出産ぐらいポポポーンとやってみせるわよ。今日はこの時の為  
に来ていたんだから」

「でも思いつきり酒飲んでたよな」

「……あれは景気付けなの」

「深くは聞かないで置いてやるからなんとかしてやってくれ。俺に  
出来る事があつたら手伝うから」

「あら、女の子がお股を広げてうんうんする姿が見たいの？」

「俺が悪かったからさっさとやれえ！」

くそっ、これは迂闊だった。セクハラされる話題だと予想すべきだった！

「んじゃ取り掛かるから外に出といてね。てゐちゃんとルーミアは別に見学してもいいけどレンカさまはダメよー。どうしてもって言うなら止めないけど」

「……外に出てるよ」

「あたしもそうする」

「私も邪魔にならないよう外に出てるわ」

俺達三人はひとまず家を出る。

てゐもルーミアも流石に緊張しているのかソワソワしていた。

「うーん、幸運を分けてあげるくらいすれば良かったかな……」

「私じゃあんまり役に立てそうにないわね」

……はあ、情けない。俺も何億年も生きていくせにこんな時役に立てないとは。

てゐが言うように幸運を与えろかな……



——オギヤア　オギヤア——

「産まれたわよー」

「早い!？」

えっ、あれ!？

まだ三分も経ってないぞ！　出産ってこんなに早く終わるもんだっ  
たか!？

「そこはそれ、私の『孕ませて産ませる程度の能力』で……」

「ちょっと待てや、お前そんな能力持ってなかっただろ」

「この時の為に主がくれたのだ!」

「変な能力貰ってんじゃねえ!」

もう存在自体がセクハラじゃねえか！　あの野郎危険極まりない能  
力渡しやがって！

「それでどうなの!？　大丈夫だった!？」

「ん、大丈夫大丈夫」

まあ泣き声もここまでしっかり聞こえてきたしな。ガブリエルの表  
情を見ても何事もなく終わったと……

「無事に元気な女の子が産まれたわよ」

………はい？

## 第二十四話：有名人（後書き）

元ネタは『さくらファミリア!』です。キャラが変わっている人もいますけど……

そんな作品知らんって？ わかりにくくてすみません……

しかし人参天国の知る限りではこのイベントに絡んでいる二次創作って知らないですね。やっぱり地雷だからでしょうか……

## 第二十五話：ザ・アイドルマスター（前書き）

やはりイマイチな出来だ……

困った困った。

## 第二十五話：ザ・アイドルマスター

「おかーしゃんのがおえかいたのー！　みてみてー」

「てるちゃーん、またお花のかんむりおしえてー！」

「ルーちゃん、この髪形どう？」

「ガブリエルさん、お酒ばかり飲んでたらダメですよ！」

「レンカさま、今度はあの料理を教えてください！」

……思い起こせば十五年前、マリアが産んだ女の子はイエスと名付

けられ、今日に至るまですくすくと育っていった。

イエスといったらヒゲの生えたガリガリのオヤジだった気がするんだが……まあ俺が創った世界だから仕方無いな。いい加減諦めたよ。

俺達三人も暫くここに在る事に決め、仕事をサボってやって来るガブリエルも交えてそれなりに楽しく暮らしていた。

そして現在成長して十五歳となった女の子イエスはというと……

「働け暇人共おおお!!」

「「「明日から本気出しまあああす!!」」」」

「あと汗臭いのよお! 風呂入れえええ!!」

「「「ごめんなさああああい!!」」」」

「これが終わったら働きなさいよおおお!!」

「「「はあああい!!」」」」

「それじゃあさつさと一曲目えッ！ 『I SAY イエス』 いくわよおッ！！」

「「「うおおおおおおお！！！！」」「」」」

御子系ツンデレアイドルとして衆生救済ライブを開いている。

「……………どうしてこうなった」

「いやー今日のライブも激アツだったわねー。信者も順調に増えるし、このまま世界征服するのも夢じゃないわ」

「おかしい！ 絶対何かおかしいぞ！」

イエスが女というのはもうどうでもいい。しかし救済手段がアイドルってなんだ！ そしてなぜそれで信仰が生まれる！？ この時代の人間ノリが良すぎるだろう！

「いいじゃん別に。あれはあれで布教活動になってるんだし、手頃

な値段の『キリストペナント』も売れ行きいいよ？」

「ここは甲子園球場か何かか」

「キャロット味の『キリスト饅頭』とイエスの顔写真がプリントされた『キリストうちわ』と肩を並べる売れ筋商品だよ」

「関連グッズを開発していたのはお前か！　しかもキャロット味ってお前が食いたいただけだろ」

「失礼な、あたしはただギトギトした信者共にβーカロチンをくれてやってるだけだよ」

「金取って売ってるだけだろ」

「あ、てるちゃん儲かったのならまたおごってー」

「トイチね」

「え、貸し？　しかも利子高っ」

「ええい、順応しやがって……！　一人で騒いでる俺がバカみたいじゃないか。」

「ルーミア！　この後のスケジュールは！？」

「すぐにレッスンをしてパラメーターを上げた後別の地域でまたライブ。これでファンの規模を更に増やすわ。同じ所で活動が続けたら世間が飽きちゃうもの」



「……なんだかマネージャーじゃなくてプロデューサーのような気がしてくるわね」

ルーミアはなぜかイエスのマネージャーの様な事をしている。最初の頃は仕方無くだったが、こいつも時間が経つにつれて順応していた。

わざわざスーツを着て（どっから持ってきた）伊達メガネを着けているのは形から入ったかららしい。結局お前もノリノリじゃねーか。

「いっちゃーん！ お弁当持って来たよー！」

「お母さん、その私の顔がプリントされたシャツを着てうろつくのはやめて！ 私その商品が一番恥ずかしいんだから！」

「え、じゃあ今度の新商品の『イエス！ 抱き枕』は大丈夫なの？」

「てゐー！？」

マリアはイエスの身の回りの世話、食事の準備やら衣装の洗濯やらをしている。地味に洗濯物が多いのだがこの時代に洗濯機なんてないし、そもそも繊細な衣装を洗濯機に放り込んだらしわくちゃんになってしまう。よって手洗いでしているため、案外大変な仕事なのだ。

少なくともチケットの売り子しかしていないガブリエルよりは忙しいだろう。

俺？ 俺はボディーガード兼演出係。

何か仕出かしそうな輩を行動を起こされる前に察知してOHANA

SHIしているから今の所はアクセントはゼロだし、この時代はベースもドラムもないから俺が音を出したりステージをライトで照らしたりしている。

そういえばいつの間にこの役目になっていたんだろう。気が付けばこの役目になってたなあ。

「錬火、どうしたの？」

「ああ、ルーミアか。いや、なんでアイドルになってんのかなあと」

「今更？　　というか提案したのは錬火だって聞いてるけど」

「……はい？」

「イエスが教えてくれたんだけど、今から二年前に……」

「レンカさま！」

「ん？　　なんだイエスか、どうしたんだ？」

「教えてほしいのです！　この枯れた時代に希望を与える救世主の在り方とはどのようなものですか！？」

「（おお、これはイエス・キリストの誕生の前触れか？）そうだな、希望を与えろといえど歌って踊れる……（って山○リ○ダか。違う違う……）明るい教えを広めてくれる奴じゃないか？」

「（歌って踊れる……？）わかりました！ 参考にさせてもらいます！」

「……って感じだったって」

「……オウノウ」

何それ、俺ってミスが多くない？ バカなの？ ドジなの？ 実は呪われてるの？ まさかこれが世界の意思なの？

「やーいドジ」

「イエスー、てゐを捕まえたぞー」

「うげっ！？ 放せー！」

「レンカさまナイス！ そのままこっちに寄越して！」

これで抱き枕は販売中止になるのかね。余計な事を言わなければ良かったのに……学習しないウサギだ。

あ、俺もか。

「ふん、御子ごときがあたしを捕まえてられるかッ！ くらえッ、因幡フラッシュー！」

「キャッ!?!」

てゐるが強烈な閃光を発し、それに目が眩んだイエスはまんまと取り逃がしてしまった。

これって学習?

「くっ、待ちなさい!」

「さあ、振り切るよ!!!」

「イエス、もうあまり時間がないわよ」

てゐるを追おうとしたイエスだが、ルーミアに止められてしまった。次の予定が迫って来ているんだろう。

もっとも、あのまま追ったとしてもてゐるの逃げ足には追いつけなかっただろうけど。

「もう、布教活動ばかり! 少しは自由な時間はないの!?!」

「自由時間はないわ」

「……はあ」

「自由時間はないけど公式ファンクラブ『メシア通十二使徒団』の人達と会食する予定があるわね」

「えっ、それってつまりあいつも来るの?」

「他のニート共にハブられてなかったら来るんじゃない？」

「ふ、ふーん、まあどっちでもいいけどね！ あ、でも汗臭い……お母さん！ お風呂沸いてるー？」

「ばっちりだよー！」

「御子さま、別に食べてもらうのはいいですけど避妊はしっかりしてくださいねー？」

「ちよっ、はあっ！？ 意味わかんない！ 人前に出るから体をキレイにしておきたいってだけよ！」

「そうそう、彼にはキレイな体を見てほしいもんね」

「あいつは関係ないでしょ！」

「えっ、あいつ？ 私は誰とは言ってますんよ？」

「~~~~ッ！ もういい、お風呂入って来る！！」

「あ、でも汗臭い方が好きって男もアバババ……」

「もうお前は黙ってろ……」

ガブリエルを電気ショックで気絶させる。

なんでこいつは神相手だろうが御子相手だろうが構わずセクハラ出来るんだろうか。命賭けすぎだろ。

このまま天国に送り返そうかと思ったが……どうせまたすぐに戻って来るだけなのでやめておいた。

「御子って言ってもやっぱり女の子ね」

ルーミアが倒れ伏したガブリエルを華麗にスルーしながらこっちに来了。もはやこの光景も日常茶飯事なので慣れたものだ。

「休憩よりも意中の彼と会える方が嬉しいなんて……青春って奴？」

「青春か……んなもん遙か遠くに置いて来ちまったな」

などとカッコつけてみたものの、俺の青春なんて残念なものばかりだった。

死ぬ前はゲームやら漫画やらラノベやらに時間を費やし、死んだ後は修行三昧で女っ気なんて欠片もなかったな。青春ポイントなんてゼロ以下だろう。青春男には程遠い。

「ところであの子の意中の男ってどんな奴なの？ 顔は知ってるけど性格とかはよく知らないのよ」

「んー……そうだな、一言で言えば『苦労性』かな」

……うん、あいつはまず間違いなく苦労性だな。それもハス彦とはまた違った種類のだ。

ハス彦の場合は特徴として苦労性があるってイメージなんだが、あいつの場合は運命というか、まるでラブコメの主人公の様な苦労性なのだ。

誰も触れた事もないイエスと偶然密着してしまったのを目撃され二つ名が『裏切り者』になったり、風で舞い上がったイエスのスカートの中身を見てしまいぶん殴られてたり、まるで運命が苦労性を科したかの様な奴なのだ。

まさに主人公。

あと若干ヘタレっぽい所も主人公的だ。

……お前もだろって言った奴、とりあえずエロい物を見たり考えたりしたら鼻血を出す呪いをかけてやる。そしてそのままあだ名が『ムツツリーニ』になってしまえ。

「それで相思相愛なの？」

「たぶん……っていうかほぼ確実に。でもお互い相手の気持ちを知らないからどちらかというと両片想い？」

「……青春ねえ」

「青春だよなあ」

ジジババ臭いと言うなかれ、万も億も年取ってりゃこんなセリフのひとつも出る。

ま、死ぬ前の俺ならきつと「リア充滅せよ」とか言っただろうが、今の俺はあまり嫉妬は感じない。

出会いの数なら今の俺の方が遥かに多いし、しかも人外といえど一

応女の子二人と旅をしていたんだ。非リア充達が血涙を流して羨ましが  
る境遇だろうな。

もっとも、『青春』というのは少し羨ましく感じるが。

「お母さん、なんで着替えがこのシャツなの!? 別の持って来てもよ  
よ!」

「えー、お揃いだよ?」

「自分の顔がプリントされたシャツを着るとかイタすぎるわ! 私  
どんなナルシストよ!」

ん? イエスが風呂から上がったみたいだな。俺達も結構話し込んで  
いたらしい。

「まだライブが残ってるから今お風呂に入っても……」

「今頃言うなよ。なんとかまた時間を作ってやってくれないか?」

「……仕方無いわね、ライブは少し早めに切り上げましょうか」

また忙しくなりそうだな。ルーミアもスケジュールの再調整がんば  
ってくれ。俺の仕事には大した影響はないし、もう少し怠けさせて  
もらうよ。

……しかし関係ない話だが困った事が。

考えてみれば俺の知っているイエス・キリストはこの先十字架に張  
り付けにされたり槍で刺されたりする筈なんだが……当然このイエ



スをそんな目に会わせたくない。

あれでも俺達が我が子の様に育てて来た大切な子だ。人の罪を償う  
為か何か知らんが、傷つくのをただじっと見ている事なんて出来な  
いだろう。

いずれ来るその時にはきっと皆で力になってやろう……

この時の俺はそう思っていた。

## 第二十五話：ザ・アイドルマスター（後書き）

はい、イエスさんが原作とキャラが違います。だって人參天国にはあのキャラは難しかったもんですから……

容姿のイメージ？ 『迷い猫オーバーラン！』の芹沢文乃です。なんとなくそれっぽいイメージだったので。

次回は迷走回ですよー。

## 閑話：嵐の前（前書き）

（注）この小説は東方の二次創作です。

（注）この小説の主人公は錬火くんです。

（注）この話はわりと甘めです。

（注）この小説の作者は迷走しています。

## 閑話：嵐の前

はじめまして。ぼくの名はユダだ。

公式ファンクラブ『メシア通十二使徒団』最後の一人。自分は何の変哲もない、至って普通の働く人間だと思っている。他の奴らはみんなニートだ。

このファンクラブに入ったのは単なる成り行きからだったんだけど、今思えば入ってよかったと……あれ、どうだろう？　だってあいつら物凄くウザいし……とりあえずぼくからお金を借りてまで御子さまのグッズを買い漁るのをやめてくれたら少しはマシなファンクラブになると思う。

貸した金額を忘れてると思ったら大間違いだぞ……

……ゴホンッ、まあとにかく。ぼくが入ったこのファンクラブはあ  
る一人の女の子を応援する為の団だった。

今ぼくの目の前で愚痴を吐き続けている女の子。

やれ忙しすぎて自由がないだのやれ信者共がキモすぎるだの、ぼくが相づちを打つだけでも気にせず愚痴っている姿は『神の子』だとか『尊い人』だとか、そんな認識を全部投げ捨ててしまえる程に『普通の女の子』だった。

みんなが『御子さま』なんて言って崇めている彼女のこんな姿を見れるのは彼女の家族かぼくだけで、彼女の『特別』なのだと思うと

嬉しく思えた。

……うん、お察しの通りぼくは御子さまの事が好きなんだ。だから多少の苦労も笑って許せる。多大な苦労は流石に勘弁願いたいがないけどね。もつとも、彼女にとったら数少ないただの愚痴り相手なのかもしれないけどね。

「ちょっと、ちゃんと聞ってるの？」

「えっ？ ああ、ごめん。ぼーっとしてたみたいだ」

「……私を無視するとはいい度胸じゃない。ユダのくせに生意気よ」

「ホントごめん……ちょっと考え事してて」

「考え事って何よ」

「うえっ？」

や、やばい。君が好きだって考えてたなんて言えるわけがない！

何か、何か話題は……そうだ！

「ほら、初めて会った時もこんな風に愚痴られてたなーって！」

「ああ、その事……」

危ない危ない。咄嗟に思いつけてよかった。

初めて会った時……あの頃のぼくはまだファンクラブに入っておらず、せっせと畑仕事に精を出していた。あのニート共とは違い働き詰めで世間には人より疎かったため、道ばたで探し物を求めてキョロキョロしていた彼女の事も知らなかったんだ。

誰かは知らないものの見て見ぬ振りをするのもどうかと思って探すのを手伝う事になり、見つけた後でお札と一緒に近くのお店で食事をすることになって、そこで今日の様にぶどう酒をちびちび飲みながら延々と愚痴を聞かされたのだ。内容は今と大して変わらない。せいぜい始めたばかりでコツを掴むのが大変って感じの愚痴が追加されているぐらいだ。

解放されたのは三時間後。愚痴ばかりだった事を謝られ、「またいつか」と言い合ってそのまま別れた。

ぼくが偶然ファンクラブに入って彼女と再会するのはその一年後になる。

「思えば本当に愚痴ばかりだったよね」

「うっ……仕方無いじゃない、私だって大変なんだから少しくらい吐き出しておきたいのよ」

「大変だっていうのは十分わかってるよ」

拗ねた様な表情で言う御子さまにそう応える。少しでも顔が赤いのはお酒に酔ったからか、それとも恥ずかしがっているからなのか。

まあ毎日布教活動をしているんだし、忙しくないわけがない。疲れが溜まらないように色々しているみたいだが、愚痴る事で少しでも

楽になつてもらえるならいくらでも聞いてやる。ぼくに出来る事なんてそれくらいだ。

「……いけない、今日はこんな話をしに来たんじゃないわよ。愚痴ってばかりなのは悪い癖ね」

「何かあるの？」

珍しい事に今日は別の用件があるらしい。こんな事は今まで数回あったくらい인데……実の所、そんな時はあまりいい思い出がなかったりする。

出来れば無茶な内容じゃありませんように……

「で、どんな話？」

「え、えーと、そのー……」

えらく歯切れが悪い。これもかなり珍しい事だ。そんなに言い難い事なんだろうか。

……まさかまた、ご飯が食べたいから練った小麦粉のカタマリを米粒大に千切っていけなんて言うつもりか。

あれは御子さまの家族のレンカさんっていう人が一回だけやってくれた物なだけで……凄かった。見えない速度で手が動き、小麦粉のカタマリがあつという間に大量の小さな粒になってしまった。

それを蒸して食べたんだけど、味はともかくパンクズのような無駄が少ないからと御子さまが気に入ってしまい、一度だけぼくに（なぜ

かレンカさんじゃなく）一緒にやろうと誘ってきた。

その時はつい頷いてしまったが、開始して一時間でぼく達は後悔した。

なにせ減らない。千切っても千切っても小麦粉はテーブルの上に鎮座し続け、夕食を食べれないまま空腹と眠気で朦朧としつつ手を動かし、全てが終わった時には既に昼前となっていた。御子さまは開始四時間でリタイア、「楽しくない、こんなハズじゃあ……」とブツブツ呟きながら力尽きて寝てしまった。おかげでぼく一人でやるハメになった。

一応食べたけど……やっぱり味は微妙だった。明らかに労力に対して見返りが少なかった。

……もうあんな事したくない。夕食が昼食になるくらいなら素直にパンを焼く。パンクズもちゃんと集める。その方が楽だし。

「何考えてるか知らないけど、たぶん想像してるのと違うわよ」

だったら助かるんだけど。

まあ御子さまも流石にあの一回で懲りただろうし、そんな事を言うはずもないか。

「……ねえ、もし私がいなくなったらどうする……？」

「……え？」

いなくなる？ 君が？



なんで突然こんな質問を……まさか本当にどこかに行ってしまうというのか。

……ありえる事だ。

彼女は人間を救う為に神が遣わせた人だ。いつまでもここに留まっていたのは目的が達成出来ないという事もありえるし、もしかしたらぼくじゃあ想像もつかない様な理由があるのかもしれない。

でも、そんな事……いや、今ごちゃごちゃ考えていたって仕方が無い。まずは質問に答えなければ。

「たぶん……後悔すると思う」

「後悔……？」

だって、ぼくはまだ君に想いを伝えてない。

ただの人間のぼくじゃあ到底釣り合わないっていう事はわかってるし、そもそもそんな感情を抱く事自体が罰当たりだ。だからぼくはこの感情はいつまでも伝えないままにいるつもりだ。

……だけど。

伝えないまま別れたら結局ぼくは伝えなかった事を後悔するだろう。臆病なままでも何もしなかった自分を恨めしく思いながら生きていくんだろう。

「どんな後悔なの……？」

それがわかっていながらも……

「てゐちゃんが裏で抱き枕を売りさばいていた事を伝え損なつたという後悔だよ」

「てゐー!？」

結局想いは伝えない。

後悔よりも臆病でいる事を選んだんだ。

自分の家に向かって走って行く彼女の背中を見ながら考える。

きっとその時が来ても、ぼくは背中を見送るだけなんだろう。その方がいいんだ、きっと正しい選択をしたんだ、そんな事をウジウジと考えながら。

この時のぼくはそんなネガティブな思考で頭の中を埋め尽くしていた。

「お客さん、お勘定は？」

「……キャッシュで」

御子さま、ぼくだってあんまり裕福じゃないんだから、何度もツケられた分は払ってほしかったりするんですが……

甲斐性がないって？

貧乏な一農民にそんなもん最初からないですよ……

## 閑話：嵐の前（後書き）

何がしたいのかよくわからない？

一度くらいユダくんを出しておいた方がいいかと思ったんですよ……  
……残念ながらこんな感じになりましたが。

まあくよくよしてても仕方無いので明日の分の確認でもしましょうか。

それでは皆さんまた明日！。

## 第二十六話：神襲来（前書き）

ズバッと投稿。

それではどうぞ。

## 第二十六話：神 襲来

この日、そいつは突然やって来た。

「さあ我が娘よ、天へ帰るぞー」

「一人で帰れバカ」

「えっ……」

いや、イエスにとっては突然ではなかったみたいだが。

聞く所によると、実はつい先日、今度迎えに行くからと一度だけ連絡が来ていたらしい。十分突然な話だけどな。

それで今日が迎えに来る日だったらしいんだが……

「え、なんで？ お父さんの言う事聞いてくれないの？ お父さんと一緒に天国へ行ってくれないの……？」

「当たり前でしょバカ。アンタが誰だろうと関係ないわよバカ。あと心中するみたいに言うなバカ」

「心が折れそう……」

この、自分の要求をイエスに突っぱねられ、カウンター気味にバカ攻撃をくらい膝をついているメンタルの弱い男こそがイエスの父『YHWH』だ。俺は『ヤーウエ』って呼んでいるが。

年齢不詳の端正な顔に柔らかそうなプラチナブロンド。真っ黒な服を着て両肩にはストールをかけ、左右には一つずつ十字架を吊るしている。些か時代を先取りしているパンクな服だが、これでも一応神父の服だ。神本人が神父の服を着るというのもどうかと思うが。

「なるほど、聞きしに勝る情けなさね」

「私、こんな人に孕まされたんですか……」

「すごいでしょ、これでも私達の間で一番のお偉いさんなのよ？  
チェンジしてほしいなんて口が裂けても言えないけど」

言ってる言ってる。

ルーミアとマリアは当然の様に酷評しているが、ガブリエルも部下のくせに辛口発言だ。

しかし俺はそれを訂正する術を持たない。俺もてるも同じ様な評価だからな。

「くっ、だったら拉致るしかないな！」

「はあっ！？ それ本気！？」

「当然！ あらゆる状況においてお父さんの意志が優先されるのだ  
！」

こいつ神のくせに慈悲もクソもない。ただの変態だ。

「さあ！ お父さんと一緒に昇天しよう！」

「てめー一人で昇天しろバカ（ゲシッ）」

「おうっ!？」

ジリジリとイエスに近づいていた変態を蹴り飛ばす。

せめて強行手段をとる前に話し合うぐらいしてくれ。

「だっ、誰だ俺を蹴った奴は！ みっともない声を娘に聞かれちゃったじゃないか！」

「お前の存在そのものが世界の恥部だよ」

勢い良く振り向いたヤーウェと目が合う。

まったく、漸くこっちに気付いたか。さっきからイエス以外はまるっと無視しやがって。

「お前はッ……………誰？」

「……ルーミア、患者は認知症のようだ。治療を行うので暴れないように拘束しろ」

「任せて。神を縛り上げれるなんて楽しみね」

「いやっ、待って待って冗談だって！ レンカだろ!？ 覚えてます覚えてます！！」



「……と、患者は言っているが懸念は消えない。念のためショック療法を行う。具体的には全身の関節を死なない程度に外す。きつと忘れられない思い出になるだろう」

「うわあああ神殺しいいい!!」

それはただの厨二だ。

お前のジョークには若干イラッと来たので仕方無いんだよ。

忘れたフリして実は覚えてたってのは俺もニヤル美にやったんだが……それはそれ、これはこれ。自分の事はいくらでも棚に上げるぜ。

「助けてイエスー! このままじゃお父さん頭蓋骨の関節から爪先の関節まで残らずオープン・ゲットされちゃう!」

「いい薬になるじゃない変態。背も体積も伸びてよかったわね変態」

「ついに『バカ』が『変態』になっちゃった!？」

さっきまで拉致しようとしていた娘にすがり付いて助けを求める姿はますますみっともない。

なんだかこいつはここで消した方が世の為人の為になる気がする。

「クソッ、ここで無抵抗に殺されるぐらいなら俺は戦う!」

なぜか今度は覚悟を決めた。

そういう決死の目は少なくとも娘にすがり付く前にしてくれ。周り

の目の温度が更に下がったぞ。

「見ろ！　これが神の雷「いい加減にしてくださいっ！」　へぶんっ！？」

雷へブン？

エウ○カセブンとかイナズ○イレブンとかの親戚か。

ってそれどころじゃない！

「まーちゃんナイス……じゃなかった、まーちゃん、あなたなんて事を！　いいわよ、もっとやれ！」

「え、こんな感じですか？（ゴスツゴスツ）」

「へぶっ……あぶぼっ……へぶんっ……」

ガブリエルの本音だだ漏れな言葉に応え、マリアはマウントをとってガラスの灰皿（どっから持って来た）で変態を滅多打ちにしている。

力の込め方に躊躇いがない所がすごく怖い……そんなに色々溜まっていたんだろうか。

……あ、ついだとばかりにイエスも槍でつつき始めた……いや待て、それは何の槍だ？

「どうする、ほっとく？」

「……しばらくは好きにさせてやろう。どうせあいつも死なないだろうし」

父親を主張するというのはなら父親らしく母親と子供のストレス解消の為にサンドバッグになってやってくれ。

こんな殺伐としたスキんシップを取る家族もそういないだろうけど。

「あ、灰皿壊れちゃいました」

「そんな時は破片を口に突っ込んでやってから殴ると効率的よ」

「今までお母さんと私をほっというて何がお父さんよ！ 調子にのんな、二回ぐらい死ねっ！」

「ぐべっ……ごべんなざっ……」

……マジ震えてきやがった、怖いです……

「……あつ、あたし売上金計算してくるね」

「さて、明日のスケジュールはつと……」

「今日はいいい天気だ、絶好の洗濯日和だな。せっかくだから布団も干しておこう……」

俺達三人の見解は同じ物だった。

それ即ち……『触らぬ神に祟りなし』だ。

「えーと、初めて会う奴はマリアとイエスと……お前はルーミアだったか。そうです俺が『神様』です。地上を這いずり回る憐れなゴミムシ共とは違ってひじょーに偉いので敬うように。あと愛するように。ヤローはごめんだけど。」

……あつ、てゐさん写メは撮らないで。ボコボコの姿を未来に残さないで頼むから」

「あたしに指図しようっての？　あたしのバックには鍊火がいるんだよ！」

「お前はどこのチンピラだ。俺を盾にするんじゃないやねえ」

漸く変態の自己紹介になったんだが、残念ながら神としての威厳などどこにも無い。

娘と母親に凹にされ青黒く腫れ上がった顔を見て何を敬えと言うんだ。これならイワシの頭の方がまだ信仰出来る。

「海塩を浴びてオリンポス山の頂上で風を受けてたら傷が治るよ」

「んー、確か今なら天然物の粗塩と唐辛子があったと思うわよ？」

「だって。丈夫な皮膚と拷問の痛みに耐えられる精神とどっちが欲し

い?」

「どっちもやだよ! ガブリエル、なんか他にあるだろう!？」

「……あ、バニラビーンズがあつたわ」

「使えない!」

「おい、それ使ったらシュークリームは作らんぞ」

「じゃあやつぱり粗塩か唐辛子ね」

「レンカはいつからパティシエになったんだ……?」

仕方無いだろ、ここの奴は俺以外全員女だからお菓子類が大好評なんだ。

定期的に作ってやらないと五人に囲まれて一斉に『菓子作れコール』が来る。具体的には四方プラス上から。たぶん教えやがったのはルーミアだろうな。あの陣は地面に穴でも掘らないと抜け出せないし、そもそも逃げてても諦めてくれないから意味がない。俺は既に詰んでいたのだ。

「お前のガンメンなぞどうでもいいから早く説明しろ」

「そこ結構重要なんだけど。しゃーねーな、自分で治すか」

最初っからそうしろ。それくらい出来るんだから。

テレビの逆再生の様にみるみる傷が治っていき、元通りになった。

マリアとイエスは見慣れない光景につっこみかけたが誰も何も言わないので結局つつこまなかった。

しかしこれで漸く本題に移れる。

「なんでイエスを連れて行こうと？」

「ああ、実はな……」

「実は……？」

「なんと……」

「なんと……？」

「驚くべき事に……」

「イエス、槍貸せ。こいつの腐った脳みその風通しを良くしてやる」

「あんまり汚れると洗うのが面倒だから貸さない。でも鉋ならあるわよ」

「実はお父さん寂しいので帰って来てほしいのですハイ!!」

「なら鉋でいいや」

「お願い待ってえー!!」

ええい抱き着くな鬱陶しい！ 男に抱き着かれて喜ぶ趣味はないんだよ！

「だってそろそろ布教の進行具合を聞きたいし、あんまり長い間地上にいたら利用しようとか考えるゴミムシが出て来るかもしれないし……」

「最初からそういう理由を言えよ」

「あと娘に恋人とかできたら困るし」

「こっ……！？」

「あー、それはねー……」

イエスの体が一瞬震え、ガブリエルも声を漏らす。

今はまだギリギリセーフな所だが非常に危うい所まで来ているからなあ。具体的には『もうお前らくつついちゃえよ』レベルぐらい。

でもくつついたらあいつが他のファンやこのバカにブチ殺されかねない事が心配なんだ。だからこちらも迂闊にくつつけられないんだけど。

「ま、イエスにそんな事あるわけないだろうけどな！ あっはっはっは！」

「失礼ですよ！ いっちゃんだって既に心に決めた人がいるんですから！」

マリアさーん、空気読んでえええー！！

「……は？ 心に……決めた？ はは、なかなかウィットに富んだジョークで……」

「しかも相手のユダくんとは相思相愛なんです！！」

「お母さんやめてええええ！！」

真っ赤になってマリアの口を塞ぐイエスとは反対に、さながらエネルギーの切れたアラレちゃんのようにゆっくりと動きを止めていったヤーウエ。

「お父さんに黙って好きな人？ ゴミムシの？ 娘とゴミムシが相思相愛？ まさか若い二人でCまで行っちゃってる系？ まだ恋人じゃないけどどうせ後で義父さんの了承を貰うんだからやっちゃってもいいやみたいな？ ああ、なんだこれ終末フラグなんだね？ ははっ、お父さん頑張っちゃうよ？」

……いや、口だけは動いて物騒な思考を漏らしていた。余程シヨックがでかったものと思われる。

「そ、そうだ証拠は！？ お父さんにドッキリ仕掛けようたってそうはい神崎！！」

信じてない？ ……いや、これは現実を認められないのか。しかしどっちにしろここで誤魔化せられれば……

あと古いのか新しいのか判断に困る言い回しを使うな。

「ここに逢い引き写真があるよ」



てるー!? なぜお前はいつもいつも!

「いくらだっ!?」

「一万ガバス」

「たっか!　せめて五千ぐらいに……」

「口答えしたから一万二千」

「ノオオオオ!!」

お前らナチュラルにその単位で取引すんな。

「ぐずぐず………こっ、これは!?!」

泣く泣く手に入れた写真を見てヤーウエは目を見開く。

横から覗き込んでみれば、そこにはどこかの店の中で身振り手振りで何かを訴えるイエスと、それを聞きながら苦笑しているユダが写っていた。いつも通り愚痴っているだろう場面で色気なんて物はないが、イエスの表情は生き生きしているしユダもどこか嬉しそうな雰囲気をしている。

そこには明らかに二人だけの世界が広がっていた。

「————ツ!!　（ギリギリギリ）」

……隣のバカの歯軋りがうるさい。その表情は既に修羅の如くだ。

「イエスッ、お前本当にCまで行っちゃったのか！ 記者会見秒読み開始なのか!？」

「行ってるわけないでしょバカッ！（バチイイイン）」

「あぎゃあああ!?!？」

おい、誰だイエスに鞭打教えた奴は。

……え、ただのビンタ？ あの威力で？

「抱きしめた事はあるけどそれ以上の事はしてないもんねえ」

「あの時の真っ赤になったいっちゃんかわいかったよ!」

「なんで知ってるの!？ っていや、あれはただの事故なんだから!」

イエスとガブリエルとマリアは盛り上がっているが、それを聞いているヤーウエの変化に気付いているだろうか？

修羅の顔はとうに過ぎ、今は何の感情も見えない無表情のままタラタラと血涙を流している。こういう顔をする奴は何を仕出かすかわかったもんじゃない。

「……………レンカ」

話しかけんな。

「甘い……甘いんだよ。思わず今日朝食代わりに食ったケーキをゲ

口っちまいそうな程に」

それ甘さに関係なくね？ あとここでリバースすんじゃないぞ。

「ユダだったかあ……？ 認めん……こんなT O L o v e るに溢れてそうなヘタレっぽいガキは断じて認めんぞオオオオ！！」

いや、確かにそういう奴なんだけどな……

「……ルーミア、しばらくユダをアレに近づけさせないように注意しよう」

「……あ、でも今日は彼を食事に招待してた日だけど」

「え……」

——御子さまー？ 今日は少し早めに来たんですけどー。

「超バッドタイミングだよおい！？」

やばい、早く帰らせねば！ 今コレに会わせるわけには……！

「いらっしやいませだファッキンボーイ！！」

「ちょっと待てやあああ！！」

ヤーウエの行動は早かった。俺達が止める前に玄関へとすっ飛んで行ったのだ。

「ちっ、面倒な！  
『ザ・ワールド』！！  
『世界』！！」

そして全てが停止する。俺の時間停止の強制力には時の神でも逆らえないぜ！

そして玄関に来てみればヤーウエの拳がユダの眼前一センチ手前まで迫っていた。あまりの急展開にユダも回避出来なかったみたいだ。非常に危ない所だった。

当然このまま放置は出来ないので、ヤーウエを蹴り飛ばしてどこせてから時を動かす。

「死ぶへっ!？」

「……え、今何が!？」

「大丈夫だったか？」

「あ、レンカさんいつの間に？」

どうやら怪我はなかったらしい。無事でよかったよ。

「レンカてめえ何で邪魔する!？」

「そりゃお前がこいつを殺そうとしたからだよ」

「殺すに決まってるんだろ！ 娘に近づくゴミムシは踏み潰すに限る  
!」

「へー、ユダを殺そうとしたんだ……」

「だからそうだって……言ってるけどホントはただ挨拶がしたいだけだった恥ずかしがり屋のお父さんなのでした！ チャンチャン！」

「お前確か十戒で『殺すな』とか『偽証するな』って言ってたよな」

本人が戒律破ってどうする……いや、本人だから構わないのか？

しかしそんなヤーウエの誤魔化しもイエスには通用しなかった。

「信じられない！ レンカさまが間に合わなかったらどうするつもりだったのよ！」

「もちろんその時は俺が責任持って地獄行きに……」

「今の私なら衛星軌道上の敵だって仕止めて見せる……！」

「お願いその槍しまってー！！」

自業自得だな。こいつはしばらくはこのままほうっておこう。

「あの、何があったんですか？」

「あー、今から説明するよ。だからとりあえずは中に……」

「うおおおおおお！！」

「うわっ、なに！？」

なんと満身創痍になりながらもイエスを突破したヤーウエがユダの

足にしがみついたのだ。

放すまいと必死になっている様子がかなり気持ち悪い。

「お前は何してんだっ（ゲシッゲシッ）」

「さっさと離れなさいよ変態！（グサグサ）」

「え、ホントに何！？ さっきからあんたなんなの！？」

俺のストンピングやイエスの突きを受けても離れないなんて、まるで風呂場のカビ汚れの様なしつこさだ。こいつアメフトでもやれば大成するんじゃないだろうか。

「ユダアアア！！ てめえにゴフッ……けつとブフッ……を、もうグフッ……しゴフッ……」

「すみません、何て言ってるのかわかりません……」

訳…ユダアアア！！ てめえに決闘を申し込む！

……こいつはまためんどくさそうな事を言い出したなあ。

## 第二十六話：神 襲来（後書き）

たぶんこの小説を敬虔なクリスチャンの方々が読んだらぶちギレると思う。

罰当たりですみません。

## 第二十七話：孤独な決闘者達（前書き）

はい、決闘回です。

別にカードでモンスターを召喚したりするわけではありません。



## 第二十七話：孤独な決闘者達

「宗教密着系御子型エンターテイメント、『激突！クイズ知ック天国』！！　あなたの街の派遣大天使、ガブリエルよー」

「宣伝本部長の因幡てゐだよ」

「リンスとコンディショナーとトリートメントの違いがわからない、イエスのマネージャーのルーミアよ」

「「「「ワアアアアアア！」「」「」」」

「……どうしてこうなった」

「……どうしてこうなった」

俺とユダは全く同じ言葉を漏らす。

今俺達がいるのは急遽用意された特設ステージの上、そこにある三つ並んだ席にそれぞれヤーウエ、俺、ユダの順で座っているのだ。

更に目の前には大量の観客もいる。お前らはなんで一日経たずにこんなに集まれるんだ。働けニート。

しかしガブリエルの言葉から察するにクイズで勝負しようってんだろうが……なぜ俺までいる？

「すみません、ぼく何から何までわかんないんですけど！？」

「じゃあ説明するわ！ 今回のクイズ対決は今日突然現れたイエスのバカ親父がユダに決闘を申し込んだ事から始まったわ！ 父親としては娘と仲がいい男なんて自分だけで十分なんて思ってるから、男は叩きのめして娘は天に連れて帰ろうって思ったの！ でも戦闘力勝負じゃ自分の身長より高い所から落ちたら死んじゃうくらいなまっちょろいユダに勝ち目はなから、私達が気を利かせて知力勝負にしたってわけよ！」

「説明ありがとうございますって言いたい所ですけどあんたさりげなくぼくをバカにしましたね！？」

「えっ、じゃあゆーくんはトランプの束を指で引きちぎる事が出来るの？」

「基準そこ！？ そんなどこぞの喧嘩師みたいな事出来ませんよ！」

「うん、あの人も神パワーを使えば出来るけど素の握力じゃ無理ね」

「なら別の基準を作れよ！」

ツツコミが他にいと楽だなあ。

「ユダアッ！ てめえイエスと両想いなんだろう！？」

「は？ ……………はあああああ！？」

あのバカ……二人はまだ告白してなかったのに言っちゃったよ。しかも衆人環視の中で……ユダの命がマツハだな。

「ちょっと待ってください！　ぼくと御子さまが……ええええ！？」

「知らなかったのか！？　あいつはお前みたいなヘタレでもイチャイチャしたり孕んだりしたがつべツ……」

「ぎゃあああ！？　頭から槍が生えたー！？」

今回は出番がないのでステージの横で見ていたイエスが投げたんだ。

あの距離で投擲して正確に命中するとは……あの槍たぶんそのうち神殺しになると思うんだ。

「はっ、頭に槍が刺さったぐらいじゃ神は死なん！」

「だったらその吹き出してる血を止めろ」

「……なんか治しにくい？　ゴメン、包帯ちょうだい……」

「……ほら」

既に治癒障害ができていた。そりゃ立て続けに神の血を浴びてりゃなんか変わるだろう。

その矛先が俺に向かない事を願うばかりだ。

「つまりその情けない男が勝ったらイエスは連れ戻されて、あなたが勝ったらイエスと付き合えるってわけよ」

「いやいや付き合うってなんですか！？　あとそんな大事件をこんなクイズ大会にしないでくださいよ！　いつか向き合わないといけ

ない事なんだってシリアスに身構えてたばくがバカみたいじゃないですか!」

——ブーブー! ——

——あいつ抜け駆けしやがったのか!? ——

——そもそも個人的な接触は条約で禁止されていた筈だ! ——

——あの裏切り者をぶっ殺せええええ! ——

「おーっとアウエーです! ユダ選手アウエーです!」

「あんたが余計な事言うからだろ!? 　　というかお前らも他に言う事ないのかよ!」

なんかユダは勝っても負けても不幸になりそうな……相変わらず可哀想な奴。

しかし俺だって聞きたい事がある。

「なあ、なんで俺もここにいるんだ?」

これはヤーウエとユダの勝負だろ。俺は明らかに余計な筈だ。

「レンカさまが勝った場合、レンカさまが御子さまのお父さんという事になるわ」

「今それ決める必要あるか!?」

しかしその時はイエスは天国に帰るのか？

「つまりそのバカが勝ったらイエスはお父さんと認めて天に帰る、錬火が勝ったら錬火がお父さんになるけどイエスは天に帰る、ユダが勝ったらイエスはここにどまって交際も認められるって事だね」

俺本当に邪魔じゃん。

お父さんになるという権利も……まあイエスがどう思っているかが重要だしな。そこまで欲しい権利じゃない。

なら別に手を抜いても構わないかな？

「ちなみに負けた二人は一時間ステージでエアギターとエアドラムをしてもらうよ。道具を使ったり能力で音を出すのはもちろんダメ」

「ちょ、長っ!？」

「おい、その禁断の×ゲーム考案したの誰だ!？」

「それもはや拷問じゃん! お願いだから別のにしてよ!」

「勝てばいいんだよ勝てば」

簡単に言ってくれる!

男二人がエア楽器って……ぶっ冷め決定じゃねえか! 気まずい事になるのは間違いない。たぶん羞恥で死ねるだろう。

「ごちゃごちゃ言っていないで第一問だよ!」

「第一問は私から、妖怪に関する問題よ」

む、ルーミアからって事は他の問題もあいつら一人一人から出題されるのか？

それに妖怪に関するって事は他は神とか人間に関する問題が出るのかもな。

「それでは問題！」

騒がしかった会場は静まり、俺達回答者も思わず身構える。

さあ、どんな問題だ……！

「最近巷を騒がせている屍生人<sup>ゾンビ</sup>四人衆の四人の名前はページ、ジョーンズ、ボーンナム、あと一人は誰？」

「「誰!?!」」

ヤーウエとユダの声がハモった。

いや、ホントこの問題って……

「知らないの？ 一人ずつだとただの雑魚だけど、四人揃った時はそのコンビネーションの良さから中の下並の厄介さを持つと言われているらしいわよ」

「中の下って結局雑魚じゃん！ ヒーロー賞を取れるぐらい上の上な俺様がそんな木っ端知るわけないだろ！」

「そもそもどこの巷ですか！ そんな奇妙な巷、一般人は知らないですよ！」

「はいはい、わからなくても答えてねー。まあ間違ってたら当然点はあげないけど」

二人の抗議は残念ながらすげなく払いのけられてしまった。

そりゃやっぱ普通の問題が来るわけもないよな。わかってたよ。

「じゃあ三人共フリップを出しなさい」

俺達三人はそれぞれの答えをフリップに書き、机に出した。

「それじゃあ順番に見て行くわよー。バカ親父選手『サタン』、レンカ選手『プラント』、ユダ選手『ペトロ』！ さあルーミア、正解は！？」

「正解は……………『プラント』よ！」

「正解者はレンカ選手！ まずは一ポイント先取よー！」

——ワーワー！！——

——ネ申しっかり！——

——すげー、あってる！——

——ユダてめえ後で殺す！——

「それじゃあ次の問題に」「ちよつと待て!!」「もう、なに?」

どうやら二人には異議があるらしい。言いたい事はわかるけど。

「なんでお前はそんな事知ってるんだよ!」

「これ打ち合わせとかしてませんよね!」

「たまたまだよ」

別に打ち合わせなんかしていない。偶然俺が知っている内容だっただけだ。

でもとりあえず後で石仮面の存在を調べておこうと思う。絶対に。

「しかし流石は錬火ね。こんなコアな問題を答えられるなんて」

「その強さの秘密は『メシアサイダー』! 今なら売店で売ってるからみんな買って行ってね!」

「さりげなく宣伝したて赤ちゃんも流石ね」

宣伝本部長だもんな。

「それはともかく、続けて第二問よ」

「次はあたしからの問題だよ!」

む、てゐか。



不安だなあ。あいついったいどんな問題を出して来るのか……神に関する問題とかか？

……いや、もっと捻られた問題が出る気がする。

「それじゃあ問題！　今まで出されて来たイエス関連グッズの中で一番高値がついた物の名前を答えな！」

「「わかるかつ！」」

今度は俺とユダがハモった。

「これは何の問題だ！　『神に関する』とかじゃないのか!？」

「人の業に関する問題だよ？」

「内容が罪深すぎんだよ！」

「関連グッズってかなり多いんだけど！　その中から一つを!？」

「うん、当ててね」

というか俺は表で売っている物すら全部把握しているわけじゃない。これは圧倒的に不利だ。

しかも聞いた話では『オークション』なる物も存在するとか。てゐの問題では『一番高値がついた物』と言っているから、おそらく表で売っていた物ではなくそのオークションでの落札価格が答えなんだろう。

値段まで当てろと言わないのはありがたいが、どちらにせよ正解する事は難しそうだ。

……仕方無い、俺が知っている物の中で一番高い物を回答するしかないか。

「はい、みんな答えをどうぞ。えー、レンカ選手『1／1 イエス等身大フィギュア』、ユダ選手『イエス！ 抱き枕』……バカ親父選手ー、早く出さないと反則よー？」

なに、ヤーウエはまだ出してないのか？ 無回答とは思えないんだが……

「ふっふっふ、実にあさはかだなお前ら」

「なんだと？」

「というかこれも普通は知らないでしょ……」

なんだこいつ、やけに自信ありげだぞ。まさか答えがわかっているのか？

「あんまり勿体振ってたら失格に……」

「答えはこれに決まってるんだろ……」

失格を言い渡される寸前でヤーウエが出した答え、それは……

「バカ親父選手『イエス使用済み枕カバー』……」

なによそれー！？　という声が聞こえて来た。

いや、本当になんだそれ！？

「じゃあてゐちゃん、正解は？」

「正解は『イエス使用済み枕カバー』！　その変態が正解だよ！」

ってマジで売ってたのかよ！？　しかも枕カバーって……てゐ、自重しやがれおい！

「ちなみに金貨五百枚で買われて行ったよ、その変態に」

「その通り！　こいつは俺が激闘の末に全財産をかけて手に入れた超レアアイテムなんゴハアツ！」

槍が二本目だと！？

最初の槍はステージの隅に置いてあるというのに、ヤーウエの腹にはどう見ても同じ見た目の槍が刺さっている。

まさかあの槍は量産型なんだろうか？

「ぐふう……他のゴミムシ共に変な事をされないようにお父さんが買っておいただけなのに……」

「じゃあそれはもう処分したのか？」

「んなわけないだろ？　ちゃんとケースに入れて保管してゲハアツ

!？」

ついに三本目が来た。やっぱり量産型か、もしくは投影してんじゃないだろうか。

というか、男イエスだってここまで滅多刺しにされてないと思うぞ。この世界ではこいつが身代わりにでもなってんのか？

「はい、じゃあ第三問イクわよー」

「お前今字がおかしかっただろ。あと仮にも自分の上司が刺されてんのにスルーすんなよ」

「ツツコミが他にいると楽だなあ……」

「あっ、てめえなに楽しようとしてやがる！ お前もツツコミ頑張れよ！」

「イヤですよ！？ いいじゃないですか、レンカさんの方が慣れてるんだし！」

「なんかツツコミ係押し付け合ってる……」

うるさいぞルーミア。なんならお前もツツコミ係にしてやろうか！  
？ ツツコミもある程度出来るって事はわかってるんだぞ！

「話が進まないからさっさと問題出すわよー」

「「お前のせいだよ！」」

「やだ、二人の男が私の為に争ってるのね？ 女冥利に尽きるわー」

「お前の『せい』だっつってるだろ！」

「むしろ喜んで譲り合ってるんですよ！」

「はいはい。じゃあ第三問」

あつ、てゐの奴あつさりと流しやがった！ そりゃあお前はボケ係だもんな、他人事だと思いやがって！

「第三問はこの人から！」

「よ、よろしくお願いします！」

なぬ、マリア？ ここはガブリエルじゃないのか？

そもそもこんなイベントに出て来るとは珍しい。お前ら無理言っ引っぱり出して来たと言わないよな？

「えっと、第三問は愛に関する問題です」

愛……また妙なチョイスを。

愛って言うとかアガペーとかエロースとかの問題か？ いや待て、相手が比較的まともな人だからって油断は出来ない。どうか普通の問題でありますように……

「では問題ですっ！ ……『愛』って……なんですか？」

「「それ問題!?!」」

全員でハモったぜ!

「というか個人的な質問じゃね? それって!」

「しかもいやに根本的な疑問だし……これ答えあんの?」

「マリアさんなんでそんな問題にしたんですか!?!」

「え、だってがーちゃんは『回答者はどんな無茶振りでも答えてくれるのよー』って……」

芸人か! 余計な事を吹き込んでんじゃねえよ!

「ちなみにこの問題は明確な答えがないから、観客のみなさんを含めたこの場の全員から最も賛成を得られた人が正解になるわ」

「「答えがないのかよ!」」

「ひうつ……フワツとした問題でごめんなさい……」

くっ、『愛』……『愛』ってなんだ!? わからん、マジで! なんか考えれば考えるほどわからなくなる! というか愛に飢えているわけでもないのになんで俺はこんな事を考えているんだ!?

……仕方無い、俺はこの回答で行くか!

「じゃあ見て行くわよー? バカ親父選手『躊躇わない事』、レンカ選手『命と今を引き換える事』……どいつもこいつも熱いわねー。

それでユダ選手ー？ ほらほら、早く出して」

「愛……愛は……愛とは……！」

なんかすげえ葛藤してる……

でも考えてみれば今のところユダだけが点を取れていない。このクイズがいつまで続くか知らないが、ここで点を取れないとこの先厳しいだろう。このまま敗北が決定する事もありえるし、悩んで当然なんだが……

「ぼくの答えはこれですッ！！」

出したか！

いったいどんな答えなんだ？

「ユダ選手の回答……『ぼく達みんなの心にある御子さまへの想い』  
！！」

「そ、それはッ！？」

「なっ、なにイイイイイ！？」

俺とヤーウエは驚愕した！

この回答は問題に対する回答ではない！ この回答はッ！

「はい、じゃあ正解だと思う人に拍手をしてね。もちろん二人以上はダメよ？」

算出方法までフワツとしているが、それはどうでもいい。

しかしこれだと……

「じゃあバカ親父選手」

……

「レンカ選手」

……

「最後に……ユダ選手」

——パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ  
パチパチ！——

……そう、当然の結果だ。

あの回答は問題の答えではなく、観客への質問！

ユダはこう問いかけたんだ、「お前達は御子さまを愛しているか？」  
と。「お前達の熱い想いは『愛』ではないのか！？」と！

そんな事を言われればファン達はユダに同意せざるを得ない！ それを否定する事とはすなわち今の自分達を否定する事になるからだ！

奴らのファンとしてのプライドを刺激する回答、見事だユダ！



「いやー、圧倒的大差でユダ選手の勝利ね」

「変態の回答はありきたり、鍊火の回答はなかなか熱い回答だったけど……」

「観客が一番同意出来るのはユダの回答ってわけね。この問題の正解とは『観客の同意を得られる回答』だったって事よ」

なに真面目に解説してんだお前ら。今更だぞ。

しかし本当にファインプレーだった。

しかも……

「つまりゆうくんもやっぱりいっちゃんを愛しているって事ですネ！？」

「うぐっ!？」

マリアもそこに気付いたか。

そう、これってある意味告白しちゃったようなもんだよな。つまりお前はイエスを愛していると。

……ステージの傍でバタバタと暴れる音が聞こえる。どうせイエスが真っ赤になって恥ずかしがってるんだろうな。

「さあ、ここまででなんと全員が一ポイント持ち！ 面白くなって来たけど……残念ながら次が最終問題よ！」

次が最後か。

確かにいい勝負になっている。おかげで勝負の行方がわからないな。内容がアレなんだけど。

「最終問題は私から、命に関する問題よ！」

ここでガブリエルか！

絶対にまともな問題じゃない。というかどんな問題か見当がつくし。命に関するとか言っておきながら、どうせセクハラ問題出す気なんだろう！？

「それじゃあ問題！」

それでも一縷の望みをかけたい！　どうか少しはまともな問題でありますように……！

「子供はどうやって作るでしょーか？」

「「ほらきたあ！！」」

俺とユダ、息ピッタリだな。

が、それは置いといて、やっぱりそうだったよこいつの問題は！  
とんでもない事聞きやがった！　大勢の前でこれを答えろってか！？

「なんだ、簡単じゃねーか」

「答えは簡単でも答えるのは難しいだろ！」

「ほらほら、早く答えてねー？」

ぐっ、ニヤニヤしやがって、後でおぼえてろ！？　しかしまずはこの問題をどうにかしないと！

ここで目をつけるべき所はこの問題はさっきの問題の様に曖昧な物だって事だ。

『人間の子供』と限定されているわけでもないし、表現方法がエロい物じゃないといけないなんて事もない。

それを意識しておけばどうにでもなる。『いっぱい』の『い』を『お』に変えるって問題と同じ事だ！　俺はそこらへんの思春期とはわけが違うぜ！

「はい、じゃあフリップをドン。バカ親父選手『男と女が（ピーー  
ー）する』、レンカ選手『交尾』、ユダ選手『エッチな事』  
！」

ヤーウエの野郎やりやがったあああ！？

「個人的にはユダ選手の答えが好きなんだけど、より正確な答えを書いたという事でバカ親父選手の勝ち！」

なにっ！？

「ガブリエル、俺は！？　これ明らかに正解だろ！」

「無難すぎてつままないわ」

「つまるつまらないの話じゃねえよ!」

俺達もヤーウエみたいに躊躇いなく答えればよかったってか!?  
出来るわきゃねーだろお!!

「ははは! こんな事も答えられないとは、お前らまるで思春期男子だなあ!」

イラッ☆

と来たが……お前はある意味負けているぞ。

「ガブリエル以外の女性陣の目、見てみ? どっかの名探偵が推理する時みたいな目をしてるから」

「……目え怖っ!」

当たり前だ。オープンになればいいってもんじゃないしデリカシーがない奴がいい感情を持たれるわけがない。

所詮お前は紳士にもなれないただの変態なんだよ。

……しかし勝負に負けちまったのは事実だな。

これはやばい。何がやばいかっていうと、まずユダが負けたからイエスが天に帰る事になっちまったって事だ。……まあ今はそれは置いておく。

当面の問題は別にあるのだ……

「じゃあ負けた二人にはエア楽器してもらうね」

「「ノオオオオオオ!?」」

これだ!

このままでは黒歴史が増えてしまう! くそつ、神になったってのにこの程度の危機も切り抜けられないのか……………ん?

「てゐ、『道具』も『能力』も無しなのか?」

「そうだよ、それで一時間ね。ふっふっふ、ザマア!」

何を勝ち誇っているのか知らんが…………俺は気付いてしまった。

ふっふっふ、勝つのは俺だよ、てゐ。

「ユダ、エアドラムは俺にやらせてくれ。エアギターよりはやりやすい」

「はぁ、別に構いませんけど…………ぼくにとったらどっちも同じだし…………うう…………」

落ち込んでるみたいだが…………悪いな、俺はお前を裏切る事になるかもしれない。だけどただ羞恥を受けるだけの演奏はしたくないんだ。

「それじゃあ二人共、初ライブ頑張ってねー!」

ナメるなよ! この俺にかかればたとえエア楽器だろうが問題ない

んだ！

そう、俺は……『空気を叩く』！！

——パパパン！！　パンパン！　バーン！！——

「な、なんだってー！？」

「ああ、錬火なら道具も能力も無しでそれくらい出来るわよね……」  
ユダもこっちを呆然と見ている。悪いな、こんな裏切り方をして。

ちなみにエアギターでも指で同じ事をして音を出せたんだけど、こっちの方がやりやすかったからエアドラムを選んだ。

——うおおお、すげー！——

——人間業じゃねえ！——

——ユダ帰れー！——

会場也大いに盛り上がり、俺は観客の期待に応える為に更に腕を振るペースを上げたのだった。

……さて、イエスの件はどうしようかなあ……

## 第二十七話：孤独な決闘者達（後書き）

イエスさんほとんど出番がありませんでしたね。

まあそれはいいとして、次がこの章の最後の話になる……かもしれ  
ません。どうか最後まで付き合ってやってください。

それでは最後に皆さんに問います。

『愛』って……なんででしょうね？

## 第二十八話：また会う日まで（前書き）

これで連投は最後になります。

漸くこの章が終わり、次の話が……



## 第二十八話…また会う日まで

あのクイズ大会が終わって、俺達はイエスの家に戻って来ていた。

そして今は話し合いをしている所なのだが、イエスは大会の結果を思い出してひどく憤慨している。

「ガブリエルっ、ユダ負けちゃってるじゃない！」

「うーん、もう少し頑張ってくれてたらねー」

「えっ、これぼくのせい！？ ぼくかなり頑張った方なんだけど！」

「結果が全てよ」

「過程が難関だらけだったのに！」

うん、流石に全責任を擦り付けるのは可哀想だと思うんだ。

というか問題出す側のお前らがユダにとっての難問ばかり出してどうすんだよ。

……なに、出来レースはいけない事？

だからなんで中途半端に真面目になるんだよ！ 言ってる事は正論だけど！

「それに私だって被害者よ？ ゆーくんがラブパワーできっと優勝

してくれると思って賭けてたのに、結局一問しか正解出来ずに負けちゃったんだから」

「賭け！？　どういう事ですか！？」

「いやー、同僚達にイベントの事を話したらあれよあれよという間に天界全体を巻き込んだ一大ギャンブルに。

ちなみにゆうくん凄いのよ？　ほとんどの人が主かレンカさまに賭けちゃったからゆうくんの倍率が五百倍以上に……」

「あんたらお願いだからもう少し慎んでくれませんか！？　しかも揃いも揃ってぼくをバカにしてるし！

……ちよつと待ってください、あんたがあイベントの前にぼくらお金を借りて行ったのって……！」

「うん、元金あれ」

「今すぐ返せえええ！！」

「ちよつ、ゆうくん顔が怖いわよ！？」

いつの間にそんな事になっていたのだろう、まったく気付かなかった。というか遊んでないで仕事しろやお前ら。

「ちなみに借りたお金の一部はそこでふんぞり返ってる人に行ったわ」

「なんで!?!」

「そりゃあ金欠だからここで一発当てようと思ったからじゃない？

レンカさまに賭けてみたいだけ」

「変な商品買うからだよ！ 脱却手段がギャンブルってただの駄目男じゃん！ しかも結局外してるし！」

すげえ、三連ツツコミだ。流石はユダ、鮮やかだな。

[illegible]

「おわつ、突然なんだよ？ 狂ったのか？」

「確かに賭けで外したのは痛かったが、そんな事はどうでもいい！これでイエスに『ファザー』と呼んでもらえるし連れて帰れるしユダは地獄に落とせるし！ やーいユダのバーカバーカ！ ザマーミロ！！」

「こつ、こいつムカつく……！　ってなんでぼくが地獄行きに！？　そんな話してませんでしたよね！？」

「娘にゲスな感情を抱くからだ、この万年有罪男が！ あとお前が死ねば借金も無しだ！」

ちよつと待てや、俺も聞いてないぞ。しかも凄く小物臭いし。

つまりあれか、このままだとイエスが天に帰ってユダは地獄行きになるって事か？

……史実通りじゃん。

あれ、どうしよう。心情的には地獄行きは勘弁してやってほしいん

だけど、でもこの世界の地獄ってかなりユルユルだしなあ……確かに安全な所ではないけど、地獄に行っても主人公パワーでなんとかなりそうな気がする。

「地獄行きなんてさせるわけないでしょ、この変態っ！ あんたが二回死ね！」

「変態じゃない、お父さんだ」

「うっさい変態！ ユダは渡さないわよ！」

「御子さま……」

「かつ、勘違いしないでよね！？ あんたがいなくなったら誰が私の愚痴を聞いてくれるのよ！」

「……そうですよね。それはぼくだけの仕事ですもんね！」

お前ら本当にラブラブだな。なんか見てて砂糖吐きたくなってくる。ほら、他の奴らもコーヒー飲んでるし。……なに、銘柄はなんだって？ 俺が持ってた邪神印のコーヒー、『ブルーマウンテン・ティム』だよ。害はない普通のコーヒーだ。

あとガブリエル、なんでお前はカメラで撮っている？ ……後でネタにするため？ お前もいつかイエスに刺されるぞ……

つと、そうじゃなかった。

「ヤーウエ、お前が送る地獄って……」

「こっち側の地獄だな。東の地獄は遠くてめんどいし、説教好きが多くて見つかったら俺が色々言われそうだし……」

煩悩まみれの生き方してるから悪いんだろうが。

しかしこっちの地獄って言う……確かサタンがいたな。あいつユダがフラグを建てれそうな奴なんだよなあ。気に入られれば色々と助けてもらえそうだし、やっぱりあんまり心配する事もないと思える。

……それにこのまま何もなかったとしても、ユダとイエスはいずれ寿命で別れる羽目になるんだよな。今のうちにあの地獄へ行っておけばユダはある意味不老不死になれる。あそこは一応罪人に苦しみを与え続ける場所だから、死なくなるというよりは死ねなくなるってのが正しいけど。

うーん……

「……ユダ、地獄に行ってみるか？」

「えっ!?　なんでレンカさんまでそんな事を!？」

「だってこのままじゃお前はイエスと寿命で死に別れちゃうし。それに今のお前はただの雑魚助だからな、言ってみれば『神の子』のパートナーとしては実力不足だ」

「それでなんで地獄行きの話になるの!？」

「つまり修行しろって事だ」

「「……修行？」」

ユダに修行を薦める事になるとは……これも修行ばかりしてた影響だろうか。修行マニアってつもりはないんだけどな。

「文字通り地獄の特訓をして来って事だ。せめてイエスの隣に立てる実力を身につけて来なよ」

「……………」

まあすぐに返事出来る事でもないよな。

ユダは黙って考え込んでおり、イエスは心配そうにその様子を見ている。

「ちょっと待て！　なんでこいつを苦しめる為の地獄が修行場みたいに言われてんの！？　あとイエスはやらねーよ！？」

「お前は黙ってろや」

「ひでえ！？」

「……さっきから思ってたんですけど、レンカさんってなんでこの人にもそんな態度をとれるんですか？　一応神様ですよ？」

「……えっ、あんた知らなかったの？」

「？　何をですか？」

「ああ、ユダには話してないぞ」

俺とかてるとかルーミアの種族の事はあんまりな。話す必要も今までなかったし。話すタイミングがなかったとも言っけど。

……よし、今話すか。

「実は俺はこいつより偉い神だったりする」

「……はい？」

「そしてあたしは錬火より偉い神だったりする！」

「えっ!？」

「おい嘘をつくな。あ、いや、こいつが神なのは本当なんだが「その神の中でも最も偉いんだ」混乱させる様な事を言うんじゃない！」

「そして私が妖怪よ」

「え!？ えーと……」

「ルーミアも乗るなよ！ ユダが本当に混乱してるだろ！」

「そして俺様が神」

「お姉さんは大天使よー」

「うるせえお前らあああ!！」

あーくそ、めんどくさいな！ もういい、『キング・クリムゾン』

だッ!! 『説明をした』という結果だけが残るッ!

「実は、カクカクシカジカなんだよ」

「へー、そうだったんですか」

ん? 俺のキング・クリムゾンになんか文句でも? 伝わってたらそれでいいんだヨ! クリムゾンだヨ!

「でもそれなら知り合いのよしみで便宜を図ってほしいなー、なんて……」

「と言っても、お前一応負けちゃったろ?」

「うっ……」

「だったら甘えちゃ駄目だ。これはお前らの問題だし、イエスと付き合うには実力不足ってのも確かだしな」

「はい……」

勝負の内容はかなりひどいもんだったけどなあ。いや、それでも勝てなきゃイエスに相応しくなかったって事か?

……やっぱり修行してもらった方がいいな。議会を力づくで可決出来るぐらいには。

でもこいつはツツコミが巧いだけのただの人間なんだよな。地獄でもフラグを立てるどころか雑魚戦で負けてそのままゲームオーバーになりかねん。



……しゃーない、たまには神らしい事するか。

「ユダ、そう落ち込むな。知り合いのよしみでサービスくらいはしてやるから」

「サービス……ですか？」

本当は神の仕事じゃない気もするんだが、俺が最初に知り合った神があいつだから結構印象に残ってるんだよな。

ま、俺にとっての神らしいサービスって事だ。

「今からお前の中に眠っていた力を開放してやるから、それを使いながら地獄で鍛えろ」

「えっ、なんでいきなり厨二的な話に？」

「つまり錬火があんたの黄金の右手とか鬼の左手とか韋駄天の足とかカトブレパスの瞳とかの封印を解こうってわけよ」

「ぼく病院とか行った方がいいんじゃないですか!？」

「そこまで理不尽な身体じゃねーよ……」

どんだけ不幸な過去フラグを立ててるんだ。というかもうそいつただの人間じゃねえよ。まず間違はなくSOS団に引き込まれるレベルだよ。

「そうじゃなくて、お前の潜在能力的な物を引きずり出そうって事

だ」

「イマイチ曖昧で不安が残るんですけど……それをするならばくは少しは強くなれますか？」

「もちろん」

「……………ならお願いします」

「そうか？」

あんまり考え込む事もなかったな。

まあ現状がかなり崖っぷちだし、このままじゃ何も出来ずに終わってしまふ。それなら自分に出来る事をしようと思ったんだろう。

……これも青春って奴かなあ。ま、諦めるよりは行動した方がずっといい。お前も相手が誰だろうと諦めずに頑張れ。

「では早速……」

むむむ、とユダの能力を引き出して……うわ、なんじゃこりゃ？

「錬火、どしたの？　なんかあった？」

「ああ、その……」

「潜在能力が貧弱だった？」

その言い方はひどいような……そうじゃないんだ。

能力はあったしかなり強力なんだけど、なんと言うか別の問題が。

こいつの能力って……

「ユダ、よく聞け。お前の能力は……」

「……はい」

言っているのか。……いや、言うしかあるまい。

「お前の能力は……『腐らせる程度の能力』だ」

「……………え？」

ユダの漏らした一声を最後に、シーンという静寂が場を包む。

うん、少なくとも主人公が持つ能力じゃないな。絶対に敵の、それこそ幹部級の敵が持ちそうな能力だ。このユダには非常に似合わない能力と言えるだろう。

「……………ぶふっ」

おっと、ヤーウエが吹き出した。

「ぶははははは！！ 『腐らせる』！？ モロ悪役の能力じゃん！  
腐葉土でも作る気ですかあー！？ あひやひやひやひや！！」

こっ、こいつウゼエ……

「よかったじゃん、生ゴミ出す時は便利だよ？ 畑に優しい能力だし。……ぷっ」

「お前も笑ってるだろ。あとこれ加減を間違えたら土も死ぬぞ？」

「でも闇を使う主人公ならいるけど、腐らせるってのはねえ……」

「巧く使ったらお酒とかできないかしら？」

「流石にこれで作ったお酒は飲みたくないですよ……」

周りの奴らもイエスとマリア以外は皆笑ってる。でも確かにこれは意外だよな！。

「ちょっと、あんたもう少しまともな能力なかったの！？ こう、光を操る程度の能力とか！」

「無茶言わないでくださいよ！ ぼくだって好きでそうなったわけじゃないんですから！ あとその能力もなんか厨二臭くて嫌です！」

まあこればかりは仕方が無い。能力なんて選べないし。でもそれなりに強力だからいいじゃないか。修行したら強くなれそうな能力だよ。

「やーいやーいユダの腐り男ー！」

「超越してと……ほっ」

「ぎゃああああ！？ 俺の服の袖が腐り落ちて行くううう！！ 袖無し神父服とか超ダセェよ！？」

「と、こんな事もすぐに出来るようになる」

とりあえずヤーウエを使った見本を見せておいた。

もっと強くなれば物だけじゃなく人体にも干渉出来るし、かなり強力な能力って事はわかってもらえたかな？

「んじゃお前もやってみ？ 『的』に向かって。どうせ死なないし」

「生き物相手にこんな能力使うってすごい抵抗あるんですけど……わかりました、やってみます」

このバカって生物かね？ もっと格が違うと思うけど……どうでもいいか。

「それでは……腐れエツ！！」

ユダがその言葉を言った瞬間……

「ぎゃあああ！ 今度は俺のズボンの股関節辺りから下が腐り落ちたあ！？ これじゃサングラスかけたらハードなゲイじゃねーか！！」

ヤーウエの言う通り、今度は奴のズボンが短パン並の短さになるまで腐り落ちてしまい、見るに堪えない姿になってしまった。ボケならまだしも町中で見かけたら間違いない変質者として通報されそうな恰好だ。

ユダは何を思っこの惨状を作り出したのだろうか。

「なんか本当に悪役の能力ですけど……これでなんとか頑張っています」

「うむ、精進しろよ」

よし、久しぶりに神らしい事をしたぞ。

んじゃ次はイエスの件だが……

「イエスは天国に行くのか？」

あそこで「フオオオオオオオ！」と騒いでるヤーウエと一緒に。

「……ユダは修行に行っちゃうのよね？」

「……はい、そうします。そして強くなってぼくは帰って来ます！  
あなたの隣に立てるように！」

「……バカ」

おい、お前らだけでコーヒー飲んでんじゃねえ。俺にも寄越せ。あ、  
さんきゅーマリア……って甘いぞコレ。……え？　これでブラック  
？　こんなに甘ったるいのに？

「ユダがそう言うんなら、私も天国に行ってするべき事をしてくる  
わ。どうせいつかは行かないといけなかったんだし」

「ゆーくんがいなくなったら地上にいる意味もないものねー」

「ちょ、ガブリエル!? 何を言って……」

「いっちゃん!」

「え、なにお母さん?」

おや、マリアが大声を出すなんて珍しいな。何か伝えたい事でもあるのか?

「いっちゃん、自分に正直になっていいんだよ? しばらく会えなくなっちゃうんだから、伝える事は伝えておかないと!」

「つ、伝えるって……何を?」

「愛だよ!」

「あっ……!?!?」

確かにこれはいい機会なんだろうか。

ユダもこれからキツイ修行になるだろうし、ここで伝える事は伝え合っておいた方が励みにもなるだろう。

というかお前らさっさとくつつけや。もう御子とか人とかどうでもいいから。

「……………そうね、そうよね」

「みつ、御子さま?」

おお、ついに決心がついたか。

よし、ここは若い二人に任せて俺達は退散しておこうじゃないか。

「錬火、それ年寄り臭いよ……」

……確かに。でも今は席をはずしておこうぜ。俺達は邪魔者だしな。

「おい待て、まさかお前イエスとチヨメチヨメする気じゃ……」

「当て身<sup>バキッ</sup>」

「ぐっ……（ドサッ）」

うるさい奴は黙らせた。それじゃあ俺達はこれで……

「御子さま？　ちゃんと避妊はしないと」  
「当て身<sup>ビシッ</sup>」  
「うっ……（ドサッ）」

せっかくのムードを壊すなセクハラ天使。

さて、気絶した二人を肩に担いでつと。

「よし、みんな行くぞー」

「暴れて物壊さないようにねー」

「はぁ、なんか羨ましいわね」



「あつ、ゴムならあそこの机の中「起きるのはええよ（ビシッ）」  
うっ……」

「いっちゃん、しっかりね！」

そうして俺達は真っ赤になった二人を残し、家を出たのであった。

……ま、二人共ハメを外しすぎないようにな。

「じゃあ行ってこい、二人共。イエスもユダも頑張れよ」

「ありがとう」

「ありがとうございます」

翌日。

早くも二人は出発する事になる。ヤーウエとガブリエルも一緒に行くんだが、ユダだけは途中の地獄が目的地だな。そして俺達は揃ってそれを見送りだ。

昨日二人に何があったかった？

それは知らないけど、一応健全であつたらしいって事なら知ってるよ。ま、二人ならそんなとこだろうな。流石にそういう展開はまだ早いだろ。

「くそう、俺はタクシーのおっちゃんじゃないんだぞ……」

「お前が連れて行くって言い出したんだから責任もって連れて行けや」

「だって地獄まで寄らなくちゃいけないんだぜ？　めんどいなあ……なあユダ、考え直さね？」

「だからあんたが言い出したんでしょが！　それにもう決まった事なんですからね！？」

自ら地獄に行こうとする人間も珍しいよな。薦めたのは俺なんだけど。

「いっちゃん、元気でね……？　神様稼業がんばるんだよ？　……ううう」

「いや、お母さん？　時間がきたらまた会いに来れるから悲しむ事でも……」

「まあぶっちゃけ御子さまにはそれほど仕事はないし、どうせすぐに暇ができるわよ」

「あら、じゃあその時は復活ライブとかするの？　未消化の予定ならまだ残ってるけど」

「……ライブって疲れるからあんまりしたくないんだけどね」

まあユダと違ってイエスは時間が空けばまた戻って来れるからな。  
ガブリエルだって仕事サボって地上に来るくらいだ、またすぐに会えるだろう。

……どうしよう、遠距離恋愛出来るよう、イエスとユダに餞別に携帯電話でもあげようかな。二人も喜ぶと思うし。……別にそれくらいやってもいいか。

「二人共」

「なに？」

「なんですか？」

二人を呼び、その道具を渡す。見た目はまんま携帯電話でどこにいても電波が届くという優れものだ。

「これを餞別にやるよ。これがあつたらお互いの声がいつでも聴ける」

使い方を説明すると早速二人は離れて携帯を使ってみている。でもそれ普通に声が届く距離だからもうちょっと離れた方がいいぞ？  
……ま、別にいいけどな。喜んでくれてるみたいでよかったよ。

「はあ……んじゃ行くぞー……」

「辛気臭い声出さないでくれる？ ……それじゃあ皆、また会いま

しょう！」

「レンカさん達もまた会いましょうね」

「まーちゃん、蛇と液体が入った瓶は『ハブ酒』ってお酒だから捨てないでね？」

一人どうでもいい事を言ってる奴がいるが、いよいよお別れだな。

だけど……

「……ねえ、てゐはまだ来ないの？」

「知らん、あいつどこ行っただ……？」

ルーミアが言った通り、てゐの姿が見えないのだ。

おかしいな、今朝は一緒にいたんだが、それから姿が見えないぞ。どっかで道草でも食ってんのか？

「まさかまたどこかで変な物売ってるとかじゃないでしょうね……」

「今それをする必要もないと思うんだが……」

「もー俺やる気がダダ下がりなんだけど……さっさと帰って寝たい」

なんでお前はそんなにテンション低いかな。……ユダを地獄送りにしても借金がなくなりそうにないから？ お前は本当にバカだな……

「いい加減この人もうるさいし、いないんじゃ仕方無いわよ。てゐ

ちゃんとは会おうと思えばすぐに会えるんだから、レンカさまがよろしく言っておいてくれない？」

「悪いな、あいつにはそう伝えておくよ」

まったく、あいつ本当に何やってんだか。

「私ちょっと家に行ってみるわ。もしかしたら寝てたりしてるかもしれないし。いなかったらすぐに戻って来るわ」

ルーミアは返事を待たずにてゐを捜しに行った。

それなら戻って来るまで皆には待っててもらおうかな。

「すまん、ルーミアが帰って来るまで……」

「私は別に構わないけど……」

「早く帰ろうよー……」

「あーもう、うっさい！ 五分ぐらいじっとしてて！」

「父親と娘というより母親と大きな子供って感じだなあ」

「やっぱりお見送りするなら皆揃ってがいいですもんね」

ホントすまない、皆。

――三分後――

「お、戻って来た」

ルーミアが戻って来たみたいだ。

しかしてゐの姿は見えず、なぜかルーミアの様子は焦っている様に見える。別にそんなに待ってないから大丈夫だぞ。

「鍊火、大変！」

「……どうした？」

第一声がそれだった。

……まさかてゐに何かあったのか？ どうも穏やかな雰囲気じゃないぞ。

「これを見て。家の扉に貼ってあったの。しかも家の中は散らかってて何かが暴れた痕跡があったわ」

「……………」

本当に穏やかじゃない。これは本格的にてゐに何かあったな。

ルーミアが渡して来た物は一枚の紙。文字が書かれている『手紙』だ。

そこにはこう書いてあった。

『貴方の大切なウサギさんを預かっています。

返してほしかったら私を見つけてご覧なさい？』

.....ほう。

## 第二十八話…また会う日まで（後書き）

はい、急展開です。この小説にはよくある事ですが。

いったいてゐるを攫ったのはどのどいつなのか！ 錬火は犯人をどうするのか！

次回、『世界最後の日』。そして終焉は訪れる……（嘘だけど）

あとこれから更新速度が下がります。

リアルの都合って奴です。おかげで執筆にかけれる時間が減ってしまふ……まだ東方らしい事もしてないのに！

それでも時間を作ってちょこちょこ書いていきますけどね。

それでは皆さん、いつになるかはわかりませんが、また次回もよろしく願います！



## 第二十九話：誘拐犯の憂鬱（前書き）

間に合った！

リアルの都合と言いつつ、月が変わる前にもう一つ投稿する事が出来ました。あんまり話は進んでないですけどね。

次に更新出来るのはいつになる事か……

## 第二十九話：誘拐犯の憂鬱

消えたてると残された手紙。そこに書かれていた内容は

『貴方の大切なウサギさんを預かっています。

返してほしかったら私を見つけてご覧なさい？』

という物だった。

……てゐを連れ去っただと？

ふふふふ……

「はははははははー!!」

「「「「「（ビクッ）!」」」」」

随分とナメたマネをしてくれるじゃないかア……

ふーん、てゐを………へえー………アハッ☆

「全殺しかなア……?」

「「「「「ひiiiiiiiiiiii!」（ガタガタガタ）」」」」」

どうしたんだ皆……？ そんなひきつった悲鳴をあげて……

「エフツエフツエフツ……」

「やっ、やばい！ てゐに危険があつたせいで鬼モードに入つたわ  
！ こうなったら世界中のグラップラーが集まっても止められない  
！」

「よーしお前ら、大いなる旅路に出発だー！！」

「そうね！ 善は急げって言うし、早く行きましょう！」

「いやあ地獄ってどんな所だろうなあ！ 早く行つてみたいなあ！」

「私も早く仕事をしないと！ 今日頑張るわよー！」

「お願いですからこの人を置いて行かないでくださーい！！」

「「「我が身がかわいい！」「」」」

「「裏切り者おー！！」」

イエス達はあつという間に去って行ってしまった。

何を慌てていたかは知らないが、何者かのせいでてゐも見送りに来れなかったな……

「え、えーと、錬火？ とりあえずてゐを連れ戻しに行きましょう  
？」

「いゝい事言うなあルーミアアア……」

「お願いだから普通に喋って……」

む、いかんいかん、落ち着かねば。平常心を保つんだ。

ルーミアの言う通り、まずはてゐを迎えに行こう。愚か者もきつとそこにいるだろう。

しかし情報がこの手紙だけというのは……

「ちなみに場所を記した紙とかは？」

「その手紙以外に手掛かりはなかったわ。もしかしたら家の中に何かあったかもしれないけど、散らかってて探すのに時間がかかりそう」

「片付けするの私なんですか……？」

すぐ元通りにしてやるから。

まったく、こういうつもりだ？ 鬼ごっこやかくれんぼでもしているつもりなのか……あるいは俺ならわかるだろうから書かなかった、探すのに時間をかけてほしかった、なんて事も考えられる。

だがやる事は一つだ。

「てゐの居場所なんざすぐにわかる。行くぞルーミア！」

「(……どこの誰かは知らないけどご愁傷さま、親バカの錬火に喧

嘩を売るから悪いのよ」

さあ、その面拝ませてもらうぜ！

「えっ、行っちゃうんですか？」

「ああ、てるも心配だし、俺達も行く事にする。家は分身に片付けさせておくよ」

「また雑用か、本体」

「また雑用だ、分身」

「よ、よろしくお願いします……」

それじゃあ行くか、てるの元へ。そして愚か者に制裁を与えに……

S i d e    ? ? ?

あいたたた……

あのウサギ、予想外に強かったわ……この私が一撃でやられるなん

て……

一人になった所を襲ってさっさと連れ去ろうとしたんだけど、すぐに気付かれて戦闘になってしまった。

その内容なんだけど……私が何かをするより先に殴られて無様に吹き飛んだわ。ものすごく痛かった……

反撃に能力を使って干渉しようとしたら神力でレジストされるし……ねえ、ちよつと強すぎない！？　今までそんな事された憶えないわよ！

まったく、見かけに騙されたわ。あんなに強いってわかってたならもう少しやりようもあったのに！

それでも一応目的の誘拐は成功したんだけど……

「うわこれめっちゃマズッ！　シェフを呼びな！」

「それでも一番できがいいニンジンよ！？　何が不満なのよ！」

「鍊火がくれるニンジンに比べて味が薄いしまろやかさも無い、野菜のみずみずしさもないし口に残るエグ味がキツくて食べたくなくなる。そもそも野菜は健康に優しい食物で新鮮さがウリになるけどこのニンジンは新鮮さが足りないし健康に良さそうとはお世辞にも思えない上に……」

「なにそれ、不満だらけじゃない！？　どんだけ舌が肥えてんのよ！」

「ふっ、未熟者めが!!」

「なんかムカつく……!!」

好物らしいニンジンで簡単に釣れたと思ったんだけど、いざどこかの農家から借りて来たニンジンを与えてみれば……

「これは形になってない! これはベツタリ土が付いてる! これは……中に虫がいるね!? ……ほらあ!!」

「好き嫌いせずに食べたらいいでしょ!?!」

「これは選別していると言うんだよ!」

文句ばかり言うし、今もニンジンの山の中から選別と言って気に入らないニンジン捨てている。

私が言うのもなんだけど、もっと食べ物は大切にきなさいよ!

「……………はあ」

思わず溜め息が漏れた。

奴の呼び出しだって何事もなければすぐに呼び出せたのに、このウサギのせいで予想外の負傷や妖力の使用をしたからあんな方法で時間稼ぎしないといけないハメになった。あそこからこれだけ離れていればこの場所に気付く事はないだろう。

そして万全の体調になったらいよいよこことは違う場所に呼び出し、このウサギを人質にして奴を……

でもよく知らないんだけど、お供がこれだけ強いのなら奴はどれだけ強いのかしら。パツと見平和ボケした神なんだけど……私大丈夫かしら？

いやいや、それでもこの戦いで勝って喰らってやれば、私はもっと強くなれるわ！ 予定通りこのウサギを人質にすればいいんだし、勝算はある！

「そこのガキンちよ、他にニンジンはないの？」

「あなただって見た目はガキでしょ！ とうか背中にニンジンの山があるじゃない！」

「これは審査を通れなかったニンジン。言わば安値で買い叩かれるワケありニンジンだよ」

「そのニンジン自体相当珍しい物よ！？ それ以上の物なんて知らないわ！」

「ふう……これだから世界を知らないお子ちゃまは……」

「ムキーーー!!」

ぶん殴ってやりたいけどこいつは私より強いし、これ以上余計な事で力を消耗するわけにはいかない。

早くコンディションを整えて奴に勝って、用済みになったこいつも殺してやる！



その為には今はじっと我慢だ。この苦勞を水の泡にしない為にも私は堪えてみせる……！

「しばらく小松菜食べてないから食べたくなったなあ……ねえ、小松菜ちょうだい」

「……………」

く、くじけそう……

私もしかしたら誘拐する奴間違えたかしら……回復するまでこんな奴の相手をしないといけないなんて……

戦う前から後悔し始めた——その時だった。

——ゾクツ……——

「————ツ!？」

おぞましい感覚が背筋を駆け上がったのだ。

その原因を考える暇もなく、みるみるうちに場が変化していく。

カラッと晴れていた空はあつという間に真っ黒な雷雲で覆われていった。周囲には圧倒的な圧力が生まれ、それこそ妖力も神力も魔力も霊力も、様々な力が渦巻きながら私を押し潰そうとしていた。

私の足がガタガタと震え、立っていられなくなる程の圧力なのに、

なぜこのウサギや周りの木々が潰れてしまわないのかわからない。  
まるでこの混沌が私だけに向かって来ているかの様だ。他のものには目もくれず、一直線に私の方へ。

そして、ゴロゴロと雷が鳴り響く空に一瞬にして直径一キロメートル程の光輝く魔方阵が現れたのを見た時、ついに私は膝をついた。

あのバカげたサイズ。何が出て来るかは知らないが、少なくともこんな混沌を生み出してしまいう様な存在だ、私などあっさりと踏み潰されてしまいうに違いない。

まさか……奴か。

そうとしか考えられない。それ以外に身に憶えがない。

こんな……ここまでの相手だったなんて。

冗談じゃない、覚悟も何もあるものか。これでは殺される為に動いた様なものじゃないか。希望もない戦いに覚悟なんて出来るわけないじゃないか。

しかし後悔してももう遅い。だって私は奴の逆鱗に触れてしまったんだろうから。奴の大切なウサギを連れ去ったんだから……

そしてついに魔方阵からそいつが出て来た。その姿は奴の物ではない。『龍』だ。銀色に輝く龍が出て来たのだ。

……龍なんて初めて見た。

西の方では知らないが、この国では龍は大自然を司る絶対的な存在

だ。一妖怪ごときが勝てる勝てないの話をする相手ではない。私の敗北……いや、蟻を踏み潰す様にただ殺されるであろう事は既に決定しているのだ。

もはや私に出来る事は殺さないでと神頼みする事だけだった。さっきまで神を殺してやろうとほくそ笑んでいた奴が神に嘆願するなんて笑い話にもならない。

それでも私は震え祈りながら龍を見、そしてついに目が合って……

「……………あれ、幼女？」

「……………」

なんか失礼な事を言われた……

## 第二十九話：誘拐犯の憂鬱（後書き）

別に鍊火くんの正体は龍だったとかじゃありませんからご安心（？）を。

さて、この少女は一体何者なのでしょうか？ その答えはまた次回！

### 第三十話：こんにちは妖怪少女（前書き）

実は犯人はあのスキマの人ではなかったのだ！

……という展開になったら暴動が起きる気がする。

意外性はバツグンだろうけど。

### 第三十話…こんにちは妖怪幼女

てゐる居場所を探ったところ、なんと日本にいる事がわかった。かなり距離があるのにそんな所まで逃げる事が出来たという事は、犯人は能力持ちである可能性が高いな。

しかし俺はそんなの関係ねえとばかりにルーミアを連れて転移する。もちろん転移の仕方も普通じゃない。誘拐犯に手っ取り早く絶望を与えてやる為に色々と趣向を凝らした演出をした。

まずは場の雰囲気を整える為におどろおどろしい分厚い雲で空を覆い、いろんな力を垂れ流しにしてプレッシャーを与え、ド派手な魔方陣を作って圧倒し、わかりやすい絶望の象徴である龍に変身して降りて行った。

無駄だらけと言うなかれ、俺は怒ってるんだからこれくらいやるのだ。決して性格がSだからなんて理由はない。

そして俺はルーミアに呆れた目を向けられながらも龍の姿で降臨し、それでは天罰を与えよう……と思って犯人を見たんだが……

「……………あれ、幼女？」

「……………」

そう、相手は幼女だったのだ。しかも涙目になっている。

……あれ、なにこの罪悪感。俺、てゐより小さい子供をいじめてるみたいになってない？

「てゐが言っていたわ……『鍊火はあたしみたいな弱い女の子をいじめる。ペドとはあーゆー奴の事を言うんだよ』って。……あなたはいじめるペドなの？ それともいじめないペド？」

「ってどっちを選んででもペドは確定かよ！？ 断じて俺はペドじゃないからな！」

あのヤロー隠れてなんて事言ってるやがる！ 俺はペドではないしロリコンでもない、ノーマルだ！

てゐをいじめているというのは……まあたまにいじる事ぐらいならあるけど。

「……………」

「おいなんだその目は。お前だってたまに面白がっていじってるだろ」

「……さあ、身に憶えがないわね」

「お前はどこの政治家だ」

つといかないかん、こんな小さい子をいつまでもおっかない姿で威圧するもんじゃない。

なので手早く雲を散らして力を引っ込め、姿も元に戻してその子供の目の前にルーミアと二人で降り立った。

さて、このポカンとしている幼女なんだが……ルーミアと同じく見事な金髪、時代錯誤なフリフリの服、僅かに漂う妖力……なぜか頭に包帯も巻いてるけど、どう見ても妖怪だな。この世界での。

こいつらってどこから服を調達してるのかも謎だよな。ホント不思議な世界だよ、ここ。

「ねえ、この子が犯人なの？」

「たぶんそうなんだろうけど……お前がこの手紙を残したのか？」

例の手紙を取り出してヒラヒラと見せてみる。

「……えっ？」

いや、えっ？　じゃなくて……話聞いてたか？　それとも急展開で頭がついて来れなかったか？

「……って、てゐはそこにいるじゃない」

「……いたな」

「やっほー」

「お前もやっほーじゃねえよ……」

こっちは心配してたってのになんて呑気な……誘拐されたんじゃないのか？　でも怪我はないみたいだし……あとなんだ、その後ろにあるニンジンの山は？



「とりあえず状況説明。三行で簡潔に」

「ニンジンくれるって言うからついて来た」

「一行で終わっちゃったよ！」

しかも何だその理由！ そんな事で知らない妖怪にホイホイついて行くなよ！ アホかお前は！

「てゐ、三行じゃなくていいから正確に説明してくれない？」

「1…一人で家に居たら突然そいつが襲って来た。

2…あっさり撃退してやったらニンジンくれるって言って来た。

3…それに期待してついて来たけどマズいニンジンばかりでうんざりしてた」

「なにこの子、反抗期……？」

「しかもやっぱり内容がアホくさい……」

結局ニンジンに釣られてたってわけかよ。そういうオイシイ話もうちよつと疑ってくれ。純粹なのはいい事かもしれないが単純なのはよくない事だぞ。

「まあ一応事情はわかった。んじゃ次はお前に……逃げんなこら」

「きゃっ!?!」

こっそり逃げようとしていた妖怪の足元にスキマを作り、俺達が目

の前に落とした。これでこいつは俺達三人に囲まれた形になったので、逃げる事は相当難しいだろう。

もつとも、俺がいる限りは逃げられんが。……なんか本当に魔王みたいだな。

「ええっ、今のって!?　なんでえ!？」

「今のは何?　なんか気味悪い目がうようよいたけど……」

「『スキマ』って奴だよ。空間と空間を繋げたと思ってくれ」

ルーミアに見せたのは初めてだな。俺とてゐが長距離移動する時はたまに使ってたけど。てゐに最初に見せた時もどん引きされたよ。

しかしこの妖怪も随分と驚いて……いや、混乱してるな。まあ、ぶっちゃけかなりキモいもんな、仕方無い。

「ええっ、『スキマ』!?　なんで貴方まで使えるの!?　貴方神じゃなかったの!？」

「……なんか様子がおかしくない?　突然囲まれて驚いたって感じじゃないんだけど」

確かに。何と言うか、知らない事を経験して驚いたと言うよりは意外な物を見て驚いたって感じが……

「あっ、たぶん自分とおんなじ事が錬火にも出来たから驚いたんじゃない?　ここまで来るのにスキマ使ってたよ」

「……なぬ？」

おいおいマジかよ。という事はこいつは……

「なっ、なに？　これからどうするつもり！？　まさか私を慰み者にでも……」

「黙れ幼女」

「よっ……！？」

「とりあえず正座しなさい」

「ふっ、ふん、誰が言う事聞くもんですか！」

「てゐ」

「はいよ」

俺が声をかけ、てゐが目の前に置いたのは積み重なった瓦。その数実に四十枚。どっから出したとかは気にしない。俺と長年付き合ってきたこいつなら、これくらいの非常識は既に常識の範疇だ。

そして俺は一番上の瓦に手をのせ……

「ふん」

——バリバリバリバリバリバリバリバリバリ！——

「おおー（パチパチパチ）」

「……まさに鬼<sup>オーガ</sup>ね」

押さえつけるだけで一番下の瓦まで一気に割った。

「……………」

幼女の顔は真っ青だ。

「正座」

「……はい」

これぞ、瓦割りから始まるOHANASHI術。相手にOHANASHIを聞いてもらいたい時に非常に便利な術だ。

……幼女相手に脅しすぎ？

ふっ、何を言うかと思えば……てゐを誘拐した事には変わらないんだから、これぐらいしても構わんだろう？

それに見た目は幼女でも妖怪なんだから年齢はそれなりにあるだろう。子供に見られるのも嫌らしいし、お望み通り大人として扱ってやるよ！ ハッハッハ！

「てゐを誘拐したのがそもそもの間違いだったのよ……残念だけど諦めなさい」

「……………」

さて、これでゆっくり話が出るな。聞きたい事はいっぱいあるし。

「まずお前の名前は？」

「……八雲紫よ」

「種族は？」

「スキマ妖怪」

……やっぱり。

容姿があまりにも幼かったから最初はわからなかったけど、今となったらあのキャラにそっくりに見えてくる。正しく本人なのだろう。というか、俺って少女に会う機会が多くないか？ ニャル美達は子供の頃からの付き合い、永琳達も子供の頃に会った、てゐだったのだの喋るウサギの時から付き合いだし……無駄に年食ってるからかね。

「んじゃ本題、てゐを攫った理由は？」

「それは……」

その続きは無く、チラリと俺を見て押し黙ってしまった。

俺か？ 何か用があったとかだろうか。

「もしかして、てゐを人質にして錬火を殺そうって考えてた？」

「……っ」

「当たりかよ……俺、お前に何かしたか？」

誰かに恨まれる様な事をした覚えは……ないとは言わないけど、こいつにした覚えはないな。

それでも俺が命を狙われる理由なんて……

「あれじゃない？」

「あれ？」

「ほら、私の時みたいな……」

ルーミアの時って言うと、確かゾークを吸収してパワーアップしたり、その後力に酔って世界征服を企んだりしてたな。

……吸収してパワーアップ？

「まさか俺を喰ってパワーアップしようなんて事は……」

「あーもう、うるさいわね！　そうよ、悪い！？　せっかく平和ボケしてるザコそうな神がいたんだからカモだと思うに決まってるでしょ！　手っ取り早く強くなれるなら誰だってこうす「なに唐突に開き直ってんだ（ゴン）」あぶっ！？」

「うわぁ、痛そー……」

拳骨を食らわせてやった。

んなもん悪いに決まってるだろうが。そんな理由でてゐまで巻き込みやがって……

「錬火が平和ボケした『ザコ』ですって。てゐ、どう思う？」

「やれやれ、これだからゆとりは……」

「ムカア……！」

挑発すんなよお前ら。ほら、こいつ怒ってるし……ゆとりの意味わかってんのか？

「まあなんだ、流石に喰われてやる事は出来ないから潔く諦めて地道に強くなってくれ。修行しろ修行」

「出た、修行。錬火ってそればかりだよな」

「……いやよ、めんどくさい」

「……ほう」

めんどくさいと。楽しんで強くなりたいと。百億年以上も修行を頑張った俺に向かって「修行なんて古いのよ」と。（そうは言っていない）

「そんな事するより手頃な獲物を喰って強くなった方が簡単だわ」

「だからお前は幼女なのだあああ！！（グリグリグリ）」

「痛い痛い痛い!?! 何これ凄くこめかみ痛い! 大陸の武術!?!」

「ふむ、背面取りから攻撃への動作がまるで流れる様になめらかで素早い……また避けづらくなったね、ルーミア」

「私が普段からされてるみたいに言わないでくれる? されてるのはいつもあなただけでしょ」

ええい、ガキンちよのくせに生意気な事を言いやがって!

「お前何歳だ」

「うう……レディに歳を尋ねるもんじゃ……」

「なんさいだ」

「……六十歳ぐらいよ」

「ほら見ろ、子供じゃねーか」

「何よ、人間基準ならもう私は大人よ!」

「そしたらババアになるぞ」

「ババ……!?!」

そりゃそうだろ。しかもこの時代の平均寿命から言えば、六十歳なんてとくに土の下でもおかしくない。妖怪を人間の基準に当てはめようっていうのはかなり無理があるだろう。



「ババアと少女とどっちがいい？」

「なにその極端な二択！？ わかったわよ、子供でいいわよ！ でも少女はやめて！」

「はいはい」

女性を子供扱いしてはいけないって事は聞いてるけど、実際に見た目も年齢も子供では大人扱いする方が不自然だ。というか子供の背伸びに付き合っただけでいる様に見えるってしまうだろうな。

……まあそれはそれとしてだ。

「いいか、お前はまだ若い。でも若い頃から楽ばっかりして育っていくと、将来努力を知らない大人になっちゃう。するとどうなるかという……」

「あたしはゲームと一緒に攻略本も買うタイプだよ！」

「ああなる」

「よくわからないけどいい意味じゃないって事はわかったわ」

そうだろうそうだろう。

やっぱり最初から攻略本頼りってのはよくないよな。最初は自力でチャレンジした方が楽しめる筈だ。

「なんか話がずれてるわよ」

……そうだった。攻略本云々はどうでもいいんだよ。

「とにかく、強くなりたいならまず努力しろ」

「イ・ヤ！ 大体なんで貴方にそんな事指図されなくちゃいけないのよ。私は効率的に強くなりたいの！」

「楽しただけだろうが。しかも結果的に相手の実力を見誤ってこの有り様だし」

「うるさいうるさいうるさい！」

うわっ、あんまりしつこく言ったから妙なスイッチが入ったのか？  
いきなりくぎゅ化してしまった。

「私はまだ若いんだから格上の相手の擬態を見破れる程強くないのよ！ そんなに簡単にわかってたら苦労はしないわ！」

「……ふっふっふ、語るに落ちたな」

「ど、どういう意味よ！？」

「お前の言葉を借りればだ、『相手の実力を見抜くには強くなければいけない』、そして『見抜くには苦労するもの』……つまり！  
実力を見抜ける程強くなるには苦労しなければならないという事に！  
今回みたいな危険を冒さずに強くなるには努力をしなければいけないとお前は自分で言ったんだ！」

「そっ、それは言葉の綾で……」

「ええい、ごちゃごちゃ言わずに修行しろ」

「もう、しつこいわよこの修行お化け！」

「俺は神だ」

「『修行神』ってどんな神なのかしらね」

「たぶん信仰したら経験値が二倍貰えるんじゃない？」

「……素直にがくしゅうそうちを持った方が楽ね」

ステータスの上昇率が上がるとかじゃないか？ どうでもいいけど。

しかしこいつは六十歳という若い妖怪なのに妖力自体は結構ある。  
大人の妖怪ぐらいあるかもしれない。

普通に鍛えてりゃちゃんと強くなれるだろうに……もったいない。

「くっ、こうなったら作戦変更よ！」

「作戦変更？」

作戦って言うのと、てゐを人質にって奴か？ それを変更？

「そこのウサギは強いって事はわかったわ！ だったら一番弱そう  
なあなたを人質にすれば！」

その視線の先には……

「……え、私？」

ルーミアだった。

こいつ、今度はルーミアが弱いんじゃないかと言いだしたのか。

「一番弱そうなのはそっちなんだけど……」

「あんたも懲りないね」

「なんか若干アホの子に見えて来たぞ」

「むぐっ!？」

ホント、見抜く力が足りないなあ。これも若さ故の過ちって言うんだろうか。

「そう言ってられるのも今のうちよ! はっ!」

ルーミアに飛びかかった。こいつの作戦ではこのままルーミアを人質にすると。

うん、出来るもんならやってみ。

「……えい」

ルーミアは一瞬にして間に闇で壁を作った。そしてそれに突っ込んだアホは……

「(ボヨン)はうっ!？」

見事に弾かれてしまい、地面をコロコロと転がった。

随分と柔らかい質の闇だったらしい。堅くも出来るし、何気に応用効くんだよね。てゐが便利そうって羨ましがるのも頷ける。俺も使えるんだけどね。

「……………ぐすっ」

「……………ん？」

「ううううう……………」

「ぬあっ!？」

「えっ、ちょっ、ちょっと?」

「あーあ、泣かしちゃった」

他人事みたいに言うなよ! お前はお前で原因の一人だろうが!

そうこうしている内に見る見る目に涙が溜まっていく。まさかいじめ過ぎたのだろうか?

……………いや、でもこれは半ばこいつの自業自得のような気が。

「何よ何よ、人をバカにして! そうよ、どうせ私はただの弱小妖怪よ! それなのに他の妖怪達は揃って私を襲って来るから早く強くなりたかったのに……………もういいわよ、殺せばいいじゃない! 焼くなり煮るなり好きにしてよ! うわああああん!」

「うわあああ！　ちょ、泣くなって！　ほら、リンゴ飴やるから！　あまりのおいしさに笑顔になっちゃうぞー！」

「だ、大丈夫よ！　私長い事生きて来たけどあんな強烈な攻撃には流石に驚いたわ！　今回はなんとか防げたけど次にやったらどうなるか……いやー、才能って怖いわねー！」

「やっぱりバカにしてるしー！！」

ぐあああ、泣き止まない！

しかもそんな裏事情があったとは。

確かに、いくら妖力を持っていようが使いこなせなきゃ意味がない。若くて闘い慣れていないこいつは周りの妖怪にとったら正しく絶好のカモだったんだろう。そうして襲って来る敵から身を守る為にこいつなりに努力をして来たんだろうな。

むむむ、もし本当にそうなら怠けているとも言えん。周りが敵だらけでは早く、そして楽に強くなりたいと思うのも無理はない。

「……ほら、このニンジンを食べてみな。本当はあたしの非常食だったんだけど」

「え、なにそれ……」

「いいから食えっ！」

「むぐっ！？　……ポリポリ……お、美味しい！？　この色艶、こ

の食感、この糖度！ この世のニンジンとは思えないわ！ これってつまり……」

「イヤな事があったらニンジン食べて忘れるといいよ？」

「それが出来るのあなただけじゃない！？ 『このニンジンみたいにまだまだ知らない事がたくさんあるんだからもっと頑張ってみようよ！』とかって慰めじゃなかったの！？」

「無知は罪だよ」

「このタイミングでその発言！？」

もう泣いてはいないんだけど……何やってんだか。

いや、泣き止ませてくれたてゐには感謝すべきか？

「八雲紫」

「……なに」

「まあ何だ、お前も頑張って来たんだな。楽しただけなんて言って悪かった。それは謝らせてもらおうよ」

「な、何よ急に……」

俺の態度が変わった事に戸惑っているようだ。

しかしこいつの苦勞を知った今、俺は自分の浅慮を謝りたいと感じたのだ。

……これって『感謝』とは違うよな？

「でも強くなりたいからって自棄になっちゃいけない。生きたいからこそ強くなりたいんだろう？ 多少の危険は仕方無いかもしれないけど、だったら尚の事冷静に考えて結論を出して、生きる為に確実に強くなっていけ。少なくとも今回みたいな事がない様にな」

「……あなたには関係ないじゃない」

そうだな、確かに関係ないかもしれない。

だけど……

「頑張ってる奴に神様がちょっとした助言をしてやるくらいは構わないだろう？

……本当によく頑張ってるよ、お前は」

「~~~~っ……」

よしよしと頭を撫でる。子供扱いするなって怒るかな？

しかし恐らくこいつは頭を撫でもらった事などないだろう。小さい子が頑張っても褒めてもらえないのは哀しい事だ。誰かに褒めてもらって、叱ってもらいながら成長して行くのが子供にとって一番いい。それをしてくれる奴がいないのなら……俺が代わりに頭を撫でてあげても構わないだろう？

「うううう……」



「あつ、やっぱりイヤだったか？」

「……そうじゃない……そうじゃなくて……ぐすっ」

……困ったな、また涙ぐんじやったよ。

ヘルプの意味を込めて二人の方に視線を送ると口パクで応えて来た。

『そこは抱きしめてあげなさい』

『ふっ、あたしは何も見えていないよ。空が綺麗でそっちに夢中だったからね……』

『お前は何をハードボイルドにキメてんだ……』

しかしここはルーミアのアドバイスを頂戴し、ゆっくりと抱きしめてやる。すると一瞬ビクリとしたが、躊躇いがちにゆっくりと抱き着いて来た。

もう顔は見えなくなり、小刻みに揺れる頭と肩しか見えない。

そのまま俺は背中をさする。

「……別に泣いてるんじゃないわよ」

「……ああ、そうだな」

「これはその……鼻がムズムズするから擦りつけてるだけなの」

「……そうか」

それはちょっと勘弁してほしいかなー、なんて思うが口にはしない。  
ゆっくりと時間が流れる中、小さな体の震えが止まるまで俺は背中  
をさすり続けるのだった。

「……………私帰る」

「そうか？」

漸く震えが止まって離れたら、八雲紫はそう言った。

流石に恥ずかしかったのだろう、顔を赤くしてそっぽを向いている。

ちなみにそれを見たルーミアはその可愛さに悶えていた。気持ち  
はわからない。

しかし一緒に旅をしてもよかったんだけど……まあこっだけ恥ずか  
しい事をしたんだから同行するなんて無理だろうな。顔も見れない  
ぐらいだし。

「わかった、何かあったらまた気軽に声をかけてくれ。俺達はいつ

でも構わないから」

「あと何度も言うけど無理はしたらダメよ？　ちゃんと考えて行動すること」

「世の中広いんだから、あんたも色々と見てみるといいよ。ニンジンとか」

ニンジンはどういういよ。

ま、色々見てみるってのはいいかもしれんけどな。

「……………紫」

「ん？」

「紫でいいわよ、いつまでも『お前』って呼ばれるのは気に入らないから。その代わりにこっちも三人は名前で呼ぶわ」

ふむ……

「じゃあよろしくな、紫」

「……………っ！　……………ええ、ええ、よろしく……………」

ありゃ、更に真っ赤になってしまった。

名前で呼ばれるのに慣れてないからかね？　それくらいで恥ずかしがってちゃ友達も出来ないぞ。余計なお世話だけだな。

「「……………（じとー）」」

「なっ、何よ？」

ルーミアとてゐるが紫にジト目を向けている。その目は昔てゐるがルーミアに向けた事があるモノと同じモノだが……今度はルーミアもその目をするのか？ 何故に？

「……ゆかりん」

「んなあっ!？」

「仕方無いわ、弱っていた所を優しくされちゃったんだもの。……ね、ゆかりん」

「あ、あなたまでその呼び方!？」

「ま、あそこで許可したのは私達だしね。確かに仕方無いよこりや」

「子供って得ね、あっさりと抱きしめてもらえて。されてないのって私だけじゃない？」

「誰が子供よ! ふん、そのうち大人になってもちゃんと抱きしめてもらうって私は何を言ってるのおお!？」

うーん、姦しい。

しかし仲良く(?) 話が出来ているみたいだし、よかったよかった。

「もうっ、私は行くわよ!？」

「またな、紫」

「元気でね、ゆかりん」

「精々頑張りなよ、ゆかりん」

「キーッ！ あんた達いつか絶対に負かしてやるからね！？ 覚悟してなさい！！」

紫はスキマを開き、どこかへ去って行った。

二人にからかわれてああ言ったみたいだが……ま、目標があるのはいい事だよ。二人共強いから頑張らなくちゃな？

……よし、旅を再開するか。

ちょうど久々の日本だしな。懐かしい奴らに会うのもいいだろう。

「で、どっちに行くの？ 私はここの事はあまり知らないんだけど」

「そうだな……とりあえず西に行くか。あいつらもたぶんいるだろうし」

「……ああ、あの二人ね。一回バトってたみたいだけど、仲良くしてるかなあ？」

大丈夫だろ。なんだかんだでいい友人同士だし、その件の決着もついている。きっと仲良くしてるさ。

「それじゃあしゅっぱーっ！」

「あっ、そんなに走ってたら転ぶわよ？」

「はは、まさか子供じゃあるまいし……」

「いてっ」

「……転んだわよ」

「……転んだな」

てゐももうちょっと成長してくれないかなあ……と思いつつ。

幼いスキマ妖怪に出会った俺達は次なる旅の目的地に向かって歩いて行くのだった。

### 第三十話：こんにちは妖怪幼女（後書き）

あんまり胡散臭くないって？

まあまあ、きっと彼女も幼い時は純情だったのですよ。

それが成長したらあんなになっちゃって……大喜びの人がいっぱいいるでしょうね。

次は日常話。

今回も結構早く投稿出来たけど、次はいつになるだろうか……

### 第三十一話：旅は順調に（前書き）

山もなく谷もなく……

ささっと書いた日常話をとーこー。



### 第三十一話：旅は順調に

ここはどこぞの山の中。

日が落ちて暗くなって来たが目的地まではまだまだ遠く、周囲には村どころか人の姿さえ見えない。

しかし夜通し歩く必要もないし、野宿の経験だって多くある。急ぐ旅でもないので、俺達三人は今日はこの辺りで野宿をする事に決めた。

「このキメラの翼があれば一瞬で天空の城に……」

「夜の方が調子が良いからもっと進めるわよ？」

「うっさい、いいからここで野宿だ」

……訂正、俺一人で決めた。

てゐの提案は当然却下。夜になる度に一々宿屋に戻る旅があるか。せっかくの旅なのに野宿もしないなんてかなり損してるぞ。

そしてルーミアの提案は……完全に暗くなる前に野宿の準備をしておきたいから却下。移動するのは明るい内で十分だからな。

とは言っても二人も本気で言っていたわけでもないの俺の提案通りここで野宿する事に決まり、早速その準備をする事になった。

「まずは食糧だな。俺は山菜を探してみる」

「お肉も欲しいわね。なら私は動物を探すわ」

「んじゃあたしは荷物の番をしてるね」

「荷物ねえよ。全部俺が管理してるだろうが。お前は薪を集めて火を起こしとけ」

「チッ……」

「舌打ちしない。んじゃ、散」

そして俺達は各々の仕事を果たす為に散って行った。

さて、この辺りでは何が採れるかなって……

一時間経ち、日は完全に落ちて辺りは真っ暗になった。

俺は見つけた山菜を手にとって二人の所へ戻る。

視線の先は焚き火で明るくなっており、火の傍にはてるとルーミア

が座っているのが見えた。

どうやら待たせてしまったみたいだ。

「悪い、遅くなった」

「ううん、今来た所だよ」

「何でデートの待ち合わせみたいに？　あなたずっとここに居たでしょ」

「気分の問題だよ」

「こんな暗い山の中で気分も何もないと思うが……」

「ノリ悪いなあ」

俺が悪いのか？

まあとにかく、戦利品を見せるか。

「俺はキノコを見つけた。ほら、エリンギマイタケブナシメジ」

「それ本当に見つけたの？」

「何故か群生してた」

この地名は『北斗』だったりするんだろうか。まあ気にするまい。

「ルーミアは？　って見りゃわかるか」

視界の端で猪が木に吊り下げられて血抜きされてるもんな。

しかも結構な大物だ。

「私は見ての通りあの猪。十分ぐらい探してたらすぐに見つかったわ。と言っても私じゃ生か丸焼きにしか出来ないから調理はお願いしてもいいかしら？」

「オツケー、なら何にするかな……」

「ならあれやってよ、あれ」

「あれ？」

「マンガ肉。塩コショウの味付けで」

「俺、時々お前が元ウサギだって事を忘れそうになるよ……」

何だ肉汁滴るマンガ肉にかぶりつくウサギって。それ絶対にウサギの姿をした別の何かだ。ワイルドなんて言葉じゃ片付かない。

でもマンガ肉か……猪で出来るか？

「はぁ……一応やってみる。ちょっと違う形になっても文句言うなよ？ それじゃ早速……」

「あ、あたしには戦果聞かないの？」

「ん？ 薪を頼んでたけど、他になんか見つけたのか？」

「うん」

そう言ってるが取り出したのは小さな黒い種の様な物が生った木の枝だった。

これって……

「ほら、山椒だよ」

「（キラリ）……肉にかけてみるか」

「（うわっ、目が輝いた……）でも山椒ってそのまますぐに使えるの？」

「問題ない、能力を使えば乾燥も搗り潰すのもすぐだ」

「すごい能力の無駄使いね……」

使える物は何でも使う、当然だろ？

しかし意外な収穫があったな。いいもん見つけてくれた。

「褒めて褒めてー」

「良おーしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし」

「えっへん」

「あれ、なにかしらこの敗北感……」

競争じゃないんだから気にしなくてもいいのに。

ま、とにかくこれを使えば味も増えるな。

それじゃあ調理を始めるか。何から手をつけようかな……

「ん、美味しいわね。この山椒もピリツとしていい感じ」

「モグモグ……ハグハグ……」

「あーあー、汁が散ってるぞ。ほら、顔出せ」

「んー……」

てゐの顔に散った肉汁をハンカチで拭いてやる。

しかしどうやら二人には好評の様でよかった。

猪は骨付きのマンガ肉みたいには出来なかったので、でかい肉塊に串を通して焼いてそれっぽく仕上げ、キノコはフライパンを使ってソテーにした。油やらパセリなんかも自前の物だ。

どれも簡単に作った物なんだが、結構イケた。

「肉と言ったら赤ワインなんだが……こんな所でワイングラスってのも合わないな。俺はビールでも飲むか。二人はどうする？」

「そうね、私も同じ物にしようかしら」

「あたしはやっぱりニンジンジュース一択で」

「ニンジンジュースなんて聞いた事ないわね。あつ、私は普通のお酒でいいわよ？」

ニンジンジュースってこんな肉に合うか？ まあてゐならどんな時でもそれを選ぶんだろうが。

……………ん？

「はい、ビール」

「ありがとう」

「んでニンジンジュース」

「さんきゅー」

「……………」

「私にはくれないの？」

.....

「……いち」

「に」

「さーん」

「……」

「ってそこは応えろよ、紫」

「心の中でそっと呟いたのよ」

「言葉にしなきゃ伝わらないんだよ」

何故か紫も一緒になって肉を頬張っていた。

いつの間に来てたんだろう。あまりに自然だったから気付かなかった。

「おいしそうな気配がしたものだからつい。別にこれくらいいいでしょ？」

「そりゃあ構わないけど……」

飯時を狙うなら、まずは一言声をかけてからにしてくれよ。いつでも来いって言ったのは確かだけどさ。

「さあみんな、私にキノコをわけてちょうだい」



「まったく、事前に言ってくれてりやお前の分も用意出来たのに……ほら、エリンギ」

「仕方無いなあ、はい、ブナシメジ」

「まあこれくらいはいいけど……マイタケどうぞ」

「なんか絶妙なコンビネーションね……」

俺達三人から三種類のキノコが渡され、紫の分のキノコ玉……もいい、キノコのソテーが無事出来上がった。

しかしキノコは三人分しか採ってなかったから一人分の量が少なめになってしまった。今度からはこんな時の為に少し多めに採っておいた方がいいだろうか。

「それにしても随分早い再会になったわね。別れたのはほんの二、三日前よ？ やっぱ一人は寂しかった？」

「違うわよ！ このタイミングなら食事がありつけるかと思っただけ……」

「そんなに寂しかったの？」

「って聞いている！？ さっきから人を寂しがりやみたいに言わないで！」

「紫、ぬいぐるみやるよ。これがあれば一人でも寂しくないぞ」

「いらないわよそんなファンシーなぬいぐるみ！ そんな物使う程子供じゃないわよ！ ……って何その怪物！？」

「ピッピだ」

「いや、何それ！？ 知らないけどとにかくいらないわ！」

なかなかツツコミが出来るな。

よし、俺の手が回らなくなったらこいつにツツコミ役を押し付ければ……

「何か不吉な事考えてない？」

「気のせいだろ」

……勘もいいな。その時になったら逃げられるかもしれない。

まったく、失礼しちゃうわ！ と言いながら紫は肉にかじりついて  
いる。

しかし気の毒だが俺達三人はからかい甲斐のある相手が出来たと認識していた。いつの世も後輩は先輩に遊ばれるモノなのだ。せめてもう少し大人になるまでは我慢するんだな。

「でも大人になったらだんだんボケて行くんだよ」

「それ意味が違くね？」

「やっぱり安定したツツコミは錬火に任せましょ」

「何で俺ツツコミに関してはアウエーなんだ……」

しかしてゐの言う通りならば、紫も大人になったらポケ側になってしまうのだろうか。そうなるとますます俺はアウエーになってしまう。せめてもう一人ぐらいはツツコミが欲しいな。

……なんか、考えてみれば随分と妙な悩みをしてるなあ。

「……ふう、ごちそうさま」

「ごちそうさまー」

「お粗末様でしたと……」

「ええっ、みんな早くない!？」

「喋りながらもさっさと食べてたからな」

いつの間にやら俺達の食事は終わり、食べているのは紫だけになってしまった。

「よし、じゃあ片付けるか。紫は自分のペースで食べていいからなー」

「ちょ、待ってよ! 急ぐから!」

「……(によによ)」

「てゐ、そう急かすもんじゃないわよ?」

「うう、落ち着かない……」

あれだな、学校の給食で周りの友達がみんな食べ終わってしまい、食べるのが遅くて自分一人だけ食べているのをみんなに見られているかの様な状況だ。

確かに落ち着かない事この上ないだろう。

「むぐっ！　ゴホッ、ゴホッ……」

「……大丈夫か？　ほら、水だ」

「ゴホッ……あ、ありがとう……」

紫は急ぎ過ぎて若干詰まらせながらもなんとか食べ終え、俺も後片付けを済ませる。その間紫は渡した酒をちびちびと飲みながら恨めしそうに俺達を見ていた。

勿論俺達はスルーしていたが。

「まったく、ひどい目に会ったわ……」

「自分のペースでって言ったろ？」

「じゃあジロジロ見るのやめてよ！」

「だってする事なくて暇だったんだもん。さっさと食べ終わってればよかったのに……」

「と言っても、ただ単にからかいたかっただけなんだけどね？」

「ほらやっぱりー！」

まあからかい過ぎたのは否定出来ない。反応が面白いしなあ……今度からは自重するか。あんまりいじめるのも可哀想だし。

だから出来れば俺も労ってくれ。てゐもフリーダムなボケは控えてほしい。

「はあ……じゃあ私は帰るわね」

「ん、こっちに泊まっていけないのか？」

「これ以上ここにいたらどれほどいじめられる事か……」

「紫が悟りを開けるぐらいには」

「もはや苦行レベルかよ。お前マジで控えろや」

「いや、たぶん冗談だと思うけど……冗談よね？」

「まったく、そんなの冗談じゃないわよ！」

「なんでそこでややこしい言い方するんだ……」

いかん、今少しボケやがったぞ。ボケるにはまだ早すぎるだろう。

「……まあそんな理由なら仕方無いか。今度食事時に来る時は事前に言っておいてくれよ？ また一人前の量が減るから」

「ええ、そうするわ。料理もお酒も美味しかったわよ」

「どーいたしまして」

「お土産に『イエス！抱き枕』をあげよう」

「うわっ、誰！？　って確かこれあなた達と一緒にいた人！？」

「そうそう」

「聖人が描かれた抱き枕使わないといけない程って、私どんだけ寂しがりやよ！」

渡された枕をバシッと地面に叩きつける紫。てゐは最後まで紫をからかうつもりなのだろうか。

あとまだそれ残ってたのか。早く処分しろよ。

「まさか今までの商品はまだ持ってたりするの？」

「モチ。せっかく作ったんだから需要がある所で売り飛ばそうと…」

「あなたねえ……」

お前はいつからそんなに商魂たくましくなったんだ？　イエス達に会うまではそんな事なかった筈なんだけど。

これが邪神が絡んだ伏線じゃない事を祈りたい。

「もう、きりが無いわね。いい加減帰るわよ、私」

「んじゃこれ持ってけ」

「錬火まで……何これ？」

俺が渡したのは文字が書かれたお札。効果は敵の撃退だ。

「これに妖力込めて敵に投げれば雑魚妖怪ならそれで一発だ。危なくなったら使ってくれ」

「……なんでこんな物を？」

「お前、さっきも妖怪に追われてたんじゃないか？ 服が汚れたり破れてたりしてるし」

まだ若い紫は妖怪達にとって恰好の餌だって話は前にした。たぶん今日は自分より強い妖怪に会ってしまったので安全地帯を求めてここへ逃げて来たんじゃないだろうか。

甘やかすのは為にならないってのはわかっているが、もしもの事を考えるとどうも甘くなってしまう。

もしかしたら俺に子供が出来たら子煩悩になったりするかもしれない。(今更)

「……今はありがたく使わせてもらうわ。でもすぐにこんな物に頼らなくてもいいくらい強くなるんだから」

「よし、その意気だ」

まあそう思っているなら大丈夫か。頼りつきりにならないか心配だったが、これならそんな事にもならないだろう。

「私は何もしてあげられないけど、無茶はしないようにね」

「仕方無い、特別に特注の『抱き枕 ver. 錬火』を……」

「……じゃあさようならー」

「あー！ スキマ送りにいー！？」

てゐが取り出した謎の抱き枕を紫はスキマで奪い取って即座に去って行った。

「あれ元から渡すつもりで出したんじゃないの？」

「ううん、自慢したかっただけ」

「自慢ってねえ……それで、あれも売り物だったの？ 需要はあんまりないと思ってたんだけど」

「特注って言ったでしょ。あれ一個しか作ってないんだよ……」

「バカでしょあなた」

うん、とりあえず俺も聞きたい事が出来た。

「……何故俺バージョンがある」



「えっ？ えーと、そのー………そう、サンドバッグ代わりに！  
って臭い臭い臭い！ ネギを鼻に近づけんなっ！」

おかしい、てゐは悪戯好きだが主人思いな所もあったと思うんだが。  
もしかしたら他にも俺バージョンの商品を作られているかもしれない。これは要OHANASHIだな……

「てゐ、ちょっと一緒にOHANASHIしようよ……」

「あ、あはは、ハンバーガー四個分ぐらいで……」

「いや、意味わかんないからそれ」

そうして俺とてゐのOHANASHIは夜更けまで続いたのだった  
……

ちなみにルーミアは我関せずとばかりに離れて寝てしまい、後でてゐに文句を言われていたとき。

「おじょーちゃん今からオレと遊ばない？ オレ、飛沫丸澤男。」

略して『シブタク』。へへ……付き合ってよおじょーちゃん」

「急急如律令！（バシューン）」

「やがびっ！？（ピチューン）」

「……この威力で何回でも使えるお札って……世の陰陽師達が涙目になる様な代物ね」

もはや呆れを含んだスキマ妖怪の呟きは誰に聞かれる事もなく、暗い夜空に消えて行ったのだった。

### 第三十一話：旅は順調に（後書き）

次も東方キャラが出せるんじゃないかと思っています。

我ながら先行き不透明な……

### 第三十二話：守矢の神々（前書き）

お久しぶりです！

一ヶ月が過ぎる前に投稿出来ました！

折角の夏休みだったというのに、ろくに執筆出来ないまま九月になってしまいました。なんたる事だ！

しかしこれからも暫くは更新速度が遅いままでしょう。どうか皆様気長にお待ちくださいますよう、お願い申し上げます。

さて、今回は……まあタイトル通りですね。

なんかチート主人公らしくない話が多い気がします、「まったく、仕方のねえ奴だな」とスルーしつつ読んであげてください。

それではどうぞ。

### 第三十二話：守矢の神々

「やって来ました旧洩矢王国、現守矢。幾山を越えて今、遂に我々は幻の国へと辿り着いた。（スタスタ）」

「そこには果たしてどんな未知が待っているのか？　そしてかつての友の今は！（テクテク）」

「「そして妖怪であるルーミアの運命や如何に！？」」

「ツツコミしてほしいならしてやるわ……！　ダークフォールテウェーブッ！！」

「「ぎゃあああああ！！」」

こ、こいつなんて奴だ、思いつきりツツコミして来やがった！　容赦無しか！

「だっていきなりわけのわからない事を言い始めるから。『だから私は悪くない』」

「出来ればもう少し穏便なツツコミで済ませてください……」

「『いてて……でも久しぶりだから、色んな人達に簡単な説明が必要だと思わない？』」

「そしててゐはこんなマネすんな」

まあ、それはともかく早く行こう。

あいつらがいる神社ももうすぐだ。相変わらず暇しているだろうし、たぶん会えるだろう。

……が、その時だった。

「……ハッ、すごい気だ！」

「気じゃなくて神力だけだな。……てかこれって明らかにあいつらのじゃん」

「なんか地響きまで起きてるんだけど……何かと戦っているのかしら？　というか、本当に妖怪の私が会っても大丈夫なの、これ？」

「……………」

「こっち見なさいよ」

うん、まあ大丈夫だと思うけど……たぶん。

しかしおかしいな、二人の神力以外には何も感じないし、諏訪大戦もとっくに終わっている筈だ。

それなのにこんなに神力を漏らして争う理由なんて……

「フオッフオッフオッフ、お前さん方は旅人さんかい？」

考えていると、俺達に誰かが話しかけて来た。見た所何の変哲もない爺さんで俺には見覚えがないし、てるとルーミアも同様なのか首

を傾げている。

「ワシの事は……そうじゃな、村人Aとでも呼んでくれ。村の入口で『ここは〴〵の村じゃよ』と言う様な存在じゃ」

不審者丸出しだった。

これは関わらない方がいい気がするが……どうやら何か知っているらしい。情報は欲しいのは確かなので、仕方無く話を聞いてみる事にしよう。

「お爺さんはこの地響きが何か知っているの？」

「いつもの事でな、この辺りのもんはもう皆慣れっこじゃよ。ほれ鳥達も。神さん達が争っておるのじゃ」

「……本当だ、全然動物達が慌ててない。こんなに揺れてるのに」

見ると確かに雀も変わらず地面でさえずっている。爺さんの言う通り、それほど日常茶飯事って事なのか。

というか、お前らどこのモヤツとボール頭の鬼人だ。仲は良かったんじゃないのか。

「これがいつからの事かと言うとの………いつじゃったかのう？  
おーい、ばあさんや」

「はいはい何でしょう」

村人Aは仲間を呼んだ！ 村人Bが現れた！

「実はこれこれこういうわけなんじゃが」

「さあ、いつからだったかしらねえ……あら、ちょうどいい所に。おーい、トメさん」

「あらあらマツさんどうしたんですか？」

村人Bは仲間を呼んだ！ 村人Cが現れた！

「トメさん、実は（以下略）」

「（以下略）おや、あんな所にゴロウさんとこの（以下略）」

「（以下略）」

（以下略）（略）（略）（略）……………

「撤退イイイイ！！」

続々と村人が集まって来た！？ なにコレ、どんな罠だよ！

「なるほど、この罠が守矢での挨拶代わりなのね！？」

「違うっ……と思っていたい！」

流石にいきなりこの展開は想定外だ。

まさか蹴散らすわけにもいかないし、今はひたすら逃げるしかない。



「皆の衆、合体じゃ！」

村人達は集まって一つになった！ キングムラビトが――

「現れてたまるかポケッ！」

「「「ぐわあああああ！」「」「」

合体失敗！

「って結局蹴散らしてるし！ いいのあれ！？」

「大丈夫だ！ あの攻撃は非殺傷設定の比較的クリーンな攻撃だからな、死にゃしない！ それに……」

――おお、ぎっくり腰が治ったぞい！――

――持病の癪もだ！――

――成績が上がった！――

――彼女が出来ました！――

「ショック死とかしないように付属効果として多少の幸運も与えている！」

アフターケアもばっちりだ！

「ちよっ、錬火は余計な事しちゃダメだって！」

「え、何で？　これくらいはした方が良くないか？」

「……ああ、確かにしちゃダメだわ！」

何やらてゐが言い出し、なぜかルーミアも同意しているようだ。

はて、俺は何かまずい事をしたのだろうか。

「錬火が何かすると大抵……」

——こんな事が出来るとは、あの方も神様に違いない！——

——追うんだ！　そしてお礼を！——

——あつしにも彼女をくだせー！——

——むしろそのウサ耳の子をくれえー！——

「次のイベントの伏線になる！」

「そうだったあー！」

「というか、自分の事なんだから憶えておきなさいよ！」

いや、善かれと思って……はい、ごめんなさい。俺が悪かったです。謝ります。だから二人して冷たい目で見ないでお願いだから。

「とっ、とにかくだ！　今は神社へ急ごう！　追手はすぐに振り切れそうだしな！」

「誤魔化そうたってそうはいかないからね!? まったく、ホントに気をつけてよね!」

「……まあ何の刺激もないよりはいいのかしら? ちょっと色々あり過ぎるけどね」

追手はますます増えて来た。どっから湧いて来てるのかは知らないが、困ったものだ。

こうして俺達はあの集団をなんとか振り切り、ここを統治している神、諏訪子と神奈子がいる神社へと向かったのだった。

「さて、到着だな」

着いたのは諏訪子と神奈子がいる守矢神社だ。

たぶんここまで来れば奴らも追っては来ないと思う。集団でこんな所に押し掛けるなんて不敬な事はしない筈だ。

「おお、最後に見た時よりも大きくなってる。神様が二人も住む事になったからかな。ヘラんちよりは小さいけど」

「あれと一緒にするのはどうかと思うぞ。まあ、この国は西より慎重しやかなんだよ」

「確かに私が今まで見て来た建物に比べたら控え目ね。エジプトの王族なんてお墓まで大きかったし」

いや、この国でも将来でかい古墳を造る事になるんだけどな。そういえばもっと先には金色の建物とかも出来る事になるし……意外と派手な所もあるな。

「んじゃとりあえず入るか」

「……私は？」

「大丈夫大丈夫。あいつらはそんなの……多少は気にするけど、気に入ったなら妖怪だろうと人間だろうと気にしないし」

「……はあ、何かあったら頼むわよ？」

「もちろん」

「たのもー！」

ルーミアと話している間にてゐるが先に行ってしまったので、俺達もそれを追う。

出迎えはなかったものの、溢れる神力で居場所はわかる。

並の奴なら動けなくなる様なプレッシャーなんだが、何をしているんだか。

「……ここだな」

「なんか緊張して来たわ」

そしてある部屋の前に辿り着く。この襖を開ければ二人に会えるの  
だろう。

しかし本当に久しぶりになるな。

「それじゃあさっそく」

てゐがスパーンと勢い良く襖を開け、俺達の前に二人の姿が目に入  
った。

……そしてその二人がしている事を見て、俺は溜め息をついた。

「び、貧乏神がっ!? 謀ったな、神奈子!!」

「はははは! 諏訪子はいいい友人だったけど、インドのスパイスを  
独占したのがいけなかったんだよ!」

「これじゃあ破産して物件を手放す事になってしまう!  
……………と、言うんでも思ったかな?」

「なん……………だど……………?」

【ラッキーチャンス！】

「私はこのカードを発動して……！」

「えっ、ちょ、それ反則……」

「知った事か、私がルールだっ！ 速攻魔法『無敵看板娘の岡持ち』！ 信徒千五百人の屍を越えて、所有している食品店から出前を配達するよ！ 私は洛陽の料理店から肉まんを取る！ するとお……」

『諏訪子、この肉まん食べていいのかっ！？』

【貧乏神は福の神にジョブチェンジした！】

「裏返ったアツツ！？ バカな、そんな裏技が！」

「わははは、キチはゲームになっても私の友達でいてくれるのだあつ……！」

とりあえず喧嘩どころか暢気に遊んでいるって事はわかった。そして何で遊んでいるのかも。

「二人共、久しぶりー。なんか相変わらずみたいだね」

「……ん？ この声は……って、お前はてる！？」

「わっ、いつの間に来たの！？ とうか本当に久しぶりだね！」

気付いてなかったんかい。あと俺もいるんだが？

「そしててゐがいるって事は……」

「それでも何もねえよ。最初っから俺もいるだろうが……」

「あ、やっぱり錬火もいた！ 錬火久しぶりーっ！」

「……まあ、久しぶりだな」

諏訪子がこっちに走り寄って来た。

ふむ、この適度な位置にある、変な帽子を被った頭も相変わらずだな。よしよし。

「……いやあ、この子供扱いも懐かしいね。悪くはないんだけど微妙な気分になるんだよね……実際に子供じゃないんだし、もう少し大人な扱いをしてもいいと思うんだけど」

「じゃあどこを撫でれば大人の扱いになるんだ？」

「えっ？ えーと……し……尻……とか？」

「……………神奈子も久しぶり。仲良さげで安心したよ」

「スルーされた！？ 錬火が振った話題なのに！」

いや、これは俺が悪かった。そりゃそんな回答になってもおかしくないわな。そして予想以上に反応に困ってしまったので思わず逃げ

てしまったのだ。

何と言うか、ホントごめん。

「うん、久しぶり。でも何でまた突然来たんだい？ 色んな所に行ってるって聞いているから、もしかしたらここにも近くに來たから寄っただけなのかな？」

「まあそんな所なんだけどな。それに二人が今どうしてるか気になったというのもある」

「ん？もしかして私達が恋しくなったとか？」

「何をニヤニヤしてんだ。そんなんじゃないよ」

「そりゃ残念。ま、ここ最近はずっと平和でね、おかげでボケてしまいそうぐらい暇があるんだ。一応暇を潰せる物もあるんだけど……錬火が來たなら暫くは退屈しないで済みそうだね」

人をトラブルメーカーみたいに言うなよ。事あるごとに皆に言われてるんだけど……

でもまあ、神にとったら何事もないのが一番だと思うぞ。流石に諏訪大戦みたいなのが始終あっても困るだろうし、問題が起きないのはいい事だ。

平和なら平和な分だけ暇が敵になりそうではあるが。

……ってそうだ、聞きたい事があったんだ。



「ところで二人に聞きたいんだけど、何であんなに神力を漏らしていたんだ？ 尋常じゃない雰囲気だったんだが……」

神生ゲームで遊んでたって事はわかるんだが、はて、アレにそんなに神力を使う必要があっただろうか？

……あ、いつの間にかてるとルーミアが勝手に用意したお茶を啜りながら話を聞いている。俺にも淹れといてくれ。

「ああ、それね。いやあ、実は最近ある噂が流れててね……」

……なぜ諏訪子は井戸端会議で近所の奥さんが『ここだけの話なんだけどね……』と絶対にここだけでは済まない話をする時の様に声を潜めているんだろう。普通に話せよ。

「実は……」

「実は？」

「……賽を振る時に神力をいっぱい込めたら良い目が出るらしくて」

「それは『Aボタンを連打したらモンスターが捕まえやすくなる』ってのと同じくらいのデマだ！」

「「えっ、嘘!？」」

「信じてたのかよ!？」

思った以上にくだらなかった。

そう言うのも理由がある。

神様だったらその気になれば異常アブノーマルに狙った目を出せるが、当然ながらそんな事は許されなかったため、ゲームには神力の影響を受けない特別な加工をされた素材が使われている。詰まる所、いくら神力を使おうが関係無しって事なのだ。

まあ、生まれつきの『運勢』とかなら作用するみたいだが。そのおかげかは知らないが、てるなんかはいつも馬鹿勝ちしている。

「つまり暇なお前らがゲームをする度にそんな理由で地震が発生していたと。」

……はた迷惑以外の何物でもないわアホ」

「いやいや、そうでもないよ。皆もう慣れてるからせいぜいウチの巫女達に『昨日はお盛んでしたね（笑）』って言われるぐらいだし」

「慣れていると言うよりむしろナメていると言わないかそれ？」

フレンドリーと言えば聞こえは良いんだが、仮にも神と巫女の関係でそれはいいんだろうか。

……まあそれで平和なら構わないのか。

「原因がわかったのはいいんだけど、ルーミアの紹介はしなくていいの？ あぐあぐ……」

「あ、忘れられてたわけじゃないのね。全然話について行けなかったから黙っていたけど」

「……すまんルーミア、今からするから。あとてゐ、ヨウカンに丸ごとかじりつくのはやめろ。食べる分だけ切れ」

「錬火もこの前同じ様な事してたじゃん」

「カステラはいいんだよ」

「んじゃロールケーキは？」

む、ロールケーキか……

「……………『可』だ」

「可だ、じゃないし！ それ私のヨウカンじゃないか！ 隠してたのにどうして！？」

「ルーミアが『食べ物匂いがするわ』って言って見つけたの」

「ちよっ、それなんか私がすごく食いしん坊みたいじゃない！ い匂いがしてるって言っただけよ！」

「貴様、よくも見つけてくれたなッ！」

「ああ、第一印象が最悪に！？」

「ちよっと待って、神奈子いつの間にそんな物を！？ さては今までも私に隠れて食ってたな！」

「す、諏訪子だって普段巫女達からお菓子を貰ってるじゃないか！」

「……食べてるのを見ながら『キャー、カワイーッ!!』って言われるのがそんなに羨ましかった?」

「……うん、なんかごめん」

だんだん混沌として来たなあ。

そして諏訪子の扱い方が完全にペット感覚だ。たぶん背がちっちゃくて小動物チックな所がツボだったんだろう。それは確かにわかるんだが、やっぱり神様の扱い方じゃないよね。

そんな信仰（笑）でも生きていけるんだから不思議だ。

「でもどっちにしても私の楽しみが……ええい、おのれ妖怪め！」

この八坂神奈子が直々に成敗してやる！」

「いや、どんだけ私事なのよ！ しかも実際に食べたのはてゐだし！ ……仕方無いわね、ならお詫びに錬火が作ったこの白○恋人をあげるわ」

「まあ一々そんな事で怒るのも大人気無いな。謝罪もちゃんとしてくれたし、赦そうじゃないか」

「変わり身早っ」

それでいいのか神奈子！ 戦いにならないのはありがたいが、妖怪に餌付けされる神って何だ！

というかお前そんなキャラだったっけ！？

「ところでルーミア、そんなのどこに持ってたんだ？ それ作ったのはだいぶ前だからとつくに腐ってると思うんだが」

「ぶふっ!？」

あ、神奈子が吹き出した。ばっちなあ……

「大丈夫、影の倉庫に保管していたから、新鮮なままちゃんと保存出来てるわよ」

「なあ、お前本当に闇の妖怪？」

おかしい、ルーミアが何度も闇以外の属性を使用している。しかも闇よりも使う頻度が高い。

それでいいのか闇の妖怪。

「もう、しっかりしてよ神奈子。汚れた床を誰が掃除すると思ってんの」

「ゴホッ……ウチの巫女達だろう……」

「大丈夫？ ほら、このお茶飲んで」

「ああ、ありがとうてゐ」

あつバカ、てゐが出した物を不用意に飲んだら……

「ずずず………ボハアッ!？」

熱っ!?

「こっちに噴くなよ!　って何だこの緑色の液体は!？」

「……助かった、運良く錬火が盾になってくれたわ」

俺が助かってないよチクショウ!

「げほっ、げほっ、何これ苦ッ!　超ヤバイ!」

「ウサウサウサ!」

笑いどころじゃない、神奈子のキャラが崩壊しかかっている!　てゐは一体何を飲ませたんだ!?

とりあえず頬に垂れて来た緑色の液体を指で掬い取って舐めてみる。

「(ペロッ)　これは……青汁!　ってホントに苦ッ!？」

「思いつく限りの苦い野菜をぶち込んで作ったから、体には良いけど味はやバイよ!」

何だ熱々の青汁って!　なんかの罰ゲームか!

あまりの苦さに神奈子も涙目で咳き込んでおり、諏訪子はずくまった神奈子の背中を心配そうに摩っている。

それを見ているとやっぱり仲が良いんだとわかるんだが……なんか『咳き込む体の弱った母親とその背中を心配そうに摩る子供の図』に見えて来た。

あんまり見ない方がいいな、コレ。

「ところで錬火、神奈子が吹き出した青汁を舐めたって事は……間接キス？」

「!？」

「お前は思春期男子かつ。あと落ち着け神奈子」

不意打ちに神奈子がほんのり赤面しているが、残念ながら俺には効かない。今更間接キス程度で恥ずかしがる俺ではないのだ！

「でも役得とか思ってたんじゃないの？」

「反省の色が見えないな、お前罰として暫くウサギのままな（ビビビビ……）」

「アババババ……」

「あっ、てるがウサギになっちゃった!? ……って、そう言えばてるは最初からウサギだったんだっけ？」

まあ、単に人化出来なくなったただけだな。俺も最近忘れがちだが、てるは実はウサギなんだよなあ。

……まあどこぞの犬姫みたいに呪いで犬にされるよりはマシだろ。

「はっ！ おりゃっ！ ……うげっ、人化出来ない!？」

「神奈子ー、仕返しに思う存分モフっていいぞー」

「ええええええ！？」

「ふ、ふふふ……てゝ……やってくれたなゝゝ……」

「ひいひいひい、緑色の液体が口から垂れてて余計に怖っ！？」

「あんたが変なもん飲ませたせいだろうっ！」

「いいなあ神奈子、コンテストの時以外じゃ触らせてもらえないのに……鍊火、私もだめ？」

「別にいいぞ」

「いいの！？ やったー！」

「ぎゃああああ、薄情主いー！！」

はっはっは、生き残れたならまた会おう。ブラッシングぐらいはしてやるよ。

……さて、久しぶりに友人に会ったんだから、今夜は宴会かな。なら酒と料理を用意しないと。一応俺達は客なんだが、二人はてゝをモフるのに忙しいからやるしかない。

「というわけでルーミア、宴会の準備を手伝ってくれ」

「何が言いたいのか見当はつくし、別に構わないんだけど……」



「？」

「何度も言うけど、私の事の説明は……？」

「……あ」

「あ、じゃないでしょっ！」

しまった、また話が完全に逸れてた。結局何も説明してねえ。

……でも二人共妖怪ってわかっててスルーしてるみたいだし……うん。

「大丈夫だ、問題ない」

「すごい不安……」

いや、本当に大丈夫だと思うけどな。妖怪って事で攻撃される心配はまずないだろう。

なのでとりあえず今は準備だ、準備。それで一緒に酒を飲めば仲良くなれるさ。

「毛並みすごっ！ ミジャクジ様なんか相手にもならないねこりや……」

「あーもう、生意気だけどモフモフなんだよねえ、てゐは！ ……こんな毛皮が欲しいなあ（ボソツ）」

「ぎゃあああ！？」 ヘルプミー錬火あー！ ヘルプミールーミアー

！！ あんな思いは二度とごめんだあー！（トラウマ想起）

「……さよなら、せめて安らかに眠りなさい」

……てゐが刈られないうちにさっさと準備を済ませようか。

### 第三十二話：守矢の神々（後書き）

宴会の所も書こうかと思ったんですが、長くなってしまうので次に持ち越しです。

しかし、盛り上がりに欠けるなあ。

もったこう、DIOと承太郎の最終決戦みたいな盛り上がりが欲しいですね（ハードル激高）。

ま、そんな話はまた別の機会という事で。

それはともかく皆様、こんな作者ですが、また次の話でもよろしく願います！

### 第三十三話：酒は三献に限る（前書き）

わりと早めに書けました。

代わりに量は少なめだし酒盛りしてるだけですけど。

とにもかくにも第三十三話、皆様の暇潰しになれる事を祈りつつ投稿です。

### 第三十三話：酒は三献に限る

さて、夜である。

てゐをいじり終えた諏訪子と神奈子にルーミアの事を説明した所、  
「ま、別にいいんじゃない？」と、なぜか疑問符付きであっさり話が終了し、すぐに場は酒盛りへと突入した。

現在は諏訪子と神奈子、それにルーミアは俺が出した酒を楽しんでおり、俺はてゐを膝に乗せて乱れてしまった毛を繕っている。

酒宴開始時には「再会と新たな出会いを祝って乾杯！」などと調子の良い事を言い合っていたが、今となっては各々がフリーダムに楽しんでいる状態だ。

「ああ……そこそこ、その辺をもっと……」

「はいはい。この辺りか？」

「んんっ、はあ……結構いい感じで「おりゃっ」ひゃあっ!？」

「確かお前の弱点はこの辺だったよな? (ワシヤワシヤ)」

「あふっ、やめっ、へんた……あひゃひゃひゃひゃ!！」

一応言っておくが、俺はウサギをくすぐっているだけでエロい事はないぞ。てゐで変な妄想をした様な奴は廊下にでも立ってなさい。

ルーミア達の方は争いの様子は見られず仲良くしている様だが、ルーミアは酔った諏訪子と神奈子に絡まれて困っているみたいだ。酒の方もだいぶ呑まされている。

笑い上戸？

テンション高い……こっちは怒り上戸だろうか。

妖怪飲んべえと露出魔ってか？  
どっちもただの変質者だな。

725

「まあまあ細かい事は気にしない！　せっかくの再会なんだから思いつきり呑み倒したっていいじゃないか！」

「いや、普段からそれなりに呑んでるんじゃないのか？　むしろゲムしながらダラダラ酒呑んでもまるで違和感ないんだが」

「んなもん巫女達が許してくれないよ。ウチのお神酒にも限りがあるからね、ガブガブ呑んでたら怒られちゃう」

「あー……」

まあ度々お酒を大量に買い込んだり貢いでもらうわけにもいかんよなあ。酒の神でもないのにずっと飲んだくれてちゃ民にも示しがかんだろう。いや、酒の神なら飲んだくれてていいってわけじゃないけど。

話はわかったんだが……巫女に怒られてしまう神ってのもどうなんだろうね。

「錬火、お酒追加ね！」

「タダ酒だからって好き放題呑みやがって……ホレ（ドシン）」

「ヒヤッハー！！　浴びる程の酒だあ！」

「ってタル！？　うわ、なみなみ入ってる……これだけ呑んだら死ぬんじゃない？」

「大丈夫大丈夫」

「グビッ……グビッ……グビッ……プハーッ！ このいくらでも飲めそうな爽やかなのど越し、加熱処理せずに殺菌したおかげで楽しめる天然の味！ いやあ、この六甲の水はおいしいねえ！ ……つて水やないかい！！！」

「スゲエ、どこの水かまで当てやがった」

「すごい、ノリツツコミしたわ。意外とやり手ね」

「やい鍊火、コッチヲミロ！」

「どうした神奈子、熱源でも感知したか……ってなんだその恰好は！？ 服がはだけすぎだ！」

「なにィー！？ こんだけスタイルのいい美人が誘ってるっていうのになんだその反応は！ 男ならここは勢いに任せて襲う所だろう！」

「知るか！ そして襲うかつ！ 犬じゃねーんだから誘われる度に襲ってたまるか！」

「何を言う、人なんて年がら年中盛っている生き物だろう。犬とは違うのだよ犬とは」

「んな事どうでもいいわっ！ いいから服を直せ！」

「そりゃあ鍊火はあたしみたいな小さい子が好きなんだからしょうがないよ」



「えっ、じゃあもしかして私も射程範囲内!？」

「……まあ確かに小動物はわりと好きだな」

「ってそっちの意味じゃないから！」

「錬火錬火、私は!？」

「カエルはそんなに……」

「いやいや違うから!？」

「ここに怪しい奴がいるぞー！」

「……って私!? わ、私の事は別に聞かなくても……」

「とは言いつつも実際は気になってるんだろう? 錬火、ルーミアはどうなんだい!？」

「……………小動物じゃないだろ？」

「「「だから違うって言ってるだろおー!!」」「」」

ドスッ

バシッ

ドゴッ

バキッ

「たわばッ!？」

うぐぐ……総攻撃を受けてしまった……しかしなんとか危険な話題は誤魔化せたぞ!

どーせみんな酒に酔った勢いで聞いてきたんだ、誤魔化したっていいだろう。俺も酔っぱらってればもう少し正直な返答をしたかもしれないけど……いつその事俺も酔ってしまおうか?

……そんな事があっても、俺達の宴会はまだまだ続いた。

盃を空け、ビンを空け、タルを空け、終わった頃にはすでに日も上がりがきっていた。生き残ったのは酒に強かった俺と呑まなかったてゐだけである。

そして更にその後翌日まで酔い潰れて熟睡していた三人はというと……

「あ……脚に……力が……脚に力が入らない……たっ……立ち上れない……!」

「あうう、頭痛がする……! は……吐き気も……くっ……ぐう、な……なんてこと……」

「この神奈子が……気分が悪いだ? この神奈子がアルコールに頭を破壊されて……立つ事が……立つ事が出来ないだ?!?」

「聞いてる分には元氣そうなんだけど……てゐ、悪いけど隣の部屋に布団を敷いて来てくれ。人化してもいいから」

「あれ、今回はお仕置き終わるの早かったね。別にいいけど……布団ってどこにあるんだろ？」

当然というか予想通りというか、二日酔いになっちまったな。もう少し量を抑えないからそうなるんだよ。酒を出した俺が言うセリフじゃないけど……

……看病するから許せ。

「ひ、光が……キラキラしたエフェクトのモノが逆流して……！」

「ううう……やばい、リバーズしてオープンしちゃう……」

「……………」

「あれ、神奈子の様子が……」

「……………オロロロ「マンダアアアム!!」はっ、助かったよ……」

……はあ、まずはみんなに水が必要だな。タルから汲んで来るか。

……頼むから吐かないでくれよな。

### 第三十三話：酒は三献に限る（後書き）

全国の神奈子サマ好きの方々、申し訳ありませんでした。  
でも時間を戻してなかった事になったという事で……

え？ 許せるわきゃねーだろお！ って？  
すみません……

さて、やはり暫くは平凡な日々が続くと思われます。というか、今  
バトルとかの話をねじ込める様な技量が自分には……

なので暫くはかのユルユル四コマ漫画の様な争いのない平和な話に  
お付き合いください。

なんか後書きが弱音ばっかだなあ……

そ、それはともかく次回のお話もよろしく願いします！

それでは皆様さようなら～！

### 第三十四話：平和な一時（前書き）

久しぶりに投稿です。

今回は繋ぎの話。

前回あんな事を言ったにも関わらずこんな事を……まったく、イケナイ奴ですね！

何をやったかはご覧になれば一発でわかります。

## 第三十四話：平和な一時

例によって俺達は暫くの間守矢神社に滞在する事にした。

したのだが……うん、する事がない。神奈子が言った通り、平和過ぎて暇なのだ。ここまでやる事がないとなれば、二人が暇を持て余してゲーム漬けになっても仕方無いかもしれない。

ま、暇ではあるが、俺としてはこんな平和な一時も嫌いではない。度々襲って来るトラブルに比べればずっと楽だからだな。

そして今日も今日とて長閑な一日。コンサートはないし村人は合体しないし邪神も這い寄って来ないのだ。そんな安心を噛みしめつつ、俺は諏訪子と神奈子と一緒に今日も縁側でお茶を啜るのだった。

「「「ずずず……………はあ」」」

「と、年寄り臭い……」

てゐに年寄り臭いと言われてしまった……まあその通りだと思うんだが。

「おかしい、錬火がいるならもっと頻繁にトラブルが起きてもいいハズなのに……ちよつと錬火、暇だからなんかこう、鹿威しのトリックを使った事件とかで殺されてみてよ」

「お前の場合推理するより通報して終わりにしそうなんだけど……あと暇潰しで殺されてたまるか」

「そう言えば最近私のサラシが減ってた様な気が……」

「神奈子、そこでなぜ俺を見ながらそれを言う？」

「錬火……」

「おい諏訪子、なんだその目は？　してないからな？　本当にしてないからな！？　だからてゐもケータイをしまえ！　どこに通報する気だ！」

「減ってた様な気が……しないなあ」

「よし、いい度胸だ神奈子、紛らわしい事言いやがって。やんのかコラ」

「おっ、いいね。なら一汗流してみるかい？　……諏訪子とてゐを盾にしなただけど」

「はい！？　ちょっと神奈子、そこは共闘しようとかじゃないの！？」

「ふっ、大丈夫さ、錬火なら諏訪子達に大技使う様な事はしないだろうからね。……たぶん」

「わお、すごく不明瞭！　あの日誓った私達の友情はどこに行った！？」

「……私はいつだって未来を見据えているんだよ」

「こいつ、過去の話にしゃがった！」

「いや、二人共落ち着け……」

あれ、いつの間にか俺が宥める側に？　そして諏訪大戦再発の危機が。なんでこうなった？

「世界はいつだってこんな事ばかりだよ。ずっと昔からいつだって誰だってそうなんだ」

「火付け人がなに偉そうな事言ってやがる」

せっかく長閑な日だったのに……まったく。

でもとりあえずは二人を、特に諏訪子を落ち着かせねば。

「みんな、村の人達が果物を持って来てくれたみたいよ……って何やってんの？」

ルーミアが帰って来た。その手にはたくさんの果物が入った籠を抱えている。

実はさっき巫女さんからお呼びがかかったので、ルーミアが用事を聞きに行ったのだ。ちなみに行く奴はジャンケンで決めた。みんなめんどくさがったからだ。

「いや、気にしないでいいぞ。んで果物がどうしたって？」

「そう？　さっきも言ったけど、村の人が収穫した果物を持って来てくれたの。それでどう食べるかって話なんだけど……」



「梨に柿に葡萄に栗に……へえ、いっぱいあるじゃん。ならさっそくかじりついてみても……」

「ん？ ……おおっ、果物だ。今年も質のいい奴が採れたみたいだね。毎年楽しみにしてるんだよねー、これ」

「ふう、ちょうどいい所に来てくれたね。助かったよ」

「あなたまた諏訪子をいじめてたの？ まったく、ほどほどにしておきなさいよ」

そういえば季節は既に秋だ。すっかり涼しくなったし山の木々も綺麗に紅葉している。どこぞの姉妹も今頃大はしゃぎしている事だろう。そんな様子が目に浮かんで来る。

「そうだ錬火、これ使ってお菓子作ってよ。考えてみたらしばらく食べてないし」

「いいわねそれ。そのまま食べてもいいかもしれないけど、こんなにあるんだから調理した物も食べてみたいわ」

「そういや錬火は料理も上手だったね。それじゃあお願いしようかな！」

「むむむ、しかしそれではますますカロリーが……仕方無い、いつまでも食っちゃ寝してないでたまには運動するか」

いつの間にか俺が菓子を作る事になってしまった。それにこんなにキラキラした目を向けられたら断れん。……別にいいんだけどさ。

美味しいもんが食いたいの俺も同じだな。

なんだか手のかかる娘が四人程できた様な気分になりながら、俺は一言小さく呟いた。

「……平和だなあ」

……しかし。

その平和も長くは続かなかったのである。

それから更に数日後の事だった。

その『音』が聞こえて来たのは。

——ピィィィィ——

「あつ、この音は！」

「……？    どしたの諏訪子？」

それは甲高い笛の音だった。どこで鳴ったかは知らないが、その音に諏訪子が、そして神奈子が機敏に反応したのだ。

——ピィィィィ——

「ああ、そう言えばそんな季節だったね。鍊火達が来たからその事をすっかり忘れてたよ」

「二人だけで納得してないで、これが何なのか説明してくれない？」

二度目の笛の音。

どうやらこれは決まった時期に鳴る物らしい。年越しの除夜の鐘みたいな物なのだろうか？

——ピイイイ——

ついに三度目が鳴った。

いったい何を示しているというのか。まさか本当に百八回鳴るなんて事はないと思うが。

「三回鳴ったって事は私と神奈子の両方って事だね。ま、どっちにしても二人で行くんだけど」

「運動不足だったから助かるよ。鍊火の作ったお菓子を食べすぎちゃったからね」

「いいから早く説明してくれ。話がまったく見えん」

「わかってるって。じゃあ説明しよう」

何の事なのかさっぱりわからない俺達三人に諏訪子が説明を始める。

「実は毎年……って程でもないけど、よく秋になると妖怪が攻めて来るんだよ。もちろんこの神社までじゃなくて、もっと遠くの、領地の端っこにある様な村にね」

「へえ、大変ね。でも何で秋なの？」

「昔攻めて来た妖怪をふん捕まえて聞いてみたら、秋の実りをたくさん食べて脂肪を蓄えた人間が食べたかったからだって言ってた」

「ああ、なんとなくわかるわ……」

「なんか秋刀魚の漁獲みたいだなあ……」

「でもそれって気付かなかったらかなりやばいね。大丈夫なの？」

「いや、普通ならすぐに気付くんだよ。こう、ピーンってニュータイプばりに。でもうっかりゲームに熱中してたりすると……ね？」

「ね、じゃねーよ……」

人民の命に関わるレベルでのうっかりだった。ゲームしていて助けられませんでした、なんて事になっては村人達は死んでも死にきれまい。

そもそもゲームを控えておけば済む話なんだから、この時期ぐらいはやめておけよな。

「それじゃあ今のは気付かなかった時の為の？」

「そう、これこそこの神奈子様が考案した画期的なシステム！ 領

内にあるそれぞれの村の心優しい子供達に特製の笛を預け、今回の様な自分達で対処出来ない事態が発生した場合に吹いてもらう事で私達がすぐに気付けるというわけだ！

ちなみに一回吹けば諏訪子が、二回吹けば私が、三回吹けば二人で駆けつける事になっている」

「それなんてマグマ大使？」

「ガンキャノンがマグマ大使パクってどうする」

「誰がガンキャノンだ！！」

てゐが何故マグマ大使を知っているかは知らないが、とにかく随分パチもん臭いシステムだった。

んなもん発明するぐらいならゲームを控えてくれ、頼むから。

「ところで既に三回吹かれる様な事態が発生してしばらく経っているんだが、急がなくていいのか？」

「……ヤバッ」

「おい」

いや、説明を要求したのはこっちなんだけれども。

まあ、とにかく今は急いだ方がいいみたいだ。

「ん？ やっぱりついて来るの？」

「そりゃあ……なあ」

「暇だしねえ」

「邪魔はしないからいいでしょ？ 何があるのか興味もあるしね」

「見学は自由さ。ついて来たって構わないよ」

……というわけで、諏訪子と神奈子の了解を得た俺達三人は妖怪退治に同行する事となった。なんと神四人、上級妖怪一人という豪華メンバーだ。オーバーキルにも程がある。相手にとったら不幸以外の何物でもないな。

そんな取り留めのない事を考えながら、俺達は急いて現場に向かって飛んで行くのだった。

### 第三十四話：平和な一時（後書き）

というわけで、また突発的に事件を起こしちゃいました。つくづく急展開が多い作品です。

しかし諏訪大戦がないとなるとあとはもう子作りぐらいしか書く事がないんですよ！（おい

なので事件がないなら起こせばいいじゃない、という犯罪者寄りの思考のもと、話のネタとして勝手に事件を起こしてしまいました。どうもすみません。

そして先に言っておきますが……シリアスにはなりません！

どうも考えていて性に合わないのです。最初の方のシリアスとか、もはや黒歴史レベルで……あ、この作品自体黒歴史でした。

なので次回もギャグ寄りになります。シリアスは滅多にしない方針で。

それでは長くなりましたが、今日はこの辺で。

次回『妖怪大戦争（仮）』でお会いしましょう。

### 第三十五話：奴らは妖怪四天王（前書き）

どうも、お久しぶりです。続きがすっかり遅くなってしまいました。

さて、読者の皆様がアンケートに答えてくださった結果、『東方キヤラを出すべし!』という声が多数寄せられましたので、神奈諏訪に続き新たな東方キヤラが出演する運びとなりました!

……が、しかし。

何をどう間違ったか、やはり一発キヤラも複数登場する事になり、話も長くなり、新たな東方キヤラもまだまだ十分な魅力を引き出せていないままの状態になっています。

一応この話は前編になっていますので、後編でもっとそのキヤラ（崩壊済み）らしい事をさせてやればなあ、と思っております。

とまあ、グチグチと言いましたが、とにかくにも第三十五話、皆様のお暇潰しになれる事を祈りつつ投稿です。



### 第三十五話：奴らは妖怪四天王

「あ、あそこだよ！」

「……見えてるよ」

諏訪子が指さす方向には村が一つあった。おそらくあの村の誰かが助けを呼んだのだろう。

それはいい。それはいいんだが……

「」「うおおおおお！！」「」

ドゴーン

「おおっ、守矢合体キングムラビト（小）が頑張っている！」

「チクショー、世の中の『一般人』にケンカ売ってんのか……」

かつてこの守矢に来た時に見た、変人共が合体したナニカが村の傍の森の中からその姿を覗かせていたのだ。

あの時は合体途中で妨害したから全貌は知らないままだったが、今回合体済みの姿を見れば……

「どこのリヴァイアサンだっ！」

「錬火、そのツツコミはわかりにくいわ！」

「うげえ、なんかすごいウジャウジャしてんだけど……」

なんと多数の人間達が密集して大きな人型となっていたのだ。スライムの如く混ざり合う事に比べればまだ安心出来るが、そうでなくとも十分にキモい。そして人間業じゃない。

守矢の民はバケモノか！ いや、マジで！

「むっ、御柱祭に並ぶ守矢名物なのに気に入らなかったのかい？」

「ちなみにキャッチフレーズは『あなたと合体したい』だよ！」

「得体の知れないモノを並ばせんじゃねー、そして長野県民と機械天使に謝りやがれコノヤロー」

……が、ツツコミの為に目を離した瞬間、それは起きた。

「「「ぐああああ！」「」」」

「！　なんだ、どうした！？」

いくつかの爆発音と一緒に村人達の悲鳴が聞こえ、見る見る内に合体が崩れていったのだ。

「ああっ、キングムラビト（小）が！」

「爆発音！？ 何か爆発したのかい！？」

「よく見えなかったけど、何か小さい粒みたいな物が森から飛んで来たわ！ たぶんそれが爆発したんだと思う！」

「話してる場合じゃないよ、早く行かないと！」

てゐの言う通り、悠長にコントをしている場合ではなかった。俺達は急いでその場へ飛んで行く。

さっきまでキングムラビトが居た場所に降り立ってみれば……そこには幾人もの人達が傷を負って呻いていた。それはまさにこの世の地獄の様な凄惨な有り様で……

「いてて、膝を擦りむいちゃったよ……」

「ツバつけときゃ治るだろ。俺なんかアフロになっちまったぜ！？」

「きゃっ、着物が破れてしまったわ！」

「娘さん、私の服で隠してください」

「（キュン）あ、ありがとうございます……！！」

「「あのキザ野郎ぶっ殺す！！」」

凄惨な有り様で……はなかったなあ。全員……いや、腰を痛めた老

人以外は歩いて帰れる程度の軽傷だった。

タフさが尋常じゃない気がするが気のせいだろうか。

「ああ、そういえばウチの人達は私達が来るまでに持ち堪えられる様に防御振りしてるからねえ。ちつとやそつとじゃ死なないよ」

「お前らの領地は鉄人量産工場か何か」

もはや領地丸ごと狂っていた。

頼むから逸般人を増やさないでくれ。あと遅れる事を前提にするんじゃないよ。

「おおっ、お二方が参られたぞ！」

「なにっ、そんなバカな!？」

「いつもより遥かに早いぞ！」

「ってすぐに来る事諦められてるじゃねーか!？」

「「……てへぺろ☆」」

「お前ら後で特別講座な……」

「「すんませーん!!」」

「はいはい、あなた達はいつまでも見てないで村に戻ってね。あとは私達が片付けるから」

「ケガをしている人にはいい傷薬があるよ。今なら安値で売ってあげるし、お金がないなら物々交換でも「商売しない！」チツ、タダでやればいいんでしょタダで……」

土下座する諏訪子と神奈子を見て目を丸くしていた人達もてるから薬を受け取ってゾロゾロと帰って行く。

村の防衛というわりとシリアスな状況だったにも関わらず、帰る時はあっさりと帰って行くというのはどうなんだろう。単なるイベント程度にしか考えてないのか、それとも自分達が敬う神への信頼から来るものなのか……この醜態から見るに前者の方なのかもしれない。

……まあ、それはともかくだ。

「その木の上で見てる奴ら、出て来い」

そう、村を襲っていた奴らはまだ片付いていないのだ。

村人達を帰す間はこちらが警戒していたので出て来なかったが、彼らがいなくなった今なら周囲を気にせず戦える。

……ああ、諏訪子に神奈子、もういいから。わかったから。敵が出て来たんだから早く立ってくれ。

「……バレていては仕方が無い」

「僕達に気付くか……それなりにやれるみたいだね」

「……強者の波動を感じます」

「ふん、ならばお望み通り出て行ってやろう！」

感じていた四つの気配が姿を現した。

奴らはそれぞれの木から示し合わせていたかの様にババツ、と同時に飛び出して地面に着地し……

ズボツ！×4

「」「「あぎゃあっ！？」」「」

ゴシヤアアア……

「」「……うええええ！？」」「」

何故かそこにあった穴に落ちて行った。

それを見た俺と諏訪子と神奈子は思わず声を漏らす。

「実は既に落とし穴を仕掛けておいてたり」

「てゐ、いつの間に！？」

「錬火達が牽制し合ってる間に」

「ついでに中には私が闇で槍を作っておいたわ」

「お前ら大丈夫かー!？」

あまりの仕打ちに、思わず敵の無事を願ってしまった。敵とは言え初登場でえげつない罠に嵌められるとは不運にも程があるだろう。

だがッ!

「……ふう、死ぬかと思ったわい」

「何言ってるの、大した事なかったくせに」

「我ら『妖怪四天王』にこの様な小細工が通用すると思うなよ!」

「えっ、私ほんとに死ぬかと思ったんですけど……」

なんと! あの落とし穴から四人全員がさっきの様に飛び出して来たのだ。つまりはあの罠から生き残ったという事だ。しかも余裕綽々で。……一人は違うみたいだが。

これには俺も少し驚いた。落ちる時に『あぎゃあっ!?!』とか言っただ様な気がするんだが、この際だからスルーしてやろう。

「ふむ、改良の余地ありと……なら今度は地雷式にしてみようかな」

「私の時にしてみたいな奴? やるなら相手を選んでね。私以外で」

「ど、どうしよう神奈子、てるの悪戯の殺傷レベルが暫く合わない間に上がった！ あんなの神社に仕掛けられたりしてないよね！？」

「いや、私に言われても……でも確かに昔の悪戯はまだ可愛げがあったね。まったく、どうしてこうなったんだか……ああ、錬火の影響か」

……神奈子とは後で少々OHANASHIをすることで、今は目の前の敵の事を考えよう。

まず一人目が見た目は禿げたオッサンで、ボロい服を纏っており、脇に抱えたザルには暗赤色の小さな粒がびっしりと入っている。もしかするとルーミアが言っていた小さな粒とはあれの事かもしれない。

二人目は十歳ぐらいの少年だ。至って普通の容姿で、唯一の特徴をあげるならば白い立体を乗せた皿を持っている点だろうか。用途は不明だが、武器として使用するのかもしれない。

三人目は赤いチャイナ服を着た少女だ。外見年齢は二人目の奴と同じくらいか？ 偏見から言えば中国拳法なんかを使いそうだ……いや、絶対に使うだろう。もしかすると大陸から渡って来た妖怪なのかもな。

そして最後、四人目なのだが……こいつが一番不気味で、そして最も妖怪らしい妖怪だ。なんと頭が丸々巨大な目玉なのだ。性別がわかりにくいがおそらく男なのだろう、纏った甚兵衛羽織からはムキムキの手足がその姿を晒している。見た目で言えば四人の中で一番



強そうな妖怪である。

「「「我ら、この世に名立たる『妖怪四天王』!!」」」

「えっ? えっ?」

ババツと揃ってポーズをとる妖怪達。……一人だけ息が合っていないみたいだが。

「弾けるウマさの採れたて小豆! 小豆洗いの豆之助!」

「絹より木綿の方が栄養価は高いぞ! 豆腐小僧の白衛門!」

「えっ、ちょっ、何ですかこれ!? 私こんなの聞いてませんよ!」

「自立機動型眼球人! 目玉オトコの玉五郎!」

「「「貴様らなんぞ返り討ちにして「帰れっ」(パカッ)うわああああああ……」」」

「えっ……ええええええええ!」

さっきから一人だけまったく息が合っていなかった少女を除き、妖怪共は突如足下に開いた穴へと再び落ちて行った。

我ながらいい仕事したと思う。

「ええっ、いつの間にあんな穴を!」

「たった今作った」

「……あれはどこに繋がっているんだい？」

「奈落」

「「「うわぁ……」「」」」

四人の顔が引き攣った。

いや、あまりにもツツコミ所が多かったもんで。具体的には小豆の小豆らしからぬ性能とかどうでもいい豆腐の豆知識（豆腐だけに）とか周りに付いて行けてないチャイナ娘とか種族名がギリギリな視覚器野郎とかそもそもどいつもこいつも種族的には弱小なくせに妖怪四天王とか言っちゃってるところとか。

なのでついつい色んな意味で放棄しちゃったぜ。当然ながら反省も後悔もない。同じ事があったらまたやってやる。

「でも手間は省けただろ。残ってるのはあと一人「二度も掛かるわけがないだろう」なにっ!？」

なんと、穴に落としてやった筈の三人がそこにいた！

そんなバカな、確かにこの目で落ちた所を……

「ふふふ、あれは分身だよ。僕の「豆腐分身」

「儂の小豆分身」

「そして俺の目玉分身が既に入れ替わっていたのだ！」

「ぐああああ、あいつらぶち殺してえッ！」

「ちょっ、錬火落ちて着いて！ 気持ちはわかる！ わかるからっ！」

「H A ☆ N A ☆ S E ルーミア！！」

ゴキブリ並にしぶといボケの塊の様な奴らのせいで、つい我を忘れてしまいそうになる。ルーミアが必死に抑えてくれなければ、少なくともここら一帯は消え去っていたかもしれない。

「まったく、血の氣の多い奴だな」

「お前の存在が一番ムカつくんだよこの目ん玉やろオオオオ！！」

「錬火、見ちゃダメ！ 深呼吸して落ち着くの！ 怖くない、怖くないから！」

「とっ、とにかく早く退治しちゃう！ このまま錬火が暴走したら被害がもっと大きくなる！」

「そうだね！ じゃあルーミアはそのまま錬火を抑えておいてくれる、あんたにも少しは手伝ってもらおうよ！」

「ええっ、まさかあんな色モノ集団と戦えと！？ いやだよ、あんなのに関わってたらなんか良くない物とか感染しそうだし！」

「いいからやるっ！ じゃないと錬火に色々チクるよ！」

「脅迫かよっ!？」

諏訪子は既に自分の武器である鉄輪を構え、神奈子は嫌がるてゐを引きずって行く。

そうして随分と珍しい三人組が出来上がった。原作の東方ではまず見ない組み合わせだろうな。まあ、俺が関わった時点で原作なんぞとつくに吹き飛んでいるのだろうが。

「三人来たが、誰が誰とやる？」

「なら僕はあの帽子を被った子供を」

「俺はあのウサギの奴だ」

「あ、じゃあ私はやめておきますね」

「そうか？　なら僕は残りものの奴じゃな」

となると、諏訪子VS豆腐小僧、てるVS目玉オトコ、神奈子VS小豆洗いという組み合わせになるわけだ。

勝敗に関してはこちらの三人が負ける事はないと言い切れる。しかしさっきから妙にしぶとい奴らだからな、決して油断はしない様に……

「誰が子供だ！　お前らよりずっと年上なんだぞッ！　神具【洩矢の鉄の輪】!!」

「この私に向かって残りもんだとオッ!?　よくぞほざいた、なら

ば死ねッ！ 神祭【エクспанデッド・オンバシラ】！！」

「テッテテ、虫眼鏡（の〇代風）」

ズバアッ

ドガガガッ

ジュウウウ

「「「ぎゃああああ！！」」」

……弱っ。

あれ、おかしいな、俺の予想ではもっと何かがあると思ったんだが……

「ヒイイイ、豆腐が一口大に切られてしまった！ 運命は僕にマーボーを作れと言っているのか！？」

「やめてくれえっ、小豆はそのまま潰したって餡子にはならねえんだよ！！」

「目がッ……目がああああ！？」

「「……弱っ！！」」

俺とルーミアの声がハモった。

奴らはなんか哀しくなる程に弱かった。さっきまで散々実力者面し

ていたくせに、戦闘になった途端にこれかい。

「あ、あれ？　おかしいですね、前に戦った時はこんなに弱くなかった様な……」

妖怪四天王とやらの少女の呟きが聞こえてきた。しかもちよつと気になる内容だ。

「おーい、どういう意味なんだ？」

「え？　あ、はい、私、四天王に加入する前に彼らと戦っているんです。一応勝ったんですけど、その時はここまで弱くなかった筈なんです……」

「それ本当か？」

「はい、何かの補正が掛かったかの様に強かったです」

「……なんか物凄くわかりやすい表現だな」

「その加入前って言うのはいつ頃の事なのかしら？」

「つい最近ですよ？　実は私、武者修業をしていたんですが、その旅の途中で彼らの縄張りに入ってしまったんです。その時はこれも修業の内と思って何とか勝利したんですけど……何故かそこからあれよあれよという間に変な団体に入れられてしまいました」

変な団体って言うのは『妖怪四天王』の事か。新手の詐欺に会ったみたいな感じだろうか。……いや待てよ、加入前なら三人しかいないから『四天王』ではないか？

「ぐぐぐ……あの時の戦いで妖怪四天王の紅一点、ぬりかべのカオルちゃん（貧乳）が胸部の負傷を理由に脱退してしまったから、代わりにその娘を入れたのだ。幸いにも実力は折り紙付きだったからな、責任をとってもらったまでよ……」

「その尋常じゃない程充血したキモい目ん玉でこっち見んな」

虫眼鏡によって集束した日光が直撃した目玉は真っ赤に血走っていた。その大きさも相俟ってこの上なく気持ち悪い。子供が見たなら一目で泣き出すだろう。

「しかしここまでてこずるとは……むむむ、仕方無い、ならば俺の真の姿で相手してやろう！」

「テッテテ、催涙スプレ」

「つてうわっ、何をする！？」

「キタ〇ーの左目に帰れー！」

てゐの妨害にあいながらも真の姿になって行く目玉オトコ。

見る見る内に身体は大きくなり、皮膚の色は死人よりも真っ青に。その手にはいつの間にか巨大な棍棒を握り込んでおり、生み出されるであろう破壊力は想像するに余りある。眼球オンリーだった頭にも皮膚が出来、口が出来、耳が出来……そして最後に堅牢そうな角が天に向かって一本、格の違いを見せつけるかの様に伸びて来た。

目玉オトコの真の姿、それは元の姿とは似ても似つかぬ恐るべき姿

だったのである。

「ぐはははは！　これが俺の真の姿！　俺は本当は一つ目入道だったのだッ！！」

「いや、お前ギガンテスだろ」

「なにっ!？」

まんまドラクエのギガンテスだった。倒したら経験値とゴールドを落としてくれそうなぐらいに。というか日本の妖怪ですらないじゃないか。おめーはどっちかと言うと『モンスター』だ。

「あー、最近外国産の妖怪の出入りが増えて困ってるんだよね。わざわざこんな極東の島国まで来て暴れなくなっちゃったいいのに……」

「でもこの大きさの奴は珍しいな。隣の大陸の妖怪でもないみたいだし、随分と長旅して来たんだろう。ご苦労な事だよ」

まあ、諏訪子と神奈子の情報はどうでもいい。なんかもうめんどくさいのでさっさと片付けてしまいたい所だ。

しかしよく見ると、なぜかギガンテス野郎がわなわなと震えている。よくわからないが怒っているっぽい。

「おっ、俺は……俺は……！　身体はギガンテスでも心は一つ目入道なんだあああ!!」

「いらねーよんなカミングアウト！　結局お前ギガンテスなんじゃねーか！」



どうでもいい葛藤を叫びながら奴は襲いかかって来た。

……仕方無い、ここは俺の出番「月光【ムーンライトレイ】！」……あれ？

「ぐああああ！！」

「「ぎゃああああ……」」

ルーミアの攻撃であつという間にボロ屑の様になるギガンテス。ついでとばかりにその余波をくらった小豆マンと豆腐ボーイなど、耐え切る事も出来ずに消滅して行った。

「ま、こんなもんね」

「うう……なんて強いんだ……」

「ヒュー、派手に決めたねルーミア」

「へえ、強いんだねルーミア！ 大した威力じゃない！」

「なかなかやるね、ルーミア。聞いた話ではてるにも勝ったみたいだし……今度私と勝負してみないかい？」

「なんて凄い妖力……さぞかし名のある大妖怪なのでしょうね。こんな所でお目にかかれるとは、旅に出た甲斐があったというものです」

「……………」

……あれれ、おかしいなあ。ここは俺があのかぶつを颯爽と倒してあいつSUGEEE!! ってなる所では? とうか主役ポジションをルーミアに丸々盗られたかの様な気が……

「……………(ニヤツ)」

「!?!」

や、ヤロウ、今『計算通りッ』って顔しやがった! まさかあいつ、俺のアイデンティティを……主役の座を奪って行くつもりか!?! (メタ発言)

「タイトルは『東方暗黯闇<sup>アンアンアン</sup>』に決まりよっ!」

「なんかタイトル変更まで考えられてる!?!」

やべー、このままじゃ俺はヤ○トに出番を盗られたア○カの様に……いやさスぺク○ルマンに番組タイトルを盗られたゴ○の如く降格させられてしまう!

常遙錬火、久しぶりの大ピンチ!

「いや、ルーミアにはツツコミ成分が足りないから無理でしょ」

「ええっ?」

「並み居るポケ達を正面から切って落とすにはまだまだ実力不足だねえ」

「やっぱりそこらへんは錬火がやってくれないと立ち行かなくなるね」

「チクショウありがとう俺のツツコミ能力!!」

正直もつと他にあるだろうと言いたくなかったが、主役の座は揺らがなかったのひとまず良しでしょうか。まったく、思わぬ伏兵にツイ焦ってしまったぜ。

「あのー、そろそろいいですかね……?」

「ん? ああ、悪い悪い。こっちはもういいよ」

申し訳なさに聞いて来た妖怪四天王最後の一人であるチャイナ娘にそう応える。こっちの話を待っていてくれた辺り、普通にいい子なのかもしれない。

「そうですか、じゃあちよつと厚かましいお願いがあるんですが……」

「……まあ見当がつくけど、言ってみ」

「はい、その……私と手合わせ願いたいのですが」

「……だろうなあ。」

さつき武者修業の途中だったと言ってたし、今も体がうずうずしているみたいだ。どうやら戦いが好きってわけじゃなく、自分の力を試したいって感じらしいな。

「でもそれならさっきあいつらと戦えばよかったのに。何でさっきは辞退したんだ？」

「それはその……私、一目見てから戦うのはあなたとがいい思っていたんですよ」

その言葉を聞いて、こちらの女性陣の目がギラリと光る。

……俺の顔からも冷や汗がタラリと流れる。

「えっと……何故？」

「それはもちろん、あなたが五人の中で一番の『武術家』であるとわかったからですよ！」

興奮した様子でそう答えた。

色気のある話ではないとわかると四人の眼力が和らいだ。おかげで俺もホッと一安心。あの目に晒され続けてたらそのうち心臓を患う気がする。

「でも錬火は今ほとんどの力を抑えているのに、何でそんな事がわかったの？」

諏訪子の言う通りだ。

確かに今俺は神力やら霊力やらを大幅に抑え込んでいるので、この中で突出した力を持っている様には見えないだろう。

このチャイナ娘は一体何を基準にしたんだ？

「いえいえ、神力や妖力の問題ではないんです。私が驚いたのは『佇まい』ですよ!」

「はあ……」

「いや、本当に凄いですよ!? まったくスキが見えなかったですし、『氣』の制御も完璧でしたし……それはもう牛乳まみれになった犬を拭いた後放置した雑巾が如く身体中から異彩が放たれている様でした!」

「その異彩は放っちゃダメな異彩だろう……」

神奈子の呟きには俺も大いに同意する。というか、それは異彩じゃなくて異臭だろう。表現が明らかにマイナスだ。自分がそんなもんを放っているなんて考えたくもない。

「他の皆さんも相当お強いみたいですが、私も一介の拳法家ですのでも最も武人らしいあなたと戦ってみたかったです!」

「……だってさ、どうすんの?」

どうするって言われてもなあ……

「敵討ちってわけではないのか?」

「え? いえ、特にそんな事はないですけど……」

「……そうか」

どうやら他の四天王はほぼ他人程度の認識らしい。まあ、加入したばかりって言ってたから、思い入れとかも特にないんだろうな。当然と言えば当然の反応か。

「……わかった、手合わせぐらいしてもいいぞ。別に減るもんでもないしな」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

随分と嬉しそうに、そうお礼を言った。

ま、俺としても実力の程は気になるからな。四天王の最後の一人は一番強いというセオリー通りの実力は持っているみたいだし、これは少し楽しみだな。

「ふ……ふふふ、そんな呑気に構えていられるのも今の内だ……」

「っってお前まだ生きてたのか」

息も絶え絶えにそう言ったのは、ルーミアに惨敗したギガンテスだった。もうとっくに死んだものと思っていたが、どうやら最後までしぶとくあり続けるつもりらしい。

守矢の住人は人も妖怪も耐久力が高すぎると思うんだが。

「聞いて驚け！　その娘の種族はな……なんと『龍』なのだ！　わかるか、お前らなんぞ吹けば飛ぶ様な存在なんだぞ！」

「……へえ、そうなのか？」

そりゃ凄い。今日一番の驚きかもしれん。

実の所、俺は彼女の種族を知らなかったからな。原作でもそれは明らかにされていなかった筈だし、そんな彼女が龍だというのも十分にあり得る話だった。

「この国では『ドラゴン』の事を『龍』と言うんですよ？ 私はこの国に来る前に立ち寄った場所で【燃えるドラゴン】と呼ばれていたんですよ」

……………ん？

「燃える…………ドラゴン？」

「はい、ローマのコロッセウム…………でしたっけ？ あそこで開催していたパンクラチオンで地元のローマ人達を降して優勝した時にそんな異名をいただきました。彼らは私の様な中国拳法家を『東洋のドラゴン』なんて言って怖れていたみたいです」

「コロッセウム…………あつ、あそこか。ゲームにあったあった」

「なぜか『コロッセウムの土』なんてアイテム売ってたけど、本場でもそうなのかね？」

「それ『龍』じゃねーよ！ 燃えるドラゴンとかむしろ『リ○』だろ！ そしてコロッセウムを高校球児が集まる野球場と同じ扱いにすんなよ！」

くそっ、こんな妙な所でも前世の歴史との差異が出ていたのか！ この分だとシルクロードの別名がドラゴン・ロードとかになっ

てもおかしくないぞ！

……とにかく、種族が龍ってわけじゃなかったんだな。そこら辺は別にどっちでもいいんだけどさ。

「それを言うならあたしなんか『白兔神拳』使いだし」

「いやいや、私なんかミジャクジ様直伝の『ミ蛇クジ拳』使えるもんね！」

「あら、私なんか『暗黒魔闘術』なんて凄い技術作っちゃったわよ」

「……くっ、私だけそういうの持ってない！ 軍神なのに！ こうなったら私も何か拳法を自作してみるべきか……」

「ええい、話がややこしくなるからおめーらは黙ってろ！」

そんな所で競い合っても仕方無いだろ！ しかもお前らがそんな技術持ってたなんて初耳なんだが。

「……あれ、もしかして何か不都合がありましたか？ まさか手合わせの件がなしに……」

「……いや、何でもない。もういいからさっさと始めちまおう」

「そうですか……あっ、一つお聞きしたいんですけど」

「なんだ？」

「この手合わせ、真剣でも構いませんか？」



「……構わない。『真剣』でも『試合』でも」

「ありがとうございます」

真剣、つまりは『リアルファイト』だ。

言ってみれば何でもアリ。ルール無用で審判なんぞ当然おらず、本人達が勝敗を決めるまで闘いは終わらない。ある意味自然で当たり前なカタチだ。

彼女が優勝したというパンクラチオンもちろん『真剣』だったのだろう。それで最も実力を発揮出来ると言うならば、俺としても否はない。

「じゃああたし達はいつもの様に見学してるよー」

「どっちかというところのあなたを応援してるわ」

「出来るだけ森を破壊しない様にね」

「面白い勝負を見せておくれよ」

まったく、他人事だと思って呑気にしゃがって。……俺も他人事ならそうするけどな。

しかしそんなてゐ達の言葉を聞いても俺の目の前の相手は気にする事もなく、先程まで友好的だった姿は既に闘志をたぎらせ闘いに備えていた。それこそひとたびスキを見せれば忽ち襲い掛かって来るだろう。

「……おい、やる前に助けてくれよ！ 身体中痛くて動けないんだ！」

……さっきから横たわっているギガンテスが、チャイナ娘に向かってそう言った。こいつ、随分と間の悪い時に言ったな。今の彼女の状態がわかっていないんだろうか。

「……そうですね、わかりました」

すると、彼女はそう言って横たわるギガンテスに近づいて行く。

……しかし俺にはわかる。その目から物騒な闘志がまったく抜けていない事が。そして必ず何かを仕出かすだろうという事が。

「へへ……すまねえな……」

「いえいえ……」

そしてギガンテスの頭の所に来た彼女は……

——ガシッ——

「なっ……」

その一本角を掴み。

——ブンッ!——

なんと空高く投げ飛ばしたのだ。

「わあああ——っ!! なっ、お前何をッ!? 何してんだあああ!?!」

「私の闘いを邪魔する妖怪など必要ありません!!」

次の瞬間、彼女の持つ『気』が爆発的に高まった。そしてその気を集中させた右手を宙に浮くギガンテスに向け——

「くらいなさい!!」

——強烈な気の奔流が放たれた。

消耗したギガンテスにはもはや成す術もなく、耐える力もなく……

「べ……ベジ——!!」

——ギョオオオオ!!——

……この世から跡形もなく消滅した。

味方に殺されるという憐れな最期を迎えたギガンテスを見、俺の心に去来した想いはただ一つ。

「（あいつ、最期になんて言おうとしたんだろう……）」

わりとどうでもいい筈の事が気になってしまっていた。

……しかし、まさか味方を殺しちまうとはな。礼儀正しい娘だとは思っていたが、やる時はやる娘らしい。それとも変な団体に入れられた恨みなんかが溜まっていたのだろうか。何にせよ、彼女の情報は少々修正する必要があるそうだ。

「ふう、これで邪魔者はいなくなりましたね！ それでは改めまして、よろしくお願いします！」

「……ああ、よろしく」

あんな事をした後でそんな『やり遂げた感』の溢れたイイ顔をされても困るんだけど……気にしないでおくか。

それじゃあ始め……おっと、そういうやってない事があった。

「まだ自己紹介をしてなかったな。俺の名は常遥錬火、種族は神だ。流派は特になし、でも色々と出来るからあんまり見くびらない方がいいぞ」

「あっ、どうも。申し遅れましたが、名を紅美鈴と言います。妖怪としては未だ若輩者の身ですが、中国拳法を修めた際には『海王』の称号をいただきました。……今日の勝負、私の武の全力でもって勝ちに行かせてもらいます」

「そうこなくちな。構わないから遠慮なく打ち込んで来い。……勝つのは俺だけだな」

互いに勝利宣言をし、いよいよ闘いの幕が開ける。

原作キャラ“紅美鈴”。幼いながらもどれ程の力を持っているのか、楽しみだ。

### 第三十五話：奴らは妖怪四天王（後書き）

というわけで、次回後編はバトルとなります。

……困ったなあ。

弾幕バカスカ打つだけならまだしも、格闘を文章で描写しろとか難しすぎッスよ……（原因は自分）

しかしやらねば先へは進めない。ニート姫にも会えないしチルノをいじる事も出来ないしさとりんをペロペロ出来な……いや、しないですヨ……？

……とにかく！

次の話も頑張って書きますので、読者の皆様はどうか気長にお待ちください。

いつの日か人参天国は続きを引っ提げて帰って来ますので！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4767t/>

---

東方超越起

2011年11月15日11時15分発行